

国立研究開発法人
国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所

精神保健研究所年報

第 38 号(通巻 71 号)

令和 6 年度

National Institute of Mental Health
National Center of Neurology
and Psychiatry

—————2025—————

国立研究開発法人
国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所

精神保健研究所年報

第 38 号(通巻 71 号)

令和 6 年度

National Institute of Mental Health
National Center of Neurology
and Psychiatry

——2025——



「国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和7年3月17日」

巻頭言

令和6年度の精神保健研究所の業績年報をお届け致します。

本年度は人事面で大きな変化がありました。金吉晴前所長が令和6年3月に定年退職され、同年4月より私がその後を継いでいます。また、9つある部のうち、精神薬理研究部、公共精神健康医療研究部、行動医学研究部、知的・発達障害研究部の4部で部長の交代がありました。このように精神保健研究所が大きく動いた年でしたが、研究活動は引き続き活発に行われ、前年を20%近くも上回る英語原著論文144編が発表されました。本研究所は、メンタルヘルスの基礎研究から社会実装まで幅広く取り組むことを特徴とし、医学生物学・心理社会科学の総合的な研究機関として9つの部を有しています。それぞれの部が大事な活動を懸命に続けていますが、所長一年目である私が折に触れて呼びかけたことは、風通しの良い部内環境作りと部横断的活動の活発化です。部内そして所内の人たちが有機的につながればさらに大きな力が発揮されると確信していますが、その種が蒔かれた年であったと思います。

研究活動に加え、人材育成と教育研修活動も本研究所の重要なミッションです。全国の精神保健医療水準の向上と均霑化を目指し、自治体職員や医療従事者等を対象に、発達障害、薬物依存、摂食障害、PTSD、災害時心理支援、統合失調症・うつ病の標準治療、入院者訪問支援など地域でのニーズが高い領域について計27回の研修を実施し、3,200名を超す参加者を得ています。また、本研究所が中心になって令和5年4月に開設した「こころの情報サイト」は非常に好評で、今年度も500万件を超すアクセス数でした。正しい知識と技術の普及に貢献できていると自負しています。

医療政策の分野での貢献にも触れておきたいと思います。薬物依存研究部は違法薬物問題だけではなく市販薬の乱用・依存問題にも積極的に取り組み、実態調査による知見を得て、政策提言にも寄与しました。睡眠・覚醒障害研究部は、健康日本21（第三次）における国民の健康づくりのための休養（睡眠）プラン策定に貢献しました。地域精神保健・法制度研究部の研究成果は、令和6年度診療報酬改定で「精神科入退院支援加算」や「精神科地域包括ケア病棟入院料」の新設につながりました。また、精神保健福祉相談員養成の再整備にも大きく貢献しました。同部の活動はすべて地域精神保健医療福祉の質の向上の礎になっています。

最後に記しておきたいことは、国内外に関わらず、苦境にある方々への支援です。令和6年は能登半島地震で幕を開けましたが、金吉晴名誉所長の助力を得て、ストレス・災害時こころの情報支援センターが支援活動に当たりました。また、JICAからの協力依頼を受け、ウクライナからの視察団を受け入れ、NCNP全体でPTSDの診断と治療、睡眠衛生、自殺予防、CBT、rTMSについて知見を教授し、意見交換する機会を持ちました。

本研究所に一貫して受け継がれてきた方針は、人々のニーズに応えた研究を行い、その成果を現場に役立つ形で還元することです。先達から引き継がれてきたこの方針を胸に、医学生物学・心理社会科学の総合的な研究機関としてさらに歩みを進める所存です。皆様方のご理解とご支援、ご鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。

2025年3月

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所 所長 張 賢徳

目 次

I. 精神保健研究所の概要	1
1. 創立の趣旨及び沿革	1
2. 内部組織改正の経緯	9
3. 国立精神・神経医療研究センター組織図	13
4. 職員配置	14
5. 精神保健研究所構成員	15
II. 研究活動状況	18
1. 今年度の活動概要	18
2. 精神保健研究所所長室	20
3. 公共精神健康医療研究部	26
4. 薬物依存研究部	36
5. 行動医学研究部	66
6. 児童・予防精神医学研究部	77
7. 精神薬理研究部	85
8. 精神疾患病態研究部	93
9. 睡眠・覚醒障害研究部	111
10. 知的・発達障害研究部	126
11. 地域精神保健・法制度研究部	133
12. ストレス・災害時こころの情報支援センター	153
III. 研修実績	158
IV. ランチョンセミナー開催実績	192
V. 精神保健研究所研究報告会プログラム・抄録集	193
VI. 令和6年度委託および受託研究課題	218

I. 精神保健研究所の概要

1. 創立の趣旨及び沿革

I. 創立の趣旨

本研究所は、精神衛生に関する諸問題について、精神医学、心理学、社会学、社会福祉学、保健学等各分野の専門家による学際的立場からの総合的、包括的な研究を行うとともに、国、地方公共団体、病院等において精神衛生業務に従事する者に対する精神衛生全般にわたる知識、技術に関する研修を行い、その資質の向上を図ることを目的として、昭和27年1月、アメリカのNIMHをモデルに厚生省の付属機関として設立された。

II. 精神衛生研究所の沿革

昭和25年に精神衛生法が制定された際、国立精神衛生研究所を設立すべき旨の国会の附帯決議が採択された。これを踏まえ、厚生省設置法及び厚生省組織規程の一部が改正され、昭和27年1月、千葉県市川市に国立精神衛生研究所が設置された。

研究所の規模について、当初、厚生省は、1課8部60名程度の組織を構想していたが、財政事情等により、総務課、心理学部、生理学形態学部、優生学部、児童精神衛生部及び社会学部の1課5部30名の体制で発足した。また、附属病院をもつことの重要性は、当時から認識されていたが、病院の新設は困難な情勢であったため、隣接する国立国府台病院と連携、協力することとされた。

その後、知的障害に対する対策の確立が社会的に求められるようになったことを受け、昭和35年10月1日、新たに精神薄弱部を設置するとともに既存の各部の再編と名称変更が行われた。この結果、研究所の組織は、総務課、精神衛生部、児童精神衛生部、社会精神衛生部、精神身体病理部、精神薄弱部及び優生部の1課6部となった。

昭和36年には、国立精神衛生研究所組織細則が制定され、部課長のもとに心理研究室、生理研究室、精神衛生相談室及び精神衛生研修室の4室が置かれた。それとともに、昭和35年1月から事実上行われていた精神衛生技術者に対する研修業務が厚生省設置法上の業務として加えられて医学科、心理学科、社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修が開始されることとなり、研修業務が調査研究と並ぶ研究所の重要な柱として正式に位置づけられることとなった。

昭和40年には、地域精神医療、社会復帰対策の充実等を内容とする精神衛生法の大改正に伴い、社会復帰部が新設されるとともに、新たに精神発達研究室及び主任研究官(3名)が置かれた。また、昭和46年6月には、社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室が設置された。さらに、昭和48年には、人口の高齢化に伴って、痴呆性老人等いわゆる「恍惚の人」が社会問題化したのを背景に、老人精神衛生部が、翌昭和49年には、同部に老化度研究室が新設された。

昭和50年には、精神衛生に関する相談が精神障害者の社会復帰と深く関連することから、社会復帰部を社会復帰相談部に改組、精神衛生相談室を同部に移管した。また、昭和53年12月には、社会復帰相談庁舎が完成し、精神衛生相談をはじめとする精神障害者の社会復帰に関する研究体制が強化された。昭和54年には、研修各科の名称が医学課程、心理学課程、社会福祉学課程及び精神衛生

指導課程に改称されるとともに、新たに精神科デイ・ケア課程が新設された。翌昭和55年には、研修庁舎が完成し研修業務の一層の充実が図られた。

Ⅲ. 国立精神・神経センター精神保健研究所の設立

国立精神衛生研究所は、このような着実な歩みをたどった後、昭和61年10月、国立武蔵療養所及び同神経センターとともに国立高度専門医療センターとして発足した国立精神・神経センターに発展的に統合された。ここに、国立精神・神経センター精神保健研究所は、国立高度専門医療センターの一研究部門として、精神保健に関する研究及び研修を担うこととなった。その際組織改正により、総務課が庶務課とされ、精神身体病理部と優生部が統合されて精神生理部とされたほか、精神保健計画部及び薬物依存研究部が新設された。その結果、統合前の1課8部8室は、1課9部19室となり、研究・研修機能の強化が図られた。

半年後の昭和62年4月には、国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合され、二病院二研究所を擁する国立高度専門医療センターが本格的に活動を開始した。これに伴い、庶務課は廃止され、精神・神経センター運営部（国府台地区）に研究所の事務部門（主幹、研究所事務係）が置かれた。また、同年10月には、心身医学研究部の新設と精神保健計画部システム開発研究室の増設が認められ、平成元年10月には、社会復帰相談部に援助技術研究室が設置された。

さらに、平成11年4月には、精神薄弱部が知的障害部に名称変更されるとともに、薬物依存研究部が組織改正により、心理社会研究室、依存性薬物研究室、診断治療開発研究室の3室編成となった。

平成14年1月に精神保健研究所が創立50周年を迎え、創立50周年パーティの開催、記念誌の発行、公開市民シンポジウムを行った。

平成15年10月には司法精神医学研究部が新設され、3室体制で、研究員の増員も認められ、研究所の組織は、11部27室体制（精神保健研修室を含む）となった。

平成17年4月には精神保健研究所は小平（武蔵）地区に移転し研究活動を開始した。

平成18年10月には自殺予防総合対策センターの新設により、自殺実態分析室・適応障害研究室・自殺予防対策支援研究室の3室と、成人精神保健部に犯罪被害者等支援研究室・災害時等支援研究室の2室の増設が認められた。

平成21年6月に精神保健に関する技術研修の事務担当が政策医療企画課から研究所事務係へと移管され、また10月に精神生理部に臨床病態生理研究室が設置され3室編成となり、研究所の組織は11部33室（精神保健研修室含）となった。

Ⅳ. 独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所へ改組

国民の健康に重大な影響のある特定の疾患等に係る医療に関し、調査、研究及び技術の開発並びにこれらの業務に密接に関連する医療の提供、技術者の研修等を行う独立行政法人の名称、目的、業務の範囲等に関する事項を定めることを目的とした、「高度専門医療に関する研究等を行う独立行政法人に関する法律」の施行により、それまでのナショナルセンター6組織が平成22年4月1日に独立行政法人化された。

我が国立精神・神経センターは「精神疾患、神経疾患、筋疾患及び知的障害その他の発達の障害に係る医療並びに精神保健」を担当する「独立行政法人国立精神・神経医療研究センター」となり、精神保健研究所も内部の組織が改正された。

自殺予防総合対策センターは、自殺実態分析室、適応障害研究室、自殺予防対策支援研究室の3室編成。

精神保健計画部は、精神保健計画研究部へ名称変更され、統計解析研究室、システム開発研究室の2室編成。

薬物依存研究部は、心理社会研究室、依存性薬物研究室、診断治療開発研究室の3室編成。

心身医学研究部は、ストレス研究室、心身症研究室の2室編成。

児童・思春期精神保健部は児童・思春期精神保健研究部へ名称変更され、精神発達研究室、児童期精神保健研究室、思春期精神保健研究室の3室編成。

成人精神保健部は、成人精神保健研究部へ名称変更され、精神機能研究室、診断技術研究室、認知機能研究室、犯罪被害者等支援研究室、災害等支援研究室の5室編成。

老人精神保健部は、精神薬理研究部へ名称変更され、精神薬理研究室、気分障害研究室の2室編成。

社会精神保健部は、社会精神保健研究部へ名称変更され、社会福祉研究室、社会文化研究室、家族・地域研究室の3室編成。

精神生理部は、精神生理研究部へ名称変更され、精神生理機能研究室、臨床病態生理研究室の2室編成。

知的障害部は、知的障害研究部へ名称変更され、診断研究室、治療研究室、発達障害支援研究室の3室編成。

社会復帰相談部は、社会復帰研究部へ名称変更され、精神保健相談研究室、援助技術研究室の2室編成。

司法精神医学研究部は、制度運用研究室、専門医療・社会復帰研究室、精神鑑定研究室の3室編成。

以上、自殺予防総合対策センター及び11部、計33室となった。

また、研究所の事務部門は、主幹が研究所事務室長となり、研究所事務係とともに、研究所の所属となった。

平成23年4月、事務部門の組織変更が行われ、研究所事務室は総務部の所属となった。

平成23年12月には災害時こころの情報支援センターの新設により、情報支援研究室の1室が認められた。

以上、自殺予防総合対策センター、災害時こころの情報支援センター及び11部、計34室となった。

平成24年1月、千葉縣市川市の地に国立精神衛生研究所が設置されてから、創立60周年を迎え、記念祝賀会を開催し、創立60周年記念誌を発行した。

平成27年4月1日、独立行政法人から国立研究開発法人へ改組。

V. 国立研究開発法人後の編成等

平成28年4月1日、自殺予防総合対策センターを廃し自殺総合対策推進センターを新設、自殺実態・統計分析室、自殺総合対策研究室、自殺未遂者・遺族支援等推進室、地域連携推進室の4室編成。

以上、自殺総合対策推進センター、災害時こころの情報支援センター及び11部、計35室となった。

平成29年10月1日、社会精神保健研究部（1部3室）を廃止し、その機能の一部を精神保健計画研究部へ移管（1室）、併せて精神疾患病態研究部（1部2室）を増設。

平成30年4月1日、精神保健研究所の組織改編を行った。

社会復帰研究部（1部2室）と司法精神医学研究室（1部3室）を地域・司法精神医療研究部として統合、臨床援助技術研究室、精神保健サービス評価研究室、司法精神保健研究室、制度運用研究部の3室編成。

心身医学研究部（1部2室）と成人精神保健研究部（1部5室）を行動医学研究部として統合、精神機能研究室、診断技術研究室、認知機能研究室、災害等支援研究室、ストレス研究室、心身症研究部の6室編成。

災害時こころの情報支援センター（1室）をストレス・災害時こころの情報支援センターへ改名、情報支援研究室、犯罪被害者等支援研究部の2室編成。

精神保健計画研究室（1部3室）を精神医療政策研究部へ改名、保健福祉連携研究室、政策評価研究室、精神医療体制研究室、NDB集計企画担当部の4室編成。

児童・思春期精神保健研究部（1部3室）を児童・予防精神医学研究部へ改名、児童・青年期保健研究室、精神疾患早期支援・予防研究部の2室編成。

精神薬理研究部（1部2室）2室を改名、分子精神薬理研究室、向精神薬研究開発部の2室編成。

知的障害研究部（1部3室）を知的・発達障害研究部へ改名、発達機能研究室、知的障害研究部の2室編成。

精神生理研究部（1部2室）を睡眠・覚醒障害研究部へ改名。

以上、自殺総合対策推進センター、ストレス・災害時こころの情報支援センター及び9部、計33室となった。

令和2年4月1日、自殺総合対策推進センターを廃止、厚生労働大臣指定（調査研究等）法人のち支える自殺対策推進センターに業務を継承。

令和2年11月1日、精神医療政策研究部を公共精神健康医療研究部（1室（NDB集計企画担当室）を廃止）に名称変更。

以上、ストレス・災害時こころの情報支援センター及び9部、計28室となった。

沿革

事項 年次	所 長	組 織 等 経 過
昭和25年5月		精神衛生法国会通過（精神衛生研究所設置の附帯決議採択）
26年3月		厚生省公衆衛生局庶務課が設置の衝にあたる
27年1月	黒沢 良臣 (国立国府台 病院長兼任)	厚生省設置法並びに組織規程の一部改正により精神衛生に関する調査研究を行う附属機関として、千葉県市川市に国立精神衛生研究所設置総務課，心理学部，生理学形態学部，優生学部，児童精神衛生部及び社会学部の1課5部により業務開始
35年10月		心理学部を精神衛生部に，社会学部を社会精神衛生部に，生理学形態学部を精神身体病理部に，優生学部を優生部に名称変更し，精神薄弱部を新設
36年4月		精神衛生研修室，心理研究室，精神衛生相談室及び生理研究室を新設
36年6月		厚生省設置法の一部改正により精神衛生技術者の研修業務が追加され，医学科，心理学科，社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修開始
36年10月	内村 祐之	
37年4月	尾村 偉久 (公衆衛生局長 が所長事務取扱)	
38年7月	若松 栄一 (公衆衛生局長 が所長事務取扱)	
39年4月	村松 常雄	主任研究官を置く
40年7月		社会復帰部及び精神発達研究室を新設
41年7月		本館改築完成（5カ年計画）
44年4月		総務課長補佐を置く
46年4月	笠松 章	
46年6月		社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室を新設
48年7月		老人精神衛生部を新設

49年7月		老人精神衛生部に老化度研究室を新設
50年7月		社会復帰部を社会復帰相談部に名称変更 精神衛生相談室を精神衛生部から社会復帰相談部の所属に改正
52年3月	加藤 正明	
53年12月		社会復帰相談庁舎完成（2カ年計画）
54年4月		研修課程の名称を医学課程，心理学課程，社会福祉学課程及び精神衛生指導課程に名称変更し，精神科デイ・ケア課程を新設
55年4月		研修庁舎完成（講義室・図書室・研修生宿舎）
58年1月	土居 健郎	
58年10月		老人精神衛生部に老人保健研究室を新設
60年4月	高臣 武史	
61年5月		厚生省設置法の一部改正により，国立高度専門医療センターの設置を決定
61年9月		厚生省組織令の一部改正により，国立高度専門医療センターの名称と所掌事務が決定
61年10月		国立高度専門医療センターの一つとして，国立武蔵療養所，同神経センターと国立精神衛生研究所を統合し，国立精神・神経センター設置 ナショナルセンターの1研究所として精神保健研究所に改組，精神身体病理部と優生部を統合し精神生理部としたほか，精神保健計画部及び薬物依存研究部を新設，1課9部19室となる
62年4月	島藺 安雄 （総長が所長事務取扱）	厚生省組織規程の一部改正により，国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合し，2病院，2研究所となる 庶務課廃止，研究所に主幹を置く
62年6月	藤縄 昭	
62年10月		心身医学研究部（ストレス研究室，心身症研究室）と精神保健計画部システム開発研究室を新設
平成元年10月		社会復帰相談部に援助技術研究室を新設
6年4月	大塚 俊男	
9年4月	吉川 武彦	
11年4月		薬物依存研究部で研究室の改組があり，心理社会研究室と依存性薬物研究室となり，診断治療開発研究室を新設

I 精神保健研究所の概要

		精神薄弱部を知的障害部に名称変更
13年1月	堺 宣道	
14年1月		精神保健研究所創立50周年
14年6月	高橋 清久 (総長が所長事務取扱)	
14年8月	今田 寛睦	
15年10月		司法精神医学研究部を新設（制度運用研究室，専門医療・社会復帰研究室，精神鑑定研究室）
16年4月	金澤 一郎 (総長が所長事務取扱)	
16年7月	上田 茂	
17年4月		市川市（国府台）から小平市（武蔵地区）に移転
17年8月	北井 暁子	
18年10月		自殺予防総合対策センターの新設（自殺実態分析室，適応障害研究室，自殺予防対策支援研究室），成人精神保健部の増設（犯罪被害者等支援研究室，災害時等支援研究室）
19年6月	加我 牧子	
21年10月		精神生理部に臨床病態生理研究室を新設
22年4月		独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所となる 8つの研究部の名称を変更（精神保健計画研究部，児童・思春期精神保健研究部，成人精神保健研究部，精神薬理研究部，社会精神保健研究部，精神生理研究部，知的障害研究部，社会復帰研究部）し，知的障害研究部に発達障害支援研究室を新設，11部33室（室長定数29）となる 所長補佐及び自殺予防総合対策センター副センター長を置く
23年12月		災害時こころの情報支援センターの新設（情報支援研究室）
25年4月	野田 広	
25年7月	福田 祐典	

27年4月		国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所となる
27年9月	富澤 一郎	
27年12月	中込 和幸	
28年4月		自殺予防総合対策センターを廃し自殺総合対策推進センターを新設（自殺実態・統計分析室，自殺総合対策研究室，自殺未遂者・遺族支援等推進室，地域連携推進室）
29年10月		社会精神保健研究部を廃止 精神疾患病態研究部を新設（基盤整備研究室，病態解析研究室），精神保健計画研究部精神医療体制研究室を増設
30年4月		4つの部を2つの部へ統合，また7研究部の名称を変更（地域・司法精神医学研究部，行動医学研究部，ストレス・災害時こころの情報支援センター，精神医療政策研究部，児童・予防精神医学研究部，知的・発達障害研究部，睡眠・覚醒障害研究部）及び室名変更等再編し，結果，2センター，11部35室から9部33室となる
31年1月	金 吉晴	
令和2年4月		自殺総合対策推進センター（4室）を廃止，厚生労働大臣指定（調査研究等）法人いのち支える自殺対策推進センターに業務を継承
2年11月		精神医療政策研究部を公共精神健康医療研究部（1室を廃止）に名称変更し，現在の1センター9部28室となる
4年4月		地域・司法精神医療研究部を地域精神保健・法制度研究部に名称変更
令和6年4月	張 賢徳	

2. 内部組織改正の経緯

国 立 精 神 衛 生 研 究 所										
組	創立昭和27年1月 総務課	35年10月 →	36年6月 総務課 精神衛生研修室 (6月)	40年7月	46年6月	48年7月	49年7月	50年7月	58年10月	61年4月 総務課 精神衛生研修室
織	心理学部	精神衛生部	精神衛生部 心理研究室 精神衛生相談室 (4月)					精神衛生部 心理研究室		精神衛生部 心理研究室
						老人精神衛生部	老人精神衛生部 老化研究室		老人精神衛生部 老化度研究室 老人保健研究室	老人精神衛生部 老化度研究室 老人保健研究室
	児童精神衛生部	→	児童精神衛生部 精神発達研究室							児童精神衛生部 精神発達研究室
	社会学部	社会精神衛生部			社会精神衛生部 ソーシャルワーク研究室					社会精神衛生部 ソーシャルワーク研究室
	生理学形態学部	精神身体病理部	精神身体病理部 生理研究室 (4月)							精神身体病理部 生理研究室 (4月)
	優生学部	優生学部								優生部
		精神薄弱部								精神薄弱部
				社会復帰部				社会復帰相談部 精神衛生相談室		社会復帰相談部 精神衛生相談室

国立精神・神経 センター精神保 健研究所	国立精神・神経センター精神保健研究所								
61年10月	62年4月	62年10月	元年10月	11年4月	13年4月	15年10月	18年10月	20年6月	21年10月
庶務課 精神衛生研修室	運営部庶務第二課 精神保健研修室	運営部庶務第二課 運営部企画室 精神保健研修室			運営部政策医療 企画課 精神保健研修室		運営局 政策医療企画課 精神保健研修室	運営局 政策医療企画課 精神保健研修室 庶務課 研究所事務係	
							自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室		
精神保健計画部 統計解析研究室		精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室					精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室		
薬物依存研究部 薬物依存研究室 向精神薬研究室		薬物依存研究部 薬物依存研究室 向精神薬研究室		薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室			薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室		
		心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室					心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室		
成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室		成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室					成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室		
老人精神保健部 老化研究室 老人保健研究室		老人精神保健部 老化研究室 老人精神保健研究室					老人精神保健部 老化研究室 老人精神保健研究室		
児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室		児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室					児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室		
社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室		社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室					社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室		
精神生理部 精神機能研究室		精神生理部 精神機能研究室					精神生理部 精神機能研究室		精神生理部 精神機能研究室 臨床病態生理研究室
精神薄弱部 診断研究室 治療研究室		精神薄弱部 診断研究室 治療研究室		知的障害部 診断研究室 治療研究室			知的障害部 診断研究室 治療研究室		
社会復帰相談部 精神保健相談研究室		社会復帰相談部 精神保健相談研究室	社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室				社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室		
						司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室		

I 精神保健研究所の概要

	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所		国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所			
	平成22年4月	平成23年12月	平成27年4月	平成28年4月	平成29年10月	平成30年4月
組	研究所事務室 研究所事務係		研究所事務室 研究所事務係		研究所事務室 研究所事務係	研究所事務室 研究所事務係
	自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室		自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室 地域連携推進室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室 地域連携推進室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室 地域連携推進室
		災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室	災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室			ストレス・災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室 犯罪被害者等支援研究室
	精神保健計画研究部 統計解析研究室 システム開発研究室		精神保健計画研究部 統計解析研究室 システム開発研究室		精神保健計画研究部 統計解析研究室 システム開発研究室 精神医療体制研究室	精神医療政策研究部 保健福祉連携研究室 政策評価研究室 精神医療体制研究室 NDB集計企画担当室
	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室		薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室		薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室
	心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室		心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室		心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室	行動医学研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室
	成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室		成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室		成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室	災害等支援研究室 ストレス研究室 心身症研究室
	精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室		精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室		精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室	精神薬理研究部 分子精神薬理研究室 向精神薬研究開発室
	児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室		児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室		児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室	児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室 精神疾患早期支援・予防研究室
	社会精神保健研究部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室		社会精神保健研究部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室			
	精神生理研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室		精神生理研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室		精神生理研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	睡眠・覚醒障害研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室
	知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室		知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室		知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室	知的・発達障害研究部 発達機能研究室 知的障害研究室
	社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室		社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室		社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室	地域・司法精神医療研究部 臨床援助技術研究室 精神保健サービス評価研究室
	司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室		司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室		司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	司法精神保健研究室 制度運用研究室
					精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室	精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室

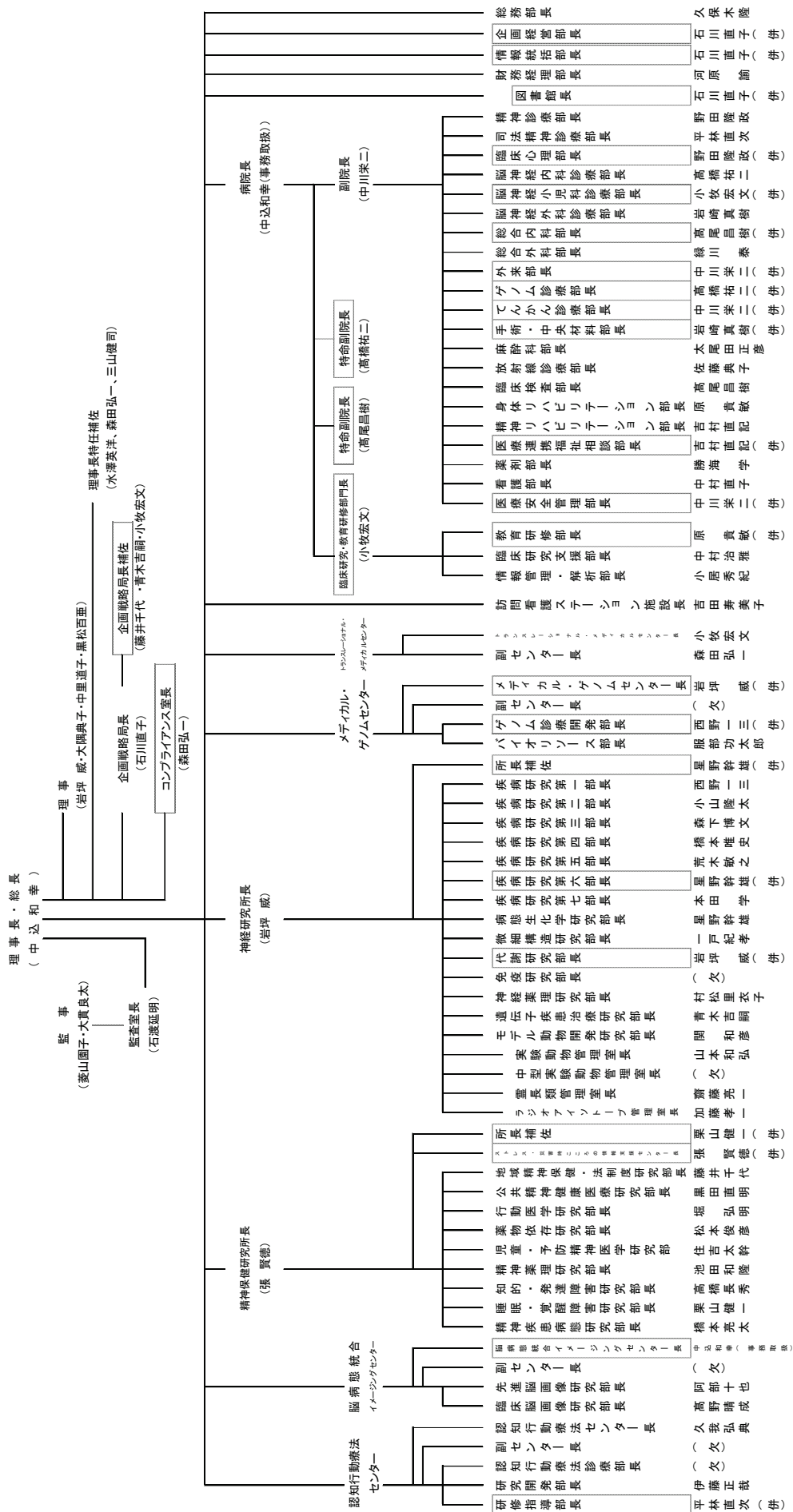
織

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所		
令和2年4月	令和2年11月	令和4年4月
研究所事務室 研究所事務係	研究所事務室 研究所事務係	研究所事務室 研究所事務係
ストレス・災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室 犯罪被害者等支援研究室	ストレス・災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室 犯罪被害者等支援研究室	ストレス・災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室 犯罪被害者等支援研究室
精神医療政策研究部 保健福祉連携研究室 政策評価研究室 精神医療体制研究室 NDB集計企画担当室	公共精神健康医療研究部 保健福祉連携研究室 政策評価研究室 精神医療体制研究室	公共精神健康医療研究部 保健福祉連携研究室 政策評価研究室 精神医療体制研究室
薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室
行動医学研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 災害等支援研究室 ストレス研究室 心身症研究室	行動医学研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 災害等支援研究室 ストレス研究室 心身症研究室	行動医学研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 災害等支援研究室 ストレス研究室 心身症研究室
精神薬理研究部 分子精神薬理研究室 向精神薬研究開発室	精神薬理研究部 分子精神薬理研究室 向精神薬研究開発室	精神薬理研究部 分子精神薬理研究室 向精神薬研究開発室
児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室 精神疾患早期支援・予防研究室	児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室 精神疾患早期支援・予防研究室	児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室 精神疾患早期支援・予防研究室
睡眠・覚醒障害研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	睡眠・覚醒障害研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	睡眠・覚醒障害研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室
知的・発達障害研究部 発達機能研究室 知的障害研究室	知的・発達障害研究部 発達機能研究室 知的障害研究室	知的・発達障害研究部 発達機能研究室 知的障害研究室
地域・司法精神医療研究部 臨床援助技術研究室 精神保健サービス評価研究室 司法精神保健研究室 制度運用研究室	地域・司法精神医療研究部 臨床援助技術研究室 精神保健サービス評価研究室 司法精神保健研究室 制度運用研究室	地域精神保健・法制度研究部 臨床援助技術研究室 精神保健サービス評価研究室 司法精神保健研究室 制度運用研究室
精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室	精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室	精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室

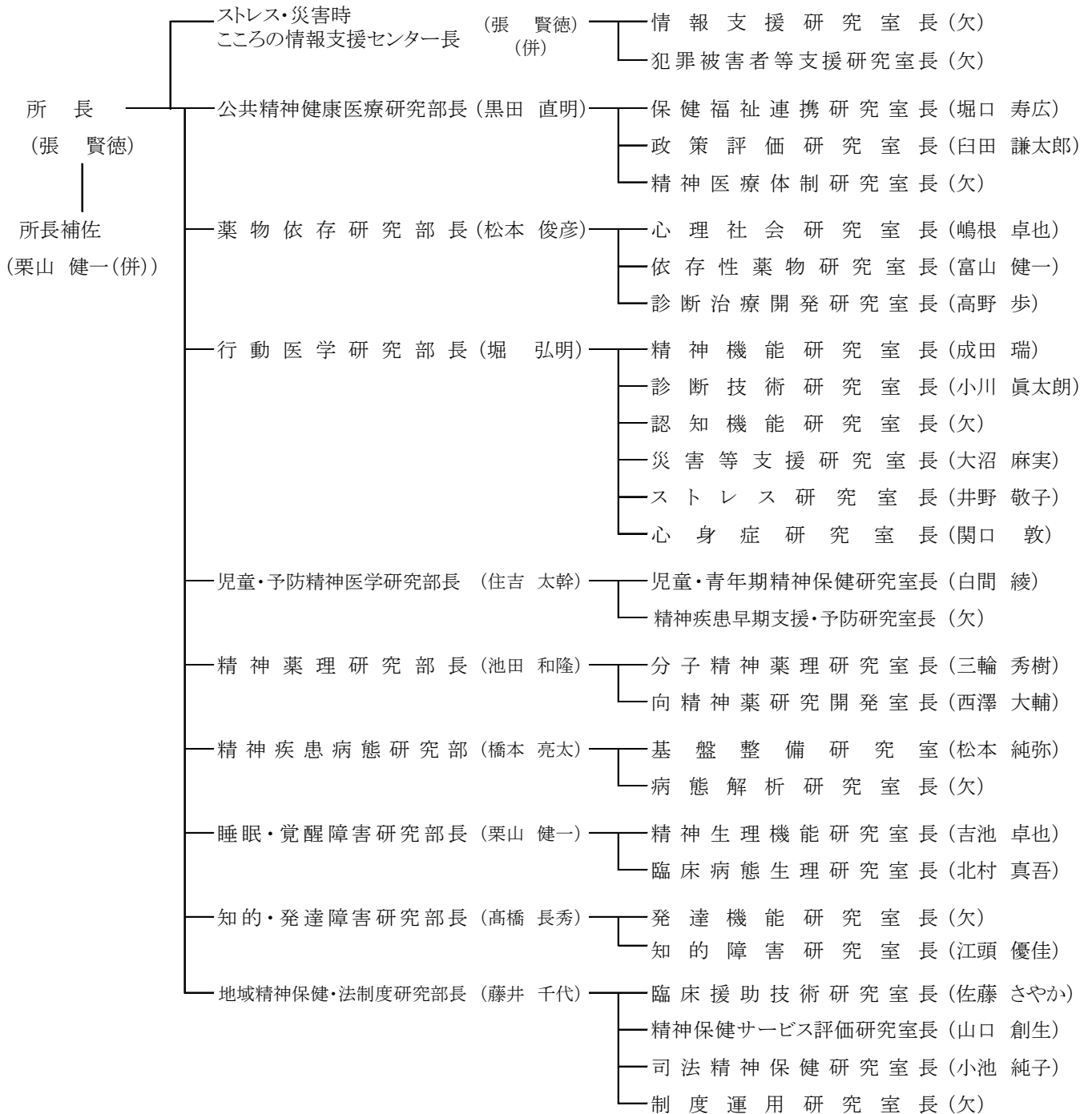
3. 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター組織図

(令和7年3月31日現在)

は併任ポスト



4. 職員配置（令和7年3月31日現在）



部名	部長	研究員	①兼任研究員 リサーチ・コーディネーター ○チクニカル・フェロー	②兼任研究員 ○科経費研究員 ○科経費研究補助員 △科経費研究社会事業専門員	科経費研究助手 ○科経費研究助手	セナ研究助手 ○セナ研究補助員	セナ事務助手	併任研究員	客員研究員	外兼任研究員 ○補助員	研究生 ○研究生
行動医学研究部									須置 楓介 梅田 慶子 伊藤 真利子 宮本 悦子 中山 未知 野間 俊一 石田 敦子		佐藤 隆 廣野 啓 Laura Elisabeth Tuturuva (7.1.1～) 須田 晶子 (7.3.1～) ○道川 由佳子 ○岡崎 遥 ○Kathy Luo (6.6.1～6.8.31)
児童・予防精神医学研究部	住吉 太幹	山田 理沙 (6.9.1～)	末吉 一貴 Andrew Mark Stickley (6.6.1～) 山田 理沙 (～6.8.31) 和田 歩 (6.10.1～)	長谷川 由美 住吉 佐和子 ○住吉 佐和子 (～6.5.31) □宮坂 岳 □宋 惠恩 △本田 妙小り	○山野 真由子 ○福本 美好子		佐藤 綾		神尾 陽子 高橋 秀俊 樋口 悠子 敷井 裕光 石井 良平 住吉 チカ 川崎 康弘 菊知 元 小坂 浩隆 (～6.6.30, 6.8.1～) 上原 隆 信川 創 酒田 圭一郎 藤井 猛		森野 和雄 薄老島 健 岡 琢哉 齊藤 彰 山田 悠至 稲川 拓磨 原口 英之 星野 大
精神薬理研究部	池田 和隆		上原 諭志 森田 拓 (6.6.1～)	○中山 京子 (6.8.1～)	○山巻 隼 (6.6.18～)			村松 浩美	山田 光彦 山田 美佐		松谷 真由美
精神疾患治療研究部	橋本 亮太	三輪 秀樹 西澤 大輔 (6.8.1～)	長谷川 尚英 伊藤 優姫	山縣 遥美子 宮川 希 米田 智成 (～6.4.2) ○木村 哲也 (～6.11.20) ○北川 航 ○河上 優輔 ○鈴木 暁 (～6.8.2) ○藤乃巻 龍之心 ○五十嵐 香琳 (6.8.1～) □新谷 茉莉果 □小池 春菜 □瀧浪 真夢 一砂 / 1st (～6.10.29)				久保田 智香 佐藤 英樹 竹田 康二 根本 隆野 志野 萌成 石川 夏絵 林 大社 渡邊 基子 一戸 紀孝 五十嵐 俊 西村 晃南	大石 恵 山田 星 高江洲 義和 稲田 健子 榎野 聖子 近江 麗和 阿竹 規雄 酒井 佳永 石丸 典生 山下 文聰 小高 チカ 住吉 敦夫 豊巻 信夫 栗岩 弘隆 山形 敦夫 中川 啓壽 竹内 啓壽 飯田 仁志 小笠原 一龍 岡田 研一 森田 健太郎 福本 健太郎 馬場 元 香月 あすか 坪井 真嗣 村岡 夏之郎 越智 耕一郎 小畑 進介 岡田 剛 肥田 道多 三野 大 三野 隆一郎 杉原 友一 (6.5.1～) 山田 海樹 (6.12.23～)	本多 安充 森藤 亘 青木 陽平 飯田 英貴 (6.4.29～) 磯村 洋生 (6.4.29～) 伊井 理紗子 (6.4.29～)	生金 彰 井至 健太 清水 泰仁 佐藤 美緒 中静 れみ 森 悠輔 藤井 大輔 吉田 恵太 中川 陽一 石丸 直樹 杉崎 友美 高麗 純子 志村 賢輔 齋藤 森 (6.6.25～) ○篠原 咲希音 ○中山 瑠美音 (6.7.30～6.9.30)

I 精神保健研究所の概要

部名	部長	専任	研究員	◎特任研究員 リサーチ・フェロー ○チ・ニ・カル・フェロー	科研究員 ◎科研究員 △科研究員 □科研究員	科研究員 ◎科研究員 △科研究員 □科研究員	セナ研究員 ○セナ研究員	セナ研究員 ○セナ研究員	兼任研究員	客員研究員	外来研究員 ○顧問員	研究生 ○実習生
睡眠・覚醒障害研究部	栗山 健一	北村 真喜 吉池 卓也		内海 智博 ◎チ・ニ・カル・フェロー	科研究員 ◎科研究員 △科研究員 □科研究員	科研究員 ◎科研究員 △科研究員 □科研究員	セナ研究員 ○セナ研究員	セナ研究員 ○セナ研究員	兼任研究員	客員研究員	外来研究員 ○顧問員	研究生 ○実習生
知的・発達障害研究部	横 野 健 (併任) (～6.8.31) 坂 野 長秀 (6.9.1～)	石井 礼花 (～6.9.30) 江頭 優佳		訓 藤 正敏 (～6.5.31)	科研究員 ◎科研究員 △科研究員 □科研究員	科研究員 ◎科研究員 △科研究員 □科研究員	セナ研究員 ○セナ研究員	セナ研究員 ○セナ研究員	兼任研究員	客員研究員	外来研究員 ○顧問員	研究生 ○実習生
地域精神保健・法制度研究部	藤井 千代	佐藤 さやか 山口 莉生 小池 純子	小堀 雅崇 山口 敬之 (6.8.1～)	◎名雪 和美 川口 彩子 (～6.7.31) 岩永 麻衣 白井 香 阿部 真貴子 (～7.1.31) 一木 崇弘 (6.9.1～) ◎久米 文恵 (6.9.1～)	科研究員 ◎科研究員 △科研究員 □科研究員	科研究員 ◎科研究員 △科研究員 □科研究員	セナ研究員 ○セナ研究員	セナ研究員 ○セナ研究員	兼任研究員	客員研究員	外来研究員 ○顧問員	研究生 ○実習生
地域精神保健・法制度研究部 所沢・ウトリージ事業			(看護師) 中西 清晃 榎本 美智子 (医療社会事業部員) 西内 絵里沙 (作業療法士) 柴田 興	(科研究員・NLP・Cp) 山崎 さおり	科研究員 ◎科研究員 △科研究員 □科研究員	科研究員 ◎科研究員 △科研究員 □科研究員	セナ研究員 ○セナ研究員	セナ研究員 ○セナ研究員	兼任研究員	客員研究員	外来研究員 ○顧問員	研究生 ○実習生

※806.8.1より 研究員実習生は研究生と見なす

Ⅱ．研究活動状況

1. 今年度の活動概要

Ⅰ．概要

1) 人事

令和 6 年度は 4 月 1 日から張 賢徳が所長を務めた（ストレス・災害時こころの情報支援センター長を併任）。

本年度の常勤研究員人事(再任を除く)は、下記のとおりである。

4 月 1 日、精神薬理研究部長に池田和隆、公共精神健康医療研究部長に黒田直明、行動医学研究部長に堀 弘明、精神疾患病態研究部 病態解析研究室長に西谷正太、知的・発達障害研究部 知的障害研究室長に江頭優佳が採用された。8 月 1 日、精神薬理研究部 向精神薬研究開発室長に西澤大輔、地域精神保健・法制度研究部 研究員に川口敬之が採用された。9 月 1 日、知的・発達障害研究部長に高橋長秀、児童・予防精神医学研究部 研究員に山田理沙が採用された。

令和 6 年度退職者は、精神疾患病態研究部 病態解析研究室長 西谷正太（9 月 30 日付）、知的・発達障害研究部 発達機能研究室長 石井礼花（同日付）、児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室長 白間 綾（3 月 31 日付）、公共精神健康医療研究部 研究員 羽澄 恵（同日付）であった。

2) 概況

精神保健研究所は、患者さんやご家族、国民に役立つ研究を実践し、国の精神保健福祉政策策定に貢献するシンクタンクとしての機能を担う一方で、研究発表分野でも精力的な活動を行っている。令和 6 年度には英文原著 144 編、和文原著 22 編、英文総説 6 編、和文総説 65 編、英文著書 4 編、和文著書 46 編を報告した（分担執筆含む）。また、学会発表としては国際学会で 79 件、国内学会で 251 件の発表を果たした。主要学会等では、若手研究者を中心に優秀賞や奨励賞等の学会賞を計 18 件受賞した。詳細は各研究部の活動状況を参照されたい。

第 36 回精神保健研究所研究報告会を令和 7 年 3 月 17 日に開催し、優秀発表賞（青申賞）に山口創生（地域精神保健・法制度研究部）、若手奨励賞に森屋由紀（精神薬理研究部）および喜多村真紀（薬物依存研究部）が選ばれた。詳細はプログラム・抄録集を参照されたい。

精神保健研究所は、専門家を対象とした各分野の研修（精神保健福祉、薬物依存、摂食障害、発達障害、災害時心理対応、入院者訪問支援、統合失調症・うつ病の標準治療研修、精神科救急医療体制整備、PTSD 対策等）を行っている。令和 6 年度は対面研修 4 回、オンライン研修 21 回、対面とオンラインを組み合わせた研修 2 回の合計 27 回を実施し、合計 3,222 名が受講した。詳細は後述した。

Ⅱ. 精神保健研究所プレスリリース一覧

日付	件名	担当
2024 年 5 月 17 日	飲料とうつ病の関連について ～甘味飲料、炭酸飲料、野菜・果物ジュース、砂糖入りコーヒーによる うつ病リスク上昇と、ブラックコーヒーによるうつ病リスク低下を確認～	行動医学研究部 室長 成田 瑞
2024 年 5 月 28 日	内受容感覚訓練が脳回路変化を誘導することを発 ～心身症の新規治療法開発への期待～	行動医学研究部 室長 関口 敦
2022 年 6 月 10 日	思春期におけるインターネットの不適切使用が精神病症状 および抑うつリスクを高めることを確認	行動医学研究部 室長 成田 瑞
2024 年 10 月 31 日	ネガティブな出来事における不確かな文脈記憶形成：その神経生物学的メカニズムとうつ病の発症リスクとの関係を解明 —うつ病の予防・治療に役立つ可能性—	行動医学研究部 部長 堀 弘明
2024 年 12 月 24 日	注意欠如・多動症（ADHD）の遺伝的リスクと子どものゲーム利用時間の増加に与える影響	知的・発達障害研究部 部長 高橋 長秀

2. 精神保健研究所 所長室

I. 研究部の概要

令和6年度の当室の人員構成は以下の通りである。所長：張 賢徳，客員研究員：金 吉晴，林 明明，科研費研究員：川島友子，奥村和香子（9.1～），科研費研究補助員：奥村和香子（～8.31），事務助手：渡邊颯希。

II. 研究活動

1) Quality Indicator を用いた精神科医療の質向上プログラムの開発と効果研究

精神科医療の質の向上に資する質指標（quality indicator：QI）の開発を目標とし、医師のセルフチェック型 QI を開発し、診療現場での効果検証を経て日常臨床で使用される社会実装を目指す。当該年度は QI 項目作成のための基礎資料として現状を把握すべく、精神科医ならびに精神科外来患者に「医療の現状」と「理想的な医療」に関するアンケート調査を実施した。その結果をもとにフォーカスグループで QI 項目を策定し、その QI 項目を学ぶための教育資材を作成する。その効果を NCNP 病院と精神科外来協力機関で検証し、QI 項目と教育資材を完成させる。（張，川島，金）

2) 性行動異常を呈する者の精神医学的考察と認知行動療法を含めた介入方法の検討及び性被害者の心理的ストレス対処に資する実態調査

厚生労働科学特別研究事業として張が研究代表となり、精神保健研究所の他、千葉大学、NCNP 認知行動療法センターが参画し実施した。性行動異常を呈する者に対する国内の治療・ケアの実態を調査し、専門的治療を提供する人材及び施設が希少であること、性嗜好障害に対する治療方針が未確立であることが確認された。医療観察法対象者に限れば、性加害者には統合失調症圏が多いことが見出された。性犯罪被害者支援に関する調査では相談先として警察の役割の重要性が示された。いずれも国内で初めて明らかにされた知見であり今後この領域の研究の基盤になる成果が得られた。（張，金，林）

3) 性的問題行動のある者に対する認知行動療法の考え方に基づいたケア支援プログラムの提案に関する研究

上記 2) の分担研究の協力者として研究計画に参画し、性加害者への処遇や性的問題行動への対応についての有識者の意見や、エキスパート会議の議論を踏まえて、医療機関での実施を想定した認知行動療法に基づく支援プログラムを提案した。更に関係機関との連携や地域ガイドラインの運用状況についても確認した。今後は、支援プログラムの具体的な開発と、その実施可能性・安全性・有効性の検討を行う予定である。（張）

4) 性犯罪被害者支援のための、医療機関の受診行動を改善するための web アンケート調査

上記 2) の分担研究として、一般市民を対象とした Web アンケート調査により、性暴力被害、および比較のためにそれ以外の重大ストレス体験（自然災害）を体験した場合の受療を促進・阻害する要因の解析を行い、群間比較、自由記述解析によって性被害に特有な受療・相談の阻害要因を抽出した。（張，金，林）

5) 自殺未遂者の実態解明と自殺未遂者登録システム構築のための研究

一般および精神科救急医療部門に搬送された日本の自殺未遂者を対象に、全国自殺未遂患者登録システムの予備的構築と運用を目的とし、日本自殺予防学会、救急患者精神科継続支援料を算定する医療施設、ならびに日本精神科救急学会との協働で実施する。令和6年度は、研究基盤の整備を行った。（張）

6) 自殺予防支援者が備えるネガティブ・ケイパビリティ (NC) とその関連要因

自殺予防支援者が支援現場で発揮している NC の特性を明らかにすることを目的とし、NC を醸成する研修プログラムの開発や、支援者のメンタルヘルス維持および支援の継続に資することを目指す。多機関共同研究の企画・立案に参画し、倫理審査を経て研究実施の承認を得た。(張)

7) 新型コロナウイルス感染症パンデミック後の自殺関連事象の動機に関する調査～パンデミック下との比較を通して～

アフターコロナでの自殺行動の動機について精神保健医療従事者を対象に WEB アンケート調査を実施し、COVID-19 パンデミック後のストレス因が自殺関連事象に及ぼす影響、両者の関連性、および相談や治療支援における課題について検証する。多機関共同研究の企画・立案に参画し、倫理審査を経て研究実施の承認を得た。(張)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・ 『こころの情報サイト』を通じてこころの健康づくりに関する情報と医学的情報、医療・福祉・労働・年金等社会的支援に関する情報、国の施策に関する情報を一般の方に向けて、分かりやすく提供している。令和 6 年度の年間のアクセス数は 5,268,396 であった。関連情報として当該サイトが朝日新聞デジタル、朝日新聞出版、NHK クローズアップ現代 WEB 記事などで紹介された。
- ・ NCNP 内の歴史資料を整理し、しょうけい館等適切に保管展示可能な施設への譲渡の検討
- ・ 世界メンタルヘルスデー2024 シルバー&グリーンライト点灯式に出席。2024.10.10。(張)
- ・ 市民向け公開講座にて自殺予防について講演を行った。(張)(IV. 研究業績, C. 講演 参照)
- ・ 各種報道を通じて自殺予防やメンタルヘルスについて普及啓発活動を行った。(張)(IV. 研究業績 F. その他 参照)

(2) 専門教育面における貢献

- ・ 各種学会の専門職向け、行政職員向け研修会等で自殺予防に関する研修で最新の知見を提供した。(張)(IV. 研究業績 C. 講演, E. 研修 参照)
- ・ 帝京大学 客員教授(張)

(3) 精研の研修の主催と協力

- ・ 各研修会の開催にあたり、開会式での挨拶等を通じて運営に協力、支援した。(張)

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

- ・ 東京都自殺対策事業アドバイザーボード委員(張)
- ・ 全国精神保健福祉センター長会定期総 来賓挨拶、講演。2025.7.4。(張)
- ・ 第 60 回全国精神保健福祉センター研究協議会 来賓挨拶。2025.10.28。(張)

(5) センター内における臨床的活動

(6) その他

- ・ Asian Consortium of National Mental Health Institutes (ACONAMI) 8th Annual Meeting, Leadership Discussion に参加、精神保健研究所、ソウル国立精神衛生センター、シンガポールメンタルヘルス機構共催、シンガポール、2024.11.18。(張)
- ・ タイ国政府代表医療視察団 司会。2025.8.9。(張)
- ・ 東京医科歯科大学 難治疾患研究学際領域展開ハブ形成プログラム運営委員会委員(張)

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Narita K, Kawanishi C, Tsuyama Y, Kawamoto S, Kashiwagi T, Ishibashi R, Cho Y, Otsuka K. Effectiveness of the 10 Essentials Workshop Program in Changing Attitudes Toward Suicide Among Mental Health Professionals. *Cureus* 17(1), 2025.

(2) 総説

- 1) 金 吉晴：特集 現代における解離—診断概念の変遷を踏まえ臨床的な理解を深める 解離性障害の器質論 どこまで解明されているか. *精神医学* 66(8):1067-1071, 2024.
- 2) 金 吉晴：特集 現代における解離—診断概念の変遷を踏まえ臨床的な理解を深める 複雑性 PTSD と解離の関係 結果可原因か. *精神医学* 66(8): 1072-1079, 2024.
- 3) 金 吉晴：PTSD 概念の歴史的変遷. *精神科治療学* 39(9):999-1002, 2024.

(3) 著書

- 1) 金 吉晴：コラム 複雑性 PTSD に対する新たな心理療法について：令和 6 年度厚生労働白書. 厚生労働省，東京，pp62-64, 2024.
- 2) 金 吉晴（監修）：PTSD：令和 6 年度厚生労働白書. 厚生労働省，東京，p62, 2024.

(4) 研究報告書

- 1) 張 賢徳：Quality Indicator を用いた医療の質向上プログラムの開発と効果研究. 国立精神・神経医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費研究事業 令和 6 年度 統括研究報告書. 2024.
- 2) 張 賢徳：性行動異常を呈する者の精神医学的考察と認知行動療法を含めた介入方法の検討及び性被害者の心理的ストレス対処に資する実態調査. 厚生労働行政推進調査事業費補助金（厚生労働科学特別研究事業）令和 6 年度 総括研究報告書. pp1-8, 2024.
- 3) 金 吉晴：PTSD の恐怖記憶と情動反応の分子基盤の解明と治療. 令和 5 年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）実績報告書. 2024.
- 4) 金 吉晴：性犯罪被害者支援、医療機関の受診行動を改善するための web アンケート調査. 厚生労働行政推進調査事業費補助金厚生労働科学特別研究事業「性行動異常を呈する者の精神医学的考察と認知行動療法を含めた介入方法の検討及び性被害者の心理的ストレス対処に資する実態調査（研究代表者：張 賢徳）」, 令和 6 年度研究分担報告書. pp63-68. 2024.

(5) 翻訳

- 1) 松永寿人，中尾智博，金 吉晴（監訳）：強迫症治療マニュアル エクスポージャーと反応（儀式）防止法：治療者用ガイドとワークブック. 金剛出版，東京，pp1-200, 2024.

(6) その他

- 1) 井上佳祐，河西千秋，張 賢徳，大塚耕太郎：入院患者の外出・外泊中の自殺企図の特徴 医療事故情報収集等事業における医療事故情報データの分析. *精神神経学雑誌* (2024 特別号) S403-S403, 2024.6.
- 2) 張 賢徳：第 19 回私たちの研究案内～公衆衛生の羅針盤～「国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所の取り組み～Bio-psycho-social な総合力を結集しメンタルヘルスの諸問題に挑む～」. *公衆衛生情報* 54(5)：10-11, 2024.8.15.
- 3) 張 賢徳：書評「精神科医はへき地医療で” 使いもの” になるのか？-私の転職奮闘記-」. *心と社会* 55(3)：116-117, 2024.09.15.

- 4) 張 賢徳：女性の一生の光と影．祈りと救いの臨床 8(1)：37-38, 2024.09.20.
- 5) 張 賢徳：産業医研修②『『適応障害』から考える職場のメンタルヘルス』．外来精神医療 25(1)：21-23, 2024.9.27.
- 6) 井上佳祐, 河西千秋, 張 賢徳, 大塚耕太郎：入院中に自殺によって死亡したせん妄患者の特徴．総合病院精神医学 36(Suppl) S-197, 2024.11.
- 7) 鈴木映二, 加藤忠史, 馬場 元, 川寄弘詔, 張 賢徳, 藤吉晴美, 竹林 実, 渡邊衡一郎：日本うつ病学会のあゆみ．臨床精神医学 53(12)：1487-1491, 2024.12.28.
- 8) 張 賢徳：書評「働く人のためのメンタルヘルス・ファーストエイド実践ガイド」 加藤隆弘・小原圭司・大塚耕太郎（編著） メディカ出版．産業精神保健 33(1):87-88, 2025.2.20.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 張 賢徳：シンポジウム 1 「外来精神医療における自殺対策」自殺予防からみた病診連携の在り方．第 1 回 日本外来精神医学会学術総会, 東京, 2024.9.23.
- 2) 張 賢徳：産業医研修②『『適応障害』から考える職場のメンタルヘルス』．第 24 回日本外来精神医療学会, 東京, 2024.10.13.
- 3) 張 賢徳：大会長企画教育講演「自殺予防と危機介入—救急現場での Do&Don't—」．第 32 回 日本精神科救急学会学術総会, 岩手, 2024.10.25.
- 4) 張 賢徳：指定発言：公開シンポジウム「がん患者の自殺対策—研究成果の普及のための公開シンポジウム—」．国立がん研究センター がん対策研究所サバイバーシップ研究部, オンライン, 2025.03.02.
- 5) 金 吉晴：ランチョンセミナー7 神経発達症とトラウマ．第 43 回日本社会精神医学, 東京, 2025.3.14.

(2) 一般演題

- 1) 石橋竜太郎, 佐野智章, 大塚耕太郎, 杉山直也, 張 賢徳, 河西千秋：精神科病院における自殺未遂者に対するアサーティヴ・ケースマネジメント介入試験計画．第 48 回 日本自殺予防学会総会 第 29 回 日本臨床死生学会総会 合同大会, 埼玉, 2024.9.14.
- 2) 井上佳祐, 河西千秋, 張 賢徳, 大塚耕太郎：入院患者の自殺死亡の特徴 医療事故情報収集等事業における医療事故情報データの分析(第 1 報)．第 48 回 日本自殺予防学会総会 第 30 回 日本臨床死生学会総会 合同大会, 埼玉, 2024.9.14.

(3) 研究報告会

(4) その他

- 1) 張 賢徳：自殺対策の最新トピックス．Lundbeck Psychiatry Expert Seminar 2024 Lundbeck Japan K.K., 北海道, 2024.6.20.
- 2) 張 賢徳：経産婦の自殺対策について．公益社団法人日本産婦人科医会 一般社団法人いのち支える自殺対策推進センター 共催, 経産婦の自殺対策のあり方についての意見交換会, 東京, 2024.12.2.

C. 講演

- 1) 張 賢徳：みんなで考えようメンタルヘルス—自殺予防の視点から考えてきたこと—．精神保健研究所所長講演会, 東京, 2024.5.20.
- 2) 張 賢徳：特別講演「みんなで考えるメンタルヘルス—自殺予防の視点から考えてきたこと—」．全国精神保健福祉センター長会定期総会, 東京, 2024.7.4.

- 3) 張 賢徳: 自殺予防と危機介入－Dos&Don'ts. 札幌医科大学神経精神医学教室同門会, 北海道, 2024.12.14.
- 4) 張 賢徳: うつ病と適応障害の治療について考える. Viatris Expert Seminar ヴィアトリス製薬合同会社, オンライン, 2024.12.18.
- 5) 張 賢徳: 大切な人を自殺から守るために. 川崎いのちの電話 公開講座 (第 1 回), 神奈川, 2025.1.30.
- 6) 張 賢徳: みんなで考える自殺予防. 「現代の若者のこころと向き合う－Z 世代への支援と対応－」 一般社団法人日本うつ病センター (JDC) 主催メンタルヘルスセミナー, オンライン, 2025.2.01.
- 7) 張 賢徳: 希死・自殺念慮への対応－精神科医はどうすればいいのか?－. Viatris Advanced Seminar in March ヴィアトリス製薬合同会社, 東京, 2025.3.22.
- 8) 金 吉晴: 躁うつ病と付き合うために～躁うつ病 (双極性障害) を知ろう. 世田谷区保健センター, 東京, 2024.12.12.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) Kim Y: WPA (世界精神医学会協会) 倫理委員会 常任委員
- 2) 張 賢徳: 日本自殺予防学会 理事長
- 3) 張 賢徳: 日本臨床死生学会 常任理事
- 4) 張 賢徳: 日本うつ病学会 理事
- 5) 張 賢徳: 日本うつ病学会 自殺対策委員会 委員長
- 6) 張 賢徳: 日本精神神経学会 自殺予防に関する委員会 委員長
- 7) 張 賢徳: 日本うつ病学会 学会奨励賞選考委員会 委員
- 8) 張 賢徳: 第 49 回日本自殺予防学会総会プログラム委員
- 9) 金 吉晴: 日本自殺予防学会 理事

(3) 座長

- 1) 張 賢徳: 会長企画シンポジウム 1 「東アジアの自殺対策における national policy と現況」, 第 120 回 日本精神神経学会学術総会, 北海道, 2024.6.21.
- 2) 張 賢徳: 委員会企画シンポジウム 12 「日本における自殺の問題点」, 第 120 回 日本精神神経学会学術総会, 北海道, 2024.6.22.
- 3) 張 賢徳: 一般シンポジウム 54 「がん患者自殺予防への取り組み」, 第 120 回 日本精神神経学会学術総会, 北海道, 2024.6.21.
- 4) 張 賢徳: 委員会シンポジウム 7 「孤独・孤立と自殺: その予防の可能性を探る」, 第 21 回 日本うつ病学会総会, 大阪, 2024.7.13.
- 5) 張 賢徳: シンポジウム 3 「ACTION-J 研究成果公表 10 周年記念: ACTION-J 研究が国内外の自殺対策に与えたインパクト」, 第 48 回 日本自殺予防学会総会 第 29 回 日本臨床死生学会総会 合同大会, 埼玉, 2024.9.14.
- 6) 張 賢徳: 合同大会シンポジウム 1 「安楽死・尊厳死について考える」, 第 48 回 日本自殺予防学会総会 第 29 回 日本臨床死生学会総会 合同大会, 埼玉, 2024.9.14.
- 7) 張 賢徳: 事例検討「自殺既遂事例の検討会」, 第 48 回 日本自殺予防学会総会 第 29 回 日本臨床死生学会総会 合同大会, 埼玉, 2024.9.14.
- 8) 張 賢徳: 合同大会シンポジウム 2 「いま求められる死生学教育」, 第 48 回 日本自殺予防学会総会 第 29 回 日本臨床死生学会総会 合同大会, 埼玉, 2024.9.15.

- 9) 張 賢徳：産業医研修①「産業精神保健領域の最近の潮流」，第 24 回日本外来精神医療学会，東京，2024.10.13.
- 10) 張 賢徳：シンポジウム 12 「自殺未遂者医療をめぐるトピックス」，第 32 回 日本精神科救急学会学術総会，岩手，2024.10.25.
- 11) 張 賢徳：メインシンポジウム「私にとっての救いとは」，日本「祈りと救いところ」学会 第 9 回学術研究学会，東京，2024.11.30.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 張 賢徳：日本精神衛生会「こころと社会」編集委員長

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 張 賢徳：第 65 回日本心身医学総会学術講演会（日本自殺予防学会共催），心身医学講習会「身体疾患を持つ患者の自殺予防に関する研修会」．東京．2024.6.30.
- 2) 張 賢徳：第 21 回日本うつ病学会総会 自殺対策委員会 ワークショップ 1. 大阪．2024.7.12.
- 3) 張 賢徳：日本精神神経学会 自殺予防に関する委員会 オンライン研修会，こどもの自殺を考える．オンライン．2024.9.30.

(2) 研修会講師

- 1) 張 賢徳：自殺学総論．心身医学講習会「身体疾患を持つ患者の自殺予防に関する研修会」．東京，2024.6.30.
- 2) 張 賢徳：事例検討による研修．心身医学講習会「身体疾患を持つ患者の自殺予防に関する研修会」．東京，2024.6.30.
- 3) 張 賢徳：職場の自殺対策：予防と事後対応（ポストヴェンション）．第 21 回日本うつ病学会総会 自殺対策委員会 ワークショップ 1. 大阪，2024.7.12.
- 4) 張 賢徳：自殺予防の基礎知識—心構えからアセスメント、実際の対応まで—．専門職向け基礎研修会 令和 6 年度自殺未遂者等支援拠点医療機関整備事業，東京，2024.10.29.
- 5) 張 賢徳：自殺行動の理解．令和 6 年度自殺未遂者ケア研修 精神科救急版，東京（動画提供），2025.01.26.
- 6) 張 賢徳：自殺予防の基礎知識．国立精神・神経医療研究センター病院 自殺予防対策チーム会議主催研修会，東京（オンライン），2025.2.5.

F. その他

- 1) 張 賢徳：生きる意味 持てる社会を〈うつをこえて 自殺を防ぐために〉10. 琉球新報デジタル，2024.7.2.
- 2) 張 賢徳：一般病棟でのがん患者の自殺予防策、「物理的にさせない」環境づくりを．日経メディカル，2024.9.5.
- 3) 張 賢徳：メンタルヘルスに初めて踏み込んだ厚生労働白書をさらに読み解く．日経メディカル，2024.9.5.
- 4) 張 賢徳：若者の自殺について．読売新聞，2025.1.30.
- 5) 張 賢徳：令和 6 年度全国摂食障害対策連絡協議会．摂食障害治療支援センター設置運営事業，2025.2.7.
- 6) 張 賢徳：監修「健康第一 Report（こころの病気予防）」．第一生命保険株式会社，2025.2.
- 7) 張 賢徳：ラジオ出演「自殺予防について」．NHK ラジオ第一 N ラジ「特集」コーナー，2025.3.6.
- 8) 張 賢徳：メンタル不調 専門家が最も警戒する「春先」に必要な心得．毎日新聞ウェブ，2025.3.15.

3. 公共精神健康医療研究部

I. 研究部の概要

当研究部は、国民全体の精神健康増進および精神疾患の予防や精神疾患からの回復を促進する支援体制の構築を目標に、種々の疫学研究から精神医療福祉サービスの実態把握・政策実装支援までを含む Public Mental Health の研究を行っている。今年度は、精神医療計画等に資する厚労省の指定研究、精神障害分野における障害福祉計画のモニタリングに関する研究、COVID-19 感染後の心身への中長期的影響を検討する疫学研究、精神科医療機関の看護師を対象としたトラウマインフォームドケア研修の効果を検討する研究を主に行った。これらの活動は、他研究部や全国の精神病床をもつ医療機関、行政機関等との幅広い協働によって支えられている。

研究部の構成

部長：黒田直明，室長：堀口寿広，臼田謙太郎，研究員：羽澄 恵，客員研究員：安西信雄，飯田真子，今井健二郎，岡崎絵美，岡田隆志（5/14～），後藤基行，佐々木那津，澤田宇多子，杉山雄大，竹島 正，中村江里，西 大輔，本屋敷美奈，リサーチフェロー：三宅美智，片岡真由美，北村真紀子（5/1～），科研費研究員：古野考志，中下綾子，神川ちあき，研究生：北村真紀子（～4/30），辻田あづさ（～6/30），伊藤友香，研究補助員：櫻庭亜希子（6/1～），鈴木和香子（6/1～），島田知恵（6/1～），辻田あづさ（7/1～），センター研究補助員：櫻庭亜希子（～5/31），鈴木和香子（～5/31），島田知恵（5/31～）

II. 研究活動

1) 良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指したモニタリング研究

精神科と他の診療科との連携，地域の多様な生活支援との連携による良質かつ適切な精神医療の持続的な確保のための要件を明らかにし，その促進を図るモニタリングの体制と，今後の医療計画および障害福祉計画に資する指標を提案することを目的として研究を行った。本研究は A～E の 5 つの分担研究によって構成される。A 班：令和 6 年度は中間見直しに向けて，追加指標候補の検討を行った。また，令和 4 年度に提案を行った第 8 次医療計画指標例および基準病床算定式について都道府県・政令指定都市の精神保健福祉主管課を対象にしたデータの利活用に関する研修を開催してデータの利活用を推進した。B 班：令和 6 年度調査では，第 8 次医療計画の指標例に含まれる「かかりつけ医うつ病対応力向上研修事業（都道府県・政令指定都市独自）」に関する項目を自治体票に追加した。医療機関票では看護職員数や外来患者数に関するいくつかの項目で項目修正や文言修正を行った。また，精神病床を有しない医療機関と訪問看護ステーションに対して，今後のオンライン調査移行の可能性を問う設問を追加した。C 班：令和 6 年度は，2013 年 1 月から 2023 年 5 月診療分の NDB データの提供を受け，集計結果の公表に向けて準備を進めている。最終年度は，生活保護受給者等の公費単独レセプトの情報も追加された，より悉皆性の高い情報に基づいた指標作成を目指している。D 班：ReMHRAD（地域精神保健医療福祉資源分析データベース）について，本研究の他の分担研究の成果等を活用して，研究，行政，市民の利用を想定した，それぞれのニーズに対応できる構造化を進めた。令和 6 年度は自治体ごとの各医療福祉資源の増減を示すヒートマップ，各社会資源の情報が掲載される手引きの自動生成，630 調査で収集されている転帰情報，についてより詳細な表示を可能とする機能について検討を行い，システム構築を進めている。E 班：措置通報及び措置入院の実態に関する研究においては，措置入院患者コホートについて，昨年度終了時まで追跡調査が終了しており，病状や状態の変化，提供された医療等のサービス，また退院後の転帰について結果の分析を行った。また，令和 6 年度は，警察官通報調査を開始し，多職種アウトリーチの調査が完了し，身体合併症のインタビュー調査を開始した。（黒田，

臼田，古野，北村)

2) 第8期障害福祉計画の「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」構築にかかる成果目標の見直しに資する研究

次期障害福祉計画の精神障害分野における新たな成果目標や活動指標を検討するための情報収集・論点整理・評価方法の探索を行う研究を行っている。3年度計画の2年目である本年は「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」構築に向けて自治体が実施すべき活動の全体を関係資料から網羅的に取り出し整理したうえで、ロジックモデルとして図示した。その上で同分野に見識のある現場の自治体職員や当事者へのインタビューや国との意見交換を通じて、ロジックモデルの理解しやすさと活用可能性、障害福祉計画や他計画との整合性や自治体の立場からみた事業の実施可能性を検討した。またアウトプット指標や中間アウトカム指標となり得るデータの候補を探索した。(黒田，臼田，羽澄，片岡，神川，三宅)

3) 新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討

本研究では、新型コロナウイルス感染者の罹患後精神・身体症状の特徴および関連要因を明らかにするため、従来株とオミクロン株の新型コロナウイルス感染者を対象としたオンライン縦断調査を行うと共に、罹患後症状を有する者へのオンライン自助グループによる精神症状への効果について検討を行った。

縦断調査では、罹患後精神症状に寄与する要因として子ども期逆境体験が、罹患後身体症状に寄与する要因として感染後時点の精神的苦痛が同定された。また、慢性疾患のセルフマネジメント状況を効力感を測定する自己報告式尺度 Self-efficacy of managing chronic disease-6 日本語版の妥当性・信頼性を検討した。

新型コロナウイルス感染後に罹患後症状を抱える者に対するオンライン自助グループに関する研究では、システムティックレビューを行ったところ、該当研究は2件にとどまり、研究知見の蓄積が必要であることが示唆された。これを踏まえ、新型コロナ感染後に罹患後症状が残遺し軽度以上の抑うつ症状がある18名にオンライン自助グループを実施し対照群なしの前後比較を行った結果、抑うつ症状が有意に軽減した。(黒田，臼田，羽澄，片岡，三宅，中下)

4) 精神科医療機関に対するトラウマインフォームドケア研修の効果に関する検討

精神科医療機関の看護職員(看護師・准看護師)・看護補助者を対象に動画を用いたトラウマインフォームドケア研修を実施し、入院患者に対する隔離・身体拘束時間の短縮や看護師のメンタルヘルスの改善への効果について検証することを目的に、多施設非無作為比較試験を実施した。その結果、患者に実施される拘束時間の短縮への効果が示唆された。また看護師に対しては、トラウマインフォームドケアに関連する態度やバーンアウトに関連する情緒的消耗感、脱人格化に改善が認められた。

日本精神科看護協会では、本研究で効果の認められた動画を用いて研修を行い、精神科医療機関だけでなく地域事業所に勤務する看護師なども幅広く講義を受講した。受講後の感想では、多くの看護師への普及を望む声も聞かれた。今後は、精神科医療機関に限らず、地域事業所、行政など幅広い分野での普及が期待される。(西，三宅，羽澄，臼田，黒田)

5) 6NC連携のNDB研究基盤による重点疾患の疫学・政策研究の推進

当センターを含む6つの国立高度専門医療研究センター(6NC)の研究者が協力し、匿名レセプト情報・匿名特定健診等情報データベース(NDB)を用いて、NCが担う重要疾患等に関するエビデンスを創出し、政策調査・提言に関わる基盤情報を提供することで、「根拠に基づいた政策立案」や政策評価に貢献することを目指す課題である。令和6年度は神経・筋疾患データの基礎加工および集計表の作成作業を進め、代謝性ミオパチー、筋ジストロフィー等の有病者数を研究班ホームペ

ージに公開した。また、実際にデータを取り扱いながらデータの取り扱い方法に関する検討を行い、NDB データ管理の体制構築を推進した。(黒田, 臼田, 古野)

6) 6NC 疾患横断的コホート研究

健康寿命延伸の決定要因解明を目的とし、国立高度専門医療研究センター6 施設 (6NC) が実施する大規模コホート研究を通じたエビデンス構築プロジェクトに参画している。

当研究部では全国 11 保健所管轄下の約 10 万人を約 20 年間追跡した縦断データに基づき、生活習慣と事故死・自殺の関連要因分析を行い、学術論文の執筆を行っている。

今後は、同データを用いて引き続き事故死・自殺の関連要因分析を行うことに加え、各 NC のコホートデータの統合により構築される大規模統合データベースを活用し、メンタルヘルスの観点から健康寿命延伸要因の解明に向けた多角的解析を展開する予定である。(黒田, 羽澄, 片岡)

7) 医療的ケア児のインクルーシブ保育を実施

人工呼吸器や胃ろう等により医療的なケアを必要とする児童いわゆる「医療的ケア児」とその家族の社会参加を促進する目的で、東京都三鷹市および武蔵野市の参加を得て設置された協議会に参加して、訪問看護師が付き添い保育所で他の児童たちとともに保育を受ける「インクルーシブ保育」の実施に協力した。令和 6 年度は、同保育を経験して就学した児童を踏まえ教育への連携について検討した。(堀口)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

(2) 専門教育面における貢献

- ・ 武蔵野大学 非常勤講師 (臼田)
- ・ 国際医療福祉大学 公開講座(地域医療ビッグデータ入門 精神医療分野のロジックモデルと指標データ 担当講師) (臼田)
- ・ 駒沢女子大学 実習補助 (三宅)
- ・ 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 非常勤講師 (黒田)
- ・ 国際医療福祉大学 公開講座 (ロジックモデルの活用, 医療計画の精神疾患分野におけるロジックモデルの活用担当講師) (黒田)

(3) 精研の研修の主催と協力

- ・ 第 2 回 精神保健医療福祉データ行政活用研修(黒田, 臼田)

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査, 委員会等への貢献

- ・ 令和 6 年度診療報酬改定の結果検証に係る特別調査 精神医療等の実施状況調査 調査検討委員会 委員 (臼田)
- ・ 令和 6 年度静岡県行動制限最小化研修会オブザーバー (三宅)
- ・ 全国精神保健福祉センター長会 倫理審査委員会 委員 (黒田, 堀口)
- ・ つくば市地域ケア会議委員 (黒田)
- ・ つくば市在宅医療介護連携推進協議会 評価部会委員 (黒田)
- ・ つくば市保健部顧問 (黒田)

(5) センター内における臨床的活動

(6) その他

- ・日本精神科看護協会査読委員（三宅）
- ・PwC コンサルティング合同会社公共事業部倫理審査委員会委員（三宅）

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Megumi Hazumi, Mayumi Kataoka, Ayako Nakashita, Kentaro Usuda, Michi Miyake, Chiaki Kamikawa, Daisuke Nishi, Naoaki Kuroda: Psychometric Property of the Japanese Version of Self-Efficacy for Managing Chronic Disease Scale in Individuals with Chronic Diseases. *Heliyon* 10(22): e40218, 2024.
- 2) Megumi Hazumi, Michi Miyake, Mayumi Kataoka, Kentaro Usuda, Daisuke Nishi: Online peer support for mental health in individuals with post-acute sequelae of COVID-19: A pre-post pilot study with mixed methods. *PCN reports: psychiatry and clinical neurosciences* 3(3): e238, 2024.
- 3) Mako Iida, Utako Sawada, Kentaro Usuda, Megumi Hazumi, Ikue Umemoto, Naoaki Kuroda, Hironori Kuga, Chiyo Fujii, Daisuke Nishi: Effects of the Modified version of the Mental Health Supporter Training Program on mental-health-related public stigma among Japanese people: A pretest/posttest study. *PCN reports: psychiatry and clinical neurosciences* 3(2): e219, Jun. 2024.
- 4) Zui Narita, Megumi Hazumi, Mayumi Kataoka, Kentaro Usuda, Daisuke Nishi: Association between discrimination and subsequent psychotic experiences in patients with COVID-19: A cohort study. *Schizophrenia Research* 267 :107-112, 2024.
- 5) Michi Miyake, Megumi Hazumi, Kentaro Usuda, Takahiro Kawashima, Maiko Fukasawa, Hisateru Tachimori, Daisuke Nishi: Effect of video-based trauma-informed care training for nursing staff on seclusion and restraint of psychiatric inpatients: A non-randomized controlled study. *International Journal of Nursing Studies Advances*. Volume 8, 100297, 2025.
- 6) Itoh S, Mori T, Jin X, Ito T, Komiyama J, Kuroda N, Uda K, Tsuchiya-Ito R, Wu XV, Kodama K, Takahashi H, Takeda T, Tamiya N: Outcomes of advanced care management in home-based long-term care: A retrospective population-based observational study. *Int J Nurs Stud*. Oct; 158:104862, 2024.
- 7) Ito Y, Iwagami M, Komiyama J, Hamasaki Y, Kuroda N, Suzuki A, Ito T, Goto T, Wan EYF, Lai FTT, Tamiya N: Clinical subtypes of older adults starting long-term care in Japan and their association with prognoses: a data-driven cluster analysis. *Sci Rep*. Jun 28;14(1):14911, 2024.
- 8) Taniguchi Y, Iwagami M, Sugiyama T, Kuroda N, Yamaoka T, Inokuchi R, Suzuki A, Watanabe T, Irie F, Tamiya N: Factors Associated with Non-attendance at a Follow-up Visit for Dyslipidemia Identified at Health Checkups: A Retrospective Cohort Study in a Japanese Prefecture. *JMA J*. 7(4):518-528, 2024.
- 9) Yamaoka T, Sugiyama T, Ihana-Sugiyama N, Kimura A, Yamamoto K, Imai K, Kuroda N, Ohsugi M, Ueki K, Yamauchi T, Tamiya N: Associations between income/employment status and diabetes care processes, health behaviors, and health outcomes in Japan: A cross-sectional study using claims data linked to a questionnaire survey. *J Diabetes Investig*. 15(11):1684-1695, 2024.

- 10) Sun Y, Sakata N, Iwagami M, Yoshie S, Inokuchi R, Ito T, Kuroda N, Hamano J, Tamiya N: Regional disparities in home health care utilization for older adults and their associated factors at the secondary medical area level: A Nationwide study in Japan. *Geriatr Gerontol Int.*24(12):1350-1361, 2024.
- 11) Wong AYS, Iwagami M, Taniguchi Y, Kawamura C, Suzuki A, Douglas IJ, Bhaskaran K, Sugiyama T, Kuroda N, Nitsch D, Tamiya N: The role of psychotropics on the associations between extreme temperature and heat-related outcomes among people with mental health conditions: population-based study. *Psychol Med.* 54(16):1-7, 2024.
- 12) Yamamoto K, Ihana-Sugiyama N, Sugiyama T, Yamaoka T, Wakui-Kimura A, Imai K, Kuroda N, Ohsugi M, Ueki K, Yamauchi T, Tamiya N: Recognition of ophthalmology consultation and fundus examination among individuals with diabetes in Japan: A cross-sectional study using claims-questionnaire linked data. *Diabetes Obes Metab.* 2025 Apr;27(4):1762-1772, 2025.
- 13) Ishimaru M, Kuroda N, Ono S, Sato M, Komiyama J, Aida J, Tamiya N: Impact of sending vouchers for a community-based oral screening program on dental service usage promotion among adults: a difference-in-difference analysis. *BMC Health Serv Res.* 24(1):1651,2024.
- 14) Hada, A., Kawaguchi, T., Usui, K. Iwanaga M., Sato A., Yamaguchi S., Kuroda N., Fujii C :Psychometric properties of Japanese version of the Recovering Quality of Life (ReQoL). *BMC Psychiatry* 25(265), 2025.
- 15) Sun Y, Sakata N, Iwagami M, Yoshie S, Inokuchi R, Ito T, Kuroda N, Hamano J, Tamiya N: Reply to comment on "Regional disparities in home health care utilization for older adults and their associated factors at the secondary medical area level: A nationwide study in Japan". *Geriatr Gerontol Int.*Epub ahead of print, 2025
- 16) Hamasaki Y, Iwagami M, Komiyama J, Ito Y, Taniguchi Y, Inokuchi R, Watanabe T, Goto T, Kuroda N, Suzuki A, Yoshie S, Kume K, Ishizaki T, Iijima K, Tamiya N: Subtypes of Older Adults Starting Long-Term Care in Japan: Application of Latent Class Analysis. *J Am Med Dir Assoc*, in press.

(2) 総説

- 1) 臼田謙太郎, 西 大輔:【トラウマインフォームドケアの普及に向けて】精神保健福祉センターにおけるトラウマインフォームドケアの普及と活用実態に関する調査トラウマティック・ストレス 22(1) :24-38, 2024.

(3) 著書

- 1) 堀口寿広: 風と場所を作った有馬先生. 加我牧子, 稲垣真澄, 中川栄二編. 有馬正高先生追悼記念文集. Plus Design Company, 東京, p96, 2024.
- 2) 堀口寿広: ジェノグラム (家系図) の作成. 永光信一郎. こどもたちのための Well-Care Visits マニュアル. 福岡大学, 福岡, pp25-26, 454.0, 2024:
- 3) 羽澄 恵: 睡眠習慣や睡眠問題の評価法. 山本隆一郎, 坂田昌嗣, 中島 俊, 田中春仁: 対人援助職に知ってほしい睡眠の基礎知識. 岩崎学術出版社, 東京, pp35-41, 2024.
- 4) 羽澄 恵: 過眠症に対する理解と支援. 岩崎学術出版社, 東京, pp129-133, 2024.

(4) 研究報告書

- 1) 西 大輔: 良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指したモニタリング研究. 令和 5 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金 (障害者政策総合研究事業). 総括研究報告書. 2024.
- 2) 西 大輔, 立森久照, 藤井千代, 久我弘典, 臼田謙太郎, 黒田直明: 良質な精神保健医療福祉の

- 提供体制構築を目指した指標に関する研究. 令和 5 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業），良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指したモニタリング研究. 分担研究報告書. 2024.
- 3) 臼田謙太郎：感染時期による罹患後精神症状の比較検討. 令和 5 年度精神・神経疾患研究開発費「新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討（主任研究者：西 大輔）」令和 5 年度 分担研究報告書. 2024.
 - 4) 臼田謙太郎：令和 5 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）「精神保健医療福祉分野におけるトラウマインフォームドケア活用促進のための研究（研究代表者：西 大輔）」令和 5 年度分担研究報告書. 2024.
 - 5) 立森久照，臼田謙太郎，瀬戸屋希，河野稔明，竹島 正，萱間真美，黒田直明，古野考志，北村真紀子：精神保健医療福祉の提供のモニタリングに関する研究. 令和 5 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業），良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指したモニタリング研究. 分担研究報告書. 2024.
 - 6) 高瀬顕功，奥村泰之，竹島 正，臼田謙太郎，黒田直明，西 大輔：精神医療の提供体制および実態把握に関する研究，NDB に関する報告. 令和 5 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業），良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指したモニタリング研究. 分担研究報告書. 2024.
 - 7) 黒田直明：第 8 期障害福祉計画の精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築に係る成果目標の見直しに資する研究. 令和 5 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業），総括研究報告書. 2024.
 - 8) 中野寛也，孫 瑜，田口怜奈，浜田将太，黒田直明，田宮菜奈子：自治体の医療介護突合データを用いた訪問薬剤管理指導等についての検討（23IA1005）. 令和 5 年度厚生労働科学研究費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業研究事業），地域の実情に応じた在宅医療提供体制構築のための研究. 分担研究報告書. 2024.
 - 9) 孫 瑜，黒田直明，吉江 悟，田宮菜奈子：口腔・栄養・リハビリテーションに関する訪問系サービスの一体的提供に関する実態，自治体の医療介護突合データを用いた検討（23IA1005）. 令和 5 年度厚生労働科学研究費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業研究事業），地域の実情に応じた在宅医療提供体制構築のための研究. 分担研究報告書. 2024.
 - 10) 杉山直也，吉川隆博，三宅美智：精神科医療機関における行動制限最小化の普及に資する研究（23GC1014）. 令和 5 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業），行動制限最小化に資する教育資料の作成. 分担研究報告書. 2024.
 - 11) 羽澄 恵：COVID-19 感染後の予後に関連する要因の検討. 令和 5 年度精神・神経疾患研究開発費「新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討（主任研究者：西 大輔）」令和 5 年度 分担研究報告書. 2024.
 - 12) 羽澄 恵：睡眠不足の維持増悪に関連する心理的機序の解明. 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（若手研究））令和 5 年度研究成果報告書. 2024.
 - 13) 三宅美智：精神障害当事者が参加する隔離・拘束を減らすためのプログラムの効果の検証. 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究 C））令和 5 年度研究成果報告書. 2024.
 - 14) 三宅美智：行動制限最小化の活動に参加する精神障害当事者のための育成プログラムの開発. 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究 C））令和 5 年度研究成果報告書. 2024.
- (5) 翻訳
- 1) 堀越 勝，羽澄 恵（監訳）：不眠および睡眠関連問題に対する介入マニュアル・診断横断的睡眠リズム療法（Trans-C）の実践. 金剛出版，東京，2024.

(6) その他

- 1) 黒田直明：心のサポーター養成事業が始まっています。東京都立（総合）精神保健福祉センターこころの健康だより No142：2-3, 2025.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

- 1) 黒田直明：精神科病院の外側から虐待防止を考える～精神科医の立場から～理事会企画シンポジウム，精神科医療現場における虐待防止に向けて共に考える。日本精神保健看護学会第 34 回学術集会・総会，成田市，2024.6.1-2.
- 2) 臼田謙太郎，西 大輔：精神保健福祉センターにおけるトラウマインフォームドケアの普及状況と活用実態調査の報告，シンポジウム C1 エビデンスから考えるトラウマインフォームドケア。第 23 回日本トラウマティック・ストレス学会，京都，2024.8.10-11.
- 3) 三宅美智，牛島一成，佐藤義崇，内堀来未子：組織全体で取り組む行動制限最小化。第 32 回精神科看護管理研究会，長野，2024.9.6.
- 4) 三宅美智，奈良麻結：委員会セミナー厚生労働省科学研究費補助金における研究の紹介「精神科医療機関における行動制限最小化の普及に資する研究」。第 31 回日本精神科看護専門学術集会，山口，2024.10.27.
- 5) 黒田直明：KDB システムを用いた地域課題分析，公的データをどう活かすかー若手・初学者のための入門ガイド。第 83 回日本公衆衛生学会，札幌，2024.10.29-31.
- 6) 杉山直也，奈良麻結，三宅美智，吉川隆博，藤井千代：非自発的入院・行動制限に対する現状と課題，精神科医療機関における行動制限最小化の普及。第 43 回日本社会精神医学会，東京，2025.3.14.
- 7) 三宅美智：行動制限最小化実践に向けて，実効的な普及・カルチャーチェンジについて学ぶ。第 30 回行動制限最小化研究会，愛知，2025.3.15.

(2) 一般演題

- 1) Yoko Hamasaki, Masao Iwagami, Jun Komiyama, Yuji Ito, Yuta Taniguchi, Naoaki Kuroda, Nanako Tamiya: Subtyping older adults starting long-term care using the nationally standardized survey for care-needs certification in Japan. World Congress of Epidemiology, Cape Town, 2024.9.24-27.
- 2) 木村晶子，井花庸子，杉山雄大，山本行子，山岡巧弥，今井健二郎，黒田直明，大杉 満，植木浩二郎，田宮菜奈子，山内敏正：糖尿病診断の主観的な認識のない方とある方の比較検討，つくば市調査票調査・レセプト突合データの解析。第 67 回日本糖尿病学会年次学術総会，東京，2024.5.17-19.
- 3) 山岡巧弥，井花庸子，木村晶子，杉山雄大，山本行子，今井健二郎，黒田直明，大杉 満，植木浩二郎，田宮菜奈子，山内敏正：社会経済状況と糖尿病患者における診療の質との関連つくば市調査票調査・レセプト突合データの解析。第 67 回日本糖尿病学会年次学術総会，東京，2024.5.17-19.
- 4) 井花庸子，木村晶子，杉山雄大，山本行子，山岡巧弥，今井健二郎，黒田直明，大杉 満，植木浩二郎，田宮菜奈子，山内敏正：専門家による糖尿病教育歴と患者の理解・治療への取り組みに関する検討，つくば市調査票調査・レセプト突合データの解析。第 67 回日本糖尿病学会年次学術総会，東京，2024.5.17-19.
- 5) 山本行子，井花庸子，木村晶子，杉山雄大，山岡巧弥，今井健二郎，黒田直明，大杉 満，植木浩二郎，田宮菜奈子，山内敏正：糖尿病専門医在籍医療機関の受診と糖尿病患者の眼科受診との関連，つくば市調査票調査・レセプト突合データの解析。第 67 回日本糖尿病学会年次学術

総会，東京，2024.5.17-19.

- 6) 孫 瑜，岩上将夫，佐方信夫，浜野 淳，黒田直明，吉江 悟，伊藤智子，井口竜太，田宮菜奈子：二次医療圏分類毎の在宅医療提供体制と地域偏在の経年変化に関する分析．第 15 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会，浜松，2024.06.7-9.
- 7) 堀口寿広，高梨健司，佐藤彰一，曾根直樹：こども家庭庁による調査を活用した保育施設における障害児虐待の発生頻度の推計．第 71 回日本小児保健協会学術集会，北海道，2024-6.21-23.
- 8) 藤井朋子，小宮山潤，黒田直明，田宮菜奈子：骨粗鬆症治療における骨代謝マーカー測定と治療アドヒアランスの関連-骨密度，血清 Ca 値の測定状況も含めたレセプトを用いた検討．第 26 回日本骨粗鬆症学会，金沢，2024.10.11-13.
- 9) 臼田謙太郎，立森久照，西 大輔，黒田直明：都道府県における医療保護入院患者の退院促進と現行制度の関連についての検討．第 83 回日本公衆衛生学会，北海道，2024.10.29-31.
- 10) 奈良麻結，山口創生，森山葉子，岡田隆志，臼田謙太郎，臼井 香，黒田直明：精神障害当事者における日本語版 ASCOT SCT4 の妥当性・信頼性の検証．第 83 回日本公衆衛生学会，札幌，2024.10.29-31.
- 11) 片岡真由美，羽澄 恵，臼田謙太郎，岡崎絵美，黒田直明，西 大輔：COVID-19 感染者のストレス経験・子ども期逆境体験と精神症状の関連．第 83 回日本公衆衛生学会，札幌，2024.10.29-31.
- 12) 羽澄 恵，三宅美智，片岡真由美，臼田謙太郎，黒田直明，西 大輔：新型コロナウイルス感染症の罹患後症状を抱える者へのオンライン自助グループの効果．第 83 回日本公衆衛生学会，札幌，2024.10.29-31.
- 13) 臼田謙太郎，立森久照，西 大輔，黒田直明：都道府県における医療保護入院患者の退院促進と現行制度の関連についての検討．第 83 回日本公衆衛生学会，札幌，2024.10.29-31.
- 14) 鈴木 愛，宇田和晃，杉山雄大，黒田直明，田宮菜奈子：高齢者施設における抗精神病薬処方割合の施設間差に関連する要因．第 83 回日本公衆衛生学会，札幌，2024.10.29-31.
- 15) 山形澄香，増田理恵，渡邊多永子，羽成恭子，黒田直明，松田智行，田宮菜奈子：中年期における社会的孤立とアドバンスケアプランニングについて考えているかとの関連．第 83 回日本公衆衛生学会，札幌，2024.10.29-31.
- 16) 小宮山潤，孫 瑜，中野寛也，黒田直明，浜崎曜子，鈴木 愛，佐方信夫，吉江 悟，田口怜奈，浜田将太，田宮菜奈子：高齢要介護認定者の在宅医療における訪問サービス利用の経時的・地域横断的分析．第 83 回日本公衆衛生学会，札幌，2024.10.29-31.
- 17) 中野寛也，孫 瑜，田口怜奈，浜田将太，黒田直明，田宮菜奈子：つくば市医療・介護レセプトデータを用いた訪問薬剤管理指導等の実態．第 83 回日本公衆衛生学会，札幌，2024.10.29-31.
- 18) 宇田和晃，岩上将夫，黒田直明，田宮菜奈子：競合リスクとして死亡を考慮した要支援・介護認定リスク予測モデルの開発と内部検証．第 83 回日本公衆衛生学会，札幌，2024.10.29-31.
- 19) 鍛冶田倫英，井口竜太，岩上将夫，小宮山潤，増田洋亮，黒田直明，杉山雄大，田宮菜奈子：うつ病を基礎疾患に持つてんかん患者に対して処方される抗てんかん薬の実態調査．第 83 回日本公衆衛生学会，札幌，2024.10.29-31.
- 20) 高橋秀人，小宮山潤，森山葉子，黒田直明，松田智行，阿部計大，森 隆浩，浜崎曜子，鈴木 愛，宇田和晃，田宮菜奈子：機械学習を用いた要介護認定審査のプロセス等をサポートするシステム開発に係る研究．第 83 回日本公衆衛生学会，札幌，2024.10.29-31.
- 21) 袁夢 舸，渡邊多永子，小宮山潤，黒田直明，松田智行，鈴木 愛，田宮菜奈子：通所介護サービス利用者における幸福感に関連する要因．日本衛生学会，さいたま市，2025.3.19-21.

(3) 研究報告会

(4) その他

- 1) 堀口寿広，高梨健司，佐藤彰一，曾根直樹：こども家庭庁による調査を活用した保育施設における障害児虐待の発生頻度の推計．小児保健研究 83Suppl, p.221, 2024.
- 2) 堀口寿広：第2節 精神科医療におけるクリティカルパスと地域連携（2024）．公益財団法人日本精神科病院協会，精神科医療と患者処遇—第10回 SENIOR コース 上, pp.147-170, 2024.
- 3) 伊藤裕司，岩上将夫，小宮山潤，浜崎曜子，黒田直明，鈴木 愛，伊藤智子，田宮菜奈子：新規要介護認定を受けた高齢者の疾病パターンの分類と予後の関連．DST EVIDENCE AWARDS, エビデンス部門大賞，つくば市，山武市，2024.11.19.

C. 講演

- 1) 堀口寿広：クリティカルパス．日本精神科病院協会令和6年度通信教育シニアコース前期スクーリング，東京，2024.7.2.
- 2) 黒田直明：共生社会と精神保健は市町村でつくろう．令和6年度川崎市総合リハビリテーションセンター活動報告，川崎市，2025.3.5.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- ・黒田直明：日本公衆衛生学会代議員
- ・黒田直明：日本公衆衛生学会 若手の活動に関する委員会 委員
- ・羽澄 恵：日本睡眠学会評議員

(3) 座長

堀口寿広：第8回「多職種のための投稿論文書き方セミナー」．第71回日本小児保健協会学術集会，北海道，2024-6.21-23.

(4) 学会誌編集委員等

黒田直明：日本公衆衛生学雑誌 査読委員

E. 研修

(1) 研修企画

(2) 研修会講師

- 1) 三宅美智：行動制限最小化看護2，行動制限最小化の方略，行動制限最小化のためのアセスメント・基本的考え方．日本精神科看護協会，オンライン，2024.6.4.
- 2) 黒田直明：第1回指導者養成研修講師．心のサポーター養成事業，オンライン，2024.6.28.
- 3) 西 大輔，宮本有紀，三宅美智：トラウマインフォームドケアの基本と実践．日本精神科看護協会，オンライン，2024.8.24.
- 4) 立森久照，臼田謙太郎：令和6年度630調査自治体担当者向け説明会．オンライン，2024.9.18.
- 5) 黒田直明：第4回指導者養成研修．心のサポーター養成事業，オンライン，2024.9.27.
- 6) 黒田直明：第1回指導者交流会．心のサポーター養成事業，オンライン，2024.10.24.
- 7) 黒田直明，臼田謙太郎：第2回 精神保健医療福祉データ行政活用研修．オンライン，2024.11.8.

- 8) 三宅美智：トラウマインフォームドケア．日本精神科看護協会宮城県支部，宮城，2025.1.11.
- 9) 黒田直明：発達特性の理解と支援 精神科医の立場から．令和 6 年度 第 2 回つくばこどもの青い羽根学習会（子どもの学習・生活支援事業）研修会，つくば市，2025.02.19.
- 10) 三宅美智：対象理解とニーズの把握につなげる観察と記録．日本精神科看護協会，オンデマンド．
- 11) 三宅美智：基礎から学ぶ看護過程．日本精神科看護協会，オンデマンド．
- 12) 三宅美智：行動制限最小化研修会．井之頭病院，東京，オンデマンド．

F. その他

4. 薬物依存研究部

I. 研究部の概要

薬物依存研究部は下記のように3研究室体制となっている。

心理社会研究室

- (1) 薬物乱用・依存及び中毒性精神障害の実態調査研究に関すること。
- (2) 薬物依存の発生要因に係わる心理学的及び社会学的調査研究に関すること。
- (3) 薬物依存の予防及びその指導，研修の方法の研究に関すること。

依存性薬物研究室

- (1) 薬物依存の発生要因に係わる精神薬理学的調査研究に関すること。
- (2) 依存性薬物の薬効に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること。
- (3) 中毒性精神障害に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること。

診断治療開発研究室

- (1) 薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の開発の研究に関すること。
- (2) 薬物依存及び中毒性精神障害の治療システムの開発の研究に関すること。
- (3) 薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の研修に関すること。

人員構成は，次のとおりである。

部長：松本俊彦，心理社会研究室長：嶋根卓也，依存性薬物研究室長：富山健一，診断治療開発研究室長：高野 歩，リサーチフェロー：水野聡美，客員研究員：浅沼幹人（岡山大学脳神経機構学分野），尾崎 茂（東京足立病院），宮永 耕（東海大学健康科学部），成瀬暢也（埼玉県立精神医療センター），森田展彰（筑波大学医学医療系），谷渕由布子（同和会千葉病院），三島健一（福岡大学薬学部），境 泉洋（徳島大学大学院），山田正夫（神奈川県立精神保健福祉センター），池田朋広（高崎健康福祉大学健康福祉学部），平田豊明（千葉県精神科医療センター），大嶋栄子（NPO 法人リカバリー），奥村泰之（東京都医学総合研究所），引土絵未（日本女子大学人間社会学部），古田島浩子（東京医学総合研究所），山口重樹（獨協医科大学医学部），宮地尚子（一橋大学大学院社会学研究科），高橋 哲（お茶の水女子大学生活科学部），村瀬華子（北里大学医療衛生学部），川口貴子（福岡市精神保健福祉センター），新海浩之（神奈川大学法学部），蛭川 立（明治大学情報コミュニケーション学部），引地和歌子（東京都監察医務院），船田正彦（湘南医療大学薬学部），山田千佳（京都大学東南アジア地域研究研究所），Tooru Nemoto（Public Health Institute），大宮宗一郎（上越教育大学教育学部），白川教人（横浜市こころの健康相談センター），佐久間寛之（さいがた医療センター），林 神奈（Simon Fraser University），藤城 聡（愛知県精神保健福祉センター，7月～），科研費研究員：近藤あゆみ，喜多村真紀，新田慎一郎，加藤 隆，瓜生美智子，堤 史織，猪浦智史，片山宗紀，青木彩香，山田里奈，金澤由佳，梅村二葉（6月～），大野昂紀（6月～），山本俊明（6月～），併任研究員：今村扶美，川地 拓，山田美紗子（以上，病院臨床心理室），沖田恭治（以上，病院第二精神科），槇野絵里子，樋口早子（司法精神診療部），石井香織（薬剤部），研究生：今井航平，花岡晋平，高木のり子，田中紀子，邱 冬梅，山本泰輔，宇佐美貴士，菊池美名子，池上大悟，江島智子，水野有紀，村上真紀，古市 亘，磯島 学，大淵拓真，熊倉陽介，土地岳彦（6月～）。

II. 研究活動

A. 疫学的研究

- 1) 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究
本研究は，保護観察所と精神保健福祉センターなどの地域支援機関との橋渡しをしながら，保護観察の対象となった薬物事犯者の長期転帰を調査する，「Voice Bridges Project」である。平成29年3月から令和6年12月末までに28の精神保健福祉センターから総計928名の保護観察対象者が調査

に参加した。1年後追跡完了者は444名、2年後の追跡完了者は279名、3年後の追跡完了者は180名であった。追跡期間における違法薬物再使用率は、3か月後では4.4%、9か月～1年では4.7%、1年6か月～2年では2.2%、2年6か月～3年では7.2%であった。 Kaplan-Meier解析による1年経過時点の累積断薬継続率は約91%、2年経過時点の累積断薬継続率は約88%であり、3年経過時点の累積断薬継続率は約83%であった。（厚生労働省：依存症に関する調査研究事業 松本俊彦）

2) 飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査（2024年）

本研究は、わが国で唯一、経年的に実施されている中学生を対象とした薬物使用に関する全国調査である。今回は14回目の全国調査となった。調査対象は、無作為に選ばれた計244校の中学校であった。調査期間は2024年9月から12月であり、各対象校内で、無記名の自記式調査（質問紙あるいはオンライン）を実施した。計124校（回収率50.8%）から、計37,967名の有効回答が得られた。違法薬物の生涯経験率（推定値）は、大麻0.07%、有機溶剤0.13%、覚醒剤0.06%、危険ドラッグ0.06%、いずれかの違法薬物0.18%であり、前回調査（2022年）に比べて減少していた。過去1年以内の市販薬の乱用経験率（推定値）は1.8%であり、市販薬の乱用問題が全国的に広がっている可能性が示唆された。（厚生労働行政推進調査事業費補助金：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業。嶋根卓也、水野聡美、猪浦智史、邱 冬梅）

3) 全国の依存症専門医療機関を受診する患者における市販薬乱用の実態に関する研究

「濫用等のおそれのある医薬品」の指定成分の範囲の見直しを検討するための基礎情報を得るため、本研究では、全国の依存症専門医療機関を受診した市販薬症例の実態を調べることを目的とした。本研究は、全国の29施設の依存症専門医療機関から計294名の市販薬症例が報告された。「濫用等のおそれのある医薬品」として指定されている成分のみならず、デキストロメトルフアン、ジフェンヒドラミン、アリルイソプロピルアセチル尿素、カフェインといった指定されていない未指定成分が乱用されていた。乱用される製品には「ブランド嗜好性」があることが明らかとなった。市販薬症例は、インターネットや友人といった身近な情報源を参考として、乱用する製品を意図的に選択している可能性が考えられた。（厚生労働行政推進調査事業費補助金：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業。嶋根卓也、宇佐美貴士、松本俊彦）

4) ダルク等の当事者団体による依存症回復支援の現状と課題に関する研究

依存症回復施設であるダルク利用者を対象とするコホート研究である「ダルク追っかけ調査」のデータベースを再分析するとともに、回復施設職員を対象とした意見交換会を実施し、ダルク等を取り巻く課題の抽出を行うことを目的とした。「多様なアディクションに対する支援」をテーマとする意見交換会を開催し、計54名の依存症回復施設職員が参加した。多様なアディクションを支援する上で、共感的理解に対する困難や、重複障害（特に発達障害や統合失調症）に対する支援の困難さが浮き上がった。（厚生労働省：依存症に関する調査研究事業。嶋根卓也、猪浦智史、喜多村真紀、水野聡美、大淵拓真、新海浩之、松本俊彦）

5) 薬物使用と生活に関する全国高校生調査

薬物使用開始の好発年齢である高校生（主として16～18歳）における薬物使用に関する基礎データを得ることを目的とした。2021年度に続く、第3回目の全国調査を実施した。対象は都道府県単位で無作為抽出された全国236校の高等学校（全日制課程）における高校生であった。2024年9月から2025年3月まで、各対象校で無記名の自記式調査を調査用紙あるいはオンラインフォームを用いて実施した。計120校（予定生徒数：52,065名）から調査協力が得られた（回収率50.8%）。集計解析は来年度に実施する。（厚生労働省：依存症に関する調査研究事業。嶋根卓也、水野聡美、猪浦智史、喜多村真紀、邱 冬梅、松本俊彦）

6) 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査

本研究は、1987年以来ほぼ現行の方法論を用いて隔年で実施されてきものであり、わが国唯一の薬物関連精神疾患患者に関する悉皆調査である。2024年調査では、対象施設1525施設のうち、1098施設（72.0%）の協力を得て、221施設（14.5%）の施設から総計2702例の薬物関連精神疾患症例が報

告された。「主たる薬物」として最も多かったのは、覚醒剤 1230 例 (45.5%) であった。次いで、睡眠薬・抗不安薬 470 例 (17.4%)、市販薬 409 例 (15.1%)、多剤 197 例 (7.3%)、大麻 168 例 (6.2%) と続いたが、1 年以内に主たる薬物の使用が認められた症例 1221 例における「主たる薬物」としては、最多は覚醒剤 342 例 (28.0%) であったが、それ以降の市販薬 312 例 (25.6%) と睡眠薬・抗不安薬 276 例 (22.6%) との差は顕著に縮まっていた。(厚生労働省：依存症に関する調査研究事業。宇佐美貴士，山本泰輔，谷渕由布子，大宮総一郎，嶋根卓也，沖田恭治，西村晃萌，松本俊彦)

7) 豪州における大麻規制の現状と青少年に対する予防教育に関する研究

本研究では、豪州における薬物犯罪状況、大麻乱用実態、法規制・薬物政策及び青少年に対する予防教育の制度を調査することでその実態を明らかにし、我が国の大麻規制のあり方や依存症対策・青少年に対する予防教育の基礎資料とすることを目的とした。豪州では、大麻が最も乱用されている違法薬物であるが、個人の違反については、刑事罰から民事または刑事司法を回避するダイバージョン制度が適用されるなどの政策が打ち出されている。国民の 4 割以上で大麻の使用経験があるような状況下では、厳罰政策よりも寛容的政策の方が社会資源の確保または司法の経済性の視点からも現実的である。一方で、大麻に関する寛容政策が青少年における薬物意識に与える影響は不明であり、また薬物乱用防止のハードルを上げる可能性も考えられる。(厚労科研：分担研究，富山健一，山本俊明)

8) 濫用等のおそれのある医薬品の追加候補となる薬剤に関する文献的調査

本研究では、デキストロメトルファン、アリルイソプロピルアセチル尿素、ジフェンヒドラミン及びカフェインについて、学術文献よりその主成分の薬理作用、中毒症状または薬物依存性等を調査し、最新の情報をまとめた。デキストロメトルファン、ジフェンヒドラミンそしてカフェインにおいては、国内外で濫用と依存性を疑う離脱症状及び過剰摂取により死にいたるケースも多数報告されていた。また、わが国ではアリルイソプロピルアセチル尿素を主成分とする市販薬の濫用が臨床現場から報告されている。これらの医薬品成分を濫用することにより重篤な健康被害の発生が危惧される。デキストロメトルファン、アリルイソプロピルアセチル尿素、ジフェンヒドラミンそしてカフェインについても濫用等のおそれのある医薬品 6 成分と同様に適切な法規制を施す必要があると考えられる。(厚労科研：分担研究，富山健一，石井香織，大谷暢子)

B. 臨床研究

1) 大手チェーンドラッグストアにおける市販薬販売の実態に関する研究

市販薬の販売に従事する薬剤師を対象として、市販薬の販売に関する実態を調べるとともに、市販薬の乱用・依存の早期発見・早期介入を目的とする薬剤師向けのゲートキーパー研修プログラムを開発することを目的とした。本研究のデザインは、個人割り付け介入研究(並行群間比較試験)である。インターネットを通じて研修プログラムを介入 A 群(全コンテンツ)と、介入 B 群(第 1 章のみ)に実施した。介入 A 群 255 名(平均 37.8 歳、女性 65.5%)、介入 B 群 230 名(平均 38.9 歳、女性 66.1%)が事前・事後調査に回答した。介入前後(Pre-Post)の変化では、介入 A 群、介入 B 群ともに関連知識が増え、ゲートキーパーとしての自己効力感が高まり、逆に薬物使用者に対するスティグマが軽減されていた。介入効果は介入 B 群よりも介入 A 群が大きかった。(厚生労働科学研究費補助金：障害者政策総合研究事業，嶋根卓也，片山宗紀，松本俊彦)

2) 女性薬物依存症者の回復支援に関する研究

治療や支援を必要とする薬物依存症女性とその支援者を対象にその実態を把握するとともに、実態を踏まえた女性回復支援プログラムの効果評価と普及を目指す研究であり、以下の 4 点を実施した。①精神科病院薬物依存症外来で女性物質使用障害患者に治療プログラム(SeRA)を提供し、効果評価のための研究を開始。②SeRA を活用する支援者に対する勉強会やスーパーヴィジョンを実施。③薬物問題をもつ女性の治療と支援に携わる医療従事者研修を実施。④教育関係者研修を実施するとともに、実態把握調査を実施。④については学生支援担当教職員 51 名を対象にインタビュー調査を実施し、効果的で円滑な支援をおこなうためのニーズとして、研修の充足、助言指導機関の拡充などが抽出された。(厚生労働省依存症に関する調査研究事業。近藤あゆみ，大嶋栄子，喜多村真紀)

3) ハームリダクションに基づく支援の導入・普及に関する研究

ハームリダクション (HR) に基づく支援において重要な要素を明らかにすることを目的にデルファイ調査を実施した。対象者は、HR についての一定の知識を有する者で、物質使用に関して何らかの治療や支援を受けた経験がある当事者、当事者の家族、支援者とした。フォーカスグループインタビューにて抽出された「HR に基づく支援において重要な要素」83 項目を用いて、各項目の重要度についてアンケート調査を実施し、最終的に 65 項目が「HR に基づく支援において重要な要素」として合意された。HR の基本的な理念に関する項目は合意が得られたが、具体的な実践や政策に関する項目については合意が得られなかった。(厚生労働省：依存症に関する調査研究事業。高野 歩)

4) 飲酒・薬物使用のリアルタイム測定と機械学習に基づく即時介入モデルの開発

セルフモニタリングとウェアラブル活動量計 (Fitbit) によって日常生活における飲酒・薬物使用状況等のデータをリアルタイムに収集するプログラムを開発し、対象者の薬物使用を予測するモデルを構築することを目的に、研究対象者のリクルートを実施した。対象者は、過去 3 ヶ月以内に覚醒剤・大麻使用があり、かつ、健康被害リスクを伴う覚醒剤・大麻使用がある人とし、4 週間 Fitbit を装着してもらい、1 日 3 回セルフモニタリングアプリに薬物使用状況等を入力してもらった。その結果、覚醒剤使用日における覚醒剤使用回数と欲求の程度やネガティブな感情と有意な相関が認められ、使用後 6 時間以内に有意な心拍数増加が認められた。(文部科学省：2023 年度 基盤研究(B)。高野 歩)

C. 基礎研究

1) NMDA 受容体を標的とする解析

NMDA 受容体を標的とする薬物の有害作用を迅速に予測する方法として、NMDA 受容体発現細胞を利用した評価法の確立を行った。評価対象として、PCP 誘導体およびデキストロメトルファン (DXM) を使用した。評価を行ったケタミン誘導体の一部は、我が国の規制薬物として、指定を受ける予定である。DXM の代謝物を評価したところ、代謝物デキストロファンにおいて DXM よりも強い NMDA 受容体拮抗作用を確認した。(精神・神経疾患研究開発費。分担研究、富山健一)

2) 危険ドラッグの中樞作用と薬物依存性の解析

本年度は、5 種類の大麻類似物質、4 種類の新規合成オピオイド、1 種類の合成カチノン、1 種類の解離性麻酔薬類似物質の薬理学的特性、運動活性および薬物依存性の解析を行った。大麻類似物質は、カンナビノイド CB₁ 受容体を介して薬理作用を発現し、新規合成オピオイドは、オピオイド μ 受容体を介して中樞興奮作用を示し、合成カチノンはドパミントランスポーター阻害作用、解離性麻酔薬類似物質は NMDA 受容体の拮抗作用と中樞興奮作用を示した。(厚生労働省：危険ドラッグの依存性等に関する評価業務事業。研究代表者、富山健一)

3) ヒト iPS 細胞より作成した機能的神経細胞を用いた危険ドラッグの有害作用の評価

今年度は、ヒト iPS 細胞より誘導したドパミン神経および市販ヒトドパミン神経細胞を用いて、methamphetamine および危険ドラッグ合成カチノン N-ethylheptedrone の神経細胞毒性、DAT 取込み阻害作用とドパミン遊離作用を検討した。Methamphetamine の添加によりヒト iPS 由来ドパミン神経と市販ヒトドパミン神経細胞は、いずれも濃度依存的に神経細胞の減少を引き起こした。市販のヒトドパミン神経細胞において、methamphetamine および N-ethylheptedron 処理によって DAT 取込み阻害作用が認められた。ドパミンの遊離作用については、methamphetamine 処理によって市販ヒトドパミン神経細胞よりドパミン濃度増加を確認した。(厚労科研。分担研究、富山健一)

4) 活性未知危険ドラッグ成分の薬理学的解析

本研究では、4 種類の THC 類似物質、モルヒネやフェンタニルと構造の異なる 3 種類の新規合成オピオイドについてカンナビノイド又はオピオイド受容体作用の有無そして運動活性に対する影響を検討した。これら THC 類似物質の腹腔内投与により、カタレプシー様の無動状態の誘発、ならびに体温下降作用の発現が確認された。また、3 種類の合成オピオイドの投与により、用量依存的な運動促進作用が発現した。これらの効果は、オピオイド受容体拮抗薬 naloxone、ドパミン D₁/D₂ 受容体拮抗薬 SCH23390 及び raclopride 前処置によって抑制された。(厚労科研。分担研究、富山健一)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・市民向け講演会：(IV. 研究業績 C. 講演 参照) ・報道：(IV. 研究業績 F. その他 参照)

(2) 専門教育面における貢献

- ・研修会・研究会

第 37 回薬物依存臨床医師研修，第 25 回薬物依存臨床看護等研修，第 16 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，2024 年度厚生労働省依存症治療拠点機関設置運営事業（薬物依存症回復施設職員研修，依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物））令和 6 年度（第 2 回）薬物問題をもつ女性の治療と支援に携わる医療従事者研修，令和 6 年度市販薬の過量服薬や自傷を繰り返す若者たちの支援研修

- ・大学

早稲田大学人間科学学術院非常勤講師（松本俊彦），国立大学法人東京医科歯科大学非常勤講師（松本俊彦），国立大学法人東京大学非常勤講師（松本俊彦），国立大学法人岡山大学大学院医歯薬学総合研究科非常勤講師（嶋根卓也），東京薬科大学薬学部非常勤講師（嶋根卓也），昭和大学医学部薬理学兼任講師（嶋根卓也），東京大学大学院医学系研究科客員研究員（高野 歩）

- ・その他

日本アルコール・薬物医学会雑誌編集委員会（高野 歩，嶋根卓也）

国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構量子生命科学研究所量子生命構造グループ構造生物学チーム協力研究員（富山健一）

(3) 精研の研修の主催と協力

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

- ・政府委員会

厚生労働省医薬・生活衛生局「薬事・食品衛生審議会」臨時委員（松本俊彦），厚生労働省医薬・生活衛生局「依存性薬物検討会」構成員（松本俊彦），文部科学省生涯学習政策局「青少年を取り巻く有害環境対策の推進（依存症予防教育推進事業）」技術審査委員（松本俊彦），厚生労働省精神・障害保健課「依存症の理解を深めるための普及啓発」に係る企画委員会委員（松本俊彦），文部科学省初等中等教育局「児童生徒の自殺予防に関する調査研究協力者会議」（松本俊彦），厚生労働省「依存症対策全国センター」事務局長（嶋根卓也），厚生労働省「依存症に関する調査研究部会」副会長（嶋根卓也），厚生労働省「依存症の理解を深めるための普及啓発事業」企画委員（嶋根卓也），法務省矯正研修所「効果検証業務（大麻取締法及び麻薬及び向精神薬取締法の一部を改正する法律の一部施行に伴う教材改訂）」（嶋根卓也），内閣府「規制改革推進会議」健康・医療・介護ワーキング・グループ参考人（嶋根卓也）厚生労働省「依存性薬物検討会」参考人（富山健一），法務省矯正研修所「効果検証業務に係わる助言指導」（近藤あゆみ）

- ・その他公的委員会

東京地方裁判所登録精神保健判定医（松本俊彦），独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員（松本俊彦），福岡県「少年用大麻再乱用防止プログラムに係わる監査及び補正業務」（嶋根卓也），国立研究開発法人国立がん研究センター「各種医療従事者向け研修事業支援業務」技術評価委員会（嶋根卓也），埼玉県地方薬事審議会薬物指定審査委員会（富山健一）

- ・研究成果の行政貢献

厚生科学審議会（医薬品医療機器制度部会）の資料として市販薬乱用に関する研究成果が活用された。（嶋根卓也）

(5) センター内における臨床的活動

毎週月・木曜日に薬物依存症外来での診療を行うとともに，デイケアにて薬物再乱用防止のための集団認知行動療法プログラムを実施している。（松本俊彦，嶋根卓也，高野 歩）

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Takano A, Hiraiwa C, Oikawa E, Tomikawa A, Nozawa K: Validity and reliability of the Japanese version of the Substance Use Stigma Mechanism Scale. PLOS ONE 19(10): e0310514- e0310514,2024.
- 2) Takano A, Takahashi K, Anzai T, Usami T, Tsutsumi S, Kanazawa Y, Kumakura Y, Matsumoto T: Predictors for recurrence of drug use among males on probation for methamphetamine use in Japan: a one-year follow-up study. Drug and Alcohol Dependence Reports 100316-100316,2024.
- 3) Ono K, Tokushige M, Hiratani N, Kaneko K, Hamamura T, Miyamoto Y, Tateno M, Ito M, Takano A: Reliability and Validity of the Japanese Version of the Internet Gaming Disorder Scale for Children (IGDS - C). Neuropsychopharmacology Reports 45(1),2025.
- 4) Tateno M, Matsuzaki T, Takano A, Tateno Y, Kato T, Higuchi S: The rate of patients screened positive for gaming disorder/Internet gaming disorder among adolescents with mental health issues assessed by two screening tests: A nine - item screening test for GD (GAMES Test) and the Ten - Item Internet Gaming Disorder Test (IGDT - 10) .Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports 4(1):2025.
- 5) Geng S, Shimojima G, Yang C, Sramek Z, Norihama S, Takano A, Hosio S, Yatani K: When Group Spirit Meets Personal Journeys: Exploring Motivational Dynamics and Design Opportunities in Group Therapy. arXiv:2410.18329v1 Human-Computer Interaction. 2024. <https://doi.org/10.48550/arXiv.2410.18329>
- 6) Usami T, Okita K, Shimane T, Matsumoto T: Comparison of patients with benzodiazepine receptor agonist-related psychiatric disorders and over-the-counter drug-related psychiatric disorders before and after the COVID-19 pandemic:Changes in psychosocial characteristics andtypes of abused drugs. Neuropsychopharmacol Rep .2024;00:1-10.<https://doi.org/10.1002/npr2.12440>
- 7) Siste K, Ophinni Y, Hanafi E, Yamada C, Novalino R, Limawan AP, Beatrice E, Rafelia V, Alison P, Matsumoto T, Sakamoto R : Relapse Prevention Group Therapy in Indonesia Involving Peers via Videoconferencing for Substance Use Disorder: Development and FeasibilityStudyJMIRFormRes 2024;8:e50452 URL: <https://formative.jmir.org/2024/1/e50452> doi: 10.2196/50452
- 8) Mizuno S, Shimane T, Inoura S, Matsumoto T. Psychosocial characteristics of the general population who habitually use hypnotics: results from a national survey on drug use among the Japanese. Psychiatry Clin Neuro Rep. 2024;3:e208<https://doi.org/10.1002/pcn5.208>
- 9) Kyan R, Kamijo Y, Kohara S, Takai M, Shimane T, Matsumoto T, Fukushima H, Narumi S, Chiba T, Sera T, Otani N, Iwasaki Y. Prospective multicenter study of the epidemiological features of emergency patients with overdose of over-the-counter drugs in Japan. PCN Rep. 15:3(3): e225. 2024.
- 10) Katayama M, Fujishiro S, Sugiura K, Konishi J, Inada K, Shirakawa N, Matsumoto T : Greater impact of COVID - 19 on peer - supported addiction services than government - owned services for addiction in Japan: a nationwide 3 - year longitudinal cohort study. Psychiatry Clin Neurosci Rep. 2024;3:e70012.
- 11) Masataka Y, Umemura F, Nagamine A, Miki N, Akahoshi Y, Matsumoto T, Takumi H : How Cannabinol Is Utilized in Japan, a Country with Strict Cannabis Regulations—Its Purposes, Medical Effects, Adverse Events, and Dependence. Integrative Medicine Reports Volume 3.1,

2024 DOI: 10.1089/imr.2024.0045 Accepted October 17, 2024

- 12) Takano A, Takahashi K, Anzai T, Usami T, Tsutsumi S, Kanazawa Y, Kumakura Y, Matsumoto T : Predictors for recurrence of drug use among males on probation for methamphetamine use in Japan: a one-year follow-up study. *Drug and Alcohol Dependence Reports*, <https://doi.org/10.1016/j.dadr.2024.100316>"
- 13) Omiya S, Shimane T, Takagishi Y, Kondo A, Kobayashi M, Takahashi M, Otomo M, Nakazawa A, Matsumoto T : Gender Differences in the Effects of Trust on Substance Abuse Severity Among Incarcerated Stimulant Offenders in Japan. *Neuropsychopharmacol Rep*. 2025 Mar;45(1):e12517. doi: 10.1002/npr2.12517.
- 14) Mizuno S, Inoura S, Matsumoto T, Shimane T: Characteristics of drinking habits of people who overdose on over-the-counter drugs: Insights from a nationwide Japanese survey. *Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports*, 2;3(4): e70027. 2024.
- 15) Arita H, Tanaka R, Kikukawa S, Tomizawa T, Sakata H, Funada M, Tomiyama K, Hashimoto M, Tasaka T, Tabata H, Nakamura K, Makino K, Oshitari T, Natsugari H, Takahashi H. Fentanyl-Type Antagonist of the μ -Opioid Receptor: Important Role of Axial Chirality in the Active Conformation. *J Med Chem*. 2024, 67: 10447-10463.
- 16) Tsutsumi S, Takano A, Usami T, Kumakura Y, Kanazawa Y, Takebayashi T, Sugiyama D, Matsumoto T: Risk and protective factors for early dropout from telephone monitoring for individuals with drug convictions in community mental health centers in Japan. *J Subst Use Addict Treat*. 162:209347, 2024.
- 17) Mizuno S, Shimane T, Inoura S, Matsumoto T. Situational factors affecting abstinence from drugs: Panel data analysis of patients with drug use disorders in residential drug use treatment. *Psychiatry Clin Neurosci Rep*. 2024;3:e174. <https://doi.org/10.1002/pcn5.174>
- 18) Mizuno S, Ono S, Makino Y, Kobayashi S, Torimitsu S, Yamaguchi R, Chiba F, Tsuneya S, Iwase H. Mandibular torus thickness associated with age: Postmortem computed tomographic analysis. *Legal medicine* 69 102449-102449, 2024.
- 19) 片山宗紀, 藤城 聡, 松浦寛奈, 小西 潤, 稲田 健, 白川教人, 松本俊彦 : 医療従事者の薬物使用の通報や刑罰に関する意識とこれに対する支援経験や知識の影響. *日本アルコール関連問題学会雑誌* 25(2) : 51-56, 2024.
- 20) 宇佐美貴士, 村上真紀, 松本俊彦 : ベンゾジアゼピン受容体作動薬関連障害の類型化と大量使用からの減量法の検討. *精神神経学雑誌* 126(8) : 510-520, 2024.
- 21) 正高佑志, 平野弘樹, 梅村二葉, 赤星栄志, 荒木李香, 丸山泰弘, 松本俊彦 : 指定薬物制度による THCH 規制が市場流通と事業者に与えた影響についての横断調査. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 59(2) : 41-52, 2024.
- 22) 堤 史織, 宇佐美貴士, 高野 歩, 熊倉陽介, 金澤由佳, 武林 亨, 杉山大典, 松本俊彦 : 薬物犯罪の更生保護施設利用者における健康格差. *アルコール・薬物医学会雑誌* 59(3) : 53-66, 2024.
- 23) 喜多村真紀, 嶋根卓也, 高橋 哲, 小林美智子, 大伴真理恵, 鈴木愛弓, 松本俊彦 : 薬物使用のトリガーとしての月経前症状を持つ女性の特徴-覚醒剤使用のメリット・デメリットに焦点を当てて-. *女性心身医学* 28(3): 349-356, 2024.
- 24) 高橋 哲, 鈴木愛弓, 近藤あゆみ, 服部真人, 小林美智子, 喜多村真紀, 嶋根卓也 : 覚醒剤事犯受刑者における自殺念慮の生涯経験率とその関連要因の検討. *自殺予防と危機介入* 44(1): 82-89, 2024.
- 25) 助友裕子, 市瀬雄一, 細川佳能, 大浦麻絵, 嶋根卓也, 杉崎弘周, 中川明日香, 東尚弘 : 高等学校2年生のがんリスク認知の関連要因 : がん対策推進に資するがん教育ロジックモデルに基づく全国調査データの解析. *日本公衆衛生雑誌*, 72(3); 185-198, 202
- 26) 齋藤利和, 宮田久嗣, 高野 歩 : ハームリダクションの広がりについて—物質使用障害治療への応

- 用一. 精神神経学雑誌 126(5) : 309-315, 2024.
- 27) 水野聡美, 堤 詩織, 新田慎一郎, 高野 歩 : インドネシアの精神科病院における薬物使用障害患者への治療と支援の実践 59(3) : 109-117, 2025
 - 28) 堤 史織, 宇佐美貴士, 高野 歩, 熊倉陽介, 金澤由佳, 武林 享, 杉山大典, 松本俊彦 : 薬物犯罪の更生保護施設利用者における健康格差. 日本アルコール・薬物医学会雑誌. 59(3): 2024.
- (2) 総説
- 1) 松本俊彦 : 十代における市販薬乱用・依存～自傷と自殺のあいだ. 小児の精神と神経 165: 21-28, 2024.
 - 2) 松本俊彦 : 若者の「見えない傷」を見る. 精神療法 増刊第 11 号 思春期 青年期のメンタルヘルスと心理社会的治療・支援 : 188-194, 2024.
 - 3) 村田雄一, 立山和久, 山元直道, 浪久悠, 石岡俊之, 吉村直記, 松本俊彦 : Real 生活プログラムとリカバリー医療機関における作業療法士の実践－. 日本アルコール関連問題学会雑誌 25(2): 9-14, 2024.
 - 4) 松本俊彦 : 現代の精神科臨床で解離はどのように扱われているか?. 精神医学 66(8):1013-1019, 2024.
 - 5) 松本俊彦 : 物質使用症臨床における支持的精神療法－心的外傷後ストレス症併存使用例に対する harm reduction psychotherapy の実践－. 精神神経学雑誌 126(8) : 533-539, 2024.
 - 6) 松本俊彦 : オーバー dosis. 日本医師会雑誌 153(6) : 653-656, 2024.
 - 7) 松本俊彦 : 精神障害の流行がもたらした影響について－臨床症候群の栄枯盛衰に関する個人史－. 39(9) : 947-953, 2024.
 - 8) 松本俊彦 : 大麻. 精神科治療学 39 増刊号 : 224-225, 2024.
 - 9) 宇佐美貴士, 松本俊彦 : 鎮静剤, 睡眠薬または抗不安薬による奇異反応. 精神科治療学 39 増刊号 : 234-235, 2024.
 - 10) 松本俊彦 : LSD, phencyclidine, その他幻覚剤など (psilocybin など). 精神科治療学 39 増刊号 : 230-231, 2024.
 - 11) 松本俊彦 : 我が国における薬物乱用・依存の実態と対策の課題. ファルマシア 60(11):1003-1008, 2024.
 - 12) 松本俊彦 : 思春期のリストカットと市販薬乱用. 奈良県小児科医会報 25 : 13-17, 2024.
 - 13) 松本俊彦 : 「わかつちやいるけど、やめられない、とまらない」という精神症状を「依存症」から「アディクション」へ. 精神看護 28(1) : 32-37, 2024.
 - 14) 松本俊彦 : 市販薬問題が私たちに訴えていること 社会が「毒親」化していないか?. 精神看護 28(2) : 93-103, 2025.
 - 15) 松本俊彦 : 覚醒剤と幻覚, 症状と治療. 臨床精神医学 54(3) : 261-266, 2025.
 - 16) 嶋根卓也 : 保健室から考えるオーバードーズをする子への対応. 心とからだの健康 28(9):18-23, 2024.
 - 17) 嶋根卓也 : 薬物使用－市販薬の過剰服薬 (オーバードーズ). 小児内科 56(9) : 1409-1412, 2024.
 - 18) 嶋根卓也 : 市販薬のオーバードーズの理解と薬剤師の役割. 日本病院薬剤師会雑誌 60(10): 1072-1076, 2024.
 - 19) 嶋根卓也 : 市販薬乱用の理解とゲートキーパーとしての薬剤師. ファルマシア 60(11):1045-1049, 2024.
 - 20) 富山健一 : 危険ドラッグ : 蔓延の現状と基礎知識, 健康教室, 2, 94-97, 2024.
 - 21) 富山健一 : 大麻成分 (THC) 類似物質の規制の現状と今後の課題, 精神科治療学, 39, 109-114, 2024
 - 22) 高野 歩 : アルコール問題に対するハームリダクションアプローチ－職場での応用－, 産業精神保健「特集 : 職場のアルコール問題の解決」, 32 (2) : 178-183
 - 23) 高野 歩 : アルコール問題に対する ハームリダクションアプローチ, 大学のメンタルヘルス, 6:

25-25

(3) 著書

- 1) 松本俊彦, 横道 誠: 酒をやめられない文学研究者とタバコをやめられない精神科医が本気で語り明かした依存症の話. 太田出版, 東京, pp1-300, 2024.
 - 2) 松本俊彦: 身近な薬物のはなし. 岩波書店, 東京, pp1-269, 2025.
 - 3) 松本俊彦: 第2章-1 何事も修行だと受け入れる力”バカよ 医学部へ来い”. 医良戦略 2040 PART II 熱意を理性でドライブせよ, ロギカ書房, 東京, pp182-213, 2025.
 - 4) 松本俊彦: 自傷行為と子どもたち 第1回 自傷とは何か. 体と心 保健総合大百科 中・高校編 2024, 少年写真新聞社, 東京, pp107-111, 2024.
 - 5) 松本俊彦: リストカット・市販薬オーバードーズ・自殺. 学校医のすすめ そうだったのか学校医, 東京, pp103-106, 2024.
 - 6) 松本俊彦: 04 依存症への介入: 「やめられない、止まらない」行動と向き合うために. 保健・医療・福祉における 行動科学入門 生活習慣の評価から行動変容の実践まで, 東京, pp166-170, 2024.
 - 7) 松本俊彦: コラム 発達障害と依存症. フローチャート 発達障害 漢方薬, 東京, pp142, 2024.
 - 8) 松本俊彦: アルコール・薬物依存. 今日の診断指針 第9版, 東京, pp1385-1387, 2025.
 - 9) 松本俊彦, 今村扶美, 近藤あゆみ(監修): SMARPP-24 物質使用障害治療プログラム[韓国語版]. 新日書籍, 韓国, pp1-227, 2024.
 - 10) 監修 松本俊彦: Shrink 精神科医ヨワイ 13. 集英社, 東京, pp1-208, 2024.
 - 11) 監修 松本俊彦: 10代からのヘルスリテラシー 薬物. 大月書店, pp1-47, 2024.
 - 12) 監修 松本俊彦: 10代からのヘルスリテラシー お酒・たばこ. 大月書店, pp1-47, 2024.
 - 13) 監修 水野雅文, 古茶大樹, 遠藤利彦, 村上伸治, 市来真彦, 松崎朝樹, 住谷さつき, 大江美佐里, 宮脇 大, 中里道子, 小野和哉, 高橋秀俊, 松本陽輔, 大石雅之, 鈴木正泰, 宮田久嗣, 垣渕洋一, 松本俊彦, 安田和幸, 酒井佳永, 中川敦夫, 満田 大, 坪井貴嗣, 古川 奨: こころの健康がみえる. メディックメディア, 東京, pp1-493, 2024.
 - 14) 井原 裕, 斎藤 環, 松本俊彦 監修: 職場がアブナイ. 日本評論社, 東京, pp1-158, 2024
 - 15) 監修 松本俊彦: 10代からのヘルスリテラシー スマホ・ゲーム. 大月書店, pp1-47, 2024.
 - 16) 監修 松本俊彦: 10代からのヘルスリテラシー ダイエット・摂食障害. 大月書店, pp1-47, 2024.
 - 17) 大森和枝, 加藤哲太, 北垣邦彦, 小出彰宏, 嶋根卓也, 高林修平, 津田 豊, 横溝宇人: 薬物乱用防止マニュアル 令和6年度改訂, 公益財団法人 日本学校保健会, 2024.
 - 18) 嶋根卓也: 子どもたちに広がる市販薬のオーバードーズ. 日本子どもを守る会編 子ども白書 2024, かもがわ出版, 京都, pp 92-93, 2024.
 - 19) 嶋根卓也: 第4章主要課題への取組「6.薬物乱用防止対策」. 令和6年版我が国の精神保健福祉 (竹島正 編). 一般社団法人日本公衆衛生協会, 東京, 2025.
- (4) 研究報告書
- 1) 松本俊彦, 成瀬暢也, 常岡俊昭, 沖田恭治, 西村晃萌, 宇佐美貴士, 谷渕由布子, 大宮宗一郎, 高野 歩, 水野聡美, 嶋根卓也: 処方薬・市販薬依存症患者の実態と通院治療プログラムの開発に関する研究. 令和6年度厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業) 処方薬や市販薬の乱用又は依存症に対する新たな治療方法及び支援方法・支援体制構築のための研究(研究代表者 松本俊彦) 総括・分担研究報告書: pp7-16, 2025.
 - 2) 松本俊彦, 宇佐美貴士, 沖田恭治, 西村晃萌, 山本泰輔, 谷渕由布子, 大宮宗一郎: 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査. 令和6年度厚生労働行政推進調査事業費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業) 薬物乱用・依存状況の実態把握のための全国調査と近年の動向を踏まえた大麻等の乱用に関する研究(研究代表者 嶋根卓也) 総括・分担研究報告書: pp99-154, 2025.
 - 3) 松本俊彦, 宇佐美貴士, 熊倉陽介, 高野 歩, 金澤由佳, 堤 史織: 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究. 厚生労働省依存症に関する調

査研究事業費補助金 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究（研究責任者 松本俊彦）研究報告書：pp1-48, 2025.

- 4) 嶋根卓也, 水野聡美, 猪浦智史, 邱 冬梅, 北垣邦彦, 小出彰宏, 富永孝治, 竹原健二: 飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査 (2024 年). 令和 6 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「薬物乱用・依存状況の実態把握のための全国調査と近年の動向を踏まえた大麻等の乱用に関する研究（研究代表者：嶋根卓也）」総括・分担研究報告書. 2025.
- 5) 嶋根卓也, 宇佐美貴士, 松本俊彦: 全国の依存症専門医療機関を受診する患者における市販薬乱用の実態に関する研究. 令和 6 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「濫用等のおそれのある医薬品の成分指定に係る研究（研究代表者：嶋根卓也）」総括・分担研究報告書. 2025.
- 6) 嶋根卓也, 片山宗紀, 榊原幹夫: 大手チェーンドラッグストアにおける市販薬販売の実態に関する研究. 令和 6 年度厚生労働科学研究費補助金障害者政策総合研究事業「処方薬や市販薬の乱用又は依存症に対する新たな治療方法及び支援方法・支援体制構築のための研究（研究代表者：松本俊彦）」総括・分担研究報告書. 2025.
- 7) 富山健一: 活性未知危険ドラッグ成分の薬理学的解析. 令和 6 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「危険ドラッグ等の乱用薬物に関する最新の分析情報の収集及び危害影響予測のための研究（研究代表者：花尻瑠理）」令和 6 年度分担研究報告書, pp1-14, 2025.
- 8) 富山健一: ヒト iPS 細胞より作成した機能的神経細胞を用いた危険ドラッグの有害作用の評価. 令和 6 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「精神活性物質の化学構造に基づく乱用危険性予測に関する研究（研究代表者：船田正彦）」令和 6 年度分担研究報告書, pp1-7, 2025.
- 9) 富山健一, 山本俊明: 豪州における大麻規制の現状と青少年に対する予防教育に関する研究. 令和 6 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「薬物乱用・依存状況の実態把握のための全国調査と近年の動向を踏まえた大麻等の乱用に関する研究（研究代表者：嶋根卓也）」令和 6 年度分担研究報告書, pp1-33, 2025.
- 10) 富山健一, 石井香織, 大谷暢子: 濫用等のおそれのある医薬品の追加候補となる薬剤に関する文献的調査. 令和 6 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「濫用等のおそれのある医薬品の成分指定に係る研究（研究代表者：嶋根卓也）」令和 6 年度分担研究報告書, pp1-25, 2025.
- 11) 船田正彦, 富山健一: 大麻を巡る国際社会の動向：米国及びカナダの規制状況について. 令和 6 年度厚生労働科学研究費補助金（健康安全確保総合研究分野 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究）「若年者を対象としたより効果的な薬物乱用予防啓発活動の実施等に関する研究（研究代表者：鈴木勉）」, 分担研究報告書, 2025.
- 12) 喜多村真紀, 高田雅弘, 江藤不二子, 首藤 誠, 嶋根卓也: 令和 6 度厚生労働行政推進調査事業費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）分担研究報告書, ソーシャルネットワークングサービスを情報源とするテキストマイニングおよび予防啓発に関する研究
- (5) 翻訳
- (6) その他
 - 1) 松本俊彦: 【解説】社会が否認する病に光をあてる—当事者と家族を孤独から救え. 母を捨てるということ おおたわ史絵著, 271-286, 2024.
 - 2) 松本俊彦: 依存症臨床という「泥炭地の沼」を冒険する人たちへ. 心理学を学ぼう! 3, 34-37, 2024.

- 3) 松本俊彦：薬剤師たちよ、蜂起せよ！. 神奈川県薬剤師会会誌 薬壺, 1, 2024.
- 4) 松本俊彦：【書評】臨床中毒学 第2版 上條吉人著. Medicina 61 (8) : 1295, 2024.
- 5) 赤坂真理, 松本俊彦：【特別記事】赤坂真理さんと松本俊彦さんのトークイベント 小さく死んで生き延びるために. 精神看護 27(6) : 454-466, 2024.
- 6) 松本俊彦：薬物依存症と二次被害. 文藝春秋オピニオン 2025年の論点 100 : 150-151, 2024.
- 7) 松本俊彦【解説】：齋藤塔子著 傷の声 絡まった糸をほどこうとした人の物語. 医学書院 : 294-297, 2024.
- 8) 松本俊彦：ブックファースト新宿店開店 16 周年記念 名著百選 2024 私が今年、出会った一冊. ブックファースト新宿店 : 46, 2024.
- 9) 松本俊彦, 宇佐美貴士, 上條吉人, 稲田泰之, 森岡壮充：シンポジウム 6 依存症対策プロジェクトチーム：処方薬依存の現状と対応～精神科診療所ができること～. 日本精神神経科診療所協会誌, 2024.
- 10) 松本俊彦：ハームリダクションって何ですか？. ころの元気+ 19(1) : 18-19, 2025.
- 11) 松本俊彦, 吉田絵理子, 翁長祐太, 遠藤 桂：精神科領域に求められる SOGI (性的指向・性自認) への配慮-当事者から精神科医へ伝えたいこと-. 精神科治療学 40(2) : 203-212, 2025.
- 12) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち ―子どもたちに広がる市販薬の過量服薬（オーバードーズ）の理解と支援 第一回：市販薬の過量服薬（オーバードーズ）とは？保体編集部オンライン, 大修館書店, 2024.6.
- 13) 嶋根卓也：【助言】特集_孤独・孤立社会の果て_誰もが当事者になる時代_BOND プロジェクト. Wedge10月号 : 40-43, 株式会社ウェッジ, 2024.9.20.
- 14) 北垣邦彦, 嶋根卓也, 松本達朗, 鈴木貴晃, 松下妙子：保護者向け薬物乱用防止パンフレット「NO! DRUG 悪影響を学ぶ 子どもを守る 相談先を知る」一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会, 2025.2.

B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等
- 1) Shimane T. Children Who Can't Say "Help": The Increasing of Over-the-Counter Drug Overdose in Japan. 2024 Drug Treatment Systems and Recidivism Prevention Symposium, Taiwan (Jiayi), 2024.5.30.
- 2) Shimane T. Children Who Can't Say "Help": The Increasing of Over-the-Counter Drug Overdose in Japan. Bali Psychiatric Center, Mister of Health and Welfare, Taiwan (Bali), 2024.5.31.
- 3) 松本俊彦：【ワークショップ】若者の自傷・自殺や依存. 日本学生相談学会 第42回大会, 宮城, 2024.5.25.
- 4) 松本俊彦：【シンポジウム】市販薬オーバードーズでSOSに蓋をする～大人の都合に翻弄される子どもたち～. 第15回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会, 静岡, 2024.6.9.
- 5) 松本俊彦：【パネルディスカッション】がん治療における心理社会的要因を主とする痛みを再検討する. 第29回日本緩和医療学会学術大会 第37回日本サイコオンコロジー学会総会 合同学術大会, 兵庫, 2024.6.15.
- 6) 成瀬暢也, 松本俊彦：【司会】一般シンポジウム 27 市販薬乱用・依存の実態・治療・対策～いま若者たちに何が起きているのか？. 第120回日本精神神経学会学術総会, 北海道, 2024.6.20-22.
- 7) 松本俊彦, 引地和歌子：【シンポジウム】監察医務院から見た市販薬中毒死の実態. 第120回日本精神神経学会学術総会, 北海道, 2024.6.20-22.
- 8) 太刀川弘和, 松本俊彦：【司会】一般シンポジウム メディア×メンタルヘルス 3.0—どう協働すべきか. 第120回日本精神神経学会学術総会, 北海道, 2024.6.20-22.
- 9) 松本俊彦：【シンポジウム】薬物問題をめぐる情報発信のあり方—専門家だからこそすべきこと.

- 第 120 回日本精神神経学会学術総会，北海道，2024.6.20-22.
- 10) 松本俊彦：【基調講演】自殺予防と中毒 薬物依存を中心に．第 46 回日本中毒学会総会・学術集会，兵庫，2024.7.24.
 - 11) 松本俊彦：【特別講演】助けてが言えない．日本カウンセリング学会第 56 回大会，東京，2024.7.28.
 - 12) 松本俊彦：【招請講演】薬物依存症における stigma の克服と inclusion．第 56 回日本医学教育学会大会，東京，2024.8.9.
 - 13) 水野聡美，堤 史織，片山宗紀，新田慎一郎，大野昂紀，安間尚徳，塩澤拓亮，嶋根卓也，松本俊彦，高野 歩：【シンポジウム】ハームリダクションに基づく支援の導入・普及に関する研究：グループインタビュー調査の実施背景と研究方法の説明．2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，東京，2024.9.19.
 - 14) 堤 史織，片山宗紀，新田慎一郎，水野聡美，大野昂紀，塩澤拓亮，安間尚徳，嶋根卓也，松本俊彦：【シンポジウム】アルコール・薬物使用問題の経験がある当事者の視点から見るハームリダクションに基づく支援において重要な要素．2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，東京，2024.9.19.
 - 15) 片山宗紀，堤 史織，新田慎一郎，水野聡美，大野昂紀，塩澤拓亮，安間尚徳，嶋根卓也，松本俊彦，高野 歩：【シンポジウム】”大きな理想をもって、本当のハーム・リダクションを目指して”-アルコール・薬物の家族の視点から．2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，東京，2024.9.19.
 - 16) 新田慎一郎，水野聡美，堤 史織，片山宗紀，大野昂紀，塩澤拓亮，安間尚徳，嶋根卓也，松本俊彦，高野 歩：【シンポジウム】”支援者の立場から考える”ハームリダクションに基づく支援における重要な要素．2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，東京，2024.9.19.
 - 17) 松本俊彦：【シンポジウム 6 PS6-1】薬物依存症臨床から見た医薬品乱用・依存の実態と治療上の課題．2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，東京，2024.9.20.
 - 18) 松本俊彦：【ワークショップ】トラウマとアディクションからの回復のために何が必要か？．2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，東京，2024.9.20.
 - 19) 松本俊彦：【スポンサードセミナー：アッヴィ合同会社】刑務所出所者に対してどう情報提供を行うか？～保護観察から地域精神保健福祉への橋渡しの試みから～．2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，東京，2024.9.20.
 - 20) 松本俊彦：【市民公開講座】人はなぜアルコールや薬物にハマルのか？．2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，東京，2024.9.21.
 - 21) 松本俊彦：【教育講演 3】薬物依存症臨床から見た市販薬乱用・依存の実態と治療上の課題．第 8 回日本精神薬学会総会・学術集会，東京，2024.9.22.
 - 22) 松本俊彦：【特別講演】市販薬乱用・依存の理解と援助．第 78 回東北精神神経学会，秋田，2024.10.6.
 - 23) 松本俊彦：【特別鼎談】金融資本主義とアディクション．第 24 回日本外来精神医療学会，東京，2024.10.13.
 - 24) 松本俊彦：【シンポジウム 5】依存症治療の立場からみた若年に広がる物質使用障害の現状、背景、課題．第 65 回日本児童青年精神医学会総会学術集会，愛媛，2024.10.18.
 - 25) 松本俊彦：【教育講演】子どもの市販薬乱用問題．日本子ども虐待防止学会第 30 回かがわ大会，香川，2024.12.1.
 - 26) 松本俊彦：【特別講演】若者の自傷行為と市販薬乱用．日本精神衛生学会第 40 回大会，東京，2024.12.15.
 - 27) 松本俊彦：【特別講演】我が師を語る．第 8 回関東甲信越アルコール関連問題学会，山梨，2025.3.2.
 - 28) 松本俊彦：【教育講演】SNS 時代の精神科医の役割．第 43 回日本社会精神医学会，東京，2025.3.14.
 - 29) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち・市販薬の乱用・依存を例として．第 127 回日本小児学会学術集会，モーニング実践講座，2024.4.20.
 - 30) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち・市販薬の乱用・依存を例として．日本社会薬学会 社

会薬学フォーラム 2024, 2024.4.28.

- 31) 嶋根卓也 :【シンポジウム】「濫用等のおそれのある医薬品」の販売制度の現状と課題.「市販薬過量服用の現状とその対策」第 8 回日本臨床・分析中毒学会 総会・学術集会, 神奈川, 2024.5.10.
- 32) 嶋根卓也【ランチョンセミナー】:「助けて」が言えない子どもたち:急増する市販薬のオーバードーズの背景と対応を考える. 第 8 回日本臨床・分析中毒学会 総会・学術集会, 神奈川, 2024.5.10.
- 33) 嶋根卓也 :【シンポジウム】大麻乱用による健康被害と断るスキル:有効な、有効ではない予防教育. 第 57 回日本薬剤師会学術大会, 埼玉, 2024.9.23.
- 34) 嶋根卓也, 片山宗紀, 榎原幹夫【シンポジウム】:市販薬の乱用・依存とゲートキーパーとしての薬剤師. 2024 年度 アルコール・薬物依存関連学会 合同学術総会, 東京, 2024.9.19.
- 35) 新田慎一郎, 嶋根卓也【シンポジウム】覚醒剤依存症のゲイ・バイセクシュアル男性における支援ニーズ. 2024 年度 アルコール・薬物依存関連学会 合同学術総会, 東京, 2024.9.20.
- 36) 嶋根卓也 :【シンポジウム】市販薬のオーバードーズとさりげない「おせっかい」-ゲートキーパーとしての薬剤師-. 第 34 回日本医療薬学会年会, 千葉, 2024.11.3.
- 37) 富山健一, 船田正彦 :【シンポジウム】「新規合成オピオイド系化合物の薬理作用の評価について」, 2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 砂防会館 シェーンバッハ・サボー, 2024.9.21.
- 38) 水野聡美, 堤 史織, 新田慎一郎, 高野 歩 :【シンポジウム】インドネシアの医療機関における薬物使用障害患者への治療. 第 59 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 東京, 2024.9.19
- 39) 堤 史織, 水野聡美, 新田慎一郎, 高野 歩 :【シンポジウム】インドネシアの地域コミュニティにおけるハームリダクション活動. 第 59 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 東京, 2024.9.19
- 40) 新田慎一郎, 水野聡美, 堤 史織, 高野 歩 :【シンポジウム】インドネシアのリハビリテーション施設における薬物依存症のリハビリテーション. 第 59 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 東京, 2024.9.19

(2) 一般演題

- 1) Nemoto T, Iwamoto M, Kamitani K, Zhengv M, Shimane T : Marijuana and Other Substance Use Behaviors among Japanese Nationals Temporarily Staying in the U.S. 2024 年度 アルコール・薬物依存関連学会 合同学術総会, 東京, 2024.9.21.
- 2) Ofuchi T, Shimane T, Matsumoto T : The Role of Spirituality in Methamphetamine Abstinence Among Japanese Participants in 12-Step and DARC Programs. 2024年度 アルコール・薬物依存関連学会 合同学術総会, 東京, 2024.9.21.
- 3) Takano A, Ono K, Umemura F, Sato M, Okuda K, Sese J, Matsumoto T : Development of a Model to Distinguish Methamphetamine Use from Alcohol Use Based on Sleep and Heart Rate Conditions Assessed by a Wearable Activity Tracker., The College on Problems of Drug Dependence (CPDD) 86th Annual Scientific Meeting, Montreal ,2024.6.15-19.
- 4) Tsutsumi S: Diverse Belief Systems in Mutual Help Groups for Alcohol Use Disorder: Alcoholics Anonymous and 12-step Alternatives, Lisbon Addictions, Lisbon,2024.10
- 5) 谷渕由布子, 大宮宗一郎, 宇佐美貴士, 松本俊彦 : わが国の精神科臨床現場における市販薬乱用の特徴:単一製品乱用者と複数製品乱用者の比較. 第 120 回日本精神神経学会学術総会, 北海道, 2024.6.20-22.
- 6) 高野 歩, 大野昂紀, 奥田華代, 瀬々潤, 湯本洋介, 松下幸生, 松本俊彦 : 飲酒が心拍数および睡眠に与える影響:ウェアラブル活動量計とスマホアプリを用いた計測. 2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 東京, 2024.9.21.

- 7) 田中紀子, 松本俊彦: 重複障害の病的ギャンブラーにおける回復コミュニティ・アクセス促進要因の研究. 2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 東京, 2024.9.21.
- 8) 高野 歩, 高橋邦彦, 安齋達彦, 宇佐美貴士, 堤 史織, 金澤由佳, 熊倉陽介, 松本俊彦: 男性の覚醒剤使用者における違法薬物再使用リスク: 保護観察対象者の前向きコホート研究. 2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 東京, 2024.9.21.
- 9) 水野聡美, 猪浦智史, 松本俊彦, 嶋根卓也: 市販薬乱用と飲酒の関係: 薬物使用に関する全国住民調査の結果から. 2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 東京, 2024.9.21.
- 10) 正高佑志, 三木直子, 松本俊彦: 貴方はなぜ大麻を吸うのですか?: 日本人大麻使用車を対象とした質的調査. 2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 東京, 2024.9.21.
- 11) 片山宗紀, 藤城 聡, 杉浦寛奈, 小西 潤, 稲田 健, 白川教人, 松本俊彦: COVID-19 が全国精神保健福祉センター及び民間団体の依存症支援活動に与えた長期的影響の相違-4 年間の長期調査から-. 2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 東京, 2024.9.20.
- 12) 沖田恭治, 松本俊彦, 齊藤友美, 重本蓉子, 佐藤典子: (ポスター) パーキンソン病治療薬を用いた覚醒剤使用障害の薬物療法開発を目指した脳機能画像研究: 中間解析. 2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 東京, 2024.9.19.
- 13) 石井香織, 沖田恭治, 齊藤友美, 吉澤一巳, 松本俊彦: (ポスター) 処方薬及び市販薬使用障害患者背景の縦断的調査研究 (第 1 報). 2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 東京, 2024.9.19.
- 14) 堀内健太郎, 常岡俊明, 杉沢 諭, 田中紀子, 松本俊彦: (ポスター) GA 参加者の発達傾向に関する調査. 2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 東京, 2024.9.20.
- 15) 嶋根卓也, 猪浦智史, 喜多村真紀, 松本俊彦: 「助けて」が言えない子どもたち-市販薬の乱用・依存を例として-. 第 127 回日本小児科学会学術集会, 九州, 2024.4.1.
- 16) 引土絵未, 嶋根卓也, 小高真美, 秋元恵一郎, 加藤 隆, 大吉 努, 山村りつ, 吉野美樹: 依存症者の就労支援に関する研究: ハローワークを対象とした依存症者の就労に関する実態および意識調査. 2024 年度 アルコール・薬物依存関連学会 合同学術総会, 東京, 2024.9.20.
- 17) 喜多村真紀, 高田雅弘, 江藤不二子, 首藤誠, 嶋根卓也: X (旧 Twitter) 上の『OD レボ』解析を通じた市販薬過量服薬の現状把握と予防啓発の検討. 2024 年度 アルコール・薬物依存関連学会 合同学術総会, 東京, 2024.9.21.
- 18) 喜多村真紀, 嶋根卓也, 水野聡美, 松本俊彦: 「トー横キッズ」における物質使用関連問題と支援に関する研究. 2024 年度 アルコール・薬物依存関連学会 合同学術総会, 東京, 2024.9.21.
- 19) 嶋根卓也, 水野聡美, 猪浦智史, 邱 冬梅: 一般住民における市販薬乱用の経験率の推計: 薬物使用に関する全国住民調査 2023 より. 2024 年度 アルコール・薬物依存関連学会 合同学術総会, 東京, 2024.9.21.
- 20) 舩田正彦, 池上大悟, 富山健一: 改正大麻取締法の意義: 大麻乱用防止と医療応用, 第 145 回日本薬学会年会, 福岡, 2025.3.28.
- 21) 有田浩暢, 菊川俊太郎, 富澤 幸, 坂田遥佳, 西本瑞葉, 舩田正彦, 富山健一, 橋本 勝, 田坂友彦, 田畑英嗣, 中村佳代, 忍足鉄太, 夏苺英昭, 高橋秀依: フェンタニル骨格を有する μ オピオイド受容体アンタゴニストの構造解析, 第 145 回日本薬学会年会, 福岡, 2025.3.26-28.
- 22) 西本瑞葉, 有田浩暢, 菊川俊太郎, 富澤 幸, 坂田遥佳, 舩田正彦, 富山健一, 田畑英嗣, 中村佳代, 忍足鉄太, 夏苺英昭, 高橋秀依: フェンタニル誘導体の合成と構造活性相関, 第 145 回日本薬学会年会, 福岡, 2025.3.26-28.
- 23) 有田浩暢, 菊川俊太郎, 富澤 幸, 坂田遥佳, 中村佳代, 田畑英嗣, 富山健一, 忍足鉄太, 夏苺英昭, 舩田正彦, 高橋秀依: フェンタニル誘導体の構造活性相関, 第 41 回メディシナルケミストリーシンポジウム, 京都, 2024.11.20.
- 24) 富山健一, 舩田正彦: 危険ドラッグに含まれる大麻成分 THC 類似物質の薬理学的特性の解析,

2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，東京，2024.9.19.

- 25) 西本瑞葉，有田浩暢，菊川俊太郎，富澤 宰，坂田遥佳，富山健一，田坂友彦，田畑英嗣，中村佳代，忍足鉄太，夏莉英昭，舩田正彦，高橋秀依：フェンタニル誘導体の構造活性相関，第68回日本薬学会関東支部大会，新潟，2024.9.14-15.
- 26) 有田浩暢，田中諒子，菊川俊太郎，富澤 宰，坂田遥佳，舩田正彦，富山健一，橋本 勝，田坂友彦，田畑英嗣，中村佳代，牧野宏，忍足鉄太，夏莉英昭，高橋秀依：フェンタニル由来の新規オピオイド μ 受容体拮抗薬の創製，日本法中毒学会第43年会，千葉，2024.6.29.
- 27) 松枝美智子，光永憲香，脇崎裕子，植田 愛，倉持裕子，増満 誠，高野 歩，中本 亮，池田 智，児玉裕子，安保寛明：COVID-19 に罹患した利用者をケアした経験を持つ訪問看護師の Moral Injury につながる状況，第44回日本看護科学学会学術集会，熊本，2024.12.7-8
- 28) 喜多村真紀，薬物使用関連問題に関する学生相談への援助要請について 一意図と態度における性差に焦点を当てて，日本心理臨床学会第43回大会，神奈川，2024.8.23.
- 29) 喜多村真紀，「トー横キッズ」における物質使用と関連問題への支援の検討—インタビュー調査の結果より—，第61回日本犯罪学会総会，東京，2024.11.30.
- 30) 喜多村真紀，菊地 創，有馬 慧，松本俊彦，大学生の物質使用関連問題に対する学内援助の現状と課題 —インタビュー調査の結果より— ，第46回全国大学メンタルヘルス学会総会，秋田，2024.12.6.

(3) 研究報告会

- 1) 松本俊彦，嶋根卓也：国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部主催 合同報告会，オンライン，2025.3.7.
- 2) 嶋根卓也：飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査（2024年）。「薬物乱用・依存状況の実態把握のための全国調査と近年の動向を踏まえた大麻等の乱用に関する研究」令和6年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）研究成果報告会，オンライン，2025.3.7.
- 3) 嶋根卓也：全国の依存症専門医療機関を受診する患者における市販薬乱用の実態に関する研究。「濫用等のおそれのある医薬品の成分指定に係る研究」令和6年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）研究成果報告会，オンライン，2025.3.7.
- 4) 嶋根卓也，猪浦智史，喜多村真紀，松本俊彦：高校生における市販薬乱用の有病率と関連する心理社会的要因に関する研究：薬物使用と生活に関する全国高校生調査2021. 第36回国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会，2026.3.17.
- 5) 喜多村真紀，高田雅弘，江藤不二子，首藤 誠，嶋根卓也：市販薬の過量服薬に関連する問題の探索的研究. 第36回国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会，2026.3.17.
- 6) 富山健一，山本俊明：国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部主催 合同報告会，オンライン，2024.3.7.
- 7) 富山健一，石井香織，大谷暢子：国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部主催 合同報告会，オンライン，2024.3.7.
- 8) 富山健一，舩田正彦：大麻に関する海外の規制状況と社会問題：米国及び加国の現状（2024年）。「大麻をはじめとする薬物の効果的な予防啓発活動の実施及び効果検証に向けた調査研究」令和6年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）研究成果報告会，東京，2024.2.28.
- 9) 高野 歩：お酒の科学財団 第3回研究報告会，飲酒に関する心理的・行動的データのリアルタイム計測と飲酒予測モデルの開発，京都，2024.8.27
- 10) 喜多村真紀，高田雅弘，江藤不二子，首藤 誠，嶋根卓也：ソーシャルネットワーキングサービスを情報源とするテキストマイニングおよび予防啓発に関する研究，令和6年度厚生労働科学研究

費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）研究成果報告会，オンライン，2025.3.7.

- 11) 水野聡美，嶋根卓也，猪浦智史，松本俊彦：睡眠薬を常用する一般住民の心理社会的特徴に関する研究：薬物使用に関する全国住民調査の結果より．第 36 回国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会，2024.3.18.

C. 講演

- 1) 松本俊彦：オーバードーズ．公益社団法人日本医師会主催 令和 6 年度学校保健講習会，東京，2024.4.7.
- 2) 松本俊彦：生き抜くために～依存について考える～．NPO 法人抱樸主催 奥田知志との対談講演，youtube，2024.4.8.
- 3) 松本俊彦：ハーム・リダクションについて．関西大学人権問題研究室主催 2024 年度第 1 回研究学習会，オンライン，2024.4.12.
- 4) 松本俊彦：市販薬乱用の実態と治療・支援の課題．一般社団法人日本社会精神医学会 MeijiSeika ファルマ共催 多職種のための社会精神医学セミナー，オンライン，2024.4.14.
- 5) 松本俊彦：依存症ってなんだろう．株式会社ほぼ日主催 ほぼ日の学校，動画，2024.5.14.
- 6) 松本俊彦：知っておきたい依存症の基本．日本放送局主催 福祉班プチ勉強会 第 1 回「依存症」，オンライン，2024.5.15.
- 7) 松本俊彦：依存症と自殺．株式会社 HANA 主催 Club Psychiatry 第 3 回記念講演会，オンライン，2024.5.16.
- 8) 松本俊彦：ギャンブル依存症問題を考える会 10 周年を記念して．公益社団法人ギャンブル依存症問題を考える会主催 10 周年記念フォーラム，東京，2024.5.18.
- 9) 松本俊彦：【基調講演】非行・犯罪行為に至った障害者とその支援．日本社会福祉学会中部地域ブロック部会主催 2024 年度春の研究定例記念講演，愛知，2024.5.19.
- 10) 松本俊彦：若者でまん延する一般薬による薬物依存の実態と背景．日本医学ジャーナリスト協会主催 2024 年度通常総会特別講演会，オンライン，2024.5.29.
- 11) 松本俊彦：市販薬乱用・依存の理解と対応．武田薬品工業株式会社主催 北足立郡市医師会学術講演会，オンライン，2024.5.31.
- 12) 松本俊彦：薬依存症をもつ人を地域で支える．東京大学医学部附属病院精神神経科主催 東京大学履修証明プログラム「職域・地域課架橋型一価値に基づく支援者育成」C コース，東京，2024.6.16.
- 13) 赤坂真理，松本俊彦：「小さく死んで生き延びるために」．医学書院主催 シリーズケアをひらく「安全に狂う方法」（医学書院）刊行記念トークイベント，東京，2024.6.19.
- 14) 松本俊彦：処方薬と依存症．特定非営利活動法人 RDP 主催 2024 年度 RDP 横浜依存症家族教育プログラム，神奈川，2024.6.26.
- 15) 松本俊彦：いま求められる薬物依存症対策とは？．NPO 法人全国薬物依存症者家族会連合会主催 やっかれん 20 周年フォーラム，神奈川，2024.6.30.
- 16) 尾久守侑，松本俊彦：「精神科医が見ている世界」．株式会社晶文社主催 トークイベント，東京，2024.7.4.
- 17) 松本俊彦：最近の薬物乱用・依存の動向．大塚製薬株式会社主催 アディクションからの回復を考える会，京都，2024.7.6.
- 18) 松本俊彦：今どきの依存症～市販薬を含む薬物依存症について．新宿区保健予防課主催 令和 6 年度新宿区精神保健講演会，東京，2024.7.12.
- 19) 松本俊彦：最近の青年たちにみる自傷・依存行動をめぐる問題．公益社団法人明治安田こころの健康財団主催 子ども・専門講座 1，東京，2024.7.14.
- 20) 松本俊彦：薬物依存症臨床から見た市販薬乱用・依存の実態と治療上の課題．MeijiSeika ファルマ株式会社主催 Web セミナー，オンライン，2024.7.16.

- 21) 松本俊彦：自死遺族のケアについて．公益社団法人ギャンブル依存症問題を考える会主催 ギャンブル依存症者の自死遺族会立ち上げセミナー，東京，2024.7.20.
- 22) 松本俊彦：シンポジウム「こころを紡ぐ人と地域」．特定非営利活動法人東京ソテリア主催 こころ織りなす映画・絵画と服飾，三重，2024.7.21.
- 23) 松本俊彦：生きづらさを抱えた子供たちにできること．尼崎市養護教諭研究会主催 講演会，兵庫，2024.7.24.
- 24) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない子どもとどう向き合うか？～自傷とオーバードーズの理解と援助～．福島県学校保健会養護教諭部主催 第 42 回福島県養護教諭研究大会，動画配信，2024.7.26.
- 25) 松本俊彦：自己治療仮説とハームリダクション～医薬品依存症と抑うつ・不安の精神病理～．lundbeck・ジャパン株式会社主催 Lundbeck Psychiatry Expert Web Seminar，オンライン，2024.7.29.
- 26) 松本俊彦：「生きづらさ」を抱える若者たちへの支援について～若者に増加するオーバードーズにどう向き合うか～．東京都南多摩保健所主催 令和 6 年度東京都南多摩保健所自殺対策推進講演会，東京，2024.7.30.
- 27) 松本俊彦：子どもの「生きづらさ」と向き合う～自傷行為をやめられない子どもへの理解と対応～．全国養護教諭サークル協議会主催 第 52 回全国養護教諭サークル記念講演会，東京，2024.8.4.
- 28) 松本俊彦：自傷と市販薬 OD の理解と援助．天理教社会福祉課 ひのきしんスクール運営委員会主催 ひのきしんスクールシンポジウム「たすけて」と言えない若者たち～業にハマる理由と背景～，オンライン，2024.8.8.
- 29) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか？～回復に必要なものは何か～．駒木野病院主催 駒木野懇話会第 53 回記念大会，東京，2024.8.18.
- 30) 松本俊彦：もしも「死にたい」といわれたら～自傷と OD の理解と対応～．埼玉県高等学校教育相談研究会主催 令和 6 年度埼玉県高等学校相談研究会夏季研究会，埼玉，2024.8.20.
- 31) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない～自傷と OD の理解と援助．特定非営利活動法人八王子ダルク主催 八王子ダルクセミナー「OD・自傷の背景にある声」，東京，2024.8.24.
- 32) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか？～予防啓発と回復支援の両立を目指して～．福井大学保健管理センター主催 学生支援講演会，2024.8.28.
- 33) 松本俊彦：オーバードーズの課題．一般社団法人日本思春期学会主催 第 8 回思春期学研究認定者講習会，オンデマンド配信，2024.9.1～2024.9.30.
- 34) 松本俊彦：思春期のメンタルヘルス．横浜市こころの健康相談センター主催 令和 6 年度自殺対策普及啓発市民講演会，神奈川，2024.9.3.
- 35) 松本俊彦：思春期の市販薬乱用・依存、もしも「死にたい」といわれたら．なら思春期・不登校支援研究所株式会社主催 スクールカウンセラーのための勉強会，オンライン，2024.9.8.
- 36) 松本俊彦：自傷とオーバードーズの理解と援助．群馬大学医学部附属病院主催 令和 6 年度子どもの心のケアネットワーク事業，オンライン，2024.9.15.
- 37) 松本俊彦：思春期と自傷・自殺．一般社団法人日本家族計画協会主催 思春期保健セミナーコース II，オンライン，2024.9.17.
- 38) 松本俊彦：薬物依存症と ADHD．武田薬品工業株式会社主催 成人 ADHD 治療薬の新たな可能性-併存疾患の観点から-in kyoto，京都，2024.9.21.
- 39) 松本俊彦：いま求められる薬物乱用防止教育とは？．九州大学キャンパスライフ・健康支援センター主催 九州大学・薬物依存対策全学 FD，オンライン，2024.9.25.
- 40) 奥田知志，松本俊彦，杉山春：孤立ではなく、自立して生きるために．認定 NPO 法人抱樸主催「希望のまちプロジェクト」進捗報告会，東京，2024.9.25.
- 41) 松本俊彦，大脇幸志郎：エビデンス依存は病なのか？．株式会社ゲンロンカフェ主催 松本俊彦×大脇幸志郎 対談イベント，東京，2024.9.27.

- 42) 松本俊彦：子どもの自傷・自殺～もし死にたいと言われたら～. 特定非営利活動法人チャイルドラインとんだばやし主催 電話の受け手ボランティア養成講座, 大阪, 2024.9.29.
- 43) 松本俊彦：市販薬オーバードーズの現状と課題. 公益社団法人日本精神神経学会主催 第24回記者勉強会, 東京, 2024.10.2.
- 44) 松本俊彦：薬物依存症臨床から見た市販薬使用症の特徴と治療上の課題. 東京都精神保健福祉協議会主催 2024年度東京都精神保健福祉協議会講演会, 東京, 2024.10.4.
- 45) 松本俊彦：アルコールとうつ、自殺～死のトライアングルを防ぐために～. 大塚製薬株式会社 埼玉肝不全研究 共催 第13回埼玉肝不全研究会, 埼玉, 2024.10.4.
- 46) 松本俊彦：自傷行為とその対応について. 文部科学省初等中等教育局主催 児童生徒の自殺予防に関する普及啓発協議会, 群馬, 2024.10.16.
- 47) 松本俊彦：自傷と市販薬オーバードーズの理解と援助. 愛知県教育委員会 愛知県学校保健会 共催 愛知県学校保健研究大会, 愛知, 2024.10.23.
- 48) 松本俊彦：思春期の市販薬乱用・依存～自傷と自殺のあいだ. 一般社団法人山梨県医師会主催 令和6年度日医生涯教育講座, 山梨, 2024.10.26.
- 49) 松本俊彦：生きづらさからの回復. 八王子市主催 令和6年度八王子市こころの健康づくり普及啓発講演会, 東京, 2024.10.30.
- 50) 松本俊彦：①ルラシドンの対象症例 ②アディクションの現状と課題. 住友ファーマ株式会社主催 アディクション Web セミナーから薬物依存症を探求する～, オンライン, 2024.11.1.
- 51) 松本俊彦：依存症という病気と回復の希望. 相模原ダルク主催 10周年記念フォーラム, 神奈川, 2024.11.2.
- 52) 松本俊彦：市販薬乱用・依存の理解と対応. 武田薬品工業株式会社主催 埼玉こどものこころ臨床研究会, 埼玉, 2024.11.2.
- 53) 松本俊彦：大人も子どもも「助けて！」が言えない. 長崎いのちの電話主催 開局30周年記念講演会, 長崎, 2024.11.3.
- 54) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられないー自傷とオーバードーズの理解と援助ー. 調布市主催 令和6年度調布市子ども・若者支援地域ネットワーク講演会, 東京, 2024.11.10.
- 55) 松本俊彦：こころを紡ぐ人と地域. 特定非営利活動法人東京ソテリア主催 支援職員向け講演会, 東京, 2024.11.12.
- 56) 松本俊彦：市販薬乱用・依存の実態と対策の課題. 公益財団法人世田谷区保健センター主催 講演会「依存症セミナー」, 東京, 2024.11.13.
- 57) 松本俊彦：「なぜ自分を傷つけるの？」～自傷行為から見える子どもたちの「今」そして「今」私たちにできること～. ぐんま思春期研究会主催 令和6年度ぐんま思春期研究会特別講演, 群馬, 2024.11.17.
- 58) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助. 厚生労働省医薬・生活衛生局監視指導・麻薬対策課中毒係主催 令和6年度再乱用防止対策講習会, 滋賀, 2024.11.20.
- 59) 松本俊彦：最近の薬物乱用・依存の動向. 大塚製薬株式会社主催 2024年度第2回神奈川精神科薬物療法専門薬剤師セミナー, オンライン, 2024.11.21.
- 60) 松本俊彦：「自分を傷つけずにはいられない子どもたち」～島で暮らす私たちにできること～. NPO法人Love Peer Price やいま主催 石垣市若年層自殺対策事業市民講演会, 沖縄, 2024.11.24.
- 61) 松本俊彦：自傷行為とオーバードーズの理解と援助～若者の自殺予防のためにできること～. 奈良県立医科大学医学講座主催 令和6年度自殺未遂者等支援拠点医療機関整備事業講演会 自殺・自傷の予防にむけて, 奈良, 2024.11.27.
- 62) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか！～痛みを抱える人に寄り添う支援～. 一般社団法人道北地方物質使用障害研究会主催 道北リカバリーセミナーPolarBears10周年記念フォーラム, 北海道, 2024.12.11.
- 63) 松本俊彦：自分を傷つけることで生きてきた～自傷から回復するための心と体の処方箋～. 医療

- 法人社団 CRS きずときずあとのクリニック主催 講演会, 東京, 2024.12.16.
- 64) 松本俊彦: 依存症. 横浜市立大学附属市民総合医療センター主催 こころと痛みのベイサイドセミナー2024. 神奈川, 2024.12.19.
- 65) 松本俊彦: なぜ自分を傷つけずにいられないのか〜リストカット・オーバードーズなどへの理解と支援〜. 株式会社金子書房主催 金子総合研究所オンラインセミナー, オンライン, 2024.12.22.
- 66) 松本俊彦: 市販薬のオーバードーズについて〜理解と対応〜. 千葉県精神保健福祉センター主催 令和 6 年度依存症講演会, YouTube 動画, 2024.12.23〜.
- 67) 松本俊彦: 若年層による市販薬のオーバードーズ. 小田原市学校保健会主催 令和 6 年度すこやかセミナー, YouTube 動画, 2024.12.25〜2025.1.15.
- 68) 松本俊彦: 若年層による市販薬のオーバードーズ. 小田原市健康づくり課主催 令和 6 年度自殺対策講演会, YouTube 動画, 2024.12.25〜2025.1.15.
- 69) 松本俊彦: わが国における薬物政策の現状と課題. 新潟県役部依存症者を考える家族の会主催 学習会, 新潟, 2025.1.12.
- 70) 松本俊彦: 薬物依存 up-to-date 患者さんに寄り添うことが大切. 順天堂大学麻酔科学・ペインクリニック講座主催 痛みと心のカンファレンス, オンライン, 2025.1.14.
- 71) 松本俊彦: 自傷・自殺の事を知り、適切な支援をできるようになるセミナー. NPO 法人東京メンタルヘルス・スクエア主催 チャリティオンラインセミナー, オンライン, 2025.1.14.
- 72) 松本俊彦: 薬物依存症のしくみと回復支援. 一般社団法人 ARTS 主催 令和 6 年度依存症民間団体支援事業 薬物依存症セミナー, 大阪, 2025.1.19.
- 73) 松本俊彦: 依存症について. 成城大学治療的司法研究センター主催 カンファレンス, オンライン, 2025.1.22.
- 74) 松本俊彦: 自分を傷つけずにはいられない〜自傷行為とオーバードーズの理解と援助〜. 岡山市こころの健康センター主催 令和 6 年度こころの健康講演会兼自殺予防のための支援者研修会, 岡山, 2025.1.29.
- 75) 松本俊彦: 市販薬・処方薬依存の現状と支援のあり方. 愛知県精神保健福祉センター主催 令和 6 年度薬物関連問題関係機関連絡会議, 愛知, 2025.2.7.
- 76) 松本俊彦: 「思春期の市販薬乱用・依存」「もしも『死にたい』と言われたら」. なら思春期・不登校支援研究所株式会社主催 スクールカウンセラーのための研究会, オンライン, 2025.2.9.
- 77) 松本俊彦: 自分を傷つけずにはいられない〜自傷と市販薬 OD の理解と援助〜. 日本精神保健看護学会 第 6 回社会貢献委員会主催セミナー, オンライン, 2025.2.9.
- 78) 松本俊彦: 自分を傷つけてしまう子どもたちへ わたしたちができること. 和歌山児童家庭支援センターきずな主催 令和 6 年度講演会, 和歌山, 2025.2.11.
- 79) 松本俊彦: カフェイン依存症問題・若年層を中心に. 神奈川県保険医協会主催 地域医療学習会, 神奈川, 2025.2.14.
- 80) 松本俊彦: ダメ! と止める支援からハームリダクション的な支援へ. 特定非営利活動法人地域精神保健福祉機構主催 第 98 回こんぼ亭月例会, オンライン, 2025.2.15.
- 81) 松本俊彦: なぜ人は依存症になるのか〜日常診療で見かける依存症〜. 兵庫県保険医協会神戸支部主催 研究会, 兵庫, 2025.2.15.
- 82) 松本俊彦: 若年層のドラッグ使用について. 特定非営利活動法人東京ソテリア主催 講演会, オンライン, 2025.2.18.
- 83) 松本俊彦: 市販薬の乱用・依存. MeijiSeika ファルマ株式会社主催 Web セミナー, オンライン, 2025.2.19.
- 84) 松本俊彦: 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究. 東京保護観察所主催 令和 6 年度東京都薬物再乱用防止対策支援連絡協議会, 東京, 2025.2.21.
- 85) 松本俊彦: 【コメント】演者 マーク・ホロウィッツ 精神科の薬の「脱処方」を学ぶ: 離脱症状を

- 踏まえた薬の減らし方・やめ方. 東京大学大学院総合文化研究科「精神科の診断・薬・社会」研究会主催 講演会, オンライン, 2025.2.23.
- 86) 松本俊彦: 若者の自傷行為の理解と家族の関わり方について. 東京都立精神保健福祉センター主催 令和6年度第6回思春期・青年期家族講座, 東京, 2025.2.25.
- 87) 松本俊彦: みんなで考えよう依存症の事. 厚生労働省主催 依存症の理解を深めるためのトーク&音楽ライブイベント, 東京, 2025.2.26.
- 88) 松本俊彦: 市販薬オーバードーズの現状と課題. 神奈川県精神神経科診療所協会主催 医療問題検討会, 神奈川, 2025.2.28.
- 89) 松本俊彦: なぜ若者は市販薬をオーバードーズするのか?. 一般社団法人日本うつ病センター主催 メンタルヘルスセミナー, オンライン, 2025.3.1.
- 90) 松本俊彦: 不登校や自殺企図を中心に、思春期特有の心の状態や発達の理解、子どもの揺れる心に寄り添った対応について考える. 名古屋市精神保健福祉センター主催 思春期精神保健関係職員研修, オンライン, 2025.3.5.
- 91) 松本俊彦: 不眠症の診断と治療の知識習得. ユーザイ株式会社主催 不眠症治療セミナー〜これからの睡眠薬使用を考える〜, オンライン, 2025.3.6.
- 92) 松本俊彦: 松本俊彦先生に聞く! 生きるための依存と社会的養護を経験した若者たち. 特定非営利活動法人インターナショナル・フォスターケア・アライアンス主催 IFCA 日米ユースサミット前夜祭イベント, オンライン, 2025.3.7.
- 93) 松本俊彦: 市販薬乱用・依存の実態と治療・支援の課題. 公益社団法人富山県医師会主催 乳幼児・学校保健講習会, 富山, 2025.3.11.
- 94) 松本俊彦: 自分を傷つけずにはいられない子どもたち. 特定非営利活動法人いちごの会主催 市民講演会, 大阪, 2025.3.16.
- 95) 松本俊彦: 市販薬オーバードーズの理解と援助. 北海道大学病院子どものこころと発達センター主催 令和6年度第10回北海道児童思春期精神医学セミナー, オンライン, 2025.3.19.
- 96) 嶋根卓也: 十代のオーバードーズ 現状と対応. 小児科診療 UP-to-DATE, オンライン, 2024.4.9.
- 97) 嶋根卓也: ドラッグストアチェーンにおける市販薬乱用防止活動の可能性. 一般社団法人日本社会精神医学会・Meiji Seika ファルマ株式会社 共催 多職種のための社会精神医学セミナー, 東京, 2024.4.14.
- 98) 嶋根卓也: 薬物非行防止指導. 愛光女子学園, 東京, 2024.4.24.
- 99) 嶋根卓也: 「助けて」が言えない子どもたち ～市販薬と大麻の乱用・依存を例に～. 神奈川県薬務課 令和6年度薬物乱用防止講演会, 神奈川, 2024.5.20.
- 100) 嶋根卓也: 「助けて」が言えない子どもたち・市販薬の乱用・依存を例として. 「性と健康を考える女性専門家の会」総会シンポジウム, オンライン, 2024.6.2.
- 101) 嶋根卓也: 薬物乱用防止のお話: あなたとあなたの大切な人を守るために嶋根卓也: 薬物乱用防止のお話: あなたとあなたの大切な人を守るために. 横須賀市立衣笠中学校, オンライン, 2024.6.14.
- 102) 嶋根卓也: 薬物乱用防止のお話: あなたとあなたの大切な人を守るために. 横須賀市立大津中学校, オンライン, 2024.6.14.
- 103) 嶋根卓也: 薬物乱用防止のお話: あなたとあなたの大切な人を守るために. 横須賀市立不入斗中学校, オンライン, 2024.6.17.
- 104) 嶋根卓也: わが国における市販薬乱用の実態と課題～「助けて」が言えない子どもたち～. 国立成育医療センター 拠点病院および自治体との連絡会議, オンライン, 2024.7.5.
- 105) 嶋根卓也: ドラッグストアにおける市販薬乱用防止活動の可能性. Meiji Seika ファルマ株式会社, オンライン, 2024.7.16.
- 106) 嶋根卓也: 「助けて」が言えない子どもたち～市販薬の乱用・依存を例として～. 高知県薬剤師会主催 第40回高知県学校医・歯・薬・保健研究大会, 高知, 2024.8.4.

- 107) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち・市販薬の乱用・依存を例に．東京都立多摩総合精神保健福祉センター主催 令和6年度思春期・青年期家族教室及び依存症家族教室，オンライン，2024.9.2.
- 108) 嶋根卓也：分科会 13「学校における最近の健康課題と学校薬剤師の役割」内「大麻乱用による健康被害と断るスキル」．日本薬剤師会学術大会，埼玉，2024.9.23.
- 109) 嶋根卓也：「ダメ、ゼッタイ」と言わない薬物乱用防止教育：あなたとあなたの大切な人を守るために．東京都立世田谷泉高等学校「薬物乱用防止教室」，東京，2024.9.26
- 110) 嶋根卓也：地域における市販薬乱用の現状と販売時のさりげない”おせっかい”．東京都精神保健福祉協議会，東京，2024.10.4.
- 111) 嶋根卓也：「ダメ、ゼッタイ」と言わない薬物乱用防止教室．日本教育財団首都医校，東京，2024.10.11.
- 112) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち・市販薬のオーバードーズと効果的な予防教育．京都市学校保健会 健康教育シンポジウム，京都，2024.10.15.
- 113) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに対する理解と支援-「助けて」が言えない子どもたち．成育こどもシンクタンクセミナー，オンライン，2024.10.18.
- 114) 嶋根卓也：東京薬科大学2024年度【秋期】卒後教育講座「助けて」が言えない子どもたち・市販薬の乱用・依存とゲートキーパーとしての薬剤師．オンライン，2024.11.10.
- 115) 嶋根卓也：「市販薬乱用に対する学校薬剤師への期待」～脅しの教育からスキル教育へ～．第57回東海薬剤師学術大会，岐阜，2024.11.17.
- 116) 嶋根卓也：地域における市販薬乱用の現状と薬剤師によるさりげない”おせっかい”．神奈川県病院薬剤師会研修会，オンライン，2024.11.21.
- 117) 嶋根卓也：薬物依存における近年の傾向と市販薬依存について．群馬県こころの健康センター令和6年度依存症回復支援者研修会，群馬，2024.11.22.
- 118) 嶋根卓也：濫用等のおそれのある医薬品の販売について．内閣府主催 規制改革推進会議 健康・医療・介護ワーキング・グループヒアリング，東京，2024.11.25.
- 119) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズの理解と支援-「助けて」が言えない子どもたち．静岡県薬物乱用防止県民大会，2024.11.30.
- 120) 嶋根卓也：「助けて」が言えない若者たち-市販薬乱用を例に-．多文化・国際協力の実践(4)，津田塾大学学芸学部多文化・国際協力学科，東京，2024.12.2.
- 121) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに対する理解と支援-ゲートキーパーとしての薬剤師への期待．一般社団法人和歌山県薬剤師会，2024.12.19.
- 122) 嶋根卓也：市販薬乱用の理解と支援-「助けて」が言えない子どもたち-．第62回北海道高等学校教育研究大会兼第39回養護部会，オンライン，2025.1.9.
- 123) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに対する理解と支援．山形県薬剤師会，オンライン，2025.1.19.
- 124) 嶋根卓也：わが国における市販薬乱用の実態と課題：「助けて」が言えない子どもたち．警視庁生活安全部少年育成課，2025.1.24.
- 125) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに対する理解と支援～「助けて」が言えない子どもたち～．相模原市健康福祉局，神奈川，2025.1.31.
- 126) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに対する理解と支援「ダメ」と言わない予防教育のススメ．日本薬剤師会，2025.2.2.
- 127) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに対する理解と支援-「声かけ」から始めるメンタルヘルス支援-／パネルディスカッション・質疑応答．厚生労働省「依存症の理解を深めるための普及啓発事業」，東京，2025.2.6.
- 128) 嶋根卓也：市販薬・処方薬のオーバードーズに対する理解と支援．日本女子大学，東京，2025.2.20.
- 129) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズの理解と支援-『助けて』が言えない子どもたち-．富士五湖ダルク開設記念フォーラム，山梨，2025.2.22.

- 130) 嶋根卓也：学校薬剤師および医薬品販売等に携わる方向けオーバードーズへの理解&資材活用セミナー，厚生労働省，2025.3.2
- 131) 嶋根卓也：薬物非行防止指導．愛光女子学園，東京，2025.3.10.
- 132) 嶋根卓也：薬物乱用・依存の理解と支援－薬物乱用防止教室を効果的に実施するには－．青森少年鑑別所，オンライン，2025.3.11.
- 133) 高野 歩：「保護観察所と精神保健福祉センターの連携による地域支援：Voice Bridges Project の取組」，刑事司法福祉フォーラム・オアシス 第10回ミニ・フォーラム，東京，2024.9.14
- 134) 高野 歩：東京大学大学院医学系研究科イートロス医学講座特別セミナー「研究におけるフィールド調査の基本と注意点」，オンライン，2025.2.20
- 135) 喜多村真紀，依存症と女性，大妻女子大学『女性と自立支援』外部講師，東京都，2024.8.9.
- 136) 喜多村真紀，令和6年度薬物乱用防止教育－ツライ気持ちに安全な方法で対処する，所沢市立南陵中学校，埼玉，2024.10.22.
- 137) 喜多村真紀，名脇役としての学生相談・薬物使用関連問題への心理支援－，令和6年度日本大学学生支援センターカウンセラー報告会，東京，2024.11.16.
- 138) 喜多村真紀，若者の市販薬・処方薬依存症～家族・支援者のかかわり方～，令和6年度精神保健講演会，葛飾区新小岩保健センター，東京，2024.12.9.
- 139) 喜多村真紀，渡邊香子，石川朝陽，令和6年度品川区主催 思春期講演会 子どもの「HELP！」に気づくために～オーバードーズに至る理由～，大井保健センター，東京，2024.12.10.
- 140) 喜多村真紀，薬物依存の問題を抱える人やその家族に対する対応について，令和6年度保護司特別研修，千葉保護観察所，千葉，2024.12.17.
- 141) 喜多村真紀，杉谷遼子，「安全」とは何か？-少女たちの死にたいから私たちが受け取ったこと「薬物使用と自傷行為」，東京大学総合文化研究会・教養学部附属共生のための国際哲学研究センター（UTCP），東京，2025.1.17.
- 142) 喜多村真紀，「自分の気持ちを抱えるのが難しい人」の理解と支援－トラウマインフォームドケアの視点から，社会福祉法人つむぎ，東京，2025.3.18.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 松本俊彦：日本アルコール・アディクション医学会 理事
- 2) 松本俊彦：日本臨床カンナビノイド学会 理事
- 3) 松本俊彦：日本社会精神医学会 理事
- 4) 松本俊彦：日本精神科救急学会 理事・評議員
- 5) 松本俊彦：日本青年期精神療法学会 理事
- 6) 松本俊彦：日本司法精神医学会 評議員
- 7) 嶋根卓也：日本アルコール・アディクション医学会 学術評議委員
- 8) 嶋根卓也：日本エイズ学会 代議員
- 9) 高野 歩：日本アルコール・アディクション医学会 理事，学術評議員
- 10) 高野 歩：International Society for Biomedical Research on Alcoholism (ISBRA), Membership Committee

(3) 座長

- 1) 松本俊彦，成瀬暢也：(座長) シンポジウム 6 PS6 処方薬・市販薬使用障害「オーバードーズ」をどう治療するか．2024年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，東京，2024.9.20.

- 2) 嶋根卓也：シンポジウム 5 市販薬乱用：古くて新しい問題を再考する，2024 年度 アルコール・薬物依存関連学会 合同学術総会，東京，2024.9.19.
- 3) 嶋根卓也：ポスター発表 AP2-1, 2024 年度 アルコール・薬物依存関連学会 合同学術総会，東京，2024.9.19.
- 4) 嶋根卓也：シンポジウム 7 物質使用と性感染症・性行動・セクシュアリティ (2)，2024 年度 アルコール・薬物依存関連学会 合同学術総会，東京，2024.9.20.
- 5) 富山健一，船田正彦：【座長】シンポジウム「危険ドラッグの乱用・流通の現状と有害作用評価研究の最前線」，2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，東京，2024.9.21.
- 6) 高野 歩：【座長】シンポジウム「ハームリダクションに基づく支援における重要な要素」，2024 年度アルコール・薬物依存関連学会，東京，2024.09.19
- 7) 高野 歩：【座長】シンポジウム「インドネシアにおける薬物政策と治療・支援：薬物依存症治療と地域におけるハームリダクション活動」，2024 年度アルコール・薬物依存関連学会，東京，2024.09.19
- 8) 高野 歩，治徳大介：【座長】シンポジウム「アディクション分野におけるデジタルヘルスの活用：臨床導入や社会実装に向けた取り組み」，2024 年度アルコール・薬物依存関連学会，東京，2024.09.20
- 9) 高野 歩：【座長】一般演題「アディクション臨床 4」，2024 年度アルコール・薬物依存関連学会，東京，2024.09.21
- 10) 高野 歩：【司会】日本精神保健看護学会 市民公開セミナー，オンライン，2025.2.9
- (4) 学会誌編集委員等
 - 1) 松本俊彦：日本青年期精神療学会 編集委員
 - 2) 嶋根卓也：日本アルコール・アディクション医学会 編集委員会査読委員
 - 3) 高野 歩：日本看護科学学会 和文誌専任査読委員
 - 4) 高野 歩：日本精神保健看護学会 査読委員
 - 5) 高野 歩：日本アルコール・アディクション医学会 編集委員長

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 松本俊彦：令和 6 年度依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修 (薬物)，オンライン，2024.7.9-10.
- 2) 松本俊彦：国立精神・神経医療研究センター薬物依存症センター主催 市民公開講座，東京，2024.8.25.
- 3) 松本俊彦：国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催 第 37 回薬物依存臨床医師研修際および第 25 回薬物依存臨床看護等研修会，オンライン，2024.9.4-6.
- 4) 松本俊彦：国立精神・神経医療研究センター主催 第 16 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，東京，2024.11.4-6.
- 5) 松本俊彦：国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター病院薬物依存症センター主催 令和 6 年度東京都薬物依存症治療指導者養成研修，東京，2025.1.14-15.
- 6) 松本俊彦：2024 年度依存症対策全国拠点機関設置運営事業 薬物依存症回復施設職員研修，東京，2025.2.4-5.

(2) 研修会講師

- 1) 松本俊彦：児童・生徒の自傷行為に関する対応について．足立区教育委員会主催 校長研修，東京，2024.5.7.
- 2) 松本俊彦：「助けて」が言えない若者たち．静岡市こころの健康センター主催 令和 6 年度静岡市依存症関連問題研修会，静岡，2024.7.3.

- 3) 松本俊彦：薬物問題に関連する法律. 令和 6 年度依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物），オンライン，2024.7.9.
- 4) 松本俊彦：薬物依存症と重複障害. 令和 6 年度依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物），オンライン，2024.7.9.
- 5) 松本俊彦：自傷行為と市販薬過剰摂取：児童生徒の自殺予防のために. 千葉県子どもと親のサポートセンター主催 令和 6 年度管理職資質向上研修，千葉，2024.7.12.
- 6) 松本俊彦：市販薬オーバードーズの理解と援助. 一般社団法人日本女性医学会主催 第 1 回女性のヘルスケア研修会上級編，東京，2024.7.28.
- 7) 松本俊彦：自傷行為とオーバードーズの理解と援助. 富山県養護教諭会主催 令和 6 年度富山県養護教諭会夏季研修会，オンライン，2024.8.6.
- 8) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助～見える傷の背景には見えない傷がある～. 大和市教育委員会主催 青少年相談室夏季研修兼課題解決力向上研修講座（子ども支援），神奈川，2024.8.7.
- 9) 松本俊彦：居場所を探す生徒たち～オーバードーズと自殺の予防～. 千葉県高等学校教育研究会主催 令和 6 年度教育相談部会夏季研究協議会・研修会，千葉，2024.8.21.
- 10) 松本俊彦：市販薬乱用・依存の理解と援助. 一般社団法人日本プライマリ・ケア連合学会主催 プライマリ・ケア認定薬剤師研修会，オンライン，2024.9.1.
- 11) 松本俊彦：薬物依存症臨床総論. 国立精神・神経医療研究センター主催 第 37 回薬物依存臨床医師研修会および第 25 回薬物依存臨床看護等研修会，オンライン，2024.9.4.
- 12) 松本俊彦：依存症治療およびその家族への支援. 一般社団法人家族心理士・家族相談士資格認定機構主催 オンライン研修，オンライン，2024.9.8.
- 13) 松本俊彦：市販薬乱用・依存の現状と対策の課題. 一般社団法人浅草薬剤師会主催 令和 6 年度第 1 回台東区地区薬剤師研修会，オンライン，2024.9.10.
- 14) 松本俊彦：薬物依存症患者への対応の基礎、SMARPP の実態・グループワーク演習. 法務省矯正局成人矯正課主催 令和 6 年度薬物依存対策研修，東京，2024.9.11.
- 15) 松本俊彦：自死・死にたい気持ちとその対応. 浄土真宗本願寺派子ども・若者ご縁づくり推進室主催 思春期・若者支援コーディネーター統制研修会「終了者の集い」，京都，2024.10.5.
- 16) 松本俊彦：依存症や自傷行為がある子どもへの対応や予防. 鳥取大学医学部附属病院 鳥取県 共催 子どもの心を支える支援者スキルアップ研修，鳥取，2024.10.20.
- 17) 松本俊彦：自傷とオーバードーズの理解と援助. 栃木県養護教育研究会主催 栃木県養護教育研究会秋季研修会，栃木，2024.10.29.
- 18) 松本俊彦：大麻乱用防止. 法務省矯正研修所主催 令和 6 年度専門研修課程観護処遇科第 1 回観護処遇充実化研修，オンライン，2024.11.1.
- 19) 松本俊彦：SMARPP の理念と意義. 国立精神・神経医療研究センター主催 第 16 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，東京，2024.11.4.
- 20) 松本俊彦：薬物依存症臨床における司法的問題への対応. 国立精神・神経医療研究センター主催 第 16 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，東京，2024.11.4.
- 21) 松本俊彦：①覚醒剤依存症と医療 ②矯正施設における自殺・自傷への対応. 法務省矯正研修所主催 任用研修家庭高等科第 56 回研修，東京，2024.11.26.
- 22) 松本俊彦：薬物依存症臨床における司法的問題への対応. 独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センター主催 令和 6 年度依存症に対する集団療法に係る研修，オンライン，2024.12.2.
- 23) 松本俊彦：大麻、市販薬、若年層の対象者に対する支援について重複障害の方への支援について. 特定非営利活動法人川崎ダルク支援会主催 ダルクスタッフ研修会，オンライン，2024.12.3.
- 24) 松本俊彦：依存症への支援. 特定非営利活動法人山友会主催 山友会全体研修，東京，2024.12.4.
- 25) 松本俊彦：自傷と OD の理解と援助. 高野山真言宗松原山薬師寺主催 心の相談員ネットワーク 令和 6 年オンライン研修会，オンライン，2024.12.10.
- 26) 松本俊彦：「死にたい」の本当の意味は？助けてあげたいと思うあなたができること. 宮崎県精神

- 保健福祉センター主催 令和 6 年自殺予防相談従事者研修会及び第 2 回電話相談員研修会, オンライン, 2024.12.13.
- 27) 松本俊彦: 市販薬乱用・依存の理解と援助. 日本学校心理士会熊本支部主催 令和 6 年度第 2 回研修会, オンライン, 2024.12.15.
- 28) 松本俊彦: 依存症臨床から見た、十代における市販薬使用症の実態と治療上の課題. 江戸川区産婦人科医会主催 江戸川, 江東・千葉西ブロック産婦人科医会合同卒後研修会, 東京, 2024.12.18.
- 29) 松本俊彦: 「死にたい気持ち」を抱える女性への理解と援助. 東京都女性相談支援センター主催 東京都女性相談支援業務研修 (モデル研修), 東京, 2025.1.7.
- 30) 松本俊彦: SOS が言えない子どもたち. NPO 法人子どもの権利オンブズパーソンながさき主催 学校内別室支援員養成研修プログラム, オンライン, 2025.1.9.
- 31) 松本俊彦: アルコールと自殺・自傷. 独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催 令和 6 年度アルコール依存症臨床医等研修, 動画, 2025.1.9.~2025.2.19.
- 32) 松本俊彦: アディクション SW 総論「②依存症の医学的理解」. 公益社団法人日本精神保健福祉士協会主催 令和 6 年度依存症 (アルコール・薬物・ギャンブル等・ゲーム) 治療指導者養成研修, オンデマンド, 2025.1.11~2025.3.1.
- 33) 松本俊彦: 自分を傷つけずにはいられない~自傷と OD の理解と援助. 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター 厚生労働省令和 6 年度依存症に関する調査研究事業 市販薬の過量服薬や自傷を繰り返す若者たちの支援研修, オンライン, 2025.1.13.
- 34) 松本俊彦: やめたいのにやめられない~依存症の本質の理解~. 大阪市こころの健康センター主催 精神保健福祉関係職員研修, 大阪, 2025.1.17.
- 35) 松本俊彦: 自傷する学生・死にたい気持ちを抱えている学生の理解と対応. 亜細亜大学学生部主催 令和 6 年度亜細亜大学学生支援研修会, オンライン, 2025.1.24.
- 36) 松本俊彦: 薬物依存症者の治療および支援. 法務総合研究所主催 第 59 回保護局関係職員高等科研修, オンライン, 2025.1.28.
- 37) 松本俊彦: 「助けて」が言えない若者たち~OD・薬物乱用・自傷行為・自殺・わたしたちができること~. 香川県精神保健福祉センター主催 令和 6 年度香川県依存症対策・思春期精神保健・再犯防止推進研修会, 香川, 2025.2.2.
- 38) 松本俊彦: 自傷・自殺のリスク評価と対応. 2024 年度依存症対策全国拠点機関設置運営事業 薬物依存症回復施設職員研修, 東京, 2025.2.5.
- 39) 松本俊彦: もしも「死にたい」と言われたら. 佐賀県唐津保健福祉事務所主催 思春期自殺予防研修会, 佐賀, 2025.2.12.
- 40) 松本俊彦: 小・中・高校生への自殺予防について. 佐賀県公認心理師協会主催 令和 6 年度スクールカウンセラー研修会, オンライン, 2025.2.16.
- 41) 松本俊彦: 自殺・自傷の理解と対応. 法務省矯正研修所主催 令和 6 年度専門研修課程調査鑑別科 (特別課程) 研修, 東京, 2025.2.18.
- 42) 松本俊彦: 自傷行為に及ぶ少年等の理解と支援. 神戸家庭裁判所主催 令和 6 年度家庭裁判所調査官自庁研修 (調査実務研修 (少年調査実務研修)), オンライン, 2025.2.19.
- 43) 松本俊彦: 処方薬・市販薬乱用の実態と対応. 筑波大学附属病院 精神医療・自殺対策連携センター主催 茨城県自殺未遂者支援研修会, 茨城, 2025.2.21.
- 44) 松本俊彦: 子どもや若者の自殺について. 一般社団法人東京精神保健福祉士協会主催 自殺対策委員会 10 周年記念研修会, 東京, 2025.3.9.
- 45) 松本俊彦: 自分を傷つけずにはいられない~市販薬オーバードーズの理解と援助~. 東京経済大学主催 2024 年度学生相談研修会, 東京, 2025.3.12.
- 46) 松本俊彦: これからの薬物乱用防止教育のあり方. 島根県健康福祉部薬事衛生課主催 薬物乱用防止指導員研修会, 島根, 2025.3.18.
- 47) 松本俊彦: 若年層の薬物使用の現状について. 東京都立小平特別支援学校主催 令和 6 年度病弱

- 教育研修会Ⅲ，東京，2025.3.19.
- 48) 松本俊彦：薬物依存症概論. 医療法人社団益豊会回生病院主催 令和 6 年度福岡県薬物依存症医療研修，オンライン，2025.3.21.
 - 49) 松本俊彦：薬物依存、最近の薬物乱用、依存の動向. 一般社団法人山梨県薬剤師会主催 令和 6 年度医薬・環境情報に関する研修会，オンライン，2025.3.21.
 - 50) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち・市販薬の乱用・依存を例として-. 令和 6 年度大和市学校保健会 公益社団法人大和綾瀬薬剤師会 合同主催研修会，神奈川，2024.6.26.
 - 51) 嶋根卓也：薬物使用と感染症（HIV・肝炎）令和 6 年度依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物），オンライン，2024.7.9.
 - 52) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたちー市販薬の乱用・依存のゲートキーパーとしての薬剤師ー. 東北医科薬科大学同窓会東京支部主催 第 42 回生涯学習研修会，オンライン，2024.7.14.
 - 53) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち・市販薬の乱用・依存を例に-. 山形県置賜保健所主催 令和 6 年度置賜地域自殺対策推進研修会，オンライン，2024.7.18.
 - 54) 嶋根卓也：依存症支援の現状と課題・オーバードーズの予防や支援. BOND プロジェクト主催 相談業務スタッフ研修会，東京，2024.7.30.
 - 55) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち～市販薬の乱用・依存を例として～. 鹿児島県精神保健福祉センター主催 令和 6 年度依存症回復支援・思春期精神保健福祉従事者研修会，オンライン，2024.8.9.
 - 56) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち～市販薬の乱用・依存を例として～. 神奈川県精神保健福祉センター主催 ，オンライン，2024.8.15.
 - 57) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち～市販薬の乱用・依存を例として～. 2024 年度熊本県依存症治療拠点機関研修事業主催 薬物研修，オンライン，2024.8.22.
 - 58) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたちー市販薬の乱用・依存と参加型の薬物乱用防止教育ー. 埼玉県教育委員会主催 令和 6 年度埼玉県薬物乱用防止教育研修会，埼玉，2024.8.23.
 - 59) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち～市販薬の乱用・依存を例として～. 兵庫県薬剤師会第 2 回薬剤師のための自殺ハイリスク者対応力向上研修，オンライン，2024.8.24.
 - 60) 嶋根卓也：ゲートキーパーの役割とその重要性について. 宮城県薬剤師・登録販売者等を対象とした研修会，宮城，2024.8.29.
 - 61) 嶋根卓也：「薬物乱用・依存の疫学：一般住民および青少年」「民間回復支援施設の活動と課題」国立精神・神経医療研究センター主催第 37 回薬物依存臨床医師研修・第 25 回薬物依存臨床看護等研修，オンライン，2024.9.5.
 - 62) 嶋根卓也：処方薬・市販薬乱用の現状-「助けて」が言えない子どもたち-. アルコール依存症者回復支援施設レベルアップ研修，東京，2024.9.13.
 - 63) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち・市販薬の乱用・依存を例として-. 滋賀県立精神医療センター研修，東京，2024.9.13.
 - 64) 嶋根卓也：薬物乱用・依存の疫学. 慶応義塾大学学生実習，オンライン，2024.9.18.
 - 65) 嶋根卓也：ドラッグストアにおける市販薬乱用防止活動の可能性-ゲートキーパーによるさりげない「おせっかい」-. 宮城県チェーンドラッグストア協会研修会，オンライン，2024.9.27
 - 66) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズの理解と支援-「助けて」が言えない子どもたち-. 令和 6 年度薬物中毒対策連絡会議・再乱用防止講習会（九州・沖縄地区），熊本，2024.10.1-2.
 - 67) 嶋根卓也：『こどもたちの命を守るために 学校薬剤師ができること』市販薬のオーバードーズを中心に. 京都府薬剤師会学校薬剤師部会主催 令和 6 年度第 2 回学校薬剤師部会研修会，オンライン，2024.10.20.
 - 68) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズに対する理解と支援-有効な、有効ではない予防教育-. 栃木

県 学校薬剤師資質向上研修, オンライン, 2024.10.20.

- 69) 嶋根卓也:「助けて」が言えない子どもたち・市販薬の乱用・依存と参加型の薬物乱用防止教育
- 長野県教育委員会薬物乱用防止教育研修会, オンライン, 2024.10.22.
- 70) 嶋根卓也:市販薬の乱用・依存の理解と支援-「助けて」が言えない子どもたち- 青森県立精神
保健福祉センター令和 6 年度自殺対策従事者スキルアップ研修, 青森, 2024.10.25.
- 71) 嶋根卓也:若者による市販薬のオーバードーズの現状と課題-『助けて』が言えない子どもたち
- 滋賀県立精神医療センター令和 6 年度薬物依存症支援従事者研修, オンライン, 2024.10.29
- 72) 嶋根卓也:薬物乱用・依存の疫学. 国立精神・神経医療研究センター主催 第 16 回認知行動療
法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修, 東京, 2024.11.6.
- 73) 嶋根卓也:市販薬乱用の実態と対策について. 岡山県令和 6 年度覚醒剤等薬物乱用防止指導員
研修会, オンライン, 2024.11.13
- 74) 嶋根卓也:市販薬のオーバードーズの理解と支援-「助けて」が言えない子どもたち- 令和 6 年
度薬物中毒対策連絡会議・再乱用防止講習会(東海北陸地区), 静岡, 2024.11.26・27.
- 75) 嶋根卓也:若年者などの近年の薬物使用の動向など. 川崎ダルク 20 周年フォーラム, 神奈川,
2024.11.27
- 76) 嶋根卓也:「助けて」が言えない子どもたち・市販薬の乱用・依存と参加型の薬物乱用防止教育
- 岩手県教育委員会 薬物乱用防止教室講習会, オンデマンド配信, 2024.12.18-2025.1.31.
(配信期間)
- 77) 嶋根卓也:薬物乱用と感染症(HIV・肝炎). 令和 6 年度東京都薬物依存症治療指導者養成研
修, 東京, 2025.1.14.
- 78) 嶋根卓也:OTC のオーバードーズやカフェインの過剰摂取関連. 多摩第三地区薬剤師研修会
第 39 回養護部会, 東京, 2025.2.9.
- 79) 嶋根卓也:市販薬乱用に対する学校薬剤師への期待・脅し教育からスキル教育へ- 学校薬剤師・
薬事衛生指導員合同研修会, オンライン, 2025.3.1.
- 80) 富山健一:大麻成分の医療用途と海外の状況. 第 37 回薬物依存臨床医師研修・第 25 回薬物依存
臨床看護等研修, オンライン, 2024.9.4.
- 81) 高野 歩:ハームリダクションの理念に基づく個別支援. 国立精神・神経医療研究センター主催
第 16 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修, 東京, 2024.11.6.
- 82) 高野 歩:グループワーク. 2024 年度依存症対策全国拠点機関設置運営事業 薬物依存症回復施
設職員研修, 東京, 2025.2.5.

F. その他

- 1) 松本俊彦:新年度になり生活環境の変化に伴う生きづらさについて. NHK ラジオ第 1「尾崎世
界観のとりあえず明日を生きるラジオ」, 2024.5.6.
- 2) 松本俊彦:女性の依存症(女性が依存症に陥る背景や回復の歩みを考える). NHK「ハートネッ
ト TV」, 2024.5.27.
- 3) 松本俊彦:【監修】ギャンブル依存症について. 日本テレビ「ザ!世界仰天ニュース」, 2024.7.25.
- 4) 松本俊彦:夏休み明けの 10 代が抱える心理的な負担、生きづらさについて. NHK「ハートネッ
ト TV」, 2024.8.20.
- 5) 松本俊彦:#8 月 31 日の夜に. NHK「ハートネット TV」, 2024.8.31.
- 6) 松本俊彦:違法薬物で逮捕された元 NHK アナと考える 社会復帰の壁・問題起こしたら”叩かれ
て当たり前?”. ABEMA Prime, 2025.2.27.
- 7) 松本俊彦:きょうのセンセイ. NHK ラジオ「高橋源一郎の飛ぶ教室」, 2025.3.7.
- 8) 松本俊彦:LGBTQ の薬物依存、メンタルヘルス. OVER, 2024.5.27.
- 9) 松本俊彦:専門医に聞く 依存症からの回復. FLASH, 2024.5.21.

- 10) 松本俊彦：SNS服用量競い合い。読売新聞 朝刊、2024.6.3.
- 11) 松本俊彦：誰でもなりうる、身近で怖い 依存症の話。Tarzan, 51-58, 2024.6.27.
- 12) 松本俊彦：なぜ「依存」は起こるのか。日経ヘルス 夏号, 2024.6.13.
- 13) 松本俊彦：巻頭インタビュー 今日、一日を生き延びるための依存症一回復に寄り添う学校へ。教職研修, 2024.7.1.
- 14) 松本俊彦：オーバードーズ「やめて」という前に その背景にある心の痛み#こどもをまもる。Yahoo ニュースオリジナル ビジュアルで知る, 2024.7.19
- 15) 松本俊彦：安心して「さびしい」と言える場所。PHP 孤独を癒すヒント、楽しむコツ 2024 年 9 月増刊号, 36-45, 2024.7.19.
- 16) 松本俊彦：心の傷はいつ癒える？。ネットでいじめられたら、どうすればいいの？ 5 人の専門家と処方箋を考えた, 192-232, 2024.7.30.
- 17) 松本俊彦：オーバードーズ。神戸新聞, 2024.7.31.
- 18) 松本俊彦：私が歩む道。きょうの健康, 98-99, 2024.9.21.
- 19) 松本俊彦, 横道誠：酒にハマる文学研究者×タバコにハマる精神科医 語り合う。京都新聞, 2024.12.11.
- 20) 松本俊彦, 田中紀子：特別読物「依存症」を知る。文藝春秋 スーパードクターに教わる最善予防と最新治療 2025, 44-47, 2024.12.29.
- 21) 松本俊彦：【書評】「倫理的なサイコパスある精神科医の思索」尾久守侑著。心と社会 55(4)：114-115, 2024.12.15.
- 22) 松本俊彦：薬物依存臨床から見た市販薬乱用・依存の実態と治療上の課題。東京の精神保健福祉 44(1)：1-6, 2024.12.1.
- 23) 松本俊彦：孤独の現場から「クラスで 1〜2 は経験者」専門家が語るオーバードーズの現在。毎日新聞, 2024.12.30.
- 24) 松本俊彦：孤独の現場から「いいね」20 歳女性がオーバードーズを減らすまで。毎日新聞, 2024.12.30.
- 25) 松本俊彦：孤独の現場から 冬休みも注意したい子どものオーバードーズ 周囲にできること。毎日新聞, 2024.12.30.
- 26) 松本俊彦：OD. リスカ・・・「トー横」の仲間と生きた日々 救われて気づいたこと。朝日新聞 DIGITAL, 2024.12.14.
- 27) 松本俊彦：心の苦痛逃れられず”自己治療”。朝日新聞, 2025.1.11.
- 28) 松本俊彦：「ダメ。ゼッタイ。」通用せぬ時代に。毎日新聞, 2025.2.7.
- 29) 松本俊彦：フェンタニル汚染急拡大にトランプはどう立ち向かう？一昨年は約 7 万 3000 人が死亡、全米で依存者があふれる”ゾンビタウン”が急増中。週間プレイボーイ, 2025.2.10.
- 30) 松本俊彦：専門家インタビュー 従来の依存症治療では正直どうにもならない。Be! 158：56-62, 2025.3.10.
- 31) 松本俊彦：ふたをしていた思い 子どもがほしい。朝日新聞, 2025.3.3.
- 32) 嶋根卓也：『助けて』が言えない子どもたち～市販薬と大麻の乱用・依存を例に～。基礎的研修 1 市販薬と大麻の乱用・依存を考える。公益社団法人東京社会福祉士会発行「瓦版」ALL RIGHT (オーライ) Vol.3, 東京, 2024.4.
- 33) 嶋根卓也：不安から逃れ「ふわふわ感」。医療ルネサンス シリーズ薬オーバードーズ 1/6, 読売新聞朝刊, 2024.3.28.
- 34) 嶋根卓也：OD 当事者らに交流の場。医療ルネサンス シリーズ薬オーバードーズ 2/6, 読売新聞朝刊, 2024.3.29.
- 35) 嶋根卓也：家族で悩み共有、救い。医療ルネサンス シリーズ薬オーバードーズ 3/6, 読売新聞朝刊, 2024.4.1.
- 36) 嶋根卓也：薬局で積極的に声かけ。医療ルネサンス シリーズ薬オーバードーズ 4/6, 読売新聞

- 朝刊, 2024.4.2.
- 37) 嶋根卓也: 薬剤師 出前授業で啓発. 医療ルネサンス シリーズ薬オーバードーズ 5/6, 読売新聞朝刊, 2024.4.3.
- 38) 嶋根卓也: 規制対象の成分追加を. 医療ルネサンス シリーズ薬オーバードーズ 6/6, 読売新聞朝刊, 2024.4.4.
- 39) 嶋根卓也: 薬局で積極的に声かけ. 医療ルネサンス シリーズ薬オーバードーズ 3/6, 読売新聞朝刊, 2024.4.2.
- 40) 嶋根卓也: 時代超える OD の背景. 健幸記, 読売新聞夕刊, 2024.4.13.
- 41) 嶋根卓也: 若者に急増する OTC 薬乱用の実態と対策は? 「この人に聞きたい」 スペシャルインタビュー. 日本医事新報, No.5218: 6-7, 2024.4.27.
- 42) 嶋根卓也: 十代のオーバードーズ 現状と対応. 小児科診療 UP-to-DATE, ラジオ NIKKEI, 2024.5.7 (放送日)
- 43) 嶋根卓也: 薬の過剰摂取深刻 90 錠一気に 心の傷忘れない 暴力や虐待背景. 北海道新聞, 2024.5.12.
- 44) 嶋根卓也: 「助けて」が言えない子どもたち: 市販薬の乱用・依存. とうやく, 一般社団法人東京薬科大学同窓会 No.430, May (2024): 16-17, 2024.5.
- 45) 嶋根卓也: 子どもたちに広がる市販薬のオーバードーズ. 子ども白書 2024, かもがわ出版, pp.92-93, 2024.6.
- 46) 嶋根卓也: 「助けて」が言えない子どもたち —子どもたちに広がる市販薬の過量服薬(オーバードーズ)の理解と支援①市販薬の過量服薬(オーバードーズ)とは? 保体編集部オンライン, 大修館書店, 2024.6.1.
- 47) 嶋根卓也: (出演)「広がるオーバードーズ 必要な支援とは」. NHK「視点・論点」, 東京, 2024.6.18.
- 48) 嶋根卓也: 「助けて」が言えない子どもたち —子どもたちに広がる市販薬の過量服薬(オーバードーズ)の理解と支援②市販薬の乱用は身近な健康問題——高校生の約 60 人に 1 人が市販薬の乱用経験. 保体編集部オンライン, 大修館書店, 2024.6.20.
- 49) 嶋根卓也: 【市販薬の濫用】経験者「65 万人」の推計判明—国立精神・神経医療研究センター嶋根氏、情報提供「内容」も重要—, ドラビズ for Pharmacy, 581 号, 2024.6.26.
- 50) 嶋根卓也: 医薬品の販売規制案にドラッグストア反発の事情—市販薬のオーバードーズ問題に有効な規制とは—, 東洋経済オンライン, 2024.7.2.
- 51) 嶋根卓也: 市販薬の乱用、年間 65 万人 10 代、50 代の割合多く. nippon.com.2024.7.20.
- 52) 嶋根卓也: 市販薬の乱用、年間 65 万人 10 代、50 代の割合多く. Yahoo!ニュース.2024.7.20.
- 53) 嶋根卓也: 市販薬の乱用 10 代が最多に 厚生労働省研究班の初の全国調査. スポニチアネックス.2024.7.21.
- 54) 嶋根卓也: 市販薬乱用 年間 65 万人 厚労省研究班初調査 10 代、50 代で割合多く. 京都新聞, 2024.7.21.
- 55) 嶋根卓也: 市販薬乱用 65 万人 厚労省初調査 10 代、50 代割合多く. 中日新聞, 2024.7.21.
- 56) 嶋根卓也: 薬乱用食い止める現場 中日新聞, 2024.7.21.
- 57) 嶋根卓也: 広がる市販薬乱用 SNS 拡散店舗苦慮. 中国新聞, 2024.7.21.
- 58) 嶋根卓也: 市販薬の過剰摂取「経験ある」65 万人. 信濃毎日新聞, 2024.7.21.
- 59) 嶋根卓也: 市販薬の乱用、年間 65 万人 オーバードーズ厚労省が初調査 10 代、50 代の割合多く. 熊本日日新聞, 2024.7.21.
- 60) 嶋根卓也: 市販薬の乱用、年間 65 万人 10 代、50 代の割合多く. 沖縄タイムスプラス, 2024.7.21.
- 61) 嶋根卓也: 市販薬の乱用、年間 65 万人 10 代、50 代の割合多く 厚労省研究班. MEDIFAXweb.2024.7.22.
- 62) 嶋根卓也: 薬販売「ヤミ露店」対策へ 大阪・西成、乱用助長か. 奈良新聞, 2024.8.4.
- 63) 嶋根卓也: 薬販売「ヤミ露店」西成で対策強化へ. 京都新聞, 2024.8.4.

- 64) 嶋根卓也：「ヤミ露店」で薬販売 若者に流れる？大阪府警が対策強化。中國新聞，2024.8.4.
- 65) 嶋根卓也：(情報提供) “市販薬”による「オーバードーズ」経験のある若者が急増・・・その共通点とは？専門家が解決。TOKYO FM plus+，2024.9.16.
- 66) 嶋根卓也：市販薬のオーバードーズの理解と支援－「助けて」が言えない子どもたち－。東京保険医新聞，東京，2024.9.25.
- 67) 嶋根卓也：乱用防止 薬剤師向け研修プログラム開発へ。RISFAX 第 9065 号，医薬経済社，2024.10.8.
- 68) 嶋根卓也：(情報提供)「わが国における市販薬乱用の実態と課題」(ケーブルテレビちゅピ COM)，2024.10.21.
- 69) 嶋根卓也：若者の市販薬乱用を防げ-オーバードーズで中毒死も-薬物依存の治療へ「受け皿を」。時事通信社，2024.10.22.
- 70) 嶋根卓也：大麻相談 SNS 声掛け。読売新聞 (夕刊)，2024.11.28.
- 71) 嶋根卓也：大麻が若者の間で蔓延、福岡県が SNS で直接相談呼びかける「プッシュ型」窓口設置…匿名可能で秘密厳守。読売新聞オンライン，2024.11.28.
- 72) 嶋根卓也：大麻相談 SNS 声掛け－福岡県若者の摘発増で窓口－。読売新聞 (夕刊)，2024.11.28.
- 73) 嶋根卓也：10 代のオーバードーズ 現状と対応。小児科診療 UP-to-DATE，ラジオ NIKKEI，2024.12.5.
- 74) 嶋根卓也：くるしい日々を生きながらオーバードーズ 1～6。朝日新聞 DIGITAL，東京，2024.12.14-18.
- 75) 嶋根卓也：OD リスク、「最後の砦」は薬剤師 忙しい…でも、変化に気づくには。朝日新聞デジタル，2024.12.17.
- 76) 嶋根卓也：回復と希望、神部冬馬のピースフルデイズ、FM ふじやま，山梨，2025.2.27.
- 77) 嶋根卓也：風林火山 (コラム)。山梨日日新聞，2025.3.5.
- 78) 高野 歩：オーストラリアの政策と研究に学ぶハームリダクション－Building on Harm Reduction: Insights from Australian Policy and Research for Japan’s Public Health Future, NCNP 主催国際セミナー，東京，2025.1.21
- 79) 高野 歩：Cross-Cultural Perspectives on Addiction: Exploring Internet and Substance Abuse/Dependence in Japan and Australia, 東京科学大学との共催セミナー，東京，2025.1.24

5. 行動医学研究部

I. 研究部の概要

研究部及び研究室の研究目的

成人を主な対象とした様々な精神健康上の問題、特にトラウマ性疾患やうつ病についての病態解明、治療研究に取り組むとともに、自然災害、犯罪被害、虐待等におけるストレスを緩和し、効果的な治療と支援の研究を進め、代表的な病態である PTSD の神経科学的・遺伝学的な解明と治療研究を推進している。各種震災、事故等に際しては専門家派遣などの現地支援に当たるとともに、効果的な行政・医療対応のシステム研究にも取り組んでいる。

また、心身症や摂食障害、生活習慣病を対象に、Bio-Psycho-Social モデルに基づき、心身相関の観点から病因や発症のメカニズム、病態を臨床的、基礎的に研究し、効果的な治療法や予防法を開発し、摂食障害全国支援センターが当研究部内に設置されている。

臨床面では研究部のスタッフがセンター病院心療内科・精神科外来で診療・研究に携わっている。

令和 6 年度の当研究部の構成は以下の通りである。部長：堀 弘明。心身症研究室長：関口 敦。診断技術研究室長：小川眞太郎。ストレス研究室長：井野敬子。精神機能研究室長：成田 瑞。災害等支援研究室長：大沼麻実。リサーチフェローは伊藤（丹羽）まどか、井上智子、勝沼るり。テクニカルフェローは成田 恵、中野稚子、島津友梨、遠藤 香。科研費研究員は高村恒人、小原千郷。科研費心理療法士は蔵下智子。科研費研究補助員は吉田冬子、宮田ともみ、譜久里紀子、中村美幸。外来研究員は Laura Elisabeth Tuturea。研究生は赤井利奈、菅原まゆみ、井上朋子、荒川和香子、堀江美智子、藤内温美、大村靖子、土嶺章子、Vabulnik Mariia, Siti Nurul Zhahara, 松尾侑佳、岡野宏紀、石渡小百合、河西ひとみ、小林加奈、宮下采子、深川珠央、渡邊颯希、佐藤 啓、道川由佳子、関場 遙、Kathy Luo, 原野高美、須田晶子。客員研究員として兒玉直樹、西園マーハ文、藤井 靖、守口善也、寺澤悠理、森野百合子、永岑光恵、井筒 節、堤 敦朗、福地 成、松本和紀、中島聡美、田中英三郎、笈 亮子、茅野龍馬、堀 有伸、岡崎純弥、牧田 潔、須賀楓介、袴田優子、宮本悦子、中山未知、野間俊一、伊藤真利子、船場美佐子、安藤哲也、石田牧子、大友理恵子、今井理沙、横田悠季、平野好幸、白川美也子、坂口昌徳、利重裕子、富田吉敏、金 吉晴、鈴木仁美の各氏を迎えている。（順不同）

II. 研究活動

1) 複雑性 PTSD に関する治療法と診断評価尺度の検証

複雑性 PTSD に対する認知行動療法である、STAIR Narrative Therapy の日本での指導者および治療者育成を進め、無作為化比較試験の準備を進めた。また日本語版の国際トラウマ面接 (ITI) および国際トラウマ質問票 (ITQ) の妥当性研究を進め、現在までに 88 例のデータを収集し継続中。（金、丹羽、成田恵、中野、島津、蔵下、遠藤、堀）

2) PTSD の病態解明と治療効果予測法開発に向けた、遺伝子・バイオマーカー・心理臨床指標による多層的検討

トラウマ体験者 (PTSD 群、非発症群) と健常者を対象とし、遺伝子解析・発現解析、内分泌・免疫系マーカー測定、自律神経機能解析、脳 MRI 計測、認知機能測定、心理・臨床評価を行い、PTSD の病因病態解明、客観的治療効果予測法の開発を目指す。現在までに 364 名のデータを収集し継続中。本年度は PTSD における脂肪酸プロファイルを明らかにした論文を Progress in Neuro-Psychopharmacology & Biological Psychiatry 誌に発表した。（堀、伊藤、林、丹羽、金、成田恵、河西、井野、吉田、中野、島津、遠藤、蔵下、小川）

3) PTSD に対するメマンチンの有効性に関する臨床試験

PTSD 患者において、抗認知症薬メマンチンの有効性を検討する。初めにオープン臨床試験を行い、すでに目標症例数である計 20 名を組み入れ、データ収集を完了した。顕著な症状改善効果が得られ、忍容性も良好であった。この結果を受けて現在、PTSD に対するメマンチンの有効性と安

全性を検証する RCT を実施しており、また、RCT を完了した被験者を対象としたメマンチン長期オープン試験を実施している。並行して、メマンチン治療前後で遺伝子発現解析や内分泌・免疫系測定、脳 MRI 計測を行い、治療効果機序の解明および治療効果サロゲートマーカーの開発を目指す。（堀，小川，井野，成田瑞，伊藤，成田恵，中野，島津，遠藤，蔵下，金）

4) PTSD に対するメマンチンの有効性及び安全性を評価する無作為化二重盲検プラセボ対照比較試験

PTSD に対するメマンチンの有効性を実証するため、中等症以上の PTSD 患者 40 例を目標として無作為化二重盲検プラセボ対照比較試験を実施している（特定臨床研究：CR21-005）。服用開始から 13 週後の PTSD 症状に対する改善効果を主要評価項目とし、副次評価項目も併せてプラセボに対する実薬の優越性を検討する。R6 年度は 16 例の同意を得、14 例の患者を組入れ、対象者リクルートを継続中。（堀，小川，井野，成田瑞，藤内，丹羽，成田恵，中野，島津，蔵下，遠藤，金）

5) 血液検査による統合失調症・気分障害の診断法の開発に関する研究

患者・健常者から血液を採取し、タンパク・mRNA・代謝物などを定量し、統合失調症や気分障害の診断法や分類、経過判定指標に役立つ分子の同定を目的とする。神経研究所疾病研究第三部との共同研究として実施し、すでに約 3,000 名の被験者のサンプルが集積されている。これらの血液サンプルを用いて上記の測定を行い、精神疾患のバイオマーカー候補を探索している。（堀，小川，吉田）

6) ヒト毛髪を用いた精神疾患バイオマーカーの探索

気分障害、精神病的障害、PTSD 等の精神疾患を対象として、毛髪中のステロイドホルモンなどの濃度を測定し、バイオマーカーの同定を目的とする。神経研究所疾病研究第三部，センター病院，MGC バイオリソース部との共同研究として実施しており、被験者リクルート中である。（堀，吉田，蔵下，石渡，土嶺）

7) 情報処理バイアスを標的とした心理治療の有効性の検証とその神経生物学的機序の解明

ストレス関連精神障害に対するリスク保有者を対象として、記憶領域にも働きかける新しい CBM の有効性およびその神経作用機序について、北里大学，労働安全総合研究所等と共同で，fMRI や遺伝子，内分泌・免疫炎症系指標を用いて包括的な観点から検証している。本年度は Psychoneuroendocrinology 誌に論文を発表した。（袴田，堀）

8) 摂食障害支援拠点病院における相談・支援事例の調査

摂食障害支援拠点病院での相談・支援事例を収集，集積し，内容を解析し，摂食障害の支援体制モデルの確立に資するための研究を実施した。令和 6 年度は，全国を対象とした相談「ほっとライン」と 8 カ所の支援拠点病院の相談事例を報告書にまとめる。（井上，井野，関口）

9) 摂食障害支援拠点病院における摂食障害入院データの調査・解析

摂食障害支援拠点病院での入院事例を収集，集積し，内容を解析し，摂食障害の診療連携モデルの確立に資するための研究を開始した。R6 年度より 8 拠点病院にてデータ収集を開始した（井上，井野，関口）

10) 神経性過食症に対する認知行動療法の無作為比較試験

日本人の神経性過食症患者を対象に摂食障害の認知行動療法「改良版」（enhanced cognitive behavior therapy：CBT-E）の効果検証のため，東京大学，東北大学，九州大学，国立国際医療研究センター国府台病院，および当センターTMC との多施設共同無作為化比較試験を実施している。NCNP においてはすでに登録は終了し，協力施設においてもデータ収集が完了した。現在，データ固定の作業も完了し，解析を実施している。（小川，小原，関口，船場，成田恵，中野，富田，安藤）

11) 過敏性腸症候群に対するビデオ教材を併用した認知行動療法プログラムのランダム化比較研究

過敏性腸症候群（IBS）に対するビデオ教材を併用した CBT プログラムの効果検証のため東京大学，東北大学，国立国際医療研究センター病院，同国府台病院および当センター病院，国際医療福祉大学成田病院，TMC との多施設共同無作為化比較試験を実施し，全施設で合計 35 例のデータ収集が完了し解析，論文化を行っている。（船場，関口，藤井，小原，富田，安藤）

12) 摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出

摂食障害への認知行動療法（CBT）前後の縦断的観察研究を実施し、CBT 前後の脳 MRI、臨床データ、遺伝子発現データを収集し、CBT 効果の神経科学的エビデンスを創出することを目指す。本研究成果として、Molecular psychiatry 誌、Psychological medicine 誌に論文を出版し、Neuroimage Clinical 誌に論文が受理され、電子版が出版されている。（関口、井野、小川、安藤、堀、勝沼、高村、成田恵、中野、船場、小原、守口、富田）

13) 病院 気分障害センターおよびバイオバンクとの共同研究

NCNP 病院・気分障害センターおよび NCNP バイオバンクと連携した共同研究課題を実施している。うつ病など多くの精神疾患の発症リスクは幼少期トラウマ（小児期逆境体験）の経験率に伴い上昇することが報告されているが、本課題ではこれまで気分障害センター外来を受診し、バイオバンクでの研究参加登録を頂いた方々の試料と情報を対象として、小児期逆境体験とうつ病など精神症状の発現とに関連する生物学的マーカーの探索を目的として解析を進めている。（小川、堀、金）

14) 病院 脳神経内科診療部との共同研究

NCNP 病院 脳神経内科診療部における「中枢神経系炎症性脱髄疾患の患者」を対象に、精神症状・高次機能障害を評価し、その特徴とリスク因子の関連性について「小児期逆境体験」や QOL に着目しながら広く解析することで、脳神経内科および精神科領域において将来的な医療・研究につなげるためのデータを探索的に収集している。R6 年度は論文文化作業を進めた。（小川、堀、金）

15) 機能性精神疾患における心理的機能に関する研究

統合失調症患者、気分障害患者、健常対照者を対象に合計 2,700 名から取得した認知機能障害やパーソナリティ特性等の既存データを解析し、これらの患者における心理的特徴およびそれに寄与する要因を明らかにする。神経研究所疾病研究第三部との共同研究として実施している。（堀、小川）

16) 北茨城の被災地住民を対象とする精神医学的コホート研究

東日本大震災後に北茨城市の被災地住民に対するメンタルケアおよび調査・検体解析研究を実施した。その際に取得された既存資料・試料を新たに解析することで、うつ病や PTSD の発症リスクに関わる環境要因や遺伝要因を明らかにし、バイオマーカーの探索を行う。筑波大学等との共同研究として実施している。（堀、小川、吉田）

17) 良画で悪画を駆逐する～摂食障害の正しい知識の啓発および予防・支援に資する動画の作成・普及活動～

摂食障害の発症や憎悪に寄与する SNS 上の動画のリスクの啓発を行い、同時に摂食障害の正しい知識を啓発する動画を 23 本作成して Web サイトで公開した。（関口、井野、小原）

18) 先進的 MRI 技術に基づく総合データベースと大規模コホートデータの連結による高齢者神経変性疾患の責任神経回路の解明

東北メディカル・メガバンク機構で収集している脳 MRI 画像データを解析し、精神神経疾患のバイオマーカーの特定を目指す。（関口、高村、勝沼）

19) 思春期児童のインターネット不適切使用とメンタルヘルスの関連についての研究

東京都医学総合研究所と Tokyo Teen Cohort を対象とした共同研究を行った。インターネット不適切使用とメンタルヘルスの関連を因果推論のフレームワークを用いて解析した。これらの結果は Schizophrenia Bulletin 誌に発表した。（成田瑞）

20) 地域住民の飲料摂取と抑うつの関連についての研究

国立がん研究センターと JPHC-NEXT コホートを対象とした共同研究を行った。飲料摂取と抑うつの関連を因果推論のフレームワークを用いて解析した。これらの結果は Clinical Nutrition 誌に発表した。（成田瑞、堀）

21) 地域住民の生活形態と自殺の関連についての研究

国立がん研究センターと JPHC コホートを対象とした共同研究を行った。生活形態と自殺の関連を因果生存解析のフレームワークを用いて解析した。これらの結果は Epidemiology and Psychiatric Sciences 誌に発表した。（成田瑞、堀）

22) COVID-19 罹患に関連する差別体験と精神病症状の関連についての研究

公共政策部とオンラインサーベイを用いた研究を行った。COVID-19 罹患に関連する差別体験と精神病症状の関連を因果推論のフレームワークを用いて解析した。これらの結果は Schizophrenia Research 誌に発表した。(成田瑞)

23) 心的外傷後ストレス障害に対するオンライン持続エクスポージャー療法の有効性検証：多施設ランダム化比較試験

ウェブ会議システムを利用してオンラインの持続エクスポージャー療法を行う介入群とかかりつけ医の通常治療を継続する対照群の 2 群の RCT である。遠隔地にトラウマ専門治療を提供し医療格差を是正し実装を進めることが本研究の構想である。3 例のリクルートを終了した。(井野, 藤内, 中野, 須賀, 利重, 田中, 丹羽)

24) 心的外傷後ストレス障害に対する睡眠中音エクスポージャーの実施可能性確認研究 (PTSD 睡眠中音刺激研究)

トラウマを想起させるテラーメイドの音刺激を作成し、それを徐波睡眠中に聞かせる研究の実施可能性を検証する研究である。2024 年 1 月に倫理審査を通過し、目標リクルート数の 6 名をリクルートした。現在介入中である。(井野, 金, 中野, 島津, 藤内, 坂口, 関場)

25) 難民・移民のこころのケアを広める研究 – 支援者のメンタルヘルス実態調査とトラウマインフォームドケア研修 –

難民支援職を対象として支援環境とメンタルヘルスの状態の関連を調査し、また質的なインタビューによって支援体験がメンタルヘルスに与える影響を検討する。本研究ではトラウマインフォームドケアの研修を実施し、支援者支援も合わせて行なっていく。(井野, 堀, 須田, 中野, 田中)

26) 北里大学との共同研究：血中不飽和脂肪酸と PTSD との関連の検討

北里大学病院救急外来に搬送された方々を対象に、入院時の血漿中脂肪酸組成と受傷後 1 / 3 ヶ月目時点での PTSD 判定や PTSD 重症度スコアとの関連を検討した。受傷時の血中リノール酸などの特定の脂肪酸の濃度とその後の PTSD 症状の判定や重症度との関連が明らかとなった。本研究の成果は Neuropsychopharmacology Reports 誌に掲載された。(小川, 成田瑞, 堀, 金)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・ 摂食障害情報ポータルサイト (一般向け https://edcenter.ncnp.go.jp/edportal_general/, 専門職向け https://edcenter.ncnp.go.jp/edportal_pro/) を運営し、市民および専門職への摂食障害の普及・啓発を行った令和 7 年 2 月の 1 ヶ月間で一般向け、専門向け合わせ 38,011 のページビュー数, 20,625 のセッション数, 17,257 のユーザー数であった。摂食障害全国支援センターの HP アクセス数が, 4,620 ページビュー, 前年同月に比べて 91%と下がっている。(関口, 井野, 井上, 小原)

(2) 専門教育面における貢献

- ・ 客員教授：早稲田大学人間科学学術院 (堀), 東北大学大学院医学系研究科 (関口)
- ・ 非常勤講師：筑波大学大学院人間総合科学学術院 (小川), 名古屋市立大学大学院医学研究科, 文教大学人間科学部, 愛知学院大学心身科学部 (井野), 文教大学人間科学部 (丹羽)

(3) 精研の研修の主催と協力

- ・ 令和 6 年度精神保健に関する技術研修：災害時 PFA と心理対応研修 (前半対面, 後半オンライン)。第 13 回 2024.7.2, 2024.7.9, 第 14 回 2024.12.18, 2024.12.24。(堀, 大沼)
- ・ 令和 6 年度精神保健に関する技術研修：第 3 回 強迫症対策医療研修 基本コース (オンライン)。2024.7.24。(堀)
- ・ 令和 6 年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 1 (オンライン)。2024.10.22。(堀)
- ・ 令和 6 年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 2 (オンライン)。2024.11.13。(堀)
- ・ 令和 6 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1 東京, 2024.12.4-5。(堀)
- ・ 令和 6 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 2 (オンライン)。2025.1.22-23。(堀)
- ・ 令和 6 年度 PTSD 対策専門研修 C.犯罪・性犯罪被害者コース (オンライン)。2024.2.8-

9. (堀)

- ・ 令和 6 年度精神保健に関する技術研修. 摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療～（オンライン）. 第 8 回 2024.8.3, 第 9 回 2025.1.26. (関口, 井野, 井上, 小原)
- ・ 令和 6 年度精神保健に関する技術研修. 摂食障害治療研修～入院治療の留意点とコツ～（オンライン）. 第 3 回 2024.5.17, 第 4 回 2024.11.10. (関口, 井上, 小原)
- ・ 令和 6 年度精神保健に関する技術研修. 第 21 回摂食障害治療研修会（オンライン）. 2024.7.10-12. (関口, 井野, 小原)

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査, 委員会等への貢献

① 公的委員会

- ・ 厚生労働省「健康増進総合支援システム（e—ヘルスネット）」情報専門委員（関口）

② 摂食障害治療支援センター設置運営事業

平成 26～令和元年度に続き NCNP が摂食障害全国基幹センターに指定され, 令和 3 年度より摂食障害全国支援センター（全国支援センター）に改称され, 事務局実施責任者（センター長）を関口が, 実施担当者を井野, 井上, 小原が担当した. 令和 6 年 4 月に栃木県, 同年 7 月に東京都に摂食障害支援拠点病院が 3 年連続で新規指定された. 全国摂食障害対策連絡協議会開催及び全国支援センターの設置運営を行い, 摂食障害支援拠点病院を統括, ポータルサイトを運営および記事の更新をした. また, 国立国際医療研究センター国府台病院に委託をして, 全国 of の患者・家族・医療関係者を対象とした摂食障害の電話相談窓口『摂食障害「相談ほっとライン」』を継続している. (精神保健等国庫補助金: 関口, 井野, 井上, 小原)

(5) センター内における臨床的活動

- ・ センター病院に併任し, 外来診療を行っている. (堀, 井野)
- ・ 摂食障害患者の認知行動療法を実施している. (井野, 井上, 中野)

(6) その他

- ・ 国際緊急援助隊(JDR)医療チーム登録者（井野）

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Hori H, Fukushima H, Nagayoshi T, Ishikawa R, Zhuo M, Yoshida F, Kunugi H, Okamoto K, Kim Y, Kida S: Fear memory regulation by the cAMP signaling pathway as an index of reexperiencing symptoms in posttraumatic stress disorder. *Mol Psychiatry*. 29(7): 2105-2116, 2024.
- 2) Sugawara A, Katsunuma R, Terasawa Y, Sekiguchi A: Interoceptive training impacts the neural circuit of the anterior insula cortex. *Translational Psychiatry* 14(1): 206, 2024.
- 3) Ogawa S, Hori H, Niwa M, Itoh M, Lin M, Yoshida F, Ino K, Kawanishi H, Narita M, Nakano W, Imai R, Matsui M, Kamo T, Kunugi H, Hattori K, Kim Y: Serum lipid and plasma fatty acid profiles in PTSD patients and healthy individuals: Associations with symptoms, cognitive function, and inflammatory markers. *Prog Neuropsychopharmacol Biol Psychiatry* 138: 111298, 2025.
- 4) Narita Z, Shinozaki T, Goto A, Hori H, Kim Y, Wilcox HC, Inoue M, Tsugane S, Sawada N: Time-varying living arrangements and suicide death in the general population sample: 14-year causal survival analysis via pooled logistic regression. *Epidemiol Psychiatr Sci* 23: 33: e30, 2024.
- 5) Narita Z, Hidese S, Kanehara R, Tachimori H, Hori H, Kim Y, Kunugi H, Arima K, Mizukami S, Tanno K, Takanashi N, Yamagishi K, Muraki I, Yasuda N, Saito I, Maruyama K, Yamaji T, Iwasaki M, Inoue M, Tsugane S, Sawada N: Association of sugary drinks, carbonated beverages, vegetable and fruit juices, sweetened and black coffee, and

- green tea with subsequent depression: a five-year cohort study. *Clin Nutr* 43(6): 1395-1404, 2024.
- 6) Narita Z, Ando S, Yamasaki S, Miyashita M, DeVlyder J, Yamaguchi S, Hosozawa M, Nakanishi M, Hiraiwa-Hasegawa M, Furukawa TA, Kasai K, Nishida A: Association of Problematic Internet Use with Psychotic Experiences and Depression in Adolescents: A Cohort Study. *Schizophr Bull* 51(1): 198-207, 2024.
 - 7) Narita Z, DeVlyder J, Yamasaki S, Ando S, Endo K, Miyashita M, Yamaguchi S, Usami S, Stanyon D, Knowles G, Hiraiwa-Hasegawa M, Furukawa TA, Nishida A: Uncovering associations between gender nonconformity, psychosocial factors, and mental health in adolescents: a birth cohort study. *Psychol Med* 54(5): 921-930, 2024.
 - 8) Hakamata Y, Mizukami S, Izawa S, Hori H, Matsui M, Moriguchi Y, Hanakawa T, Inoue Y, Tagaya H: Contextual memory bias in emotional events: Neurobiological correlates and depression risk. *Psychoneuroendocrinology* 171: 107218, 2025.
 - 9) Inoue T, Ogawa S, Narita Z, Sekiguchi M, Asari Y, Kataoka Y, Hattori J, Hori H, Kim Y, Inada K: A Longitudinal Study of the Association of Blood Unsaturated Fatty Acids With Posttraumatic Stress Disorder (PTSD). *Neuropsychopharmacol Rep* 45(1): e12522, 2025.
 - 10) Ota M, Nemoto K, Hori H, Ishida I, Sato S, Asada T, Kunugi H, Arai T. Correlation Between Dietary Nutrition and Glymphatic System Activity in Healthy Participants. *Cureus* 17(1): e77860, 2025.
 - 11) Kanzawa J, Kurokawa R, Takamura T, Nohara N, Kamiya K, Moriguchi Y, Sato Y, Hamamoto Y, Shoji T, Muratsubaki T, Sugiura M, Fukudo S, Hirano Y, Sudo Y, Kamashita R, Hamatani S, Numata N, Matsumoto K, Shimizu E, Kodama N, Kakeda S, Takahashi M, Ide S, Okada K, Takakura S, Gondo M, Yoshihara K, Isobe M, Tose K, Noda T, Mishima R, Kawabata M, Noma S, Murai T, Yoshiuchi K, Sekiguchi A, Abe O: Brain network alterations in anorexia nervosa: A multi-center structural connectivity study. *NeuroImage Clinical* 45: 103737, 2025.
 - 12) Yoshinaga K, Matsushima T, Abe M, Takamura T, Togo H, Wakasugi N, Sawamoto N, Murai T, Mizuno T, Matsuoka T, Kanai K, Hoshino H, Sekiguchi A, Fuse N, Mugikura S, Hanakawa T: Age-disproportionate atrophy in Alzheimer's disease and Parkinson's disease spectra. *Alzheimer's & Dementia (Amsterdam, Netherlands)* 17(1): e70048, 2025.
 - 13) Katsunuma R, Takamura T, Yamada M, Sekiguchi A: Proof of mechanism investigation of Transcutaneous auricular vagus nerve stimulation through simultaneous measurement of autonomic functions: a randomized controlled trial protocol. *BioPsychoSocial Medicine* 18(1): 15, 2024.
 - 14) Enokida T, Hattori K, Okabe K, Noda T, Ota M, Sato N, Ogawa S, Tatsumi M, Hoshino M, Kunugi H, Nakagome K: Possible association of elevated CSF IL-6 levels with anxiety and frustration in psychiatric disorders. *Psychiatry Clin Neurosci* 78(12): 792-799, 2024.
 - 15) Alasvand Zarasvand S, Ogawa S, Nestor B, Bridges W, Haley-Zitlin V. Effects of Herbal Tea (Non-Camellia sinensis) on Glucose Homeostasis and Serum Lipids in Type 2 Diabetes Mellitus: A Systematic Review and Meta-Analysis. *Nutr Rev* 83(3): e1128-e1145, 2025.
 - 16) Yamauchi Y, Ino K, Sakaguchi M, Zempo K: Development and Evaluation of Auditory VR Generative System via Natural Language Interaction in aid of Exposure Therapy for PTSD Patients. *ACM Health ACM* doi.org/10.1145/3723048, 2025.
 - 17) Narita Z, Okubo R, Sasaki R, Takeda K, Takao M, Komaki H, Oi H, Miyama T, Kim Y: Psychological distress mediates the association between COVID-19-related discrimination and subsequent PTSD symptom severity in healthcare workers: a two-year follow-up

- study. BMC Public Health 24(1): 1834, 2024.
- 18) Yoshikawa M, Narita Z, Kim Y: Digital Health-Based Exposure Therapies for Patients with PTSD: A Systematic Review of Randomized Controlled Trials. J Trauma Stress 37(6): 814-824, 2024.
 - 19) Mihaljevic M, Nagpal A, Etyemez S, Narita Z, Ross A, Schaub R, Cascella N, Coughlin JM, Nestadt G, Nucifora FC, Sedlak TW, Calhoun V, Faria A, Yang K, Sawa A: Neuroimaging alterations and relapse in early-stage psychosis. J Psychiatry Neurosci. 49(2): E135-E142 2024.
 - 20) Narita Z, Hazumi M, Kataoka M, Usuda K, Nishi D. Association between discrimination and subsequent psychotic experiences in patients with COVID-19: a cohort study. Schizophr Res 267: 107-112, 2024.
 - 21) Inoue Y, Suzuki S, Sawada N, Morisaki N, Narita Z, Yamaji T, Kokubo Y, Doi T, Nishita Y, Iwasaki M, Inoue M, Mizoue T: Association between physical multimorbidity in middle adulthood and mortality: findings from two large cohort studies in Japan. BMC Public Health 25(1): 92, 2025.
 - 22) Toshishige Y, Nakayama M, Sakai M, Ino K, Harada Y, Akechi T: Prolonged exposure therapy for the bereaved with subthreshold post-traumatic stress disorder related to suicide loss: a case report. Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports (4)1: e70076, 2025.

(2) 総説

- 1) Tanaka S C, Kasai K, Okamoto Y, Koike S, Hayashi T, Yamashita A, Yamashita O, Johnstone T, Pestilli F, Doya K, Okada G, Shinzato H, Itai E, Takahara Y, Takamiya A, Nakamura M, Itahashi T, Aoki R, Koizumi Y, Shimizu M, Miyata J, Son S, Aki M, Okada N, Morita S, Sawamoto N, Abe M, Oi Y, Sajima K, Kamagata K, Hirose M, Aoshima Y, Hamatani S, Nohara N, Funaba M, Noda T, Inoue K, Hirano J, Mimura M, Takahashi H, Hattori N, Sekiguchi A, Kawato M, Hanakawa T: The status of MRI databases across the world focused on psychiatric and neurological disorders. Psychiatry and Clinical Neurosciences 78(10): 563-579, 2024.
- 2) 堀 弘明：逆境の小児期体験と PTSD の薬物療法と神経生物学. 精神科治療学 39(7): 747-752, 2024.
- 3) 堀 弘明：心的外傷後ストレス症（PTSD）難治例の臨床. 精神医学 66(11): 1418-1426, 2024.
- 4) 丹羽まどか：小児期逆境体験と STAIR Narrative Therapy. 精神科治療学 39(7): 741-745, 2024.
- 5) 丹羽まどか：感情と対人関係の調整スキルトレーニング(STAIR). 臨床精神医学 54(1): 53-58, 2025.
- 6) 丹羽まどか：ICD-11 の PTSD と複雑性 PTSD の診断評価のための国際トラウマ面接(International Trauma Interview : ITI). 臨床精神医学 54(2): 153-157, 2025.

(3) 著書

- 1) 堀 弘明, 金 吉晴：第 4 章 D-1 心的外傷後ストレス症. 笠井清登ら 編：精神科研修ノート改訂第 3 版. 診断と治療社, 東京, pp407-412, 2024.
- 2) 澤 明, 成田 瑞：システムティック臨床精神医学 4 つの多元的観点による治療体系化. 中外医学社, 東京, 2024.

(4) 研究報告書

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) Narita Z, Furukawa TA: Misuse of Prediction Models in Psychiatric Research. *Lancet Psychiatry* 12(1): 6-7, 2025.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Sekiguchi A, Takamura T, Tose K, Sudo Y, Ritu BC, Isobe M, Hirano Y, Yoshiuchi, K Sato Y, Kodama N, Yoshihara K, Moriguchi Y: Advancing Anorexia Nervosa Diagnosis and Understanding through Comprehensive Neuroimaging and Machine Learning: Insights from the Eating Disorder Neuroimaging Initiative (EDNI). 27th World Congress The International College of Psychosomatic Medicine (ICPM) 2024, Tübingen, Germany, 2024.9.18-23.
- 2) Ino K: The Impact of Virtual Reality in Psychiatric Treatment: Is VR the Dawn of a New Era in Mental Health? 34th International Conference on Artificial Reality and Telexistence 29th Eurographics Symposium on Virtual Environments, Tsukuba, Japan, 2024.12.1-3.
- 3) 堀 弘明: 精神疾患のメカニズム -免疫炎症系からの考察-. NEURO2024 ランチョンセミナー, 福岡, 2024.7.26.
- 4) 堀 弘明: 逆境の小児期体験とストレス関連精神疾患の関連についての神経生物学的研究. 第17回 Novel Talks for Young Psychiatrists in Ehime 特別講演, 愛媛, 2024.5.16.
- 5) 関口 敦: 診療連携モデルの提案と拠点病院設置準備サポート活動. フォーラム1, 第27回日本摂食障害学会学術集会, 東京, 2024.9.7-8.
- 6) 井上智子, 井野敬子, 関口 敦: 令和5年度 都内の摂食障害治療支援に関する実態調査報告 第1. 一般演題「調査・研究」, 第27回日本摂食障害学会, 東京, 2024.9.7
- 7) 丹羽まどか, 金 吉晴: 複雑性 PTSD 診断評価のための国際トラウマ面接 (ITI) の日本語版作成過程. シンポジウム 88, 複雑性 PTSD がもたらした臨床的意義. 第120回日本精神神経学会学術総会, 北海道, 2024.6.22.

(2) 一般演題

- 1) Ogawa S, Hori H, Niwa M, Itoh M, Lin M, Yoshida F, Ino K, Kawanishi H, Narita M, Nakano W, Imai R, Matsui M, Kamo T, Kunugi H, Kim Y: Plasma lipid and fatty acid concentrations in patients with posttraumatic stress disorder (PTSD) and healthy individuals: associations with diagnosis, symptoms, and inflammatory markers. CINP2024 35th World Congress, Tokyo, Japan, 2024.5.23-26.
- 2) Ino K, Tonai A, Toshishige Y, Nakano W, Suga R: Online Prolonged Exposure Therapy for PTSD in Japan: A Case Study of Four Patients. Poster, ISTSS 40th Annual Meeting, Boston, USA, 2024.9.25-28.
- 3) Narita Z, Nishida A: Joint association of internet use and physical attributes with subsequent psychotic experiences in adolescents: a cohort study. Society of Epidemiology Research Mid-Year Meeting (virtual), Boston, USA, 2025.2.10-14.
- 4) Narita Z, Yamasaki S, Yamaguchi S, Ando S, Nishida A: Association between problematic online gaming and subsequent psychotic experiences in adolescents: a birth cohort study. Royal College of Psychiatrists International Congress 2024. Edinburgh, Scotland, June 2024.6.23-26.
- 5) Fukaguchi K, Shinozaki T, Narita Z, Goto A: Effect of Early Healthcare Visits on Cardiovascular Disease Risk in People with Newly Screened Diabetes: Emulating Trials Using a Large Insurance Database. The 67th Annual Meeting of the Japan Diabetes Society. Tokyo, Japan, 2024.5.17-19.

- 6) Niwa M, Kato T, Suga Y, Otomo R, Sugawara M, Kim Y: Effects of STAIR Narrative Therapy on cognitive functions: analysis of a pilot study for ICD-11 complex PTSD. International Society for Traumatic Stress Studies 40th Annual Meeting. Boston, USA, 2024.9.25-28.
- 7) 勝沼り, 高村恒人, 山田光彦, 関口 敦: 経皮的耳介迷走神経刺激 (taVNS) による内受容感覚への影響. 日本生理人類学会第 85 回大会, 東京, 2024.6.14-16.
- 8) 高村恒人, 勝沼り, 山田光彦, 関口 敦: 経皮的耳介迷走神経刺激 (taVNS) が安静時脳機能結合性に与える影響の検討. 日本生理人類学会第 85 回大会, 東京, 2024.6.14-16.
- 9) 山本ゆりえ, 廣方美沙, 田村奈穂, 井野敬子, 関口 敦, 金 吉晴, 河合啓介: 摂食障害全国支援センター「相談ほっとライン」活動報告～Web アンケート調査第 1 報～. 第 65 回日本心身医学会総会ならいに学術講演会, 東京, 2024.6.29-30.
- 10) 高村恒人, 勝沼り, 井野敬子, 福土 審, 佐藤康弘, 鎌下莉緒, 須藤佑輔, 平野好幸, 野原伸展, 吉内一浩, 磯部昌憲, 高橋稔昌, 足立弘明, 兒玉直樹, 権藤元治, 吉原一文, 高倉 修, 守口善也, 関口 敦: 食症患者における治療反応性のマーカー: 探索的 VBM 分析. 第 47 回日本神経科学大会, 福岡, 2024.7.24-27.
- 11) 高村恒人, 勝沼り, 井野敬子, 佐藤康弘, 平野好幸, 吉内一浩, 磯部昌憲, 兒玉直樹, 井手智, 岡田和将, 高橋昌稔, 高倉 修, 守口善也, 関口 敦: 神経性やせ症における治療反応性に関連した脳構造の変化. 第 27 回日本ヒト脳マッピング学会, 東京, 2025.3.7-8.
- 12) 井野敬子: 指定シンポジウム B1 ト라우マ臨床における肝心要と柔軟-模擬事例を交えて PTSD を維持する認知と行動に着目した PTSD の通常治療-持続エクスポージャー療法の視点で-. 第 23 回日本トラウマティック・ストレス学会, 京都, 2024.8.10-11.
- 13) 藤内温美, 堀 有伸, 安藤絵美子, 中野稚子, 井野敬子, 金 吉晴: 300km 離れたかかりつけ医との連携により円滑に治療できたオンライン持続エクスポージャー療法の 1 例. 第 23 回日本トラウマティック・ストレス学会, 京都, 2024.8.10-11.
- 14) 勝沼り, 大場健太郎: Need for Cognition' (認知欲求) と社会的な課題解決への関与選好との関係. 第 27 回日本ヒト脳マッピング学会, 東京, 2025.3.7-8.

(3) 研究報告会

- 1) 関口 敦: 摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出. 戦略的国際脳科学研究推進プログラム [国際脳] 事後ヒアリング, 東京, 2024.8.21.
- 2) 井野敬子: 学術変革領域(B)音による環世界マニピュレーション. 年次シンポジウム, 東京, 2024.12.22.

(4) その他

- 1) 関口 敦, 井野敬子, 井上智子: 令和 6 年度第 1 回全国摂食障害対策連絡協議会. 令和 6 年度精神保健対策費補助金「摂食障害治療支援センター設置運営事業」, オンライン, 2024.7.22.
- 2) 関口 敦, 井野敬子, 井上智子: 令和 6 年度第 2 回全国摂食障害対策連絡協議会. 令和 6 年度精神保健対策費補助金「摂食障害治療支援センター設置運営事業」, オンライン, 2025.2.7.

C. 講演

- 1) Narita Z: Suicide prevention: a public health perspective. Asian Consortium of National Mental Health Institutes, Singapore, 2024.11.18.
- 2) 関口 敦: 若年女性の低体重がもたらす現在/将来/次世代の健康リスク. 令和 6 年度第 2 回 FD 講演会, 東京家政学院大学, 東京 (オンライン I), 2025.2.13.
- 3) 井上智子: インドの女性差別問題におけるスワミ・ヴィヴェーカーナンダの思想についての考察, SWAMI VIVEKANANDA: 161st BIRTH ANNIVERSARY CELEBRATION, 東京, Embassy of India, 2024.6.1.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 堀 弘明：日本生物学的精神医学会 評議員
- 2) 堀 弘明：日本精神神経学会 専門医試験症例報告審査班 班員
- 3) 関口 敦：日本心身医学会 代議員，幹事，戦略・評価委員
- 4) 関口 敦：日本摂食障害学会 評議員，学術交流委員会，ガイドライン作成委員，利益相反・倫理委員，国際交流委員
- 5) 関口 敦：日本心療内科学会 評議員，施設共同リサーチプロジェクト委員
- 6) 井野敬子：トラウマティック・ストレス学会 理事 広報委員長
- 7) 井野敬子：日本精神神経学会 災害対策委員
- 8) 成田 瑞：日本精神神経学会 ICD-11 委員

(3) 座長

- 1) 関口 敦：教育講演 10「心理的な痛みの認知神経メカニズム」．第 65 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会，東京，2024.6.29-30.
- 2) 関口 敦，吉内一浩：シンポジウム 2「摂食障害からの回復のバイオロジー」．第 27 回日本摂食障害学会学術集会，東京，2024.9.7-8.
- 3) 関口 敦，竹林淳和：フォーラム 1「摂食障害治療拠点病院 新しい拠点病院の現状と今後の方向性」．第 27 回日本摂食障害学会学術集会，東京，2024.9.7-8.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) Hori H: Frontiers in Psychiatry, review editor for Molecular Psychiatry section
- 2) Narita Z: Asian Journal of Psychiatry, editorial board member

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 堀 弘明，大沼麻実：令和 6 年度精神保健に関する技術研修．第 13 回災害時 PFA と心理対応研修．東京，2024.7.2，オンライン，2024.7.9.
- 2) 堀 弘明：令和 6 年度精神保健に関する技術研修．第 3 回 強迫症対策医療研修 基本コース．オンライン，2024.7.24.
- 3) 堀 弘明：令和 6 年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 1. オンライン，2024.10.22.
- 4) 堀 弘明：令和 6 年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 2. オンライン，2024.11.13.
- 5) 堀 弘明：令和 6 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1. 東京，2024.12.4-5.
- 6) 堀 弘明，大沼麻実：2024 年度精神保健に関する技術研修．第 14 回災害時 PFA と心理対応研修．東京，2024.12.18，オンライン，2024.12.24.
- 7) 堀 弘明：令和 6 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 2. オンライン，2025.1.22-23.
- 8) 堀 弘明：令和 6 年度 PTSD 対策専門研修 C.犯罪・性犯罪被害者コース．オンライン，2024.2.8-9.
- 9) 関口 敦，井上智子：摂食障害入院治療研修「入院治療の留意点とコツ」第 3 回．令和 6 年度摂食障害治療支援センター設置運営事業．オンライン，2024.5.17.
- 10) 関口 敦，井野敬子，井上智子，小原千郷：第 21 回摂食障害治療研修．オンライン，2024.7.10-12.
- 11) 関口 敦，井上智子：摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療～第 8 回．令和 6 年度摂食障害治療支援センター設置運営事業．オンライン，2024.8.3.
- 12) 高倉 修，北島智子，井野敬子，井上智子，小原千郷，関口 敦：摂食障害治療支援コーディネーター研修会 令和 6 年度摂食障害治療支援センター設置運営事業．オンライン，2024.10.31.
- 13) 関口 敦，井野敬子，井上智子：摂食障害小児治療研修 第 1 回．令和 6 年度摂食障害治療支援センター設置運営事業．オンライン，2024.11.4.

- 14) 関口 敦, 井上智子: 摂食障害入院治療研修「入院治療の留意点とコツ」第4回. 令和6年度摂食障害治療支援センター設置運営事業. オンライン, 2024.11.10.
- 15) 関口 敦, 井上智子: 摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療～第9回. 令和6年度摂食障害治療支援センター設置運営事業. オンライン, 2025.1.26.
- 16) 小川眞太郎: 「カルシウムシグナルを介した認知/精神機能調節と認知症治療戦略」森口茂樹. 令和6年度 第1回 精神保健研究所セミナー, 東京, 2024.9.9.

(2) 研修会講師

- 1) 堀 弘明: PTSD の神経科学と薬物療法. 令和6年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース1, 東京, 2024.12.4-5.
- 2) 堀 弘明: PTSD の神経科学と薬物療法. 令和6年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース2, オンライン, 2025.1.22-23.
- 3) 井野敬子: PTSD の心理療法各論2. 令和6年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース1, 東京, 2024.12.4-5.
- 4) 井野敬子: PTSD の心理療法各論2. 令和6年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース2, オンライン, 2025.1.22-23.
- 5) 丹羽まどか, 金 吉晴: 複雑性 PTSD. 令和6年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース1, 東京, 2024.12.4-5.
- 6) 丹羽まどか, 金 吉晴: 複雑性 PTSD. 令和6年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース2, オンライン, 2025.1.22-23.
- 7) 金 吉晴: トラウマの概念と PTSD 診断. 令和6年度 PTSD 対策専門研修 A. 通常コース1, オンライン, 2024.10.22.
- 8) 金 吉晴: PTSD 治療. 令和6年度 PTSD 対策専門研修 A. 通常コース1, オンライン, 2024.10.22.
- 9) 金 吉晴: トラウマの概念と PTSD 診断. 令和6年度 PTSD 対策専門研修 A. 通常コース2, オンライン, 2024.11.13.

F. その他

- 1) 小川眞太郎: 現代栄養学とヘルスケアレシピ. 記事監修 ストレス&ヘルスケア, 公益財団法人パブリックヘルスリサーチセンター, 2024.4.15, 9.5, 2025.1.6.
- 2) 成田 瑞: 思春期の不適切なネット使用, 16歳の幻覚・抑うつリスク1.6倍に. 朝日新聞, 2024.6.16.
- 3) 成田 瑞: うつ症状の予防に野菜・果物ジュースは? コーヒーは? 数万人調査. 朝日新聞, 2024.7.16.

6. 児童・予防精神医学研究部

I. 研究部の概要

児童・予防精神医学研究部は、精神疾患の早期介入および予防、児童・青年期のメンタルヘルス、ならびに関連する領域に関する調査研究および情報発信を行っている。早期介入・予防に向けた活動としては、精神病発症ハイリスク者のサイトカインや睡眠指標と機能的予後との関連の検討、国際標準として用いられている認知機能の評価法を本邦で用いるための整備、低侵襲脳刺激法を用いた患者のリカバリーを促進する治療法の開発研究などの活動を展開している。さらに、メンタルヘルスに及ぼす影響のインターネット調査や、神経生理学的指標を用いた精神疾患の治療反応性の予測法の開発等も手掛けている。

人員構成は以下のとおりである。部長：住吉太幹、精神疾患早期支援・予防研究室室長：(欠)、児童・青年期精神保健研究室室長：白間 綾、常勤研究員：山田理沙(9月～)、リサーチフェロー：Andrew M. Stickley、末吉一貴、山田理沙(～8月)、和田歩、科研費研究員：長谷川由美、住吉佐和子、客員研究員：神尾陽子、数井 裕光、石井良平、住吉チカ、樋口悠子、川崎康弘、高橋秀俊、小坂浩隆、菊知 充、池澤 聡、上原 隆、信川 創、西田圭一郎、藤井猛、研究生：荻野和雄、海老島健、岡琢哉、山田悠至、稲川拓磨、齊藤彩、原口英之、星野大、科研費心理療法士、科研費社会事業専門員、科研費研究補助員、科研費事務助手、センター事務助手。

Ⅱ. 研究活動

1) 部長室より：住吉が代表研究者となり、精神疾患における認知機能障害の評価や治療介入に関する研究を、NCNP 内の他部署および国内外の医療機関や企業と協働し、以下を実施している。

A) ニューロモデュレーションの精神疾患への応用に関する研究(住吉、山田、末吉、長谷川、和田、住吉、本田)経頭蓋直流刺激(tDCS)を用いた精神疾患の認知機能障害の治療研究を展開している。現在、統合失調症患者の日常生活技能に対する tDCS の改善効果に関する無作為化臨床試験(FEDICS)(特定臨床研究)が、病院 CREP などから支援を受け進行中である。2024 年度は松岡病院(小矢部市)が共同研究機関に加わる多施設共同研究に発展し、年度末時点でランダム化数 46 例(目標症例数 50 例)に達した。以上は研究生の山田悠至医師(司法精神診療部)、稲川拓磨医師(精神診療部)らと共に行っている。当グループの tDCS に関する研究成果は、2024 年度に開催された World Federations of Biological Psychiatry (イスタンブール)、European Congress of Schizophrenia Research (ミュンヘン)、World Congress of Asian Psychiatry (バリ島)、International Brain Stimulation Conference (神戸)の各年会における招聘シンポジウムで発信した。

B) 精神病超ハイリスク(UHR)者のサイトカイン濃度、活動量、睡眠指標を対象としたコホート研究(住吉)統合失調症(精神病)の前駆状態と親和性が高い UHR 者を対象とした、全国 10 の医療研究機関が協働する UHR 者を 2 年間追跡するコホート研究である。令和 6 年度末時点で、本研究のプロトコル論文が国際誌に発信され、抗炎症性サイトカインの血中濃度と UHR 者の機能的転帰の相関を示す原著論文が受理されている。

C) 統合失調症に関する各国への政策提言書 (Schizophrenia -Time to Commit to Policy Change)(住吉)欧州および北米の専門家とともに Oxford Health Policy Forum 社より発刊した原版(英語版)の邦訳版である「統合失調症・今こそ政策の変革に注力を;2024 年改訂版提言書」を刊行した。同提言書は、世界精神医学会、国際統合失調症学会、国際神経精神薬理学会、米国神経精神薬理学会、アジア神経精神薬理学会を含む 16 の国際学会・団体から推薦を得ている。

D) 病院・気分障害センターと協働し、双極症の認知機能障害に関する研究の促進のためのデータベース構築を目的とした国際的コンソーシアム (ICONIC-BD) に参加し、活動を開始した。具体的には、「気分障害外来患者を対象とした縦断的研究」の研究計画書を改変し、倫理委員会の承認を受

けた後、同研究で得られた双極症患者の認知機能等のデータセット 30 例を、メルボルン大学 Tamsyn van Rheenen 博士に送付した。

2) 児童・青年期精神保健研究室

(1) 長期化する COVID-19 パンデミックがメンタルヘルスに及ぼす影響のインターネット調査 (Stickley, 白間, 山田, 住吉)

本研究では全国規模のインターネット調査を行い、さまざまなメンタルヘルスの問題に注目した調査を行った。その結果、COVID-19 ワクチンの頻回接種と忌避に関連する要因としてうつや不安といったメンタルヘルスの問題を特定した。また調査で得た大規模サンプルの分析から、精神病様症状と問題のある飲酒やギャンブルの関連などを報告した。

(2) ウェアラブル・デバイスを用いた生体情報の数理解析研究 (白間, 信川, 住吉)

本研究では千葉工業大学 信川研究室との共同研究により、計算論的アプローチや複雑性解析を用いた生体情報の解析を進めている。本年は瞳孔計測により、人間の推論機能の神経活動を説明する計算論的モデルを提案した。また NCNP で構築が進む精神疾患レジストリと連携し、精神疾患患者の治療反応性や社会生活に影響を及ぼす生物学的指標の開発に向け研究に取り組んでいる。

(3) 気分障害の認知機能障害評価バッテリーに関する研究 (末吉, 長谷川, 住吉)

気分障害における認知機能障害を評価する簡便なテストバッテリー, Screen for Cognitive Impairment in Psychiatry (SCIP) と Brief Assessment of Cognition In Affective Disorders (BAC-A) の信頼性・妥当性を検証する多施設共同研究をおこなった。SCIP は国際双極性障害学会が推奨する簡便な測定法であり、精神疾患患者の認知機能を短時間で評価できる。BAC-A は従来の認知機能領域に加え、情動刺激が認知機能へ与える影響を評価できる。今年度は目標症例数を募集し終え、本解析結果の発信に取り組んだ。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・ 2024 年度気分障害センター市民公開講座 (2024.12.14) を企画・開催(住吉)。
- ・ 講演: Leverage digital innovation in research, treatment and care pathways (Optimising schizophrenia treatment). “Let’s Start” – Schizophrenia policy event; Schizophrenia – Time to Commit to Policy Change (hosted by Oxford Health Policy Forum), Online, (2024.11.7) (住吉)

(2) 専門教育面における貢献

- ・ 研究と臨床の橋渡しを目指すカンファレンス「児童・予防精神医学研究会」を統合失調症早期診断・治療センターと共催(2024, 10) (住吉)
- ・ 海外の精神科との交流の一環として、イタリア研究省が後援する Department of Excellence Seminar において, “Inflammation in the early phase of schizophrenia” の講演を University of Campania “Luigi Vanvitelli” (ナポリ市) に対しオンラインで行った (2024.10.30) (住吉)

(3) 精研の研修の主催と協力

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査, 委員会等への貢献

- ・ クロザリル適正使用委員会委員 (住吉)

(5) センター内における臨床的活動

- ・ センター病院 統合失調症専門外来・初診: 毎週月曜日 (住吉)
- ・ センター病院 気分障害センター外来・初診: 毎週月曜日 (住吉)

- ・ センター病院 一般再来：毎週金曜日（住吉）
- ・ センター病院 こころのリスク診療枠：隔週月曜日（住吉）

(6) その他

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Shirama A, Stickley A, Sumiyoshi T: Factors associated with COVID-19 vaccination hesitancy and most frequently vaccinated status in a Japanese population-based sample. *Vaccines* 2024;12:501.
- 2) Miskowiak KW, Obel ZK, Guglielmo R, Del Mar Bonnin C, Bowie CR, Balanza-Martinez V, Burdick KE, Carvalho AF, Dols A, Douglas K, Gallagher P, Kessing LV, Lafer B, Lewandowski KE, López-Jaramillo C, Martinez-Aran A, McIntyre RS, Porter RJ, Purdon S, Schaffer A, Stokes P, Sumiyoshi T, Torres IJ, Van Rheenen TE, Yatham LN, Young AH, Vieta E, Hasler G: Efficacy and safety of established and off-label ADHD drug therapies for cognitive impairment or attention-deficit hyperactivity disorder symptoms in bipolar disorder: A systematic review by the ISBD Targeting Cognition Task Force. *Bipolar Disorders* 2024 26(3):216-239.
- 3) Higuchi Y, Takahashi T, Itoh H, Sasabayashi D, Sumiyoshi T, Suzuki M: Relationships between erythrocyte m 1 embrane mono- and poly unsaturated fatty acid composition and clinical/cognitive indices in antipsychotic-free schizophrenia patients. *Frontiers in Psychiatry* 2024 Apr 23;15:1361997.
- 4) Stickley A, Shirama A, Sumiyoshi T: Psychotic-like experiences and problem drinking among adults in Japan. *Drug Alcohol Dependence* 2024 Jul 1;260:111319.
- 5) Stickley A, Isaksson J, Kuposov R, Schwab-Stone M, Sumiyoshi T, Ruchkin V: Loneliness and posttraumatic stress in U.S. adolescents: A longitudinal study. *Journal of Affective Disorders*. 2024;361:113-119.
- 6) Nakamura T, Sumiyoshi T, Kamio Y, Takahashi H: Reduced multiscale complexity of daily behavioral dynamics in autism spectrum disorder. *Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports*. 2024;3:e70016.
- 7) Stickley A, Shirama A, Sumiyoshi T: Loneliness and low fruit and vegetable consumption among adults in Japan. *Frontiers in Public Health* 2024 Oct 28 Vol 12 :1365628.
- 8) Stickley A, Shirama A, Yamada R, Sumiyoshi T: Ploblematic gambling and psychotic-like experiences: Findings from Japan. *Schizophrenia Research* 2024;274:511-516.
- 9) Wada A, Yamada R, Yamada Y, Sumiyoshi C, Hashimoto R, Matsumoto J, Kikuchi A, Kubota R, Matsui M, Nakachi K, Fujimaki C, Adachi L, Stickley A, Yoshimura N, Sumiyoshi T: Autistic trait severity in early schizophrenia: Role in subjective quality of life and social functioning. *Schizophrenia Research* 2025;275:131-136.
- 10) Ito S, Sumiyoshi C, Matsumoto J, Miura K, Yasuda Y, Hasegawa N, Takano H, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Usefulness of the WAIS-IV short form for measuring cognitive function in patients with schizophrenia. *Neuropsychopharmacology Reports* 2025;45(1):1-6.
- 11) Shirama A, Nobukawa S, Sumiyoshi T: Eye pupils mirror information divergence in approximate inference. *Scientific Reports*, 2024 Dec 28;14(1):30808.
- 12) Isaksson J, Nyman S, Schwab-Stone M, Stickley A, Ruchkin V; The severity of perceived stress associated with community violence exposure and its role in future posttraumatic

stress: findings from a longitudinal study of U.S. adolescents. *Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health* 2024; 18(1):121.

- 13) Kanamori M. Stickley A. Takemura K. Kobayashi Y. Oka M. Ojima T. Kondo K. Kondo N: Community gender norms, mental health, and suicide ideation and attempts among older Japanese adults: a cross-sectional study. *Int Psychogeriatr.* 2024 May;36(5):385-395.
- 14) Isaksson J. Isaksson M. Stickley A. Vermeiren R. Koposov R. Schwab-Stone M. Ruchkin V: Community Violence Exposure and Eating Disorder Symptoms among Belgian, Russian and US Adolescents: Cross-Country and Gender Perspectives. *Child Psychiatry and Human Development* 2023 Aug 22. Online ahead of print.
- 15) Yamada Y. Mishima K. Ohnishi T. Suzuki M. Nemoto T. Mizuno M. Kishimoto N. Tomita H. Ozone M. Kitamura S. Hashimoto K. Nakagome K. Sumiyoshi T. Identification of factors to predict transition to schizophrenia in subjects with ultra-high risk for psychosis: A protocol for a multicenter, longitudinal study of sleep parameters and cytokine levels. *Clinical Psychopharmacology and Neuroscience* 2025 ;23(2):266-277.

(2) 総説

- 1) Sumiyoshi T. De Peri L. Barlati S: Editorial: Unveiling the neurobiological underpinnings of cognitive dysfunction in patients with schizophrenia. *Frontiers in Psychiatry* 2024;10. 3389/fpsy. 2024.1511643
- 2) 住吉太幹, 大澤壮登, 星野竜也, 守口善也, 井筒美和: うつ病の認知機能障害に関する動向: 臨床的意義と評価法. *臨床精神薬理* 27:409-16, 2024
- 3) 末吉一貴, 住吉太幹: 精神科における社会機能の評価法. *臨床精神薬理* 27:403-7, 2024
- 4) 長谷川由美, 住吉太幹: 統合失調症の認知機能および日常生活技能・社会機能の評価. *精神医学* 66(5):526-529, 2024
- 5) 山田悠至, 住吉太幹: 統合失調症の社会認知機能障害に対する経頭蓋直流刺激の効果: 日本生物学的精神医学会誌 35(2):97, 2024
- 6) 山田悠至, 住吉太幹: 精神疾患に対する経頭蓋直流刺激の刺激部位と効果の差異: 精神科治療学 39(6):623-27, 2024
- 7) 住吉太幹, 森尾保徳: 精神疾患領域の臨床試験への中央評価の実装に向けた取り組み -うつ病患者を対象とした多施設共同研究の経験より-. *臨床精神薬理* 27:917-22, 2024
- 8) 山田悠至, 住吉太幹: 経頭蓋直流刺激を用いた精神疾患治療法開発の試み: デジタル技術の活用に向けて: 日本生物学的精神医学会誌 35(4):173-8, 2024
- 9) Nobukawa S. Shirama A. Takahashi T. Toda S: Recent trends in multiple metrics and multimodal analysis for neural activity and pupillometry. *Frontiers in Neurology*, 2024 Dec 2:15:1489822.

(3) 著書

- 1) Galderisi S. Kaur D. Keri P. Lennox B. Marder S. Matthews-Hayes T. McDaid D. Muller S. Nolan F. Nordentoft M. Pavalkis D. Sauders J. Sumiyoshi T. 統合失調症-今こそ政策の変革に注力を: 2024 年改訂版提言書. Oxford Health Policy Forum CIC, 2024

(4) 研究報告書

- 1) 国立精神・神経医療研究センター (住吉太幹, 中込和幸, 野田隆政, 吉池卓也, 橋本亮太, 服部功太郎, 竹田和良, 三輪秀樹): 精神疾患の発症および再発の予防に関連するリスク・防御因子の解明に向けた神経生物学, 心理社会学的研究・令和 6 年度主任研究者報告書

- 2) 国立精神・神経医療研究センター（原貴敏，鬼頭伸輔，高橋祐二，岩崎真樹，松井彩乃，関和彦，住吉太幹，阿部十也，有江文栄）：認知機能，身体機能に対する機能再建に着目したニューロモデュレーションの機序解明と臨床応用に向けての基盤整備・令和6年度分担研究者報告書
- 3) 日本医療研究開発機構（大庭真梨，住吉太幹，小居秀紀，飯島祥彦，上野太郎）：多様なソースから収集するデータの蓄積と利活用のための個人情報非特定化手法の開発とデータ加工技術の確立並びにデータの質担保に関する研究開発・令和6年度研究開発分担者報告書

(5) 翻訳

(6) その他

B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等
- 1) Sumiyoshi T; Transcranial direct current stimulation for enhancing symptoms and functionality in patients with schizophrenia; Prediction with neurophysiological tools. World Federation of Societies of Biological Psychiatry - 16th World Congress of Biological Psychiatry, 2024. 6. 5, Istanbul (2024, 6, 5 - 9) (Invited lecture)
- 2) Yamada R. Sumiyoshi T; Transcranial direct current stimulation and functional recovery in patients with schizophrenia. In Symposium "Updating Neuromodulation for Psychiatric Case in South East Asian Region". 10th World Congress Asian Psychiatry (WCAP), 2024.12.6. Bali, Indonesia (2024.12.5-7) (Invited lecture)
- 3) Sumiyoshi T; Transcranial direct current stimulation for the treatment of schizophrenia: Towards functional improvement. In Symposium "Uncovering Hidden Influences in tDCS: Bridging Overlooked Factors with Clinical Efficacy and Mechanistic Understanding" 6th International Brain Stimulation Conference, 2025. 2. 26, Kobe (2025, 2, 23 - 26) (Invited lecture)
- 4) Yamada Y. Sumiyoshi T; Cytokine levels predict social functioning in subjects at ultra-high risk for psychosis: A multicenter cohort study. In Symposium "Dysfunctional brain connectivity and markers of inflammation in psychoses". 9th European Conference on Schizophrenia Research, 2024. 9. 6. Munich, Germany (2024. 9. 5-7)
- 5) 樋口悠子，住吉太幹，金子直史，長澤和也，赤崎有紀子，高柳陽一郎，笹林大樹，高橋努，辻井農亜，鈴木道雄：早期サイコースにおけるミスマッチ陰性電位のバイオマーカーとしての意義：シンポジウム「ミスマッチ陰性電位の精神疾患バイオマーカー活用の現状」．第120回日本精神神経学会学術総会，札幌，2024.6.20(6.20-6.22)
- 6) 住吉太幹：NCNPにおける分散型臨床試験への取組みと展望：シンポジウム「分散型臨床試験の促進を目指して：日本脳科学関連学会連合・タスクフォースからの提言」．第120回日本精神神経学会学術総会，札幌，2024.6.21(6.20-6.22)
- 7) 住吉太幹：統合失調症の認知機能障害を改善する薬物療法の開発動向：シンポジウム「認知機能障害の評価・介入研究の最前線：患者のリカバリーを実現する多様なアプローチ」．第120回日本精神神経学会学術総会，札幌，2024.6.21(6.20-6.22)
- 8) 山田悠至，住吉太幹：経頭蓋直流刺激（tDCS）を用いた認知機能増強療法開発の試み：シンポジウム「認知機能障害の評価・介入研究の最前線：患者のリカバリーを実現する多様なアプローチ」．第120回日本精神神経学会学術総会，札幌，2024.6.21(6.20-6.22)
- 9) 住吉太幹：双極症の認知機能の評価と意義：実臨床への応用．第21回日本うつ病学会総会，大阪，2024.7.12(7.12-7.13)
- 10) 樋口悠子，高柳陽一郎，住吉太幹，伊藤博子，西山志満子，赤崎有紀子，笹林大樹，辻井農亜，

高橋努：早期サイコースにおける赤血球膜脂肪酸組成のバイオマーカーとしての意義。シンポジウム「早期精神症の生物学的研究 Up-to-Date」。第27回日本精神保健・予防学会学術集会，東京，2024.11.23 (11.23-24)

(2) 一般演題

- 1) Yamada R, Wada A, Stickley A, Yokoi Y, Sumiyoshi T: A meta-analysis of augmentation therapy with serotonin1A receptor partial agonists on cognitive function in schizophrenia. 2024 Congress of Schizophrenia International Research Society, 2024, 4, 6, Florence, April (3-7).
- 2) Yamada Y, Morimoto T, Tagata H, Kishimoto N, Higuchi Y, Hiejima H, Ohshima H, Kato T, Oba M, Izumi S, Tomo Y, Kishimoto T, Nemoto T, Tomita H, Suzuki M, Ozone M, Hashimoto K, Nakagome K, Sumiyoshi T: TGF- β blood levels as a predictor of social functioning in subjects at ultra-high risk for psychosis: A multicenter study. World Federation of Societies of Biological Psychiatry - 16th World Congress of Biological Psychiatry, 2024. 6. 7, Istanbul (2024, 6, 5 - 9)
- 3) Shirama A, Nobukawa S, Sumiyoshi T: Eye pupils reflect information gain during inference: a variational Bayes approach. NEURO 2024, Sendai, 2024.7.24-8.27.
- 4) Yamada R, Wada A, Stickley A, Yokoi Y, Sumiyoshi T: Effect of augmentation therapy with serotonin1A receptor partial agonists on cognitive function in schizophrenia: A systematic review and meta-analysis. NEURO2024, Fukuoka, Japan, 24-27, July, 2024.
- 5) Galderisi S, Kaur D, Keri P, Marder SR, Matthews-Hayes T, Muller S, Pavalkis D, Saunders J, Sumiyoshi T, Nolan F: Exploring the need to co-create treatment plans alongside people with schizophrenia: findings from a modified Delphi process. 29th International Mental Health Nursing Research Conference, 2024.9.12, Oxford (2024, 9, 12 - 13)
- 6) Galderisi S, Kaur D, Keri P, Marder SR, Matthews-Hayes T, Muller S, Nolan F, Pavalkis D, Saunders J, Sumiyoshi T: Developing universal recommendations for treatment of schizophrenia: Findings from a modified Delphi process. 24th World Psychiatric Association – World Congress of Psychiatry, 2024.11.14, Mexico City (2024, 11, 14 - 17)
- 7) Yamada R, Wada A, Stickley A, Sumiyoshi T: Augmentation therapy with serotonin1A receptor agonists on cognitive function in psychiatric disorders: A systematic review. 24th World Psychiatric Association – World Congress of Psychiatry, 2024.11.14 Mexico City (2024, 11, 14 - 17)
- 8) Sumiyoshi C, Ohi K, Fujino H, Fujimoto M, Yamamori H, Yasuda Y, Ito S, Uno Y, Takahashi J, Kentaro M, Katsuki A, Yamamoto M, Okahisa Y, Sata A, Katsumoto E, Koeda M, Hirano Y, Nakataki M, Matsumoto J, Miura K, Hashimoto N, Makinodan M, Takahashi T, Nemoto K, Kishimoto T, Suzuki M, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Transdiagnostic comparison of work outcome in patients with mental disorders: A multi-center study. 24th World Psychiatric Association – World Congress of Psychiatry, 2024.11.16 Mexico City (2024, 11, 14 - 17)
- 9) Wakita I, Maruyama K, Nobukawa S, Shirama A, Oba M, Sumiyoshi T: Long-term Analysis of Time-Series Patterns in Biological Rhythms. The 2024 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications (NOLTA) 2024.

(3) 研究報告会

- 1) Stickley A, Shirama A, Yamada R, Sumiyoshi T: Problematic gambling and psychotic-like experiences: Findings from Japan, 令和6年度 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 研究報告会，東京，2025.3.17

- 2) 白間綾, 信川創, 住吉太幹: 近似推論における瞳孔とリンクした覚醒系の役割: 健常者での検討, 令和6年度 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 研究報告会, 東京, 2025.3.17

(4) その他

C. 講演

- 1) 住吉太幹: うつ病における認知機能障害と対応. 第7回日本うつ病リワーク協会年次大会. 名古屋, 2024.4.14
- 2) 住吉太幹: 双極症のうつ症状と認知機能障害に対する薬物治療. 第2回精神科専門薬剤師養成研究会. 東京, 2024.7.6
- 3) 住吉太幹: うつ病における認知機能障害と対応: 機能的予後との関連 (ランチョンセミナー1) 第48回日本自殺予防学会総会. 浦和市, 2024.9.14 (9.13-9.15)
- 4) 住吉太幹: 統合失調症に関する政策提言の動向: “Schizophrenia – Time to Commit to Policy Change, Updated Report 2024”より (ランチョンセミナー3) 第43回日本精神科診断学会. 神戸市, 2024.9.22 (9.21-9.22)
- 5) 住吉太幹: 世界規模で求められる統合失調症への対応“Schizophrenia – Time to Commit to Policy Change, Updated Report 2024”より. 第71回 NCNP 精神保健研究所ランチョンセミナー 小平市 2024.10.16

D. 学会活動

(1) 学会主催

- 1) 住吉太幹: 第9回 Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorder 研究会・年会. 小平市. 2024.5.18.

(2) 学会役員

- 1) Sumiyoshi T: World Psychiatric Association Section on Psychoneurobiology, Committee Member
- 2) Sumiyoshi T: EEG & Clinical Neuroscience Society, Councilor
- 3) Sumiyoshi T: International Society of Bipolar Disorder; Cognition Task Force, Member
- 4) 住吉太幹: 日本脳科学関連学会連合 産学連携諮問委員会 分散型臨床試験タスクフォース長
- 5) 住吉太幹: Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorder 研究会, 代表理事
- 6) 住吉太幹: 日本生物学的精神医学会 理事
- 7) 住吉太幹: 日本臨床精神神経薬理学会 理事
- 8) 住吉太幹: 日本神経精神薬理学会 評議員, 編集委員
- 9) 住吉太幹: 日本統合失調症学会 評議員
- 10) 住吉太幹: 日本うつ病学会 評議員
- 11) 住吉太幹: 日本精神保健・予防学会 評議員

(3) 座長

- 1) Sumiyoshi T: シンポジウム” Prediction with neurophysiological tools”. World Federation of Societies of Biological Psychiatry - 16th World Congress of Biological Psychiatry, 2024. 6. 5, Istanbul (2024, 6, 5 - 9)

(4) 学会誌編集委員等

- 1) Sumiyoshi T: Clinical Psychopharmacology and Neuroscience, Associate Editor

- 2) Sumiyoshi T: Neuropsychopharmacology Reports, Section Editor
- 3) Sumiyoshi T: Frontiers in Pharmacology, Associate Editor
- 4) Sumiyoshi T: Clinical EEG and Neuroscience, Editorial Board Member
- 5) Sumiyoshi T: Schizophrenia Research Cognition, Editorial Board Member

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 住吉太幹:令和 6 年度第 1 回精神保健研究所 児童・予防精神医学研究会 / 病院 統合失調症早期診断・治療センター / 気分障害センター合同研究会, 2024.10.2.
- 2) 住吉太幹:令和 6 年度第 2 回精神保健研究所 児童・予防精神医学研究会 / 病院 統合失調症早期診断・治療センター / 気分障害センター合同研究会, 2025.3.3.

(2) 研修会講師

F. その他

- 1) 住吉太幹: ナショナルセンター医療研究連携推進本部 知財・法務課長
東北大学 客員教授
東京慈恵会医科大学 連携大学院教授

7. 精神薬理研究部

I. 研究部の概要

精神薬理研究部では、最終目標を「精神疾患の克服を目指した研究開発を行い、研究成果を目の前の医療に活かす」と定義し、当センターの事業計画における位置づけを明確化している。具体的にはわが国において重要な政策課題となっている精神疾患に焦点を当て、精神薬理学をバックボーンとする研究手法を用い、非臨床ステージにおける創薬研究を中心とした精神神経疾患の治療介入法の研究開発を行っている。

精神薬理研究部には、分子精神薬理研究室と向精神薬理研究開発室の2室が所属している。令和6年度常勤研究員は、部長の池田和隆、分子精神薬理研究室長の三輪秀樹、向精神薬理研究開発室の西澤大輔の3名であった。リサーチフェローは、上條諭志、森屋由紀の2名であった。科研費研究補助員は村松浩美、中山京子であった。科研費事務助手は田巻舞であった。

Ⅱ. 研究活動

1) 実験動物を利用した研究

三輪室長が、長崎大学との共同研究において、「Slitrk4 is required for the development of inhibitory neurons in the fear memory circuit of the lateral amygdala」が、Frontiers in Molecular Neuroscience 誌に掲載された。この研究では、脳の膜タンパク質の1つ SLITRK4 が扁桃体のカルレチニン陽性 GABA 作動性ニューロンの産生過程に必要であり、恐怖記憶生成に重要であることを示唆した。近年、PTSD の患者群を対象にした mRNA レベルの遺伝子発現変化の研究で、PTSD 患者群では SLITRK4 の発現が変化していることが報告されており、本研究の成果は、PTSD の病態の理解や治療法の開発・改善に貢献するものと期待される。

上條リサーチフェローは、発達期の小脳活動異常が自閉症スペクトラム (ASD) 様の症状を引き起こすという「ASD 発達期小脳機能異常仮説」に注目し、発達期小脳プルキンエ細胞の活動を可逆的に抑制できるモデルマウスの系を確立した。生後 11 日から 15 日までの 5 日間の小脳プルキンエ細胞の活動抑制により、オス特異的に社会性の低下および協調運動機能の異常が引き起こされることを見出した。また、小脳プルキンエ細胞の活動抑制を行ったマウスでは、成体における聴覚刺激の処理に異常が見られることを見出し、ASD および随伴する感覚処理の異常が、発達期の小脳活動の異常という共通の原因から生じる可能性を示した。ASD は 4:1 と男児に多く、発達性協調運動障害 (DCD) を高率に併発することが報告されており、DCD もまた男児に多い。我々は、両疾患の共通の原因として小脳機能の異常があり、発達期のオス小脳は異常活動に対して脆弱であるという「オス小脳脆弱仮説」を提唱し、研究を進めている。

森屋リサーチフェローは、オピオイドが抗うつ作用に関与するという仮説の下、性差の観点からオピオイド受容体とストレスに注目して基礎研究を進めている。うつ病の治療薬として注目されている δ オピオイド受容体 (DOP) 作動薬である KNT-127 を用いて、抗うつ効果を調べたところ、性差で異なる抗うつ作用を確認した。現在は μ オピオイド受容体 (MOP) を拮抗し、DOP を活性化することで、雌に効果的な抗うつ作用を示すという仮説を検証している。この仮説に基づき、新しい抗うつ薬の開発に向け、オピオイド受容体をターゲットとする薬剤の可能性に焦点を当てている。女性特有のうつ病の治療や予防にオピオイド受容体の既存薬が有用かを明らかにするための研究を進めている。

これらの実験動物を利用した研究の成果を臨床研究と双方向にトランスレーションすることで、これまで困難とされてきた向精神薬の創薬研究をより合理的に進めることができるものと期待される。

2) 鎮痛薬・疼痛感受性及び物質依存等精神疾患脆弱性の遺伝要因に関する研究

西澤大輔室長は、共同研究先である東京都医学総合研究所において、日本人女性の腹腔鏡下婦人

科手術患者を対象に、 μ オピオイド受容体 (OPRM1) 遺伝子の A118G (rs1799971) 遺伝子多型と術中のレミフェンタニル必要量との関連を調べた。その結果、この遺伝子多型とレミフェンタニルの投与量との関連が認められ、術中鎮痛管理の個別化に寄与する可能性が考えられた。また、東京歯科大学水道橋病院との共同研究において、ミダゾラム投与後の鎮静効果を Ramsay 鎮静スケールで評価し、全ゲノム及び候補遺伝子アプローチを用いて、GABAA 受容体サブユニット遺伝子多型との関連を解析したところ、この遺伝子領域の特定の遺伝子多型がミダゾラムの鎮静及び健忘効果に影響を与えることが明らかになった。さらに、がん性疼痛や術後疼痛管理のためにオピオイドを投与された患者を対象に、TMEM132C 遺伝子の rs7296262 多型と悪心（嘔気）の発生有無との関連を検討したところ、この遺伝子多型がオピオイドによる悪心の発生に有意に関連することが示され、遺伝的要因が副作用の発現に影響を与えることが示唆された。これらの成果は、それぞれ、*Neuropsychopharmacol Rep* 誌、*Mol Brain* 誌、及び *Int J Mol Sci* 誌などの学術雑誌に掲載された。その他では、東京歯科大学水道橋病院との共同研究においてこれまでにほとんど報告の無かった幻覚痛と関連する遺伝子多型を同定した他、岐阜大学との共同研究においてポリジェニックリスクスコア (PRS) の解析により統合失調症及び双極性障害の遺伝的リスクと特定の食事パターンとの間の関連性を見出し、これらの成果は、それぞれ、*Mol Pain* 誌及び *Transl Psychiatry* 誌などの学術雑誌に掲載された。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・ 日本学術会議と国際神経精神薬理学会との共催で市民公開講座「アディクションの克服に向けて」を開催し、アディクション対策の重要性を広く国民に訴えるなどした。
- ・ 国立精神・神経医療研究センターにて開催された世界脳週間 2024 の市民公開講座で、依存症の脳内メカニズムについて講演を行い、一般市民に向けた科学的知識の普及と偏見の軽減に貢献した。

(2) 専門教育面における貢献

(3) 精研の研修の主催と協力

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

(5) センター内における臨床的活動

(6) その他

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Ide S, Iwase N, Arai K, Kojima M, Ushiyama S, Ikeda K: Inhibitory effects of the selective mu-opioid receptor antagonist UD-030 on methamphetamine-induced conditioned place preference. *Neuropsychopharmacol Rep* 45(1): e12503, 2025.
- 2) Ohi K, Nishizawa D, Saito T, Goto T, Kubota I, Shinoda T, Fujikane D, Hasegawa J, Sato N, Tanioka F, Sugimura H, Ikeda K, Shioiri T: Dietary habits and genetic susceptibility: correlations between nutritional intake and genetic risks for schizophrenia and bipolar disorder. *Transl Psychiatry* 14(1): 404, 2024.
- 3) Kosaki Y, Nishizawa D, Hasegawa J, Yoshida K, Ikeda K, Ichinohe T: Gamma-aminobutyric

- acid type A receptor beta1 subunit gene polymorphisms are associated with the sedative and amnesic effects of midazolam. *Mol Brain* 17(1): 70, 2024.
- 4) Zou R, Nishizawa D, Inoue R, Hasegawa J, Ebata Y, Nakayama K, Hara A, Sumikura H, Kitade M, Hayashida M, Ikeda K, Kawagoe I: Effect of A118G (rs1799971) single-nucleotide polymorphism of the mu-opioid receptor OPRM1 gene on intraoperative remifentanyl requirements in Japanese women undergoing laparoscopic gynecological surgery. *Neuropsychopharmacol Rep* 44(3): 650-357, 2024.
 - 5) Kang Y, Nishizawa D, Ohka S, Terui T, Ishitani K, Morino R, Yokota M, Hasegawa J, Ebata Y, Nakayama K, Koshika K, Ichinohe T, Ikeda K: TMEM132C rs7296262 single-nucleotide polymorphism is significantly associated with nausea induced by opioids administered for cancer pain and postoperative pain. *Int J Mol Sci* 25(16): 8845, 2024.
 - 6) Ogawa T, Yamada S, Fukushi S, Imai Y, Kawada J, Ikeda K, Ohka S, Kaneda S: Formation and long-term culture of hiPSC-derived sensory nerve organoids using microfluidic devices. *Bioengineering* 11(8): 794, 2024.
 - 7) Araidai J, Ohka S, Soeda M, Nishizawa D, Hasegawa J, Nakayama K, Ebata Y, Ogai Y, Fukuda K, Ikeda K: rs12411980 single-nucleotide polymorphism related to PRTFDC1 expression is significantly associated with phantom tooth pain. *Mol Pain* 20: 17448069241272215, 2024.
 - 8) Ogawa T, Yamada S, Fukushi S, Imai Y, Kawada J, Ikeda K, Ohka S, Kaneda S: Formation and long-term culture of hiPSC-derived sensory nerve organoids using microfluidic devices. *Bioengineering* 11(8): 794, 2024.
 - 9) Okitsu M, Fujita M, Moriya Y, Kotajima-Murakami H, Ide S, Kojima R, Sekiyama K, Takahashi K, Ikeda K: Mouse model of Parkinson's disease with bilateral dorsal striatum lesion with 6-hydroxydopamine exhibits cognitive apathy-like behavior. *Int J Mol Sci* 25(14): 7993, 2024.
 - 10) Hagihara H, Shoji H, Hattori S, Sala G, Takamiya Y, Tanaka M, Ihara M, Shibutani M, Hatada I, Hori K, Hoshino M, Nakao A, Mori Y, Okabe S, Matsushita M, Urbach A, Katayama Y, Matsumoto A, Nakayama KI, Katori S, Sato T, Iwasato T, Nakamura H, Goshima Y, Raveau M, Tatsukawa T, Yamakawa K, Takahashi N, Kasai H, Inazawa J, Nobuhisa I, Kagawa T, Taga T, Darwish M, Nishizono H, Takao K, Sapkota K, Nakazawa K, Takagi T, Fujisawa H, Sugimura Y, Yamanishi K, Rajagopal L, Hannah LD, Meltzer HY, Yamamoto T, Wakatsuki S, Araki T, Tabuchi K, Numakawa T, Kunugi H, Huang FL, Hayata-Takano A, Hashimoto H, Tamada K, Takumi T, Kasahara T, Kato T, Graef IA, Crabtree GR, Asaoka N, Hatakama H, Kaneko S, Kohno T, Hattori M, Hoshiba Y, Miyake R, Obi-Nagata K, Hayashi-Takagi A, Becker LJ, Yalcin I, Hagino Y, Kotajima-Murakami H, Moriya Y, Ikeda K, Kim H, Kaang BK, Otabi H, Yoshida Y, Toyoda A, Komiyama NH, Grant SGN, Ida-Eto M, Narita M, Matsumoto K, Okuda-Ashitaka E, Ohmori I, Shimada T, Yamagata K, Ageta H, Tsuchida K, Inokuchi K, Sassa T, Kihara A, Fukasawa M, Usuda N, Katano T, Tanaka T, Yoshihara Y, Igarashi M, Hayashi T, Ishikawa K, Yamamoto S, Nishimura N, Nakada K, Hirotsune S, Egawa K, Higashisaka K, Tsutsumi Y, Nishihara S, Sugo N, Yagi T, Ueno N, Yamamoto T, Kubo Y, Ohashi R, Shiina N, Shimizu K, Higo-Yamamoto S, Oishi K, Mori H, Furuse T, Tamura M, Shirakawa H, Sato DX, Inoue YU, Inoue T, Komine Y, Yamamori T, Sakimura K, Miyakawa T: Large-scale animal model study uncovers altered brain pH and lactate levels as a transdiagnostic endophenotype of neuropsychiatric disorders involving cognitive impairment. *eLife* 12: RP89376, 2024.
 - 11) Yamagishi A, Ikekubo Y, Mishina M, Ikeda K, Ide S: Loss of the sustained antidepressant-

like effect of (2R,6R)-hydroxynorketamine in NMDA receptor GluN2D subunit knockout mice. *J Pharmacol Sci* 154: 206-208, 2024.

- 12) Ohi K, Shimada M, Soda M, Nishizawa D, Fujikane D, Takai K, Kuramitsu A, Muto Y, Sugiyama S, Hasegawa J, Kitaichi K, Ikeda K, Shioiri T: Genome-wide DNA methylation risk scores for schizophrenia derived from blood and brain tissues further explain the genetic risk in patients stratified by polygenic risk scores for schizophrenia and bipolar disorder. *BMJ Ment Health* 27(1): e300936, 2024.
- 13) Vinnakota C, Schroeder A, Du X, Ikeda K, Ide S, Mishina M, Hudson M, Jones N, Sundram S, Hill R: Understanding the role of the NMDA receptor subunit, GluN2D, in mediating NMDA receptor antagonist-induced behavioral disruptions in male and female mice. *J Neurosci Res* 102(1): e25257, 2024.
- 14) Matsumoto Y, Miwa H, Katayama K-I, Watanabe A, Yamada K, Ito T, Nakagawa S, Aruga J: Slitrk4 is required for the development of inhibitory neurons in the fear memory circuit of the lateral amygdala. *Front Mol Neurosci* 17: 1386924-1386924, 2024.
- 15) Kamijo S, Miwa H: Inflammatory Impact on Sleep, Schizophrenia, and Autism Spectrum Disorder. In: Jha PK, Bouaouda H (eds) *Circadian Rhythms, Sleep and Inflammation. Progress in Inflammation Research*, vol 93. Springer, Cham. *J Neuroinflammation* 15(2): 113-127, 2024.

(2) 総説

- 1) Ide S, Ikeda K: *Caenorhabditis elegans* for opioid addiction research. *Curr Opin Neurobiol* 88: 102914, 2024.
- 2) Nishizawa D, Ikeda K: Chapter 4: Pharmacology and mechanisms of addiction. In: *Addiction Medicine (Third Edition)* pp72-74, UK: Oxford University Press, 2024.
- 3) 井手聡一郎, 森屋由紀, 池田和隆: 規制薬物使用研究支援. *生体の科学* 75(5): 458-459, 2024.
- 4) 大岡静衣, 西澤大輔, 池田和隆: 疼痛・鎮痛の薬理学. *眼薬理* 38(1): 7-10, 2024.

(3) 著書

(4) 研究報告書

- 1) 西澤大輔, 長谷川準子, 池田和隆: ニコチン等物質依存脆弱性・重症度個人差におけるアルコール代謝関連遺伝子多型の関与. 令和5年度喫煙科学研究財団研究年報: 706-712, 2024.

(5) 翻訳

(6) その他

B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等
 - 1) Ichinose H, Aida R, Nago-Iwashita Y, Moriya Y, Ide S, Ikeda K: Control of the methamphetamine-responses by modulating the activity of tyrosine hydroxylase. NEURO2024, 福岡, 2024.07.24-27.
 - 2) Ikeda K, Ide S: G-protein-activated inwardly rectifying potassium (GIRK) channels: A potential therapeutic frontier for addiction. The 35th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology (CINP2024), Tokyo, 2024.05.25.
 - 3) 西澤大輔, 池田和隆: 鎮痛薬・疼痛感受性個人差の遺伝要因の解明と臨床応用. 第17回日本

緩和医療薬学会年会，東京，2024.05.25.

- 4) 井手聡一郎，池田和隆：ドパミン関連遺伝子改変マウスを用いたアディクション解析．第54回日本神経精神薬理学会 第34回日本臨床精神神経薬理学会 合同年会，東京，2024.05.25.
- 5) 池田和隆：がん関連疼痛の個別化医療．順天堂大学大学院特別講義，オンライン，2024.06.26.

(2) 一般演題

- 1) Ohi K, Shimada M, Soda M, Nishizawa D, Fujikane D, Takai K, Kuramitsu A, Muto Y, Sugiyama S, Hasegawa J, Kitaichi K, Ikeda K, Shioiri T: Genome-wide DNA methylation risk scores for schizophrenia derived from blood and brain tissues further explain the genetic risk in patients stratified by polygenic risk scores for schizophrenia and bipolar disorder. The 35th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology (CINP2024), Tokyo, 2024.05.24.
- 2) Nakamoto Y, Kaga M, Kawana S, Nakamura K, Ikeda K, Yoshii M: Gender differences in the stress response of patients with atopic dermatitis, alopecia areata, and premenstrual dysphoric disorder as observed by translocator protein 18 kDa (TSPO). The 35th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology (CINP2024), Tokyo, 2024.05.24.
- 3) Yamaguchi Y, Kasai S, Hasegawa J, Ikeda K: Alcohol intake is associated with eating habits during development. The 35th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology (CINP2024), Tokyo, 2024.05.24.
- 4) Moriya Y, Kasahara Y, Shimada M, Sakakibara Y, Fujii H, Nagase H, Ide S, Ikeda K, Hall FS, Uhl GR, Sora I: Sex differences in the reduction of hopelessness in mu opioid receptor deficient mice by additive effects of delta opioid receptor agonists. The 35th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology (CINP2024), Tokyo, 2024.05.24.
- 5) Ide S, Ikekubo Y, Mishina M, Hashimoto K, Ikeda K: The role of NMDA receptor GluN2D subunit in GABA neurons on the long-lasting antidepressant effects of ketamine enantiomers and their metabolites. The 35th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology (CINP2024), Tokyo, 2024.05.24.
- 6) Fujita M, Ide S, Okitsu M, Ikeda K: Analysis of dopamine transporter-expressing neuron-specific tyrosine hydroxylase knockout mice. The 35th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology (CINP2024), Tokyo, 2024.05.25.
- 7) Okitsu M, Fujita M, Takahashi K, Ikeda K: Transversal investigation of apathic behaviors in a Parkinson's disease mouse model with 6-hydroxydopamine lesioning in the bilateral dorsal striatum. The 35th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology (CINP2024), 東京，2024.05.25.
- 8) Kotajima H, Sato A, Kasai S, Hagino Y, Tanaka M, Takamatsu Y, Nishito Y, Uchino S, Ikeda K: Effects of behavioral therapy on mouse model of ASD associated with tuberous sclerosis complex and DNA methylation analysis. The 35th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology (CINP2024), Tokyo, 2024.05.25.
- 9) Kang Y, Ohka S, Nishizawa D, Hasegawa J, Nakayama K, Ebata Y, Terui T, Ishitani K, Morino R, Yokota M, Koshika K, Ichinohe T, Ikeda K: TMEM132C rs7296262 single nucleotide polymorphism showed significant associations with nausea induced by opioids administered for cancer pain or post-operative pain. The 35th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology (CINP2024), Tokyo, 2024.05.25.
- 10) Nishizawa D, Morino R, Inoue R, Ohka S, Kasai S, Hasegawa J, Ebata Y, Nakayama K, Sumikura H, Hayashida M, Yokota M, Ikeda K: Genome-wide association study identifies candidate genetic polymorphisms associated with postoperative nausea and/or vomiting.

The 35th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology (CINP2024), Tokyo, 2024.05.26.

- 11) Kasai S, Nishizawa D, Higuchi S, Ikeda K: Association between Proopiomelanocortin gene variation and alcohol dependence in Japanese. The 35th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology (CINP2024), Tokyo, 2024.05.26.
- 12) Ohka S, Kawaji H, Yamada S, Fukui Y, Hasegawa J, Nishizawa D, Fukushi S, Ebihara H, Ikeda K: Truncated HS3ST4 expressed downstream of chronic pain-associated single nucleotide polymorphisms regulates transcriptional promoter activity. The 35th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology (CINP2024), Tokyo, 2024.05.26.
- 13) Ichinose H, Aida R, Nago-Iwashita Y, Moriya Y, Ide S, Ikeda K: Modulation of the dopaminergic neurotransmission by controlling tyrosine hydroxylase activity. The 35th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology (CINP2024), Tokyo, 2024.05.26.
- 14) Ichinose H, Aida R, Nago-Iwashita Y, Moriya Y, Ide S, Ikeda K: Control of the methamphetamine-responses by modulating the activity of tyrosine hydroxylase. NEURO2024, 福岡, 2024.07.24-27.
- 15) Nishizawa D, Mieda T, Tsujita M, Nakagawa H, Yamaguchi S, Kasai S, Hasegawa J, Ebata Y, Nakayama K, Kitamura A, Hayashida M, Ikeda K: Genome-wide association study identifies candidate loci associated with postoperative nausea/vomiting and sedation. 日本人類遺伝学会第 69 回大会, 札幌, 2024.10.12.
- 16) Kamijo S, Miwa H: Male-specific impairment of social communication and motor coordination due to abnormal cerebellar activity during development. NEURO2024, 福岡, 2024.07.25.
- 17) Kamijo S, Miwa H: Transient inhibition of developing Purkinje cells causes male-specific social and fine motor deficits "vulnerable male cerebellum hypothesis". Society for Neuroscience 2024, Chicago, USA, 2024.10.7.
- 18) 井手聡一郎, 池田和隆: ドパミン関連遺伝子改変マウスを用いたアディクション解析. 第 54 回日本神経精神薬理学会 第 34 回日本臨床精神神経薬理学会 合同年会, 東京, 2024.05.25.
- 19) 西澤大輔, 池田和隆: 鎮痛薬・疼痛感受性個人差の遺伝要因の解明と臨床応用. 第 17 回日本緩和医療薬学会年会, 東京, 2024.05.25.
- 20) 三輪秀樹: 中枢神経疾患に対する革新的アプローチ: 診断から治療まで. 第 130 回日本解剖学会・第 102 回日本生理学会・第 98 回日本薬理学会 合同大会 (APPW2025), 千葉, 2025.03.17.
- 21) 上條諭志: 発達期小脳活動異常によるオスマウス特異的な社会性低下および協調運動機能の障害 — 発達期オス小脳脆弱仮説 —. 国立高度専門医療研究センター 医療研究連帯推進本部 6NC リトリート 2024, 東京, 2024.04.13.

(3) 研究報告会

- 1) 井手聡一郎, 藤田雅代, 池田和隆: ドパミン関連遺伝子改変マウスを用いたニコチン依存と行動嗜癖の解析. 公益財団法人喫煙科学研究財団 第 38 回令和 5 年度助成研究発表会, 東京, 2024.07.19.
- 2) 三輪秀樹: 研究紹介. 東京都医学総合研究所・国立精神・神経医療研究センター合同研究会, 東京, 2024.09.10.
- 3) 西澤大輔, 長谷川準子, 池田和隆: ニコチン等物質依存脆弱性・重症度個人差におけるアルコール代謝関連遺伝子多型の関与. 公益財団法人喫煙科学研究財団第 38 回令和 5 年度助成研究発表会, 東京, 2024.07.19.
- 4) 西澤大輔: 研究紹介 (現在までの研究の紹介と今後の研究計画). 東京都医学総合研究所・国立精神・神経医療研究センター合同研究会, 東京, 2024.09.10

- 5) 西澤大輔, 池田和隆: 鎮痛薬感受性関連遺伝子多型の同定とその臨床応用. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和6年度研究報告会(第36回), 東京, 2025.3.17.
- 6) 上條諭志: 小脳と自閉症. 東京都医学総合研究所・国立精神・神経医療研究センター合同研究会, 東京, 2024.09.10.
- 7) 森屋由紀: μ オピオイド受容体欠損マウスを用いた δ オピオイド受容体作動薬の抗うつ効果の検討. 東京都医学総合研究所・国立精神・神経医療研究センター合同研究会, 東京, 2024.09.10.
- 8) 森屋由紀, 笠原好之, 嶋田政史, 藤井秀明, 長瀬博, 井手聡一郎, Frank Scott Hall, George R Uhl, 曾良一郎, 池田和隆: μ オピオイド受容体欠損マウスにおける δ オピオイド受容体作動薬の相加効果による絶望感軽減の雌雄差. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和6年度研究報告会(第36回), 東京, 2025.3.17.

(4) その他

- 1) 池田和隆: 中枢神経作用薬の作用機序解明とその医療応用. 国立精神・神経医療研究センター 第69回 NCNP 精神保健研究所ランチョンセミナー, 東京, 2024.8.7

C. 講演

- 1) Ikeda K: Collaborations and developments in addiction research. 2024 Summer Symposium of the Taiwanese Society of Addiction Science and the Joint Academic Conference of the National Health Research Institutes and China Medical University, Taipei City Hospital Songde Branch, Taipei, Taiwan, 2024.07.27.
- 2) Ikeda K: Advances in addiction research and treatment. 334th Dr. Luis Maria Alvarez Guerrero Memorial Lecture, Manila, Philippines, 2024.09.25.
- 3) Ikeda K: Models of schizophrenia: A focus on neurotransmitter systems. Master Class in Behavioral Medicine, Metro Manila, Philippines, 2024.09.26.
- 4) Ikeda K: Genetic mechanisms underlying individual differences in sensitivity to addictive substances. ACONAMI 2024, Online (Singapore), 2024.11.18.
- 5) Ikeda K: Unraveling Addiction: Neuropsychopharmacological Insights and Emerging Therapeutic Pathways. 10th World Congress of Asian Psychiatry (WCAP) - Asian Federation of Psychiatric Associations (AFPA) 2024, Bali, Indonesia, 2024.12.06.
- 6) 池田和隆: アディクション研究の最前線 やめたくてもやめられない脳のメカニズム. 世界脳週間 2024, 東京, 2024.08.03.
- 7) 池田和隆: 疼痛・鎮痛個人差の遺伝子メカニズム. 第29回一般社団法人日本口腔顔面痛学会 学術大会, 東京, 2024.12.01.
- 8) 西澤大輔, 池田和隆: 鎮痛薬・疼痛感受性個人差に寄与する遺伝要因の解明とその臨床応用. 第46回日本疼痛学会, 東京, 2024.11.16.

D. 学会活動

(1) 学会主催

- 1) 池田和隆: 国際神経精神薬理学会 (CINP) 東京大会, 東京, 2024.05.23-26.

(2) 学会役員

- 1) 池田和隆: 国際神経精神薬理学会 理事長
- 2) 池田和隆: アジア神経精神薬理学会 副理事長
- 3) 池田和隆: 東京バイオマーカー・イノベーション技術研究組合 副理事長
- 4) 池田和隆: 日本ペインクリニック学会 特任理事
- 5) 池田和隆: 脳の世紀推進会議 理事

- 6) 池田和隆：日本アルコール・アディクション医学会 学術評議員，理事，将来構想委員長
- 7) 池田和隆：日本神経精神薬理学会 評議員，理事，財務委員長
- 8) 池田和隆：日本医療研究開発機構 AMED 課題評価委員
- 9) 池田和隆：日本薬理学会 代議員，学術評議員
- 10) 池田和隆：日本脳科学関連学会連合 評議員，運営委員，産学連携諮問委員会委員長
- 11) 池田和隆：日本学術会議 連携会員，アディクション分科会副委員長

(3) 座長

- 1) Moriya Y. Sex differences in the reduction of hopelessness in μ opioid receptor deficient mice by additive effects of δ opioid receptor agonists. CINP2024, Tokyo, 2024.5.24.
- 2) 池田和隆：Plenary 5. The 35th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology (CINP2024), 東京国際フォーラム，東京，2024.05.25.
- 3) 池田和隆：Symposium 16. The 35th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology (CINP2024), 東京国際フォーラム，東京，2024.05.25.
- 4) 池田和隆：シンポジウム 1「研究成果の国際発信：アソシエートジャーナル Neuropsychopharmacology Reports 誌の活用法」. 2024 年度 アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，砂防会館 シェーンバッハ・サボー，東京，2024.09.19.
- 5) 池田和隆：シンポジウム 1「研究成果の国際発信：アソシエートジャーナル Neuropsychopharmacology Reports 誌の活用法」. 2024 年度 アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，砂防会館 シェーンバッハ・サボー，東京，2024.09.19.
- 6) 池田和隆：シンポジウム 1 (S1)：ゲノム／エピゲノム疼痛解析とプレシジョンメディシン. 第 46 回日本疼痛学会，TOC 有明コンベンションホール，東京，2024.11.16.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 池田和隆：Alcoholism: Clinical & Experimental Research Field Editor
- 2) 池田和隆：Neuropsychopharmacology Reports Field Editor

E. 研修

(1) 研修企画

(2) 研修会講師

F. その他

【受賞】

- 1) 上條諭志：本部長賞，国立高度専門医療研究センター 医療研究連帯推進本部 6NC リトリート 2024，2024.04.13.
- 2) 森屋由紀：第 17 回 資生堂 女性研究者サイエンスグラント，オピオイド受容体をターゲットとした新規向精神薬の母体と胎児への影響. 2024.07.19.
- 3) 森屋由紀：若手奨励賞，国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和 6 年度研究報告会，2025.03.17.

【その他】

- 1) 一瀬宏，相田莉奈，井手聡一郎，池田和隆，森屋由紀，垣花泰之，原怜，西昭徳，河原幸江：特許出願 特願 2024-078987「チロシン水酸化酵素の活性阻害・発現抑制による薬物依存の減弱効果」2024.05.14.
- 2) 池田和隆，Ira D. Glick：第 9 回 NCNP 国際セミナー「Focus on Quality Psychopharmacology」，2024.10.17.

8. 精神疾患病態研究部

I. 研究部の概要

精神疾患病態研究部では、精神疾患の克服とその障害の支援のための先駆的研究活動を展開している。精神疾患の生物学的な研究と精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動をより発展させて全国レベルで展開することを目標としている。精神疾患の生物学的な研究は、認知社会機能、脳神経画像、神経生理機能などの中間表現型及びゲノムなどの生体試料を用いて、統合失調症、気分障害、発達障害などの幅広い精神疾患について疾患横断的に検討することにより、病態を解明し、新たな診断法・治療法の開発を行っている。この研究は、当研究部においてのみ行うものではなく、国立精神・神経医療研究センターの他の研究部門および日本全国 54 の精神疾患関連研究機関の共同研究体制である COCORO（Cognitive Genetics Collaborative Research Organization：認知ゲノム共同研究機構）を運営しオールジャパン体制で遂行している。精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動は、EGUIDE プロジェクト（Effectiveness of GUIDeline for Dissemination and Education in psychiatric treatment：精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果に関する研究）という全国 47 大学を含む 320 医療機関の共同研究組織を牽引し、全国でガイドラインの講習を行い、その効果検証を行っている。

令和 6 年度の人員構成は次のとおりである。部長：橋本亮太，室長：松本純弥，西谷正太，リサーチフェロー：長谷川尚美，伊藤颯姫，科研費心理療法士：小池春菜，新谷茉莉果，瀧浪貴夢，ガーネヴィカス，科研費研究員：宮川 希，山縣眞美子，科研費研究補助員：木村哲也，北川 航，河上優稀，鈴木 暁，藤乃巻龍之心，五十嵐香琳，併任研究員：久保田智香，佐藤英樹，柏木宏子，竹田康二，高野晴成，石川夏絵，林 大祐，一戸紀孝，渡邊 恵，樋口早子，五十嵐俊，外来研究員 6 名，客員研究員 74 名，研究生 13 名。

Ⅱ. 研究活動

A. 精神疾患の病態解明と診断法・治療法の開発研究

1) 精神疾患の脳神経画像研究（松本，高野，伊藤，長谷川，橋本）

精神疾患の脳神経画像研究は、COCORO の主なメンバーである大阪大学（藤本，山森，安田客員研究員），生理学研究所（福永，三浦客員研究員），筑波大学（根本客員研究員），東京大学（岡田，森田客員研究員），北海道大学（橋本直樹客員研究員），山口大学（中川客員研究員），京都大学（宮田客員研究員），富山大学（高橋客員研究員），名古屋大学（池田，尾崎客員研究員），岐阜大学（大井客員研究員），榊原病院（鬼塚客員研究員），昭和大学（中村客員研究員），徳島大学（沼田客員研究員），産業医科大学（吉村客員研究員），奈良医科大学（牧之段客員研究員），慈恵医科大学（小高客員研究員），日本医科大学（肥田客員研究員），広島大学などの多施設共同研究にて行っている。統合失調症を中心に三次元脳構造画像解析，拡散テンソル画像解析，安静時機能的 MRI 解析などを行っている。また，脳病態統合イメージングセンター（IBIC）臨床脳画像研究部の高野部長と共に，Integrative Brain Imaging Support System（IBISS：アイビス）による脳 MRI 画像データの品質評価及び管理システムの運用を行っている。国際的な脳神経画像の巨大コンソーシアムである ENIGMA との共同研究も引き続き行っている。

4 大精神疾患（統合失調症，双極症，抑うつ症，自閉スペクトラム症）の患者 2,526 名と健常者 3,078 名の MRI 脳構造画像を用いた大脳皮質下領域の体積のクラスタリング解析により認知機能および社会機能と関連する 4 つの脳バイオタイプを昨年度に見出した。この研究を臨床現場に落とし込むべく，大脳皮質下体積のクラスタリングにより定義された 4 つの脳バイオタイプのうち，辺縁系が著しく小さいバイオタイプ 1 に注目し，その臨床的意義を詳細に検討した。側脳室拡大（Enlarged Ventricle: EV）がバイオタイプ 1 の代表的特徴であることが見

いだされた。EVが健常者の3標準偏差以上であることで判別することにより感度・特異度99%の高い判別能を示した。一方で、約1%の健常者にもEV認められたためさらなる層別化指標が必要であると考えられた。そこでEVに加えて認知機能障害（Cognitive Impairment: CI）の有無により再分類を行い、EVC群として層別化することに成功した。その結果、EVC群では統合失調症の割合が高く、脳波異常や稀な病的コピー数変異も顕著に高頻度で認められた。これは精神疾患の新たな診断分類の候補となる可能性が示唆された。本成果は、精神疾患を脳科学的な指標により分類することに初めて成功したものであり、今後の精神疾患診断体系に影響を与えうる最重要な研究成果であると考えられた（松本、伊藤、長谷川、橋本, Yasuda et al., *Neuropsychopharmacol Rep*, 2025）。これらの研究により、今年度は5編の論文成果があった。

2) 精神疾患の眼球運動研究（松本、伊藤、長谷川、橋本）

精神疾患の眼球運動研究は、大阪大学（藤本、山森、安田客員研究員）、名古屋大学（池田客員研究員）、東京大学（森田客員研究員）、奈良医科大学（牧之段客員研究員）、北海道大学（橋本直樹、吉田、岡田客員研究員）、岐阜大学（大井客員研究員）、徳島大学（沼田客員研究員）、愛知医科大学（宮田客員研究員）、生理学研究所（福永客員研究員）、榊原病院（鬼塚客員研究員）、獨協医科大学（古郡客員研究員）、福岡大学（堀客員研究員）などとの多施設共同研究にて行っている。統合失調症患者の精神症状の基礎にある病態生理学的メカニズムとして、異常なサリエンス処理が提唱されており、そのうちの視覚サリエンスについて統合失調症238例、双極症41例、うつ病50例、自閉スペクトラム症133例、健常者550例合わせて1012例の疾患横断的なメタアナリシスを行った。その結果、統合失調症に最も強く視覚サリエンス異常が認められ、次いで双極性障害、大うつ病性障害、自閉症スペクトラム障害の患者においても認められ、これらの疾患のサリエンス処理の異常と精神病の強さ・頻度との関連が示唆された（三浦、松本、伊藤、長谷川、橋本, Miura et al., *Mol Psychiatry*, 2025）。眼球運動と認知機能を用いた統合失調症の診断マーカーの社会実装化を企業と10医療機関の共同研究にて推進している。医療現場で実施可能なタブレット機器にて簡便に測定できる医療機器プログラム開発を進め、タブレット実装を行った。iPad Proに搭載した自由視眼球運動課題と2種類の認知機能評価ツールを用いて、統合失調症と健常者の鑑別に役立つ成果が得られた（森田、松本、三浦、伊藤、長谷川、橋本, Morita et al., *JMIR Ment Health*, 2024）。これらの研究により、今年度は3編の論文成果があった。

3) 認知社会機能プロジェクト（松本、伊藤、長谷川、橋本）

広く診療で使えるような統合失調症の認知機能障害の簡便な測定法を開発し、2,000例程度のデータをCOCOROにて集積して解析し、普及のため各地で講習会などを行っている。認知機能障害は、簡略版WAISで測定する推定知能とJapanese Adult Reading Test (JART)で測定する推定病前知能の差にて算出したものである。例年行っている日本統合失調症学会のワークショップは2024年4月に実施した。統合失調症の認知機能の評価にはWAISが多く用いられるが、基本検査の実施には時間と負担を要するのが課題だった。旧版であるWAIS-IIIでは類似と記号探しによる簡略版が開発されていたことを受け、最新版WAIS-IVにおいて両課題を用いた簡略版の有用性を検討した。結果、両課題は患者における知能の因子構造を代表し、全検査IQの推定に十分な説明力を有していた。さらに簡略版を用いた場合も、認知機能と社会機能の間に正の相関を認めた。以上より、本簡略版の有用性が確認された（伊藤、松本、長谷川、橋本, Ito et al., *NPPR*, 2025）。効率的な認知機能評価法として今後の活用が期待され、今後はWAIS-IV簡略版を普及することになった。また、精神症状と認知社会機能検査データから、労働時間のアウトカムを予測し統合失調症患者にフィードバックするシステムを開発し、住吉らが複数の国際学会において発表した。今年度は3編の論文成果があった。

4) 精神疾患のゲノム・生体試料・分子メカニズム研究（橋本，松本）

精神疾患のゲノム・生体試料研究は、国内においては大阪大学（藤本，山森，安田，橋本 均客員研究員），名古屋大学（尾崎客員研究員），東京農業大学（中澤客員研究員），新潟大学（菊地客員研究員），徳島大学（沼田客員研究員），岐阜大学（大井客員研究員），奈良医科大学（牧之段客員研究員），東京都医学研究所（新井客員研究員），福島県立医科大学などとの共同研究，そして国外においては双極性障害におけるリチウムの治療反応性の遺伝学研究のコンソーシアムである ConLiGen や ENIGMA との共同研究を中心に行っている．統合失調症に認められる 3q29 欠失や自閉スペクトラム症で認められる POGZ 変異の iPS 細胞における機能解析を行い，徐々に成果が得られている．神経研究所微細構造研究部（一戸部長：併任）と自閉スペクトラム症に関する共同研究を引き続き行っている．これらの研究により，今年度は 5 編の論文成果があった．

B. 精神科医療の普及・均てん化に関する研究

1) 精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動：EGUIDE プロジェクト（長谷川，久保田，佐藤，柏木，伊藤，松本，橋本）

EGUIDE プロジェクトは，精神科医に対してガイドラインの教育の講習を行い，ガイドラインの効果を検証する社会実証研究である．EGUIDE プロジェクトの主なメンバーである杏林大学（渡邊客員研究員），北里大学（稲田客員研究員），獨協医科大学（古郡客員研究員），兵庫医科大学（山田客員研究員），福岡大学（堀客員研究員）など，33 名の客員研究員と共に共同研究を実施している．

対象とするガイドラインは，統合失調症薬物治療ガイドライン，うつ病治療ガイドライン，精神疾患を合併した，或いは合併の可能性のある妊産婦の診療ガイドと統合失調症に合併する肥満・糖尿病の予防ガイドであり，日本神経精神薬理学会，日本うつ病学会，日本臨床精神神経薬理学会，日本精神神経学会のバックアップを受けて行っている．統合失調症とうつ病のそれぞれに対する標準的な治療である抗精神病薬単剤治療率と抗うつ薬単剤治療率がたった 50・60%程度であり，しかも，0～100%と病院によって大きくばらついており，均てん化（全国どこでも標準的な専門医療を受けられるよう，医療技術等の格差の是正を図ること）が必要であることを明らかにしてきた．

2016 年に開始した EGUIDE プロジェクトは，本年度 47 大学 320 医療機関が参加する巨大なプロジェクトになり，毎年 10 回以上の講習会を全国で行い，延べ 5,000 名以上が講習を受講した．EGUIDE プロジェクトにおける検証活動は，講習受講直後のガイドラインの理解度の向上，その後のガイドラインを遵守した治療行動調査における実践度の向上，処方行動を診療の質（Quality Indicator: QI）という形で測定し，例えば統合失調症患者の退院時の抗精神病薬単剤治療率というような QI を設定し，経時的に測定することにより，講習の効果の有無についての検討を行っている．この講習を受講した受講者の満足度は非常に高く，たった一日の講習を受けることにより統合失調症とうつ病の両方のガイドラインに対する理解度が顕著に向上すること実証し，そのガイドラインの実践度も顕著に向上し，それが 2 年間持続することを示してきた．また，講習受講者においては，その処方がガイドラインの推奨に沿ったものに変わることが示され，総合的な講習効果が証明された．

現在様々な医療領域において，診療ガイドラインが作成されているが，臨床現場で実際に活用される，すなわち，社会実装されるためにはどうすればよいのかは明確ではなかった．特に，日本においては他の診療科領域を含めても初めての成果であり，精神科領域においては世界で初めての成果である．本成果により，精神科医がこの講習を受講することにより，精神疾患患者が標準的な治療を全国どこでも受けられるようになることが期待された．このような講習会活動が，精神科領域のみではなく，全ての診療領域や全ての診療ガイドラインにおいて行われ

るようになれば、診療ガイドラインの社会実装が進み、全国のどこにいても、誰もが診療ガイドラインの推奨する治療を受けることができるようになることが期待された。

統合失調症とうつ病の治療においては、睡眠薬処方率は推奨されていないが、実臨床においては多くの患者に処方されており、多剤併用の温床となっていることが指摘されている。精神科医の治療行動に対する講習の効果を検証するために、講習を受講した医師が担当した患者と、講習を受講していない医師が担当した患者で、睡眠薬の処方率と、睡眠薬の種類毎の処方率について比較した。結果、統合失調症、うつ病の両疾患において、講習を受講した医師が担当した患者においては、睡眠薬の処方率が低いこと（統合失調症 受講群 50.9%、非受講群 57.5%、うつ病 受講群 60.9%、非受講群 66.3%）、睡眠薬の種類ではベンゾジアゼピン受容体作動薬の処方率が低いこと（統合失調症 受講群 32.5%、非受講群 40.9%、うつ病 受講群 26.1%、非受講群 35.6%）が明らかになった。多変量ロジスティック回帰分析においても、これらの有意な関連が認められた。このことから、睡眠薬についても、EGUIDE 講習が適正使用の推進に効果があることが示唆された（長谷川、松本、伊藤、橋本, Nakamura et al., BMC Psychiatry, 2024）。

統合失調症薬物治療ガイドラインでは慢性便秘症を起こしやすい薬剤として、抗コリン作用を持つ薬剤が挙げられており抗精神病薬に併用しないことが望ましいとされているが、実態はあまり調査されていない。本研究では統合失調症患者さん 139 名の退院時の処方調査を行い、便秘薬の有無による比較検討を行った。その結果、便秘薬の処方がある患者さんは、ベンゾジアゼピン受容体作動薬の処方割合が 66%と、便秘薬の処方がない患者さんの 39%に比べ、有意に高くなっていた（多変量解析によるベンゾジアゼピン受容体作動薬の有無によるオッズ比は 3.0 倍）。統合失調症の患者さんに便秘薬が処方されている際は、向精神薬として抗コリン薬だけでなくベンゾジアゼピン受容体作動薬の併用処方にも留意し、減量・中止を検討する必要があることを示唆している（長谷川、松本、伊藤、橋本, Ochi et al., Neuropsychopharmacol Rep, 2024）。

このように日本の精神科診療実態調査では、全国の平均値や病院ごとの平均値を検討して検討しているが、一人一人の患者については、どれぐらいガイドラインに準拠した治療を行っているかを評価する方法はなく、ガイドラインの全ての臨床疑問を網羅して解釈をした上で、患者に説明して共同意思決定を行うこととなる。精神科医はもちろんガイドラインを踏まえた適切な解釈をできるように精進すべきであるが、患者がその全てを同じように理解することは困難である。そこで、患者がより理解しやすくなるように、処方がどれぐらいガイドラインに一致しているかという指標（ガイドライン一致率: Individual fitness score: IFS）を作成している。そして、この IFS が高いほど精神症状が軽く、労働時間が長いということ成果も得られており、臨床的な意義も示されている。

この IFS は、最もガイドラインに適合している処方を 100%とし、ガイドラインにて勧められていない治療を行うと減少し、最低が 0%となっている。この際に最も重要なことは、統合失調症においてもうつ病においても、下位診断（統合失調症：治療抵抗性、うつ病：軽症／中等症・重症/精神病性）によって推奨される治療が異なるため、最もガイドラインに適合している治療が異なるということである。例えば統合失調症においては第二世代抗精神病薬単剤治療を行うと 100%であり、抗精神病薬や向精神薬の併用を行うと一剤あたり 10~20%を減少する。治療抵抗性統合失調症においては、クロザピン治療を行うと 100%となり、クロザピン治療を行っていないと 60%となる。このような IFS を用いた診療場面として、統合失調症患者が不眠を訴え睡眠薬の処方を希望した際に、IFS が 80%から 60%になることを説明し、ガイドラインでは不眠の場合にはその原因を精査することになっていることから、問診を行って、不眠の理由は幻聴の悪化とわかり、抗精神病薬の用量が不十分なので増量するという対応を行うというような流れとなる。患者にとっては、点数にて自身の処方と標準的な治療との違いが理解しやすく、標準的な治療を行うことについて説明することによって、治療に対する理解を深めやすくなると考えられる画期的な研究成果であるため、その普及に努め、本年度は専用のホーム

ページを作成した。このように、ガイドラインの普及教育検証活動を全国で行い、論文成果は4編であった。

2) 精神科治療ガイドラインの作成・改訂（橋本）

2022年に改訂された統合失調症薬物治療ガイドライン2022に続いて、2023年に当事者・支援者のために統合失調症薬物治療ガイドが当事者支援者向けとして公表された。そして、本年度このガイドラインの英語版が公表された（橋本，日本神経精神薬理学会，日本臨床精神神経薬理学会，NPPR，2025）。EGUIDEプロジェクトにて広く普及に努めており，その普及の過程で得られた内容を踏まえて，統合失調症薬物治療ガイドラインの改訂がスタートし，2027年に公表する予定である。ガイドライン作成について次世代に引き継ぐべく，今回の改訂については顧問として参画することとなっている。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・ 統合失調症薬物治療ガイドライン及びうつ病ガイドラインの当事者・支援者版のガイドを用いた当事者や支援者用の講習を開始しており，各学会や家族内などで行っている（伊藤，橋本）。

(2) 専門教育面における貢献

- ・ 統合失調症やうつ病などのガイドラインの作成を行い，精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動であるEGUIDEプロジェクトを全国展開している。EGUIDEプロジェクトにおいては，統合失調症薬物治療ガイドラインとうつ病治療ガイドラインの講習を全国の精神科医を対象に行い，その医療機関における治療に影響を与えるかどうかについての検討を行い，精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果を検証している。令和6年度は，統合失調症薬物治療ガイドラインとうつ病治療ガイドラインの講習を全国20か所で行い，学会等におけるワークショップを5回行い，延べ587名が参加した（長谷川，久保田，柏木，橋本）。
- ・ 国立大学法人 大阪大学の医学系研究科，連合小児発達学研究科においては招へい教授として，奈良県立医科大学においては非常勤講師として，精神医学研究の指導や知見の教授を行っている（橋本）。

(3) 精研の研修の主催と協力

- ・ 2024年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修で第3回の統合失調症の標準治療研修とうつ病の標準治療研修を行った（柏木，長谷川，橋本）。

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

- ・ EGUIDEプロジェクトにおいて統合失調症およびうつ病の入院患者の処方についての実態調査を9年前から行っており，その処方データは今年度約3万症例に達している（橋本）。

(5) センター内における臨床的活動

- ・ 外来診療において，連携新患，統合失調症外来をそれぞれ週に1回の新患枠の診察及び，再診を週に半日行っている。専門として，統合失調症及び発達障害の診療を行い，病院内外からの紹介を受け，セカンドオピニオン対応も行っている（橋本）。

(6) その他

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Herrera-Rivero M, Gutiérrez-Fragoso K, International Consortium on LithiumGenetics (ConLi+Gen), Kurtz J, Baune BT: Immunogenetics of lithium response and psychiatric phenotypes in patients with bipolar disorder. *Transl Psychiatry* 14(1):174, 2024.
- 2) Nakamura T, Furihata R, Hasegawa N, Kodaka F, Muraoka H, Ichihashi K, Ochi S, Numata S, Tsuboi T, Makinodan M, Iida H, Onitsuka T, Kashiwagi H, Takeshimia M, Hashimoto N, Nagasawa T, Usami M, Yamagata H, Takesu Y, Miura K, Matsumoto J, Ohi K, Yamada H, Hori H, Inada K, Watanabe K, Hashimoto R, Yasui-Furukori N: The effect of education regarding treatment guidelines for schizophrenia and major depressive disorders on psychiatrists' hypnotic medication prescribing behavior: a multicenter study. *BMC Psychiatry* 24(1):388, 2024.
- 3) Morita K, Miura K, Toyomaki A, Makinodan M, Ohi K, Hashimoto N, Yasuda Y, Mitsudo T, Higuchi F, Numata S, Yamada A, Aoki Y, Honda H, Mizui R, Honda M, Fujikane D, Matsumoto J, Hasegawa N, Ito S, Akiyama H, Onitsuka T, Satomura Y, Kasai K, Hashimoto R: Tablet-Based Cognitive and Eye Movement Measures as Accessible Tools for Schizophrenia Assessment: Multisite Usability Study. *JMIR Ment Health* 11:e56668, 2024.
- 4) Rootes-Murdy K, Panta S, Kelly R, Romero J, Quide Y, Cairns MJ, Loughland C, Carr VJ, Catts SV, Jablensky A, Green MJ, Henskens F, Kiltschewskij D, Michie PT, Mowry B, Pantelis C, Rasser PE, Reay WR, Schall U, Scott RJ, Watkeys OJ, Roberts G, Mitchell PB, Fullerton JM, Overs BJ, Kikuchi M, Hashimoto R, Matsumoto J, Fukunaga M, Sachdev PS, Brodaty H, Wen W, Jiyang Jiang J, Fani N, Ely TD, Lorio A, Stevens JS, Ressler K, Jovanovic T, van Rooij SJH, Federmann FM, Jockwitz C, Teumer A, Forstner AJ, Caspers S, Cichon S, Plis SM, Sarwate AD, Calhoun VD: Cortical Similarities in Psychiatric and Mood Disorders Identified in Federated VBM Analysis via COINSTAC. *Patterns* 5:100987, 2024.
- 5) Niitsu T, Yasui-Furukori N, Inada K, Kanazawa T, Iyo M, Ueno T, Hashimoto R: Current practice for clozapine-induced leukopenia in Japanese psychiatric hospitals: A nationwide survey. *Schizophr Res* 268:82-87, 2024.
- 6) Herrera-Rivero M, Adli M, Akiyama K, Akula N, Amare AT, Ardau R, Arias B, Aubry JM, Backlund L, Bellivier F, Benabarre A, Bengesser S, Bhattacharjee AK, Biernacka JM, Birner A, Cearns M, Cervantes P, Chen HC, Chillotti C, Cichon S, Clark SR, Colom F, Cruceanu C, Czerski PM, Dalkner N, Degenhardt F, Del Zompo M, DePaulo JR, Etain B, Falkai P, Ferensztajn-Rochowiak E, Forstner AJ, Frank J, Frisén L, Frye MA, Fullerton JM, Gallo C, Gard S, Garnham JS, Goes FS, Grigoriu-Serbanescu M, Grof P, Hashimoto R, Hasler R, Hauser J, Heilbronner U, Herms S, Hoffmann P, Hou L, Hsu YH, Jamain S, Jiménez E, Kahn JP, Kassem L, Kato T, Kelsoe J, Kittel-Schneider S, Kuo PH, Kusumi I, König B, Laje G, Landén M, Lavebratt C, Leboyer M, Leckband SG, Maj M, Manchia M, Marie-Claire C, Martinsson L, McCarthy MJ, McElroy SL, Millischer V, Mitjans M, Mondimore FM, Monteleone P, Nievergelt CM, Novák T, Nöthen MM, O'Donovan C, Ozaki N, Papiol S, Pfennig A, Pisanu C, Potash JB, Reif A, Reininghaus E, Richard-Lepouriel H, Roberts G, Rouleau GA, Rybakowski JK, Schalling M, Schofield PR, Schubert KO, Schulte EC, Schweizer BW, Severino G, Shekhtman T, Shilling PD, Shimoda K, Simhandl C, Slaney CM, Squassina A, Stamm T, Stopkova P, Streit F, Tekola-Ayele F, Thalamuthu A, Tortorella A, Turecki G, Veeh J, Vieta E, Viswanath B, Witt SH, Zandi PP, Alda M, Bauer M, McMahon

- FJ, Mitchell PB, Rietschel M, Schulze TG, Baune BT: Exploring the genetics of lithium response in bipolar disorders. *Int J Bipolar Disord* 12(1):20, 2024.
- 7) Jiang Y, Luo C, Wang J, Palaniyappan L, Chang X, Xiang S, Zhang J, Duan M, Huang H, Gaser C, Nemoto K, Miura K, Hashimoto R, Westlye LT, Richard G, Fernandez-Cabello S, Parker N, Andreassen OA, Kircher T, Nenadić I, Stein F, Thomas-Odenthal F, Teutenberg L, Usemann P, Dannlowski U, Hahn T, Grotegerd D, Meinert S, Lencer R, Tang Y, Zhang T, Li C, Yue W, Zhang Y, Yu X, Zhou E, Lin CP, Tsai SJ, Rodrigue AL, Glahn D, Pearlson G, Blangero J, Karuk A, Pomarol-Clotet E, Salvador R, Fuentes-Claramonte P, Garcia-León MÁ, Spalletta G, Piras F, Vecchio D, Banaj N, Cheng J, Liu Z, Yang J, Gonul AS, Uslu O, Burhanoglu BB, Uyar Demir A, Rootes-Murdy K, Calhoun VD, Sim K, Green M, Quidé Y, Chung YC, Kim WS, Sponheim SR, Demro C, Ramsay IS, Iasevoli F, de Bartolomeis A, Barone A, Ciccarelli M, Brunetti A, Cocozza S, Pontillo G, Tranfa M, Park MTM, Kirschner M, Georgiadis F, Kaiser S, Van Rheen TE, Rossell SL, Hughes M, Woods W, Carruthers SP, Sumner P, Ringin E, Spaniel F, Skoch A, Tomecek D, Homan P, Homan S, Omlor W, Cecere G, Nguyen DD, Preda A, Thomopoulos SI, Jahanshad N, Cui LB, Yao D, Thompson PM, Turner JA, van Erp TGM, Cheng W; ENIGMA Schizophrenia Consortium; Feng J; ZIB Consortium: Neurostructural subgroup in 4291 individuals with schizophrenia identified using the subtype and stage inference algorithm. *Nat Commun* 15(1):5996, 2024.
 - 8) Kusaka M, Kageyama M, Yokoyama K, Ichihashi K, Hashimoto R, Nishio K, Solomon P: Effects of an online program about intimate and romantic relationships for people with mental disorders (AIRIKI): a study protocol for a randomized controlled trial. *BMC Psychiatry* 24(1):731, 2024.
 - 9) Miyake N, Tsurusaki Y, Fukai R, Kushima I, Okamoto N, Ohashi K, Nakamura K, Hashimoto R, Hiraki Y, Son S, Kato M, Sakai Y, Osaka H, Deguchi K, Matsuishi T, Takeshita S, Fattal-Valevski A, Ekhilevitch N, Tohyama J, Yap P, Keng WT, Kobayashi H, Takubo K, Okada T, Saitoh S, Yasuda Y, Murai T, Nakamura K, Ohga S, Matsumoto A, Inoue K, Saikusa T, HersHKovitz T, Kobayashi Y, Morikawa M, Ito A, Hara T, Uno Y, Seiwa C, Ishizuka K, Shirahata E, Fujita A, Koshimizu E, Miyatake S, Takata A, Mizuguchi T, Ozaki N, Matsumoto N: Molecular diagnosis of 405 individuals with autism spectrum disorder. *Eur J Hum Genet* 32(12):1551-1558, 2024.
 - 10) Nakatochi M, Kushima I, Aleksic B, Kimura H, Kato H, Inada T, Torii Y, Takahashi N, Yamamoto M, Iwamoto K, Nawa Y, Iritani S, Iwata N, Saito T, Ninomiya K, Okochi T, Hashimoto R, Yamamori H, Yasuda Y, Fujimoto M, Miura K, Ohi K, Shioiri T, Kitaichi K, Itokawa M, Arai M, Miyashita M, Toriumi K, Takahashi T, Suzuki M, Kato TA, Kanba S, Horikawa H, Kasai K, Ikegame T, Jinde S, Kato T, Kakiuchi C, Yamagata B, Nio S, Kunii Y, Yabe H, Okamura Y, Tadaka S, Fumihiko U, Obara T, Yamamoto Y, Arioka Y, Mori D, Ikeda M, Ozaki N: Copy number variations in RNF216 and postsynaptic membrane-associated genes are associated with bipolar disorder: a case-control study in the Japanese population. *Psychiatry Clin Neurosci* 79(1):12-20, 2025.
 - 11) Wada A, Yamada R, Yamada Y, Sumiyoshi C, Hashimoto R, Matsumoto J, Kikuchi A, Kubota R, Matsui M, Nakachi K, Fujimaki C, Adachi L, Stickley A, Yoshimura N, Sumiyoshi T: Autistic trait severity in early schizophrenia: Role in subjective quality of life and social functioning. *Schizophr Res* 275:131-136, 2025.
 - 12) Japanese Society of Neuropsychopharmacology, Japanese Society of Clinical Neuropsychopharmacology: Guideline for pharmacological treatment of schizophrenia 2022. *Neuropsychopharmacol Rep* 45(1):e12497, 2025.

- 13) Ochi S, Tsuboi T, Hasegawa N, Hori H, Ichihashi K, Imamura Y, Okada T, Kodaka F, Saito Y, Iga JI, Onitsuka T, Atake K, Ueno SI, Hashimoto R, Yasui-Furukori N: The association between benzodiazepine prescriptions and the risk of laxative use in schizophrenia treatment. *Neuropsychopharmacol Rep* 45(1):e12499, 2025.
- 14) Ito S, Sumiyoshi C, Matsumoto J, Miura K, Yasuda Y, Hasegawa N, Takano H, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Usefulness of the WAIS-IV Short Form for Measuring Cognitive Function in Patients With Schizophrenia. *Neuropsychopharmacol Rep* 45(1):1-6, 2025.
- 15) Yasuda Y, Ito S, Matsumoto J, Okada N, Onitsuka T, Ikeda M, Kushima I, Sumiyoshi C, Fukunaga M, Nemoto K, Miura K, Hashimoto N, Ohi K, Takahashi T, Sasabayashi D, Koeda M, Yamamori H, Fujimoto M, Takano H, Hasegawa N, Narita H, Yamamoto M, Tha KK, Kikuchi M, Kamishikiryo T, Itai E, Okubo Y, Tateno A, Nakamura M, Kubota M, Igarashi H, Hirano Y, Okada G, Miyata J, Numata S, Abe O, Yoshimura R, Nakagawa S, Yamasue H, Ozaki N, Kasai K, Hashimoto R: Proposal for a Novel Classification of Patients With Enlarged Ventricles and Cognitive Impairment Based on Data-Driven Analysis of Neuroimaging Results in Patients With Psychiatric Disorders. *Neuropsychopharmacol Rep* 45(1):e70010, 2025.
- 16) Miura K, Yoshida M, Morita K, Fujimoto M, Yasuda Y, Yamamori H, Takahashi J, Miyata S, Okazaki K, Matsumoto J, Toyomaki A, Makinodan M, Hashimoto N, Onitsuka T, Kasai K, Ozaki N, Hashimoto R: Gaze behaviors during free viewing revealed differences in visual salience processing across four major psychiatric disorders: a mega-analysis study of 1012 individuals. *Mol Psychiatry* 30(4):1594-1600, 2025.
- 17) Kyuragi Y, Oishi N, Hatakoshi M, Hirano J, Noda T, Yoshihara Y, Ito Y, Igarashi H, Miyata J, Takahashi K, Kamiya K, Matsumoto J, Okada T, Fushimi Y, Nakagome K, Mimura M, Murai T, Suwa T: Segmentation and Volume Estimation of the Habenula Using Deep Learning in Patients With Depression. *Biol Psychiatry Glob Open Sci* 4(4):100314, 2024.
- 18) Ishikawa Y, Oishi N, Kyuragi Y, Hatakoshi M, Hirano J, Noda T, Yoshihara Y, Ito Y, Miyata J, Nemoto K, Fujita Y, Igarashi H, Takahashi K, Murakami S, Kanno H, Izumi Y, Takamiya A, Matsumoto J, Kodaka F, Nakagome K, Mimura M, Murai T, Suwa: Electroconvulsive therapy-specific volume changes in nuclei of the amygdala and their relationship to long-term anxiety improvement in depression. *Mol Psychiatry Online* ahead of print.
- 19) 福本健太郎, 稲田 健, 村岡寛之, 井手健太, 小高文聰, 越智紳一郎, 安田由華, 飯田仁志, 堀輝, 大井一高, 市橋香代, 伊藤颯姫, 川俣安史, 古郡規雄, 橋本亮太: Individual Fitness Score (IFS)による治療ガイドライン一致率の評価: 臨床的での活用に向けて. *精神医学* 66(9):1215-1223, 2024.
- 20) 岡崎康輔, 三浦健一郎, 松本純弥, 長谷川尚美, 藤本美智子, 山森英長, 安田由華, 牧之段 学, 橋本亮太: 眼球運動と認知機能を用いた統合失調症患者と健常者の臨床診断による判別. *精神神経学雑誌* 126(6):359-365, 2024.

(2) 総説

- 1) 橋本亮太: 学会からの研究推進の提言～当事者・家族・一般向けを作成しました. *メンタルヘルスマガジン* ころの元気+ 18(11):42-43, 2024.
- 2) 橋本亮太, 伊藤颯姫, 長谷川尚美, 安田由華, 松本純弥: バイオマーカー研究の最前線(1): 脳画像研究から何がわかったのか. *福岡行動医学雑誌* 30(1):31-35, 2024.
- 3) 橋本亮太: ガイドラインの普及と啓発による「診療の均てん化」. *メンタルヘルスマガジン* ころの元気+ 18(12):42-43, 2024.
- 4) 松本純弥, 伊藤颯姫, 長谷川尚美, 橋本亮太: 双極性障害における大規模 MRI 研究. *メディ*

カルサイエンスダイジェスト 51(3):9-12, 2025.

(3) 著書

- 1) 橋本亮太, 井出健太: 編著, 向精神薬のエビデンスベースドプラクティス. 月刊薬事 10 月臨時増刊号. じほう, 東京, 66(14):1-288, 2024.

(4) 研究報告書

- 1) 橋本亮太, 松本純弥, 安田由華: 精神科領域のガイドラインの社会実装化に関する検証研究. 2024 年度日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業 (精神障害分野) 2024 年度 委託研究開発成果報告書. 2025.
- 2) 橋本亮太, 松本純弥, 安田由華: AI 技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発に関する研究. 2024 年度日本医療研究開発機構 医工連携・人工知能実装研究事業 2024 年度 委託研究開発成果報告書. 2025.
- 3) 橋本亮太, 松本純弥: iPS 細胞技術とデータ科学を融合した精神疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究. 2024 年度日本医療研究開発機構 脳神経科学統合プログラム (精神・神経疾患メカニズム解明プロジェクト) 2024 年度 委託研究開発成果報告書. 2025.
- 4) 橋本亮太: 横断的患者リクルート促進. 2024 年度日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業 (精神障害分野) 「マイレジストリの縦断データを活用した新規治療法開発と薬事承認の実現 (研究開発代表者: 竹田和良)」 2024 年度 委託研究開発成果報告書. 2025.
- 5) 橋本亮太: 解析対象 ASD/SCZ 家系の選定と臨床情報の収集. 2024 年度日本医療研究開発機構 ゲノム医療実現バイオバンク利活用プログラム・B-Cure ゲノム医療実現推進プラットフォーム・先端ゲノム研究開発事業「精神疾患の個別化医療を実現するためのゲノム・空間オミクス多施設共同研究 (研究開発代表者: 徳永勝士)」 2024 年度 委託研究開発成果報告書. 2025.
- 6) 松本純弥, 長谷川尚美: 精神疾患の病前推定知能と脳構造画像についての疾患横断の大規模多施設研究. 2024 年度科学研究費助成事業 基盤研究 (C) 研究実施状況報告書. 2025.
- 7) 長谷川尚美: 精神科領域の治療ガイドラインの普及と教育が実臨床の治療行動に及ぼす効果の検証. 2024 年度科学研究費助成事業 若手研究実施状況報告書. 2025.

(5) 翻訳

- 1) 橋本亮太 (日本神経精神薬理学会 日本臨床精神神経薬理学会 翻訳チームメンバー): 統合失調症薬物治療ガイドライン 2022. Neuropsychopharmacol Rep, 東京, 2024.

(6) その他

- 1) 橋本亮太: 朝日新聞「適切な投薬へ, 最新治療学ぶ 抗うつ薬 2 種類以上処方 41%」. 2024.5.21.
- 2) 橋本亮太: 読売新聞 (医療健康面) 「最適治療の手助けに, 統合失調症 薬物治療指針に患者の声」. 2024.11.16.

B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Hashimoto R: Mega-analysis study of cerebral cortical and subcortical structure in four major psychiatric disorders and a data-driven approach for classification. 2024 Congress of the Schizophrenia International Research Society (SIRS2024), Florence, 2024.4.5.
- 2) 橋本亮太: 精神疾患の世界を変える～野望を持って理想を目指せ! . 第 54 回日本神経精神薬理学会・第 34 回日本臨床精神神経薬理学会合同年会, 東京, 2024.5.24.
- 3) 橋本亮太: 「精神疾患の克服と障害支援にむけた研究推進の提言」とは何か? . 第 120 回日本精神神経学会学術総会, 北海道, 2024.6.21.

- 4) 橋本亮太：病態に基づく診断基準を精神科領域に導入する戦略とは何か？．第120回日本精神神経学会学術総会，北海道，2024.6.21.
- 5) 橋本亮太：ガイドラインの作成経験～統合失調症薬物治療ガイドライン2022～．第27回日本精神保健・予防学会学術集会，東京，2024.11.24.

(2) 一般演題

- 1) Matsumoto J, Fukunaga M, Miura K, Nemoto K, Okada N, Hashimoto N, Ohi K, Takahashi T, Koeda M, Yamamori H, Fujimoto M, Yasuda Y, Ito S, Hasegawa N, Koike S, Nakamura M, Okada G, van Erp TGM, Turner J, Thompson PM, Miyata J, Numata S, Onitsuka T, Yoshimura R, Nakagawa S, Watanabe Y, Ozaki N, Hashimoto R: Large-Scale Cross-Disorder Analysis of Cerebral Cortical Patterns in the Four Major Psychiatric Disorders: A Multi-Institutional Structural MRI Imaging Study. 2024 Congress of the Schizophrenia International Research Society (SIRS2024), Florence, 2024.4.6.
- 2) Yasuda Y, Ito S, Matsumoto J, Okada N, Fukunaga M, Nemoto K, Miura K, Hashimoto N, Ohi K, Takahashi T, Koeda M, Yamamori H, Fujimoto M, Hasegawa N, Koike S, Nakamura M, Okada G, Miyata J, Numata S, Onitsuka T, Yoshimura R, Nakagawa S, Watanabe Y, Ozaki N, Hashimoto R: Proposal for novel patient classification with enlarged lateral ventricles and cognitive decline based on data-driven analysis of neuroimaging in psychiatric disorders and clinical characterization. 2024 Congress of the Schizophrenia International Research Society (SIRS2024), Florence, 2024.4.5.
- 3) Ochi S, Kodaka F, Hasegawa N, Iga J, Kashiwagi H, Komatsu H, Tagata H, Tsui T, Numata S, Iida H, Igarashi S, Ohi K, Fukumoto K, Muraoka H, Matsumoto J, Miura K, Ueno S, Watanabe K, Inada K, Hashimoto R, Yasui-Furukori N: Associations of clozapine available institution and the diagnosis of subgroups about treatment-resistant schizophrenia or not with a higher rate of antipsychotic monotherapy and lower other concomitant psychotropics in overall schizophrenia treatment: A real-world nationwide study. CINP 2024 (World Congress Collegium Internationale Neuro-Psychopharmacologicum), Tokyo, 2024.5.24.
- 4) Hashimoto N, Yasui-Furukori N, Hasegawa N, Hori H, Iida H, Ichihashi K, Miura K, Matsumoto J, Numata S, Kodaka F, Furihata R, Inada K, Watanabe K, Hashimoto R: Change of prescription for patients with schizophrenia during admission: Real-world prescribing surveys from the Effectiveness of Guidelines for Dissemination and Education psychiatric treatment project. CINP 2024 (World Congress Collegium Internationale Neuro-Psychopharmacologicum), Tokyo, 2024.5.24.
- 5) Kawano S, Kuriu T, Katayama S, Ohtomo M, Miura D, Fukushima H, Takuma K, Ono F, Hashimoto H, Hashimoto R, Nakazawa T: Functional analysis of iPS cell-derived neurons from a patient with 3q29 deletion. CINP 2024 (World Congress Collegium Internationale Neuro-Psychopharmacologicum), Tokyo, 2024.5.25.
- 6) Yasuda Y, Ito S, Matsumoto J, Okada N, Fukunaga M, Nemoto K, Miura K, Hashimoto N, Ohi K, Takahashi T, Koeda M, Yamamori H, Fujimoto M, Hasegawa N, Koike S, Nakamura M, Okada G, Miyata J, Numata S, Onitsuka T, Yoshimura R, Nakagawa S, Watanabe Y, Ozaki N, Hashimoto R: Proposal for novel patient classification with enlarged lateral ventricles and cognitive decline based on data-driven analysis of neuroimaging in psychiatric disorders and clinical characterization. CINP 2024 (World Congress Collegium Internationale Neuro-Psychopharmacologicum), Tokyo, 2024.5.25.
- 7) Hasegawa N, Yasuda Y, Yasui-Furukori N, Hori H, Ichihashi K, Takaesu Y, Iida H, Muraoka H, Kodaka F, Matsumoto J, Miura K, Inada K, Watanabe K, Hashimoto R: Effect of

- education regarding treatment guidelines for schizophrenia and depression on the treatment behavior of psychiatrists: A multicenter study. CINP 2024 (World Congress Collegium Internationale Neuro-Psychopharmacologicum), Tokyo, 2024.5.25.
- 8) Sumiyoshi C, Ito S, Yasuda Y, Matsumoto J, Fujimoto M, Yamamori H, Hasegawa N, Takano H, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Predicting Work Outcome Based on Daily-living acts: Transdiagnostic comparison. 2025 Annual Congress of the Schizophrenia International Research Society (SIRS2025), Chicago, 2025.3.31.
 - 9) Wada A, Sumiyoshi C, Yoshimura N, Hashimoto R, Matsumoto J, Stickley A, Yamada Y, Kikuchi A, Kubota R, Matsui M, Nakachi K, Fujimaki C, Adachi L, Yamada R, Sumiyoshi T: Semantic network linked to social functioning in patients with schizophrenia. 2025 Annual Congress of the Schizophrenia International Research Society (SIRS2025), Chicago, 2025.3.31.
 - 10) Matsumoto J, Ito S, Sumiyoshi C, Yasuda Y, Hasegawa N, Fujimoto M, Yamamori H, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Pattern of Cognitive Dysfunction in Patients With Psychiatric Disorders With Lateral Ventricle Enlargement and Cognitive Impairment. 2025 Annual Congress of the Schizophrenia International Research Society (SIRS2025), Chicago, 2025.3.31.
 - 11) Wada A, Yamada R, Yamada Y, Sumiyoshi C, Hashimoto R, Matsumoto J, Kikuchi A, Kubota R, Matsui M, Nakachi K, Fujimaki C, Adachi L, Stickley A, Yoshimura N, Sumiyoshi T: Autistic trait severity in early schizophrenia: Role in subjective quality of life and social functioning. 2025 Annual Congress of the Schizophrenia International Research Society (SIRS2025), Chicago, 2025.3.31.
 - 12) Hori H, Hasegawa N, Iga J, Ochi S, Ichihashi K, Kyo Y, Hashimoto R, Yasui-Furukori N: Prescription of Anticholinergic Drugs in Patients with Schizophrenia: Analysis of Antipsychotic Prescription Patterns and Hospital Characteristics. 2025 Annual Congress of the Schizophrenia International Research Society (SIRS2025), Chicago, 2025.3.31.
 - 13) 越智紳一郎, 小高文聰, 長谷川尚美, 伊賀淳一, 柏木宏子, 小松 浩, 田形弘実, 坪井貴嗣, 沼田周助, 飯田仁志, 五十嵐 俊, 大井一高, 福本健太郎, 村岡寛之, 三浦健一郎, 松本純弥, 上野修一, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太, 古郡規雄: Associations of clozapine available institution and the diagnosis of subgroups about treatment resistant schizophrenia or not with higher rate of antipsychotic monotherapy and lower other concomitant psychotropics in overall schizophrenia treatment: A real-world nationwide study. 第 18 回日本統合失調症学会, 徳島, 2024.4.14.
 - 14) 伊藤颯姫, 住吉チカ, 松本純弥, 三浦健一郎, 安田由華, 長谷川尚美, 高野晴成, 住吉太幹, 橋本亮太: 統合失調症における認知機能測定のための WAIS-IV 簡略版の有用性. 第 18 回日本統合失調症学会, 徳島, 2024.4.14.
 - 15) 長谷川尚美, 山田 恒, 堀 輝, 古郡規雄, 松本純弥, 三浦健一郎, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太: EGUIDE プロジェクトの広がりとは大規模多施設研究による統合失調症の real-world study. 第 18 回日本統合失調症学会, 徳島, 2024.4.14.
 - 16) 松本純弥, 高野晴成, 根本清貴, 福永雅喜, 三浦健一郎, 杉崎友美, 伊藤颯姫, 岡田直大, 小池進介, 岡田 剛, 肥田道彦, 橋本直樹, 大井一高, 高橋 努, 宮田 淳, 中村元昭, 中島振一郎, 沼田周助, 牧之段 学, 長谷川尚美, 安田由華, 藤本美智子, 山森英長, 鬼塚俊明, 渡邊嘉之, 吉村玲児, 中川 伸, 尾崎紀夫, 橋本亮太: 統合失調症の病態解明に向けた多施設大規模脳神経 MRI 画像の精神疾患データベース基盤整備と研究画像データのクオリティコントロールシステム構築研究. 第 18 回日本統合失調症学会, 徳島, 2024.4.13.
 - 17) 橋本直樹, 根本清貴, 福永雅喜, 松本純弥, 三浦健一郎, 岡田直大, 大井一高, 高橋 努, 肥田

- 道彦, 山森英長, 藤本美智子, 安田由華, 長谷川尚美, 伊藤颯姫, 鬼塚俊明, 宮田 淳, 渡邊嘉之, 中川 伸, 尾崎紀夫, 橋本亮太: 健常者 20 人のデータを使用して構造 MRI データから統合失調症患者と健常者を判別する-リアルワールド多施設検証研究. 第 18 回日本統合失調症学会, 徳島, 2024.4.13.
- 18) 伊藤颯姫, 安田由華, 松本純弥, 岡田直大, 福永雅喜, 根本清貴, 三浦健一郎, 橋本直樹, 大井一高, 高橋 努, 肥田道彦, 山森英長, 藤本美智子, 長谷川尚美, 小池進介, 中村元昭, 岡田剛, 宮田 淳, 沼田周助, 鬼塚俊明, 吉村玲児, 中川 伸, 渡邊嘉之, 尾崎紀夫, 橋本亮太: 精神疾患における神経画像データ駆動型解析と臨床的特徴に基づく, 側脳室拡大と認知機能低下を伴う新しい患者分類の提案. 第 18 回日本統合失調症学会, 徳島, 2024.4.13.
- 19) 松本純弥, 高野晴成, 根本清貴, 福永雅喜, 三浦健一郎, 杉崎友美, 伊藤颯姫, 岡田直大, 小池進介, 岡田 剛, 肥田道彦, 橋本直樹, 大井一高, 高橋 努, 宮田 淳, 中村元昭, 中島振一郎, 沼田周助, 牧之段 学, 長谷川尚美, 安田由華, 藤本美智子, 山森英長, 鬼塚俊明, 渡邊嘉之, 吉村玲児, 中川 伸, 尾崎紀夫, 橋本亮太: 精神疾患データベースにおける多施設大規模脳神経 MRI 画像研究データの基盤整備とクオリティコントロールシステムの構築. 第 54 回日本神経精神薬理学会・第 34 回日本臨床精神神経薬理学会合同年会, 東京, 2024.5.25.
- 20) 橋本直樹, 古郡規雄, 長谷川尚美, 堀 輝, 飯田仁志, 市橋香代, 沼田周助, 小高文聰, 降旗隆二, 稲田 健, 橋本亮太: 薬剤の種類に着目した統合失調症とうつ病の退院時処方調査-EGUIDE 処方調査から-. 第 54 回日本神経精神薬理学会・第 34 回日本臨床精神神経薬理学会合同年会, 東京, 2024.5.25.
- 21) 長谷川尚美, 山田 恒, 堀 輝, 古郡規雄, 松本純弥, 三浦健一郎, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: EGUIDE プロジェクトの広がりとは大規模多施設研究による real-world study 2023 年度の報告. 第 54 回日本神経精神薬理学会・第 34 回日本臨床精神神経薬理学会合同年会, 東京, 2024.5.26.
- 22) 村岡寛之, 福本健太郎, 長谷川尚美, 古郡規雄, 小高文聰, 大井一高, 柏木宏子, 松本純弥, 三浦健一郎, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: 大うつ病性障害の治療における EGUIDE プログラムと重症度記載の有効性の検討. 第 120 回日本精神神経学会学術総会, 北海道, 2024.6.21.
- 23) 安田由華, 伊藤颯姫, 松本純弥, 岡田直大, 福永雅喜, 根本清貴, 三浦健一郎, 橋本直樹, 大井一高, 高橋 努, 肥田道彦, 山森英長, 藤本美智子, 長谷川尚美, 小池進介, 中村元昭, 岡田剛, 宮田 淳, 沼田周助, 鬼塚俊明, 吉村玲児, 中川 伸, 渡邊嘉之, 尾崎紀夫, 橋本亮太: 脳画像のデータ駆動型スクリーニングによる側脳室拡大と認知機能障害をもつ新たな診断分類の提唱. 第 120 回日本精神神経学会学術総会, 北海道, 2024.6.21.
- 24) 伊藤颯姫, 大井一高, 安田由華, 藤本美智子, 山森英長, 松本純弥, 福本健太郎, 小高文聰, 長谷川尚美, 石丸徑一郎, 三浦健一郎, 古郡規雄, 橋本亮太: 統合失調症患者における薬物治療ガイドライン一致率(IFS)と労働時間の関係. 第 120 回日本精神神経学会学術総会, 北海道, 2024.6.21.
- 25) 松本純弥, 高野晴成, 根本清貴, 福永雅喜, 三浦健一郎, 杉崎友美, 伊藤颯姫, 岡田直大, 小池進介, 岡田 剛, 肥田道彦, 橋本直樹, 大井一高, 高橋 努, 宮田 淳, 中村元昭, 中島振一郎, 沼田周助, 牧之段 学, 長谷川尚美, 安田由華, 藤本美智子, 山森英長, 鬼塚俊明, 渡邊嘉之, 吉村玲児, 中川 伸, 尾崎紀夫, 橋本亮太: 多施設大規模脳神経 MRI 画像研究のデータベース基盤整備と画像データの質評価システム構築研究. 第 120 回日本精神神経学会学術総会, 北海道, 2024.6.22.
- 26) 古郡規雄, 大井一高, 稲田 健, 村岡寛之, 福本健太郎, 小高文聰, 橋本亮太: 抗うつ薬の使用の有無とうつ病および併存疾患の診断確信度の関係について. 第 21 回日本うつ病学会総会, 大阪, 2024.7.12.
- 27) 松本純弥, 福永雅喜, 三浦健一郎, 根本清貴, 岡田直大, 橋本直樹, 森田健太郎, 越山太輔, 大井一高, 高橋 努, 肥田道彦, 山森英長, 藤本美智子, 安田由華, 伊藤颯姫, 山崎龍一, 長谷

- 川尚美, 成田 尚, 横山仁史, 三嶋 亮, 宮田 淳, 小林祐子, 笹林大樹, 原田健一郎, 山本真江里, 平野羊嗣, 板橋貴史, 中瀧理仁, 橋本龍一郎, タ キンキン, 小池進介, 松原敏郎, 岡田 剛, 吉村玲児, 阿部 修, 鬼塚俊明, 渡邊嘉之, 松尾幸治, 山末英典, 鈴木道雄, 尾崎紀夫, 笠井清登, 橋本亮太: 多施設大規模データによるうつ病の大脳皮質構造解析. 第 21 回日本うつ病学会総会, 大阪, 2024.7.13.
- 28) 伊藤颯姫, 住吉チカ, 松本純弥, 三浦健一郎, 安田由華, 長谷川尚美, 高野晴成, 住吉太幹, 橋本亮太: 統合失調症患者の認知機能測定における WAIS-IV 簡略版の有用性. NEURO2024 (日本神経科学学会第 47 回大会, 日本神経化学学会第 67 回大会, 日本生物学的精神医学会第 46 回大会 合同大会), 福岡, 2024.7.24.
- 29) 安田由華, 伊藤颯姫, 松本純弥, 岡田直大, 福永雅喜, 根本清貴, 橋本直樹, 大井一高, 高橋努, 肥田道彦, 中村元昭, 岡田 剛, 宮田 淳, 沼田周助, 鬼塚俊明, 吉村玲児, 中川 伸, 渡邊嘉之, 尾崎紀夫, 橋本亮太: Proposal for novel patient classification with enlarged lateral ventricles and cognitive decline based on data-driven analysis of neuroimaging in psychiatric disorders and clinical characterization. NEURO2024 (日本神経科学学会第 47 回大会, 日本神経化学学会第 67 回大会, 日本生物学的精神医学会第 46 回大会 合同大会), 福岡, 2024.7.24.
- 30) 伊藤颯姫, 住吉チカ, 安田由華, 松本純弥, 藤本美智子, 山森英長, 長谷川尚美, 西谷正太, 高野晴成, 住吉太幹, 橋本亮太: 自閉スペクトラム症と統合失調症における労働に関連する要因の検討. 第 11 回成人発達障害支援学会大阪大会, 大阪, 2024.9.7.
- 31) 井手健太, 稲田 健, 福本健太郎, 長谷川尚美, 村岡寛之, 小高文聰, 越智紳一郎, 安田由華, 飯田仁志, 堀 輝, 大井一高, 市橋香代, 川俣安史, 古郡規雄, 橋本亮太: EGUIDE プロジェクトにおける個人ガイドライン適合度. 第 8 回日本精神薬学会総会・学術集会, 東京, 2024.9.21.
- 32) 越智紳一郎, 小高文聰, 長谷川尚美, 坪井貴嗣, 大井一高, 五十嵐 俊, 福本健太郎, 伊賀淳一, 村岡寛之, 飯田仁志, 田形弘実, 柏木宏子, 沼田周助, 松本純弥, 上野修一, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太, 古郡規雄: クロザピン処方体制と治療抵抗性統合失調症に関する診断の有無が抗精神病薬単剤療法率に及ぼす影響. 第 43 回日本社会精神医学会, 東京, 2025.3.13.
- 33) 清水達貴, 三浦大樹, 橋本 均, 橋本亮太, 中澤敬信, 福島穂高: 3q29 領域欠失症候群モデルマウスにおける記憶障害の神経基盤解析. 日本薬学会第 145 年会, 福岡, 2025.3.28.
- 34) 秋本祐弥, 遠藤 伶, 福島穂高, 三浦大樹, 橋本 均, 橋本亮太, 中澤敬信: 環境エンリッチメントによる 3q29 領域欠失モデルマウスの精神疾患様表現型の回復. 日本薬学会第 145 年会, 福岡, 2025.3.28.
- 35) 佐藤龍太, 福島穂高, 三浦大樹, 橋本 均, 橋本亮太, 中澤敬信: 3q29 領域欠失精神疾患モデルマウスの社会性行動異常に関する栄養学的解析. 日本薬学会第 145 年会, 福岡, 2025.3.28.
- 36) 河野翔太郎, 栗生俊彦, 片山沙香, 小河真也, 三浦大樹, 福島穂高, 田熊一敬, 小野富三人, 橋本 均, 橋本亮太, 中澤敬信: 3q29 領域欠失を有する患者 iPS 細胞由来神経系細胞の表現型解析. 日本薬学会第 145 年会, 福岡, 2025.3.28.
- 37) 片山沙香, 河野翔太郎, 小河真也, 三浦大樹, 福島穂高, 橋本亮太, 橋本 均, 中澤敬信: 自閉スペクトラム症と関連する 2p16.3 領域欠失の神経発達における分子病態解析. 日本薬学会第 145 年会, 福岡, 2025.3.28.
- (3) 研究報告会
- 1) 橋本亮太: COCORO の概要. 第 22 回 COCORO 会議, 東京, 2024.6.9.
- 2) 橋本亮太: 精神疾患脳画像のデータ駆動型スクリーニングによる患者層別化と臨床的特徴検討による側脳室拡大と認知機能障害患者群の提案. 第 22 回 COCORO 合同会議, 東京, 2024.6.9.
- 3) 橋本亮太, 住吉チカ: 統合失調症の認知機能障害の新規スクリーニング質問票に関する調査研究. 第 22 回 COCORO 会議, 東京, 2024.6.9.

- 4) 橋本亮太: iPS 細胞技術とデータ科学を融合した精神疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究. AMED 精神・神経疾患メカニズム解明プロジェクト第3回分科会, 2024.9.13.
- 5) 橋本亮太: COCORO の概要. 第23回 COCORO 会議, 東京, 2024.12.1.
- 6) 橋本亮太: 精神疾患脳画像のデータ駆動型スクリーニングによる患者層別化と臨床的特徴検討による側脳室拡大と認知機能障害患者群の提案. 第23回 COCORO 会議, 東京, 2024.12.1.
- 7) 伊藤颯姫, 松本純弥, 住吉チカ, 安田由華, 藤本美智子, 山森英長, 長谷川尚美, 高野晴成, 住吉太幹, 橋本亮太: 統合失調症の認知機能の簡便な評価と労働の関連要因の検討. 令和6年度精神保健研究所研究報告会, 東京, 2025.3.17.
- 8) 松本純弥, 伊藤颯姫, 安田由華, 鬼塚俊明, 住吉チカ, 岡田直大, 福永雅喜, 根本清貴, 橋本直樹, 山本真江里, 岡田 剛, 原田健一郎, 中瀧理仁, 大井一高, 久保田 学, 山森英長, 藤本美智子, 長谷川尚美, 高橋 努, 山末英典, 吉村玲児, 橋本亮太: 側脳室拡大と認知機能障害を示す精神疾患患者群の病態解明. 令和6年度精神保健研究所研究報告会, 東京, 2025.3.17.
- 9) 松本純弥: EVCI 前向きコホート. 第22回 COCORO 会議, 東京, 2024.6.9.
- 10) 松本純弥: EVCI 前向きコホート. 第23回 COCORO 会議, 東京, 2024.12.1.
- 11) 伊藤颯姫: EVCI 認知機能解析. 第22回 COCORO 会議, 東京, 2024.6.9.
- 12) 伊藤颯姫: EVCI 認知機能解析. 第23回 COCORO 会議, 東京, 2024.12.1.

(4) その他

- 1) 橋本亮太: 精神疾患の克服とその障害支援のための病態解明研究と社会実装研究の過去・現在・未来. 第67回 NCNP 精神保健研究所ランチョンセミナー, 2024.6.19.
- 2) 松本純弥: Cerebral cortical structural alteration patterns across four major psychiatric disorders in 5549 individuals. 第21回日本うつ病学会総会 下田光造賞受賞講演, 大阪, 2024.7.12.

C. 講演

- 1) 橋本亮太: リーダー論・精神科臨床, 研究にもとめられるもの. Psychiatric Treatment Conference, 仙台, 2025.1.31.
- 2) 橋本亮太: 精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動: EGUIDE プロジェクトについて. 埼玉県病院薬剤師会精神科薬物療法研修会, オンライン, 2025.3.27.

D. 学会活動

(1) 学会主催

- 1) 橋本亮太, 第11回成人発達障害支援学会大阪大会 実行委員長, 大阪, 2024.9.7-8.

(2) 学会役員

- 1) 橋本亮太: 日本神経精神薬理学会 理事, 評議員, 広報委員会委員, 国際学術委員会委員, トランスレーショナル・メディカルサイエンス (TMS) 委員会イノベーションサイエンス部会委員, 精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証委員会委員長 (通称: EGUIDE 委員会), 統合失調症診療ガイドライン委員会委員長, 診療ガイドライン委員会委員長, 薬事委員会委員, 統合失調症薬物治療ガイドライン作成委員
- 2) 橋本亮太: 日本精神神経学会 PCN 編集委員会委員, 薬事委員会委員, 精神医学研究推進委員会委員, ガイドライン検討委員会委員, PCN を育てる PI ワーキンググループ長
- 3) 橋本亮太: 日本神経化学会 評議員, 脳研究推進委員会委員
- 4) 橋本亮太: 日本統合失調症学会 評議員
- 5) 橋本亮太: 日本臨床精神神経薬理学会 評議員, 精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証委員会委員長 (通称: EGUIDE 委員会)

- 6) 橋本亮太：日本うつ病学会 評議員，気分障害の治療ガイドライン検討委員会委員，精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証委員会委員長（通称：EGUIDE 委員会）
- 7) 橋本亮太：日本生物学的精神医学会，将来計画委員会委員（顧問），広報委員会委員，関連学会対応委員会副委員長，評議員
- 8) 橋本亮太：日本神経科学学会 学術多様性委員会委員
- 9) 橋本亮太：World Congress Collegium Internationale Neuro-Psychopharmacologicu(国際神経精神薬理学会) International Scientific Programme Committee (ISPC) member
- 10) 橋本亮太：日本脳科学関連学会連合 脳科学将来構想委員会副委員長

(3) 座長

- 1) 橋本亮太：統合失調症の認知機能障害．第 54 回日本神経精神薬理学会・第 34 回日本臨床精神神経薬理学会合同年会，東京，2024.5.24-26.
- 2) 橋本亮太：シンポジウム「向精神薬は本当に有益か？-向精神薬の有効性と安全性のエビデンスはどのように評価されるべきか-」．第 120 回日本精神神経学会学術総会，北海道，2024.6.20-22.
- 3) 橋本亮太：シンポジウム「自閉スペクトラム症の支援のための病態理解」．第 11 回成人発達障害支援学会大阪大会，大阪，2024.9.7-8.
- 4) 橋本亮太：シンポジウム「成人発達障害支援のニーズと課題～大阪地域の連携システム構築から理想の支援システムを考える」，第 11 回成人発達障害支援学会大阪大会，大阪，2024.9.7-8.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 橋本亮太：日本精神神経学会機関誌「Psychiatry and Clinical Neuroscience」編集委員会委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 橋本亮太：第 18 回日本統合失調症学会 研修コース：短時間でできる認知機能測定の実際．徳島，2024.4.13.
- 2) 橋本亮太：第 18 回日本統合失調症学会 ワークショップ：当事者・家族向け上手な診察の受け方のコツ．徳島，2024.4.13.
- 3) 橋本亮太：大阪精神科診療所協会 統合失調症薬物治療ガイドライン 2022 講習会．オンライン．2024.5.18.
- 4) 橋本亮太：第 54 回日本神経精神薬理学会第 34 回日本臨床精神神経薬理学会合同年会 自殺念慮のあるうつ病患者への治療介入について．東京，2024.5.26.
- 5) 橋本亮太：第 120 回日本精神神経学会学術総会 ワークショップ：うつ病を有する女性患者の妊娠・出産にどう対応するか？～模擬症例を通して考える～．北海道，2024.6.21.
- 6) 橋本亮太：第 120 回日本精神神経学会学術総会 統合失調症心理教育ワークショップ～上手な診察の受け方のコツ（うけコツ）～．北海道，2024.6.21.
- 7) 橋本亮太：第 21 回日本うつ病学会総会 診療技術向上ワークショップ～自殺念慮のある「うつ病患者」への治療介入を学ぶ～．大阪，2024.7.12.
- 8) 橋本亮太：大阪精神科診療所協会 うつ病治療ガイドライン講習会．オンライン．2024.8.31.
- 9) 橋本亮太：2024 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修 第 3 回統合失調症の標準治療研修．オンライン，2024.9.1.
- 10) 橋本亮太：2024 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修 第 3 回うつ病の標準治療研修．オンライン，2024.9.15.
- 11) 橋本亮太：第 8 回日本精神薬学会総会・学術集会 薬剤師のための EGUIDE プロジェクトワークショップ．東京，2024.9.21.

- 12) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト中国地区講習統合失調症のガイドライン講習．広島，2024.9.28.
- 13) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト中国地区講習 うつ病のガイドライン講習．広島，2024.9.29.
- 14) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東1講習 統合失調症のガイドライン講習．東京(NCNP)，2024.10.13.
- 15) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東2講習 統合失調症のガイドライン講習．東京（東京大学），2024.10.14.
- 16) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北陸地区講習 統合失調症のガイドライン講習．金沢，2024.10.19.
- 17) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北陸地区講習 うつ病のガイドライン講習．金沢，2024.10.20.
- 18) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東1講習 うつ病のガイドライン講習．東京（NCNP），2024.10.27.
- 19) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト近畿地区講習 統合失調症のガイドライン講習．大阪，2024.11.9.
- 20) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト近畿地区講習 うつ病のガイドライン講習．大阪，2024.11.10.
- 21) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北海道講習 統合失調症のガイドライン講習．札幌，2024.11.9，2024
- 22) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北海道講習 うつ病のガイドライン講習．札幌，2024.11.10.
- 23) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト九州地区講習 統合失調症のガイドライン講習．福岡，2024.11.16.
- 24) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト九州地区講習 うつ病のガイドライン講習．福岡，2024.11.17.
- 25) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト東北地区講習統合失調症のガイドライン講習．仙台，2024.11.23.
- 26) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト東北地区講習 うつ病のガイドライン講習．仙台，2024.11.24.
- 27) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト神奈川講習 統合失調症のガイドライン講習．川崎，2024.12.7.
- 28) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト神奈川講習 うつ病のガイドライン講習．川崎，2024.12.8.
- 29) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト四国地区講習 統合失調症のガイドライン講習．愛媛，2024.12.14.
- 30) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト四国地区講習 うつ病のガイドライン講習．愛媛，2024.12.15.
- 31) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東2講習 うつ病のガイドライン講習．東京（東京大学），2024.12.15.

(2) 研修会講師

- 1) 橋本亮太：認知機能障害検査の活用例と今後．第18回日本統合失調症学会 研修コース：短時間でできる認知機能測定の実際，徳島，2024.4.13.
- 2) 橋本亮太：治療抵抗性．大阪精神科診療所協会 統合失調症薬物治療ガイドライン 2022 講習会，オンライン，2024.5.18.
- 3) 橋本亮太：軽症．大阪精神科診療所協会 うつ病治療ガイドライン講習会，オンライン，2024.8.31.
- 4) 橋本亮太：精神病性．大阪精神科診療所協会 うつ病治療ガイドライン講習会，2024.8.31.
- 5) 橋本亮太：治療抵抗性統合失調症．2024 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修 第3回統合失調症の標準治療研修，オンライン，2024.9.1.
- 6) 橋本亮太：児童思春期．2024 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修 第3回うつ病の標準治療研修，オンライン，2024.9.15.
- 7) 橋本亮太：趣旨説明及び理解度記入．EGUIDE プロジェクト中国地区講習 統合失調症のガイドライン講習，広島，2024.9.28.

- 8) 橋本亮太：治療抵抗性統合失調症．EGUIDE プロジェクト中国地区講習 統合失調症のガイドライン講習，広島，2024.9.28.
- 9) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック．EGUIDE プロジェクト中国地区講習 統合失調症のガイドライン講習，広島，2024.9.28.
- 10) 橋本亮太：趣旨説明及び理解度記入．EGUIDE プロジェクト中国地区講習 うつ病のガイドライン講習，広島，2024.9.29.
- 11) 橋本亮太：その他の臨床的諸問題．EGUIDE プロジェクト中国地区講習 うつ病のガイドライン講習，広島，2024.9.29.
- 12) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック．EGUIDE プロジェクト中国地区講習 うつ病のガイドライン講習，広島，2024.9.29.
- 13) 橋本亮太：趣旨説明及び理解度記入．EGUIDE プロジェクト関東 1 講習 統合失調症のガイドライン講習，東京（NCNP），2024.10.13.
- 14) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック．EGUIDE プロジェクト関東 1 講習 統合失調症のガイドライン講習，東京（NCNP），2024.10.13.
- 15) 橋本亮太：趣旨説明及び理解度記入．EGUIDE プロジェクト関東 1 講習 うつ病のガイドライン講習，東京（NCNP），2024.10.27.
- 16) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック．EGUIDE プロジェクト関東 1 講習 うつ病のガイドライン講習，東京（NCNP），2024.10.27.
- 17) 橋本亮太：趣旨説明及び理解度記入．EGUIDE プロジェクト近畿地区講習 統合失調症のガイドライン講習，大阪，2024.11.9.
- 18) 橋本亮太：治療抵抗性統合失調症．EGUIDE プロジェクト近畿地区講習 統合失調症のガイドライン講習，大阪，2024.11.9.
- 19) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック．EGUIDE プロジェクト近畿地区講習 統合失調症のガイドライン講習，大阪，2024.11.9.
- 20) 橋本亮太：趣旨説明及び理解度記入．EGUIDE プロジェクト近畿地区講習 うつ病のガイドライン講習，大阪，2024.11.10.
- 21) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック．EGUIDE プロジェクト近畿地区講習 うつ病のガイドライン講習，大阪，2024.11.10.
- 22) 松本純弥，認知社会機能障害検査の意義と概要，第 18 回日本統合失調症学会 研修コース：短時間でできる認知機能測定の実際，徳島，2024.4.13.
- 23) 伊藤颯姫，現在の推定 IQ の測定，第 18 回日本統合失調症学会 研修コース：短時間でできる認知機能測定の実際，徳島，2024.4.13.
- 24) 新谷茉莉，社会活動評価と病前推定 IQ の測定，第 18 回日本統合失調症学会 研修コース：短時間でできる認知機能測定の実際，徳島，2024.4.13.

F. その他

【受賞】

- 1) 松本純弥：2024 Congress of the Schizophrenia International Research Society (SIRS) Poster Award. Large-Scale Cross-Disorder Analysis of Cerebral Cortical Patterns in the Four Major Psychiatric Disorders: A Multi-Institutional Structural MRI Imaging Study, 2024.4.7.
- 2) 松本純弥：第 21 回日本うつ病学会総会 下田光造賞．Cerebral cortical structural alteration patterns across four major psychiatric disorders in 5549 individuals, 2024.7.12.
- 3) 伊藤颯姫：日本生物学的精神医学会 第 13 回若手研究者育成プログラム奨励賞．統合失調症患者の認知機能測定における WAIS-IV 簡略版の有用性, 2024.7.26.
- 4) 伊藤颯姫：第 11 回成人発達障害支援学会大阪大会 優秀医学賞．自閉スペクトラム症と統合失調症における労働に関する要因の検討，2024.9.8.

【その他】

- 1) 橋本亮太: セミナー主宰. 第 30 回精神病態セミナー (招待演者: 三浦至先生「統合失調症の薬物療法と治療反応に関わる因子」), NCNP ハイブリッド開催, 2024.5.10.
- 2) 橋本亮太: セミナー主宰. 第 31 回精神病態セミナー (招待演者: 國井泰人先生「様々な統合失調症仮説の死後脳での検証」), NCNP ハイブリッド開催, 2024.5.17.
- 3) 橋本亮太: 研究会主宰. 第 22 回 COCORO 合同会議, オンライン, 2024.6.9.
- 4) 橋本亮太: セミナー主宰. 第 32 回精神病態セミナー (招待演者: 中江健先生「マーモセット大規模データベースとダイナミクスモデルによる統合」), NCNP ハイブリッド開催, 2024.6.14.
- 5) 橋本亮太: セミナー主宰. 第 33 回精神病態セミナー (招待演者: 中尾智博先生「強迫関連症の病態と治療」), NCNP ハイブリッド開催, 2024.7.5.
- 6) 橋本亮太: セミナー主宰. 第 34 回精神病態セミナー (招待演者: 尾関祐二先生「希な生物学的な特徴を伴う統合失調症患者の病態を検討する」), NCNP ハイブリッド開催, 2024.8.2.
- 7) 橋本亮太: 総合司会. 2024 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修 第 3 回統合失調症の標準治療研修, オンライン, 2024.9.1.
- 8) 橋本亮太: 総合司会. 2024 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修 第 3 回うつ病の標準治療研修, オンライン, 2024.9.15.
- 9) 橋本亮太: 総合司会. EGUIDE プロジェクト中国地区講習 統合失調症のガイドライン講習, 広島, 2024.9.28.
- 10) 橋本亮太: 総合司会. EGUIDE プロジェクト中国地区講習 うつ病のガイドライン講習, 広島, 2024.9.29.
- 11) 橋本亮太: セミナー主宰. 第 35 回精神病態特別セミナー (招待演者: 尾崎紀夫先生「当事者・家族の思いからスタートした精神医学研究」), NCNP ハイブリッド開催, 2024.10.11.
- 12) 橋本亮太: 総合司会. EGUIDE プロジェクト関東 1 講習 統合失調症のガイドライン講習, 東京 (NCNP), 2024.10.13.
- 13) 橋本亮太: 総合司会. EGUIDE プロジェクト関東 1 講習 うつ病のガイドライン講習, 東京 (NCNP), 2024.10.27.
- 14) 橋本亮太: セミナー主宰. 第 36 回精神病態セミナー (招待演者: 鬼頭伸輔先生「うつ病へのニューロモデュレーション療法と臨床的位置づけ」), NCNP ハイブリッド開催, 2024.11.1.
- 15) 橋本亮太: 総合司会. EGUIDE プロジェクト近畿地区講習 統合失調症のガイドライン講習, 大阪, 2024.11.9.
- 16) 橋本亮太: 総合司会. EGUIDE プロジェクト近畿地区講習 うつ病のガイドライン講習, 大阪, 2024.11.10.
- 17) 橋本亮太: 研究会主宰. 第 23 回 COCORO 合同会議, オンライン, 2024.12.1.
- 18) 橋本亮太, ほか: 特許登録 特許第 7605443 号「発明の名称: 補正装置, 補正方法, 及び, 補正プログラム」, 2024.12.16.
- 19) 橋本亮太: セミナー主宰. 第 37 回精神病態セミナー (招待演者: 高橋長秀先生「ゲノムコホート研究を用いて神経発達症の病態を理解する」), NCNP ハイブリッド開催, 2024.12.18.
- 20) 橋本亮太: セミナー主宰. 第 38 回精神病態セミナー (招待演者: 山室和彦先生「社会性行動と視床室傍核におけるオキシトシンとの関連」), NCNP ハイブリッド開催, 2025.1.17.
- 21) 橋本亮太: セミナー主宰. 第 39 回精神病態セミナー (招待演者: 菊地哲郎先生「ドパミン D2 受容体部分アゴニスト系抗精神病薬の創薬」), NCNP ハイブリッド開催, 2025.2.7.

9. 睡眠・覚醒障害研究部

I. 研究部の概要

研究部および研究室の研究目的

睡眠・覚醒障害研究部では、睡眠、意識、認知、感情、意欲等の精神活動を脳科学的にとらえ、その制御メカニズムを明らかにし、これら生理機能の調節障害に基づく各種の睡眠・覚醒障害、気分障害、不安障害、認知症性障害、神経・発達障害などの病態および治療法を解明することを目的としている。このため、精神生理学、時間生物学、神経薬理学、分子生物学、神経内分泌学、脳画像解析学などの手法を用いて、学際的な研究を進めている。

部長 1 名、室長 2 名に加え、リサーチフェロー 1 名、科研費研究員 2 名、研究補助員 5 名、国立精神・神経医療研究センター内外の研究・治療協力施設の客員研究員および協力研究者との連携のもとに研究を進めている。

研究部の構成

部長：栗山健一。精神生理機能研究室長：吉池卓也。臨床病態生理研究室長：北村真吾。リサーチフェロー：内海智博。併任研究員：松井健太郎（センター病院）、都留あゆみ（センター病院）、羽澄 恵（公共精神健康医療研究部）、長尾賢太郎（センター病院）。客員研究員：内山 真（東京足立病院）、兼板佳孝（日本大学）、大川匡子（睡眠総合ケアクリニック代々木）、井上雄一（医療法人社団絹和会）、樋口重和（九州大学）、本多 真（東京都医学総合研究所）、上田泰己（東京大学）、池田正明（埼玉医科大学）、山寺 亘（東京慈恵会医科大学）、守口善也（ルンドベックジャパン）、福水道郎（東京家政大学）、榎本みのり（東京工科大学）、有竹清夏（埼玉県立大学）、亀井雄一（日下部記念病院）、渡辺和人（明治大学）、三島和夫（秋田大学）、西村勝治（東京女子医科大学）、梶 達彦（あいせいかいココロのクリニック）、阿部又一郎（伊敷病院）、岡島 義（東京家政大学）、高橋英彦（東京科学大学）、肥田昌子（HKG 合同会社）、玉置應子（国立研究開発法人理化学研究所）、鈴木正泰（日本大学）、村上裕樹（大分大学）、吉村道孝（愛知東邦大学）、太田英伸（秋田大学）、綾部直子（秋田大学）、駒田陽子（東京科学大学）、田中克俊（北里大学）、志村哲祥（東京医科大学）、大橋由基（洛和会音羽リハビリテーション病院）、尾崎章子（東北大学）、金子宜之（日本大学）、坂口昌徳（筑波大学）、橋本英樹（プロアシスト）、竹島正浩（秋田大学）、角谷 寛（滋賀医科大学）、小曾根基裕（久留米大学）、佐伯圭吾（奈良県立医科大学）、元村祐貴（九州大学）、井谷 修（国際医療福祉大学）。そのほか科研費研究員 2 名、科研費研究補助員 4 名、センター研究補助員 1 名、外来研究員 1 名、外来研究補助員 4 名、研究生 12 名。

Ⅱ. 研究活動

1) 睡眠時間・睡眠休養感の確保に影響する就寝環境・生活習慣の客観的評価手法および適切な睡眠取得のための介入・環境整備法の開発（24FA1001）

厚生労働科学研究費補助金循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業（代表研究者：栗山健一、研究分担者：吉池卓也 他、研究協力者：北村真吾、綾部直子、河村 葵、岡邨しのぶ、松井健太郎、都留あゆみ、大槻 怜、長尾賢太郎、羽澄 恵、伏見もも 他）

本研究では主に、前研究事業「健康づくりのための睡眠指針 2014」のブラッシュアップ・アップデートを目指した「睡眠の質」の評価及び向上手法確立のための研究（19FA1009）の成果として見出した、「睡眠の質」を反映し健康を維持するために目標となる「睡眠休養感」指標を社会実装するための準備を行う。「睡眠休養感」指標は、「睡眠時間」指標と相補的な関係を有し、国民の健康寿命延伸を測るための調査項目として組み込まれるとともに、各個人が日常生活の中で、健康維持・促進に役立てられるような指標とすべく、これに資するプラットフォームを開発する。さらに、「睡眠休養感」を向上・改善に寄与する日常生活行動・習慣を調査

し、生活・睡眠習慣に組み込むべき目標として具体的に提示することも目標とする。さらに、国民の睡眠健康増進に寄与しうる、睡眠健診の有用性および実装可能性を検討するとともに、ウェアラブルデバイス等を用いた簡易睡眠測定の有用性も検証し、前述のプラットフォームに組み込み有用性を高める試みも検討する。本研究の成果は、「健康づくりのための睡眠ガイド2023」に反映され、これに基づく睡眠健康の社会基盤を整備・発展させることに寄与する。

2) 睡眠ポリグラフデータバンクの拡充およびこれを活用した睡眠障害・精神神経疾患の病態解明と生理学的診断マーカー・治療法開発

精神・神経疾患研究開発費研究事業「睡眠障害・睡眠ポリグラフデータバンク構築研究（課題番号5-1）」（主任研究者：栗山健一，研究協力者：吉池卓也，北村真吾，松井健太郎，河村葵，伏見もも，木村綾乃，岡邨しのぶ）

本研究事業の目的は、わが国初にして最大の睡眠障害・睡眠ポリグラフデータバンクを構築することである。日本国内の主要な睡眠ポリグラフ実施機関と連携し、2013年1月以降に睡眠ポリグラフを受検した患者の睡眠ポリグラフデータと、これに紐づいた患者背景情報・関連生体データを集約することで、睡眠障害および併存精神・神経疾患における新規バイオマーカーの探索、病態解明促進や新たな健康指標の定義を見越した生理学的検討を行う基盤とする。このために、厚生労働省や経済産業省、総務省が発行する医療情報システムに関する安全管理ガイドライン（3省2ガイドライン）に準拠したセキュアなクラウドシステムを構築し、多施設で個別に保管されるデータを本事業用の統一データ集計フォーマットを用いてクラウドストレージ上に集約・管理することでデータバンク化を実現した。各共同研究施設にて本データバンクを活用した個別研究課題が進行中である。

3) 睡眠時間の主観—客観乖離と健康不安が不眠症診断・健康転機に及ぼす影響の包括的検討

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究C（研究代表者：栗山健一）

不眠症は「不眠に対する恐怖」と「生理的過覚醒」が病態の中核をなす症候群であるが、一部の患者は自身の睡眠に対して、眠れているにもかかわらず「全く眠れてない」という誤認を示す。睡眠障害国際分類（The International Classification of Sleep Disorders: ICSD）第2版では、「睡眠状態誤認」は逆説性不眠症（Paradoxical Insomnia: PI）という下位診断分類の特徴とされていたが、近年は多くの不眠症患者が共有する病態特性（スペクトラム）と考えられるようになった。「睡眠状態誤認」は、「漠とした健康障害への不安」を基に生じる認知構造として、身体症状症（疼痛性障害含む）と共通した特徴を示し、加齢に伴い増強する疾患共通の治療抵抗因子であると推測される。特に、大脳灰白皮質の萎縮性病変および脳微小血管障害を背景とした大脳白質病変が、この認知構造に関与している可能性が推測されるが、系統的に検討した研究はない。本研究は、上記病態関連性を検討するとともに、身体愁訴、疼痛症状との関連も検討項目に加え、不眠症と身体症状症等の精神疾患病態との関連性を検討することを目的とし行われた。

4) ウェアラブルデバイスにより得られたライフログデータの活用による産業保健活動の推進に関する研究（24071）

労災疾病臨床研究事業費補助金（代表研究者：栗山健一，研究分担者：吉池卓也，成田 瑞，大庭 真梨）

睡眠は健康維持・向上において最も重要な休養行動であり、適切な睡眠習慣・状態をモニタリングし、睡眠習慣・状態不良の早期発見・早期介入が重要である。従来の疫学研究や臨床の現場において睡眠習慣の把握には主観評価による睡眠時間が用いられてきたが、主観評価に基づく睡眠時間と終夜睡眠ポリグラフ検査（Polysomnography: PSG）などの客観評価に基づく睡眠時間はしばしば乖離する。そして、客観評価に基づく睡眠時間が生理学的な休養状態を反

映し、健康転帰をより正確に予測することが示されてきており、客観的に睡眠時間をモニタリングする重要性が指摘されている。近年発展が目覚ましいウェアラブルデバイス等を用い睡眠を客観的に評価することが睡眠健康増進に寄与すると考えられ、これは健康日本 21 における国民の睡眠指針である「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」の中でも言及されている。しかし、市場で展開するウェアラブルデバイスは種類が多く、計測・算出される睡眠変数等には機種やサービスごとに差があり、算出された睡眠変数の精度検証は不十分である。本事業は、ウェアラブルデバイスと PSG を同時に測定し、ウェアラブルデバイスの睡眠評価精度（判別一致率）を検証し、結果を WEB 上で公開することで国民が睡眠健康の維持・向上をするための適切なデバイス選択に寄与することを目的として行われている。

5) 個人の概日リズム特性の決定に対する出生後環境の寄与

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究 C（研究代表者：北村真吾）

朝型夜型の個人差はクロノタイプとも呼ばれ、連続的なスペクトラムである。概日リズム位相や周期と密接な関連を示すことから視交叉上核を中心とした生物時計機構の表現型のひとつと考えられている。双生児研究からクロノタイプの遺伝率は約 50%と見積もられ、複数の大規模なゲノムワイド関連研究（GWAS）でも共通した遺伝的多型が報告されるなど、生得的な側面がある。一方、クロノタイプを規定する環境要因に関する知見は乏しい。また、睡眠・覚醒スケジュールや深部体温やメラトニンといった概日リズムの主要なマーカーでは 6～12 週齢ごろに概日リズムが確立するが、確立時期に個人差がみられ、その要因も不明である。本研究では、概日リズム機能と密接な授乳形態と光環境に着目し、出生後 1 年間の縦断の評価を行い、クロノタイプ及び概日リズム確立時期に寄与する出生後要因を明らかにする目的で実施される。

6) 脳構造の可塑性ダイナミクスと気分障害病態の関連探索

文部科学省科学研究費助成事業 若手研究（研究代表者：吉池卓也）

双極性障害やうつ病を有する患者において、朝に増悪するうつ症状の日内変動が特徴的に出現するのみならず、体温調節、ホルモン分泌、時計遺伝子発現といった様々な生理指標の概日パターンが健常者と比べ変化することが知られている。近年、ヒトの灰白質及び白質の容積が同日内で変化することが明らかにされ、脳の粗大な構造変化（構造的可塑性）の生理学的意義が議論されるようになった。しかし、構造的可塑性が精神疾患においていかなる変化を示し、病態及び治療といかに関係するかは明らかにされていない。本研究は、磁気共鳴画像（MRI）の解析手法のうち、脳表面形態計測法や白質微細構造解析法を用い、気分障害患者の臨床症状、治療反応性、高次認知機能との関連を検討することにより、特定の脳部位における構造変化を描出し、新たな病態指標を開発することを目的として行われる。

7) 睡眠休養感の精神生理学的背景と成立機序の解明

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究 C（研究代表者：吉池卓也）

健康増進を目的とした睡眠指標の新規開発が国際的に求められている。睡眠の量的指標である睡眠時間に加え、睡眠の質的指標として睡眠休養感（睡眠で休養がとれた感覚）が長期的な健康転帰の予測において有用な指標として、特に公衆衛生の観点から重視されており、厚生労働省による「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」にもこれが反映されている。しかし、睡眠休養感がいかに形成・障害されるか生理的には明らかでない。本研究は睡眠分断および過覚醒が睡眠休養感の低下に重要な役割を担う可能性に着目し、恒常性－概日系、情動－覚醒系の二軸評価により、睡眠休養感の形成・障害に寄与する精神生理学的因子を同定し、睡眠休養感の生理的・医療的位置づけを明確化することを目的に行われる。

8) 高照度光療法による月経前症候群及び月経前不快気分障害のプレゼンティズム改善効果

文部科学省科学研究費助成事業 若手研究（研究代表者：河村葵）

月経前症候群（PMS; premenstrual syndrome）及び月経前不快気分障害（PMDD; premenstrual dysphoric disorder）がもたらす労働生産性低下に対し、生理学的知見を基に介入した研究は乏しい。女性が社会進出する上で、労働生産性向上に貢献するエビデンスを提供することは極めて重要である。本研究では、PMS/PMDD 患者への高照度光療法が、不眠や抑うつ気分などの PMS/PMDD 症状を緩和し、プレゼンティズムを改善するという仮説をランダム化比較試験（RCT）で検証する。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

各研究員は、都民・市民のための公開講座、講演会などにおいて睡眠と健康づくり、睡眠障害および関連する健康問題などについての普及啓発に努めた。テレビ、ラジオ、オンラインサイト、新聞、雑誌等のメディアを通して、睡眠習慣および睡眠問題の重要性について普及啓発活動を行った。

(2) 専門教育面における貢献

各研究員は、国内各地の学術集会、研究会、談話会、医師会講演会などで睡眠障害、気分障害、認知症の睡眠行動障害等の治療と予防について講演した。栗山健一は東京農工大学（客員教授）、滋賀医科大学（客員教授）、東京慈恵会医科大学（客員教授）、早稲田大学（客員教授）など教育機関において学生教育の援助を行った。北村真吾は、京都大学（非常勤講師）、神奈川大学（非常勤講師）、埼玉県立大学（非常勤講師）において学生教育の援助を行った。吉池卓也は武蔵野大学（非常勤講師）において学生教育の援助を行った。

また、研究員は日本睡眠学会、日本時間生物学会、日本生物学的精神医学会、日本公衆衛生学会、不眠研究会、睡眠学研究会、関東睡眠障害懇話会、日本生理人類学会、関東脳核医学研究会などにおける理事、評議員、世話人としての活動を通じて睡眠障害診療従事者の研究及び教育のサポートを行った。

(3) 精研の研修の主催と協力

日本睡眠学会ならびに当センターCBT センターが実施する「不眠症に対する認知行動療法研修」に協力した。

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

全ての研究員は、厚生労働科学研究（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）適切な睡眠・休養促進に寄与する「新・健康づくりのための睡眠指針」と連動した行動・習慣改善ツール開発及び環境整備（研究代表者：栗山健一）に参画し、厚生労働省健康日本 21（第 2 次）による「健康づくりのための睡眠指針」アップデートの際に活用される新たな睡眠健康指標の普及・活用基盤開発・整備に貢献した。

栗山健一、吉池卓也、内海智博、河村葵は、労災疾病臨床研究事業費補助金 ウェアラブルデバイスにより得られたライフログデータの活用による産業保健活動の推進に関する研究（研究代表者：栗山健一）に参画し、労働衛生向上に関わる環境整備促進に貢献した。

栗山健一は、厚生労働行政推進調査事業費（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）次期健康づくり運動プラン作成と推進に向けた研究（研究代表者：辻一郎）に参加し、健康日本 21（第三次）における国民の健康づくりのための休養（睡眠）プラン策定に貢献した。

栗山健一は、厚生労働科学研究（障害者政策総合研究事業）睡眠薬・抗不安薬の処方実態調査ならびに共同意思決定による適正使用・出口戦略のための研修プログラムの開発と効果検証研究（研究代表者：高江洲義和）に参加し、主に共同意思決定方針策定に貢献した。

栗山健一は、厚生労働省 国民健康・栄養調査企画解析検討会に委員として参加した。

栗山健一、吉池卓也は、厚生労働省 健康づくりのための睡眠指針の改定に関する検討会に委員として参加した。

栗山健一は、厚生労働省 健康日本 21（第三次）推進専門委員会に参考人として参加した。

栗山健一は、独立行政法人 医薬品医療機器総合機構専門委員として専門協議に参加した。

吉池卓也、栗山健一は、厚生労働省 健康日本 21 アクション支援システムにおける健康増進担当者向けツール「睡眠」の改訂に貢献した。

吉池卓也は、厚生労働省「健康日本 21（第三次）の取組を推進させるための健康づくりに関する実態調査及び各種資材作成等を担う地域健康政策推進事業」の調達に係る技術評価委員会に委員長として参加した。

(5) センター内における臨床的活動

栗山健一、吉池卓也、内海智博は、国立精神・神経医療研究センター病院において睡眠障害専門外来での診療および臨床研究を行った。

栗山健一は、5つの睡眠薬および覚醒維持薬開発治験の施設責任者を務め、吉池卓也はこれの分担医師として治験に参加した。

(6) その他

栗山健一は、精神保健判定医として複数の医療観察法裁判に参加し、同法の有機的・機能的運用に貢献した。

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Matsui K, Usui A, Takei Y, Kuriyama K, Inoue Y. Sleep schedules and MSLT-based diagnosis of narcolepsy type 2 and idiopathic hypersomnia: Exploring potential associations in a large clinical sample. J Sleep Res 12: e14402, 2024. doi: 10.1111/jsr.14402
- 2) Uchimura N, Ozone M, Suzuki M, Taniguchi M, Kuriyama K, Togo O, Uchiyama M. Long-term safety and efficacy of daridorexant in Japanese patients with insomnia disorder. Sleep Med 122: 64-70, 2024. DOI: 10.1016/j.sleep.2024.07.036.
- 3) Kuriyama K. Social determinants of sleep quality: association between sleep quality and living environment among older individuals. Sleep Biol Rhythms 22(3): 301-302, 2024. doi: 10.1007/s41105-024-00533-0.
- 4) Takeshima M, Sakurai H, Inada K, Aoki Y, Ie K, Kise M, Yoshida E, Matsui K, Utsumi T, Shimura A, Okajima I, Kotorii N, Yamashita H, Suzuki M, Kuriyama K, Shimizu E, Mishima K, Watanabe K, Takaesu Y. Treatment strategies for insomnia in Japanese primary care physicians' practice: A Web-based questionnaire survey. BMC Prim Care 25(1): 219, 2024. doi: 10.1186/s12875-024-02449-7.
- 5) Matsui K, Kimura A, Nagao K, Yoshiike T, Kuriyama K. Treatment of sleep-related eating disorder with suvorexant: A case report on the potential benefits of replacing benzodiazepines with orexin receptor antagonists. PCN Rep 2(3): e123, 2023. doi: 10.1002/pcn5.123.
- 6) Yoshiike T, Kawamura A, Utsumi T, Matsui K, Kuriyama K. A prospective study of the association of weekend catch-up sleep and sleep duration with mortality in middle-aged adults. Sleep Biol Rhythms 21(4): 409-418, 2023. doi: 10.1007/s41105-023-00460-6.
- 7) Eto T, Nishimura Y, Ikeda H, Kubo T, Adan A, Kitamura S. The Japanese version of the

reduced morningness-eveningness questionnaire. Chronobiol Int. 2024;41:561-6.

- 8) Eto T, Kitamura S, Shikano A, Tanabe K, Higuchi S, Noi S. Estimating dim light melatonin onset time in children using delta changes in melatonin. Sleep Biol Rhythms. 2024;22:239-46.
- 9) Enomoto M, Eto T, Kitamura S. Investigation of macro and micro sleep structures of first night effect in school-aged children. Sleep Biol Rhythms. 2024;22:523-9.
- 10) Kondo K, Komada Y, Kitamura S, Tkachev V, Roenneberg T, Korman M. Sleep patterns in Metropolitan and Regional areas in Japan: Before and during COVID-19 social restrictions. Chronobiol Int. 2024;41:767-79.
- 11) Kudo M, Ayabe N, Takeshima M, Ogasawara M, Itoh Y, Yoshizawa K, et al. Association between sleep state misperception and bedtime behavior in patients with chronic insomnia. Sci Rep. 2024;14:13991.
- 12) Ukai M, Hida A, Kitamura S, Inoue Y, Mishima K. Circadian clock gene variants in two Japanese families with familial advanced sleep phase. Sleep. 2025;48:zsae309.

(2) 総説

- 1) 栗山健一：不眠症．向精神薬のエビデンスベースドプラクティス．月刊薬事 じほう【10月臨時増刊号】，2024: 66(14), 97-102.
- 2) 栗山健一：日本における睡眠健康の現状．創刊 50 周年記念．メディカル・サイエンス・ダイジェスト．ニューサイエンス社，2024: 50(11), 6-8.
- 3) 栗山健一：健康づくりのための睡眠ガイド 2023 ―睡眠に関する新たな指針．睡眠障害についてかかりつけ医が知っておきたいこと．日本医師会雑誌，2024: 153(5), 494-498.
- 4) 江藤太亮，樋口重和，北村真吾：ヒトの非視覚的機能を考慮した光の国際基準 (melanopic EDI) とこれに基づく屋内光環境の推奨事項．日本生理人類学会誌，2024;29:27-38.
- 5) 吉池卓也：【従業員を疲れさせない働き方】脳の疲労と睡眠．安全と健康，75(10): 958-961, 2024.

(3) 著書

- 1) 栗山健一：第 6 章 睡眠の機能．睡眠学の百科事典，日本睡眠学会編，丸善出版，pp.127, 2024.6.30.
- 2) 栗山健一：第 11 章【精神疾患】不安症．睡眠学の百科事典，日本睡眠学会編，丸善出版，pp.496-497, 2024.6.30.
- 3) 栗山健一：冬季うつとは．体と心 保健総合大百科，2024 中・高校編，少年写真新聞社，pp188, 2024.4.25.
- 4) 吉池卓也：情動処理．睡眠学の百科事典，日本睡眠学会編，丸善出版，pp.138-139, 2024.7.1.
- 5) 長尾賢太郎，吉池卓也：断眠療法．睡眠学の百科事典，日本睡眠学会編，丸善出版，pp.366-367, 2024.7.1.
- 6) 北村真吾：第 2 章 朝型と夜型 クロノタイプ．睡眠学の百科事典，日本睡眠学会編，丸善出版，pp.176, 2024.6.30.
- 7) 北村真吾：第 6 章 睡眠延長，寝貯め．睡眠学の百科事典，日本睡眠学会編，丸善出版，pp.274, 2024.6.30.
- 8) 北村真吾：第 8 章 体内時計の周期．睡眠学の百科事典，日本睡眠学会編，丸善出版，p.460, 2024.6.30.

(4) 研究報告書

- 1) 栗山健一：睡眠時間・睡眠休養感の確保に影響する就寝環境・生活習慣の客観的評価手法および適切な睡眠取得のための介入・環境整備法の開発.令和 6 年度厚生労働科学研究費

補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）（研究代表者：栗山健一）総括・分担研究報告書. pp 1-13, 2025.3.

- 2) 栗山健一：ウェアラブルデバイスにより得られたライフログデータの活用による産業保健活動の推進に関する研究. 令和 6 年度労災疾病臨床研究事業費補助金（研究代表者：栗山健一）総括・分担研究報告書. pp 1-4, 2025.3.

(5) 翻訳

(6) その他

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

- 1) Yoshiike T: The role of empathy in grief. International Forum “Grief Therapy and Restoration of Ukraine's Human Capital,” International Association of Psychologists for Grief and Loss, Invited Lecture, King Danylo University (Ivano-Frankivsk) / Online, September 26–27, 2024.
- 2) 栗山健一：国民の睡眠健康目標に准じた精神疾患患者の睡眠治療の考え方. 第 43 回日本社会精神医学会，ランチョンセミナー，浜松町コンベンションホール，2025.3.14.
- 3) 栗山健一：「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」の概要・活用・発展. メインシンポジウム，身体活動、食・栄養、飲酒、睡眠のガイドライン策定とエビデンスギャップ，第 26 回日本健康支援学会年次学術大会，Shimadzu Tokyo Innovation Plaza，2025.3.7.
- 4) 栗山健一：「睡眠の質」と心身の健康. 睡眠医学の最新トピックスと総合病院精神医療での展開. シンポジスト，第 37 回日本総合病院精神医学会総会，熊本城ホール，2024.11.29-30.
- 5) 栗山健一，兼板佳孝：「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」の活用と今後の展開. 日本睡眠学会第 48 回定期学術集会，座長・コーディネーター，パシフィコ横浜ノース，2024.7.18-19.
- 6) 栗山健一：IoT やウェアラブルデバイスを活用した睡眠健康増進 -医療前段階を中心に-. 睡眠関連疾患における最良の Patient Journey を目指した IoT やデジタルデバイスの活用（アキュリスファーマ）. 日本睡眠学会第 48 回定期学術集会，シンポジスト，パシフィコ横浜ノース，2024.7.18-19.
- 7) 栗山健一：「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」における高齢者の睡眠健康目標. 日本睡眠学会第 48 回定期学術集会，シンポジスト，パシフィコ横浜ノース，2024.7.18-19.
- 8) 栗山健一：神経発達症と睡眠障害（ノーベルファーマ）. 日本睡眠学会第 47 回定期学術集会，ランチョンセミナー，座長，日本睡眠学会第 48 回定期学術集会，パシフィコ横浜ノース，2024.7.18-19.
- 9) 栗山健一：高齢不眠の病態基盤の理解と治療戦略 ～健康づくりのための睡眠ガイド 2023 の理解も含めて～. スポンサーシップシンポジウム，第 8 回日本老年薬学会学術集会，都市センターホテル，2024.5.19.
- 10) 吉池卓也：情動制御と概日リズム 基礎と臨床の対話「サーカディアンリズムの最近の話題」. 第 77 回日本自律神経学会，京都テルサ，2024.10.25.
- 11) 吉池卓也，栗山健一：自治体における睡眠ガイド 2023・休養指針の活用. 日本睡眠学会第 48 回定期学術集会，シンポジスト，パシフィコ横浜ノース，2024.7.18-19.
- 12) 吉池卓也：睡眠とホルモン分泌（教育講演）. 第 97 回日本内分泌学会学術総会，パシフィコ横浜ノース，2024.6.6-8.
- 13) 河村 葵，羽澄 恵，岡部 しのぶ，伏見 もも，吉池 卓也，栗山 健一：職域における睡眠簡易健診，睡眠衛生指導の有用性. 日本睡眠学会第 48 回定期学術集会，シンポジスト，パシフィコ横浜ノース，2024.7.19.

- 14) 北村真吾：夜間のブルーライト対策により睡眠を整える．日本睡眠学会第 48 回定期学術集会 共催セミナー，講演者，パシフィコ横浜ノース，2024. 7. 19.

(2) 一般演題

- 1) Khullar A, Suzuki M, Yoshiike T, Koebisu M, Inabe K, Kogo Y, Taninaga T, Moline M, Cheng JY, Kumar D, Pinner K, Kuriyama K: Lemborexant Treatment in Adults With Insomnia: Correlations Between Sleep Quality and Sleep Parameters in Study 303. Canadian Psychiatric Association's 74th Annual Conference, Montreal, November 6–9, 2024.
- 2) Matsui K, Shimura A, Komda Y, Okajima I, Hashimoto H, Ohashi Y, Ozaki A, Kuriyama K. Longitudinal Study of Factors Contributing to Shorter Weekday Sleep Duration in General Workers. (24-27/Sep/2024) The 27th Congress of the European Sleep Research Society, Seville, Spain.
- 3) Yoshiike T, Utsumi T, Yajima T, Kawamura A, Matsui K, Tripathi S, Nagao N, Kitamura S, Matsuda Y, Ito M, Nakajima S, Kuriyama K: Dream enactment behavior and its relationship to the oxytocin system in prolonged grief reactions to bereavement. NEURO2024, Fukuoka Convention Center, July 24–27, 2024.
- 4) Nagao K, Yoshiike T, Matsui K, Kawamura A, Utsumi T, Kizuki J, Matsushima S, Izuhara M, Okamura S, Kitamura S, Kuriyama K: Association between fluctuations in sustained attention and efficacy of multicomponent inpatient treatment in delayed sleep-wake phase disorder, NEURO2024, Fukuoka Convention Center, July 24–27, 2024.
- 5) Yoshiike T, Kawamura A, Utsumi T, Matsui M, Kuriyama K: Longitudinal associations of weekend catch-up sleep and sleep ability with mortality in middle-aged adults. SLEEP 2024, George R. Brown Convention Center (Houston), June 1–5, 2024.
- 6) Nagao K, Yoshiike T, Matsui K, Kawamura A, Utsumi T, Kizuki J, Matsushima S, Izuhara M, Okamura S, Kitamura S, Kuriyama K: Transitional change in a fluctuation of sustained attention during intensive inpatient treatment predicts clinical outcome in patients with delayed sleep-wake phase disorder. SLEEP 2024, George R. Brown Convention Center (Houston), June 1–5, 2024.
- 7) Tomohiro U, Takuya Y, Sayaka A, Kentaro M, Kentaro N, Kaori S, Rei O, Masahiro S, Kenichi K: Association Between Subjective-Objective Sleep Time Discrepancy and Mortality in Older Men with/without Insomnia. SLEEP2024, J the convention center in downtown Houston, June 1–5, 2024.
- 8) Tomohiro U, Takuya Y, Sayaka A, Kentaro M, Kentaro N, Kaori S, Rei O, Masahiro S, Kenichi K: The Association of Subjective-Objective Sleep Duration Discrepancy with All-cause Mortality in Community-dwelling Older Men. Asian Society of Sleep Medicine Interim Meeting 2024, TFT Bldg, October 18-19, 2024.
- 9) Yamada Y, Mishima K, Suzuki M, Nemoto T, Mizuno M, Kishimoto T, Tomita H, Ozone M, Kitamura S, Hashimoto K, Nakagome K, Sumiyoshi T. Identification of factors to predict transition to schizophrenia in subjects at ultra-high risk for psychosis: A protocol for a multicenter, longitudinal study of sleep parameters and cytokines levels. 第 46 回日本生物学的精神医学会年会，福岡，2024.7.24-27.
- 10) Motomura Y, Kitamura S, Oba K, Katsunuma R, Terasawa Y, Hida A, Moriguchi Y, Mishima K. Common fMRI functional connectivity changes in subjective-objective sleepiness indices: a KSS and PVT study. Sleep Europe 2024. Seville, Spain, 2024.9.24-27.
- 11) Kitamura S, Eto T. Outdoor Light at Night is Associated with Depressive Symptoms Independent of Sleep Quality and Chronotype: A Web-Based Survey. Asian Society of Sleep

- Medicine Interim Meeting 2024. Tokyo, Japan, 2024.10.18-19.
- 12) Higuchi S, Eto T, Kitamura S. Individual differences in sleep and circadian rhythm in children in relation to melatonin suppression by light at night. SSHB 2024. Porto, Portugal, 2024.9.11-13.
 - 13) 松井健太郎, 志村哲祥, 駒田陽子, 岡島義, 橋本英樹, 大橋由基, 尾崎章子, 栗山健一: 一般勤労者の平日の睡眠時間短縮に寄与する要因の縦断的検討. 日本睡眠学会第 48 回定期学術集会, パシフィコ横浜ノース, 2024.7.18-19.
 - 14) 野崎真紀, 福水道郎, 川井未知子, 小島泰子, 長尾ゆり, 木村一恵, 林雅晴, 松井健太郎, 栗山健一, 星野恭子: 小児における睡眠薬の使用実態についての検討. 日本睡眠学会第 48 回定期学術集会, パシフィコ横浜ノース, 2024.7.18-19.
 - 15) 野崎真紀, 福水道郎, 川井未知子, 小島泰子, 長尾ゆり, 木村一恵, 林雅晴, 松井健太郎, 栗山健一, 星野恭子: メラトニン顆粒小児用の適応外使用についての検討. 第 66 回日本小児神経学会学術集会, 名古屋国際会議場, 2024.5.30-6.1
 - 16) 岩田直弥, 内海智博, 野村めぐみ, 長谷川美彩, 栗山健一, 高野晴成: アルツハイマー病の病理と睡眠障害—アミロイド PET・タウ PET と睡眠指標との関連. 6NC リトリート, 国立国際医療研究センター, 2024.4.13.
 - 17) 矢嶋智貴, 内海 智博, 河村葵, 長尾賢太郎, 松井健太郎, 江藤太亮, Srishti Tripathi, 北村真吾, 松田陽子, 伊藤正哉, 中島聡美, 栗山健一, 吉池卓也: 死別後の悲嘆における喪失回避と睡眠持続性の関連. 日本睡眠学会第 48 回定期学術集会, パシフィコ横浜ノース, 2024.7.18-19.
 - 18) 吉池卓也, 鈴木正泰, 古戎道典, 井鍋佳菜子, 向後由貴, 谷長丈廣, Pinner Kate, Kumar Dinesh, Moline Margaret, 栗山健一: レンボレキサントの主観的睡眠の質への影響: 第 3 相試験事後解析. 日本睡眠学会第 48 回定期学術集会, パシフィコ横浜ノース, 2024.7.18-19.
 - 19) 吉池卓也, 鈴木正泰, Kumar Atul, 古戎道典, 井鍋佳菜子, 向後由貴, 谷長丈廣, Moline Margaret, Cheng Jocelyn, Kumar Dinesh, Pinner Kate, 栗山健一: レンボレキサントによる不眠症治療における主観的な睡眠の質の変化と睡眠パラメータの関連: 303 試験事後解析. 日本睡眠学会第 48 回定期学術集会, パシフィコ横浜ノース, 2024.7.18-19.
 - 20) 鈴木正泰, 吉池卓也, Khullar Atul, 古戎道典, 井鍋佳菜子, 向後由貴, 谷長丈廣, Moline Margaret, Cheng Jocelyn, Kumar Dinesh, Pinner Kate, 栗山健一: レンボレキサントによる不眠症治療における主観的な睡眠の質の変化と睡眠パラメータの関連: 304 試験事後解析. 日本睡眠学会第 48 回定期学術集会, パシフィコ横浜ノース, 2024.7.18-19.
 - 21) 長尾賢太郎, 吉池卓也, 松井健太郎, 河村葵, 内海智博, 木附隼, 松島舜, 伊豆原宗人, 北村真吾, 岡邨しのぶ, 栗山健一: 睡眠・覚醒相後退障害における持続的注意の変動と集約的入院治療効果との関連性. 日本睡眠学会第 48 回定期学術集会, パシフィコ横浜ノース, 2024.7.18-19.
 - 22) 岡邨しのぶ, 吉池卓也, 河村葵, 内海智博, 長尾賢太郎, 松井健太郎, 北村真吾, 栗山健一: 東日本大震災の被災住民において全身性炎症は不眠症状を介しうつ症状と関連する. 日本睡眠学会第 48 回定期学術集会, パシフィコ横浜ノース, 2024.7.18-19.
 - 23) 羽澄恵, 河村葵, 吉池卓也, 松井健太郎, 北村真吾, 都留あゆみ, 長尾賢太郎, 内海智博, 伊豆原宗人, 高橋恵理矢, 伏見もも, 江藤太亮, 西大輔, 栗山健一: Bedtime Procrastination Scale 日本語版の開発と妥当性・信頼性の検討. 日本睡眠学会第 48 回定期学術集会, パシフィコ横浜ノース, 2024.7.18-19.
 - 24) 伏見もも, 河村葵, 内海智博, 吉池卓也, 松井健太郎, 都留あゆみ, 伊豆原宗人, 有竹清夏, 栗山健一: 日本人における不溶性食物繊維摂取と睡眠休養感の関連. 日本睡眠学会第 48 回定期学術集会, パシフィコ横浜ノース, 2024.7.18-19.
 - 25) 松島舜, 松井健太郎, 河村葵, 吉池卓也, 都留あゆみ, 長尾賢太郎, 内海智博, 伊豆原宗人, 木附隼, 羽澄恵, 北村真吾, 栗山健一: 睡眠障害外来における RBDSQ の臨床的有用性と偽陽

- 性に関する検討. 日本睡眠学会第 48 回定期学術集会, パシフィコ横浜ノース, 2024.7.18-19.
- 26) 木附隼, 松井健太郎, 木村綾乃, 吉池卓也, 長尾賢太朗, 河村葵, 伊豆原宗人, 松島舜, 羽澄恵, 鈴木正泰, 栗山健一: レム睡眠からの覚醒時にも食行動を認めた睡眠関連摂食障害の一例. 日本睡眠学会第 48 回定期学術集会, パシフィコ横浜ノース, 2024.7.18-19.
- 27) 内海智博, 吉池卓也, 河村葵, 松井健太郎, 栗山健一: 労働世代における週末の寝だめと死亡転帰の関連 (縦断的検討). 6NC リトリート 2024, 国立国際医療研究センター, 2024.4.13.
- 28) 河村 葵, 角谷 寛, 鈴木 正泰, 栗山 健一, 内山 真, 山田 尚登: 携帯型脳波計を用いたうつ病睡眠脳波指標の診断有用性に関わる予備的調査. 第 120 回日本精神神経学会学術総会, 札幌コンベンションセンター・札幌市産業振興センター, 2024.6.20-22.
- 29) 内海 智博, 松井 健太郎, 吉池 卓也, 河村 葵, 長尾 賢太朗, 押淵 英弘, 金子 宜之, 横瀬 宏美, 鈴木 貴浩, 金森 正, 早乙女 優太, 永井 康, 斎藤 かおり, 大槻 怜, 柏木 香保里, 山本 慎太郎, 吉田 政樹, 神坂 遼, 大庭 真梨, 浅野 敦子, 津野 良子, 波多野 賢二, 小居 秀紀, 鈴木 正泰, 西村 勝治, 栗山 健一: 睡眠障害に関連したうつ病の新規診断支援システムの開発. 第 120 回日本精神神経学会学術総会, 札幌コンベンションセンター・札幌市産業振興センター, 2024.6.20-22.
- 30) 内海 智博, 吉池 卓也, 松井 健太郎, 河村 葵, 長尾 賢太朗, 都留 あゆみ, 木附 隼, 羽澄 恵, 佐藤 典子, 栗山 健一: Comorbid insomnia and sleep apnea (COMISA) の病態と白質変性との関連. 第 120 回日本精神神経学会学術総会, 札幌コンベンションセンター・札幌市産業振興センター, 2024.6.20-22.
- 31) 内海 智博, 吉池 卓也, 松井 健太郎, 河村 葵, 長尾 賢太朗, 羽澄 恵, 佐藤 典子, 栗山 健二: Comorbid insomnia and sleep apnea (COMISA) の病態と白質変性との関連. 日本睡眠学会第 48 回定期学術集会, パシフィコ横浜ノース, 2024.7.18-19.
- 32) 内海 智博, 吉池 卓也, 松井 健太郎, 河村 葵, 長尾 賢太朗, 羽澄 恵, 佐藤 典子, 栗山 健二: Comorbid insomnia and sleep apnea (COMISA) の病態と白質変性との関連. NEURO2024, 福岡コンベンションセンター, 2024.7.24-27.
- 33) 田崎花, 斎藤幸恵, 恒次祐子, 西瑠衣子, 前川真紀代, 澤田知也, 上迫弘幸, 村上知徳, 石橋 円子, 長島千夏, 宮澤浩一, 太田啓明, 北村真吾: 木質内装が中年層社会人の睡眠に与える影響. 第 75 回日本木材学会大会, 仙台, 2025.3.19-21.
- 34) 山崎花乃香, 恒次祐子, 西瑠衣子, 前川真紀代, 澤田知也, 上迫弘幸, 清宮貴, 村上知徳, 石橋 円子, 長島千夏, 宮澤浩一, 太田啓明, 北村真吾: スギ・ヒノキ内装による室内環境及び社会人の睡眠への影響 (II). 第 75 回日本木材学会大会, 仙台, 2025.3.19-21.
- 35) 高嶋 滯, 池谷 風海, 川邊 美冬, 郡司 美咲, 津田 桃葉, 江藤 太亮, 國枝 泰希, 榎本 みのり, 北村 真吾: 夜間の食事のタイミングの違いによる睡眠の安定性の検討. 第 5 回日本睡眠検査学会学術集会, 東京, 2024.11.9-10.
- 36) 熊谷 千尋, 星本 弘之, 渡部 大介, 北村 真吾, 三井 誠二, 渡辺 浩, 櫻井 理紗, 小室 雅人, 美代 賢吾: FHIR による医療リアルワールドビッグデータ構築における諸課題～6NC-EHRs データベース FHIR 導入に向けたデータ品質検証～. 第 44 回医療情報学連合大会・第 25 回日本医療情報学会学術大会, 福岡, 2024.11.21-24.
- 37) 江藤 太亮, 北村 真吾: 光刺激注の縮瞳が持続的瞳孔反応に及ぼす影響: Maxwellian view 光学系を用いた検討. 日本生理人類学会第 85 回大会, 東京, 2024.6.15-16.
- 38) 榎本 みのり, 高嶋 滯, 池谷 風海, 川邊 美冬, 郡司 美咲, 津田 桃葉, 江藤 太亮, 國枝 泰希, 北村 真吾: 夜間の食事のタイミングの違いによる睡眠の安定性の検討. 2024 年度日本生理人類学会フロンティアミーティング (秋期), 東京, 2024.11.30.
- 39) 榎本 みのり, 國枝 泰希, 江藤 太亮, 北村 真吾: 夕食のタイミングの違いが夜間睡眠脳波へ与える影響. 日本睡眠学会第 48 回定期学術集会, 横浜, 2024.7.18-19.
- 40) 山崎花乃香, 恒次祐子, 西瑠衣子, 前川真紀代, 澤田知也, 上迫弘幸, 清宮貴, 村上知徳, 石

橋岡子，長島千夏，宮澤浩一，太田啓明，北村真吾：スギ・ヒノキ内装による室内環境及び社会人の睡眠への影響．日本木材加工技術協会第 42 回年次大会，京都，2024.9.19-20.

- 41) 小室 雅人，熊谷 千尋，大城 雄介，櫻井 理紗，北村 真吾，星本 弘之，長島 恵子，渡部 大介，三井 誠二，渡辺 浩，美代 賢吾：国立高度専門医療研究センター（NC）における統合電子カルテデータベースのデータ利活用に向けた品質管理における実態調査．第 44 回医療情報学連合大会・第 25 回日本医療情報学会学術大会，福岡，2024.11.21-24.
- 42) 土肥 英祐，藤原 豊史，建石 由佳，山本 泰智，北村 真吾，松村 亮，服部 功太郎，波多野 賢二：難病・希少疾患の 6NC-EHRs を用いた診療実態調査．第 12 回日本難病医療ネットワーク学会学術集会，弘前，2024.10.25-26.
- 43) 土肥 英祐，北村 真吾，松村 亮，服部 功太郎，波多野 賢二：6NC-EHRs を用いた難病・希少疾患の診療実態調査．6NC リトリート 2024，東京，2024.4.13.
- 44) 國枝 泰希，榎本 みのり，江藤 太亮，北村 真吾：夕食－消灯インターバルの睡眠への効果に対する食後血糖の関連．日本生理人類学会第 85 回大会，東京，2024.6.15-16.
- 45) 國枝 泰希，榎本 みのり，江藤 太亮，北村 真吾：夕食－消灯インターバルとその後の睡眠の関係性．日本睡眠学会第 48 回定期学術集会，横浜，2024.7.18-19.
- 46) 吉村 道孝，北沢 桃子，志賀 希子，江藤 太亮，北村 真吾：就寝前の電子機器使用制限の効果と個人特性の関連．日本生理人類学会第 85 回大会，東京，2024.6.15-16.
- 47) 吉村 道孝，北沢 桃子，志賀 希子，江藤 太亮，北村 真吾：就寝前の発光型電子機器使用の制限は、休日の就床時刻を前進させる．日本睡眠学会第 48 回定期学術集会，横浜，2024.7.18-19.
- 48) 吉村 道孝，北沢 桃子，志賀 希子，江藤 太亮，北村 真吾：スマートフォンの使用を寝る前に制限すると、睡眠がよくなる！？．第 31 回日本未病学会学術総会，金沢，2024.11.2-3.
- 49) 北沢 桃子，吉村 道孝，志賀 希子，江藤 太亮，北村 真吾：就寝前の発光型電子機器使用の制限が、気分や社会的ジェットラグに与える影響．第 21 回日本うつ病学会総会，大阪，2024.7.12-13.
- 50) 初治 沙矢香，高峰 詩由，古林 まひろ，北村 真吾，若村 智子：小学生の睡眠と入浴を含む生活習慣との関連．日本睡眠学会第 48 回定期学術集会，横浜，2024.7.18-19.

(3) 研究報告会

- 1) 高橋恵理矢，吉池卓也，内海智博，河村葵，長尾賢太郎，羽澄恵，岡邨しのぶ，不破真衣，松島舜，伏見もも，伊豆原宗人，都留あゆみ，南學正仁，木村綾乃，北村真吾，松井健太郎，栗山健一：睡眠休養感の欠如がコモンディジェズを介した健康転帰に及ぼす影響．不眠研究会第 40 回研究発表会，2024.11.30.
- 2) 内海 智博，吉池 卓也，松井 健太郎，河村 葵，長尾 賢太郎，羽澄 恵，佐藤 典子，栗山 健二：慢性不眠障害および閉塞性睡眠時無呼吸と比較した Comorbid insomnia and sleep apnea の白質変性の病像．令和 6 年度 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 研究宝庫公開，国立精神・神経医療研究センター 教育研修棟 ユニバーサルホール，2025.3.17.

(4) その他

C. 講演

- 1) 栗山健一：国内臨床試験の日本人データから読み解く臨床効果．不眠症 National Symposium，2025.4.6.
- 2) 栗山健一：睡眠力をアップしてイキイキ生活．令和 6 年度東京都在宅保健師の会，AP 市ヶ谷，2025.3.12.
- 3) 栗山健一：特定保健指導で活用できる睡眠の基礎知識．埼玉県特定健康診査・特定保健指導スキルアップ研修会，オンライン，2025.2.3.

- 4) 栗山健一：より良い睡眠をもとめて「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」の紹介。第 28 回板橋区医師会医学会区民公開講座，板橋区立文化会館，2024.12.8.
- 5) 栗山健一：健康増進・維持に役立つ良い睡眠とは「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」の紹介。宮城県令和 6 年度予防医学事業推進会議，TKP ガーデンシティ PREMIUM 仙台西口，2024.11.8.
- 6) 栗山健一：「うつ病と睡眠」。令和 6 年度うつ病セミナー・家族セミナー，オンライン，藤沢市役所・藤沢病院，2024.11.7.
- 7) 栗山健一：健康日本 21（第三次）における休養目標の意義と「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」の紹介。オンライン，宮崎県，2024.11.7.
- 8) 栗山健一：からだところを整える睡眠 ～最新の睡眠ガイドから学ぶ～。令和 6 年度こころの健康づくり講演会（小平市），小平市中央公民館，2024.11.2.
- 9) 栗山健一：「よく寝た！」を実感するための、科学で裏付けされた快眠講座。2024 健康づくり講演会（渋谷区），渋谷区役所，2024.11.1.
- 10) 栗山健一：厚生労働省スマート・ライフ・プロジェクト健康増進普及月間イベント。イオンモール名古屋茶屋，2024.9.22.
- 11) 栗山健一：からだと心のための健康維持の秘訣は「睡眠」にあり ～睡眠の質を上げる方法教えます～。JEF システムズ講演会，2024.9.19.
- 12) 栗山健一：厚生労働省スマート・ライフ・プロジェクト健康増進普及月間イベント。イオンモール幕張新都心 エキマエコート，2024.9.8.
- 13) 栗山健一：「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」の紹介。SLP 健康経営実践勉強会，オンライン，2024.7.29.
- 14) 栗山健一：不眠症の自覚と治療方策 ～ 睡眠休養感欠如と睡眠状態誤認～。Sleep Forum 2024，TKP 名古屋栄カンファレンスルーム，名古屋（名古屋大学精神科），2024.7.29.
- 15) 栗山健一：不眠症の自覚と治療方策 ～ 睡眠休養感欠如と睡眠状態誤認～。不眠症 WEB セミナー（名古屋市立大学精神科），オンライン，2024.7.3.
- 16) 栗山健一：不眠症の自覚と治療方策 ～ 睡眠休養感欠如と睡眠状態誤認～。不眠症 WEB セミナー（東邦大学精神科），オンライン，2024.6.14.
- 17) 栗山健一：不眠症の自覚と治療方策 ～ 睡眠休養感欠如と睡眠状態誤認～。Insomnia Expert Forum 福岡，ANA クラウンプラザホテル福岡，2024.5.16.
- 18) 栗山健一：新しい睡眠指針（健康日本 21（第三次））の目指す日本の健康づくり～ 働き盛り世代から高齢者まで～。プライマリーケア医のための睡眠フォーラム 2024（主催：MSD），虎ノ門ヒルズフォーラム 5F メインホール，2024.4.7.
- 19) 吉池卓也：快適な睡眠で健康づくりを～ぐっすり眠ってすっきり目覚めるために～。江戸川区快適睡眠フェア 2025（主催：江戸川区健康部），タワーホール船堀，2025.3.20.
- 20) 吉池卓也：一般内科における睡眠障害の評価と対応。西東京市医師会学術講演会（共催：西東京市医師会／第一三共株式会社），オンライン，2025.2.14.
- 21) 吉池卓也：今日の不眠診療～睡眠ガイド 2023 を踏まえて～。不眠症 Web セミナー（主催：第一三共），オンライン，2025.2.14.
- 22) 吉池卓也：心身の健康維持・向上のために必要な睡眠の知識～健康づくりのための睡眠ガイド 2023 を中心に～。心と健康フェア 2024 講演会（主催：静岡県精神保健福祉協会），静岡県男女共同参画センター「あざれあ」，2024.11.13.
- 23) 吉池卓也：睡眠から考える健康～良い眠りとは～。みずほフィナンシャルグループ社内セミナー（主催：みずほフィナンシャルグループ），オンライン，2024.10.30.
- 24) 吉池卓也：小学生における睡眠の重要性とその指導法。学校訪問型睡眠講座（主催：公益財団法人 神経研究所 睡眠健康推進機構），各務原市立蘇原第一小学校，オンライン，2024.10.28.
- 25) 吉池卓也：睡眠から考える健康～明日のためにできること～。SOMPO チャレンジド株式会社

睡眠講演（主催：公益財団法人神経研究所 精神神経科学センター），損保ジャパン事務本部ビル，2024.10.17.

- 26) 吉池卓也：不眠診療 up-to-date～睡眠ガイド 2023 を踏まえて～. 中越不眠症セミナー（主催：MSD 株式会社），2024.9.19.
- 27) 吉池卓也：死別後ストレス反応と睡眠. 第 17 回精神科臨床睡眠懇話会（主催：田辺三菱製薬株式会社），オンライン，2024.9.13.
- 28) 吉池卓也：睡眠の量と質の両面から考える睡眠マネジメント. 不眠症診療 Web セミナー（主催：ユーザイ株式会社），オンライン，2024.9.3.
- 29) 吉池卓也：不眠診療アップデート～健康づくりのための睡眠ガイド 2023 を踏まえて～. 神奈川県精神神経科診療所協会学術講演会 Sleep Seminar（共催：神奈川県精神神経科診療所協会／MSD 株式会社），オンライン，2024.8.29.
- 30) 吉池卓也：高齢者の睡眠と認知症. Sleep Management Seminar in 鳥取（主催：MSD 株式会社），オンライン，2024.5.14.
- 31) 吉池卓也：世代別にひも解く睡眠問題～治療を始める前に考えること～（座長）. 睡眠を学んで診療に役立てる会（主催：MSD 株式会社），2024.4.19.
- 32) 河村葵：睡眠の質向上のための工夫. 令和 6 年度 市民のためのメンタルヘルス講座（主催：府中市・府中精神保健福祉協議会），地域生活支援センタープラザ，2025.3.15.
- 33) 内海智博：健康管理のための睡眠習慣を考える. SOMPO チャレンジド株式会社 睡眠講演（主催：公益財団法人神経研究所 精神神経科学センター），損保ジャパン事務本部ビル，2024.10.24.
- 34) 内海智博：睡眠と生活習慣病良い眠りをとるための生活術. 第 3 回保険推進員全体研修会（主催：公益財団法人神経研究所 精神神経科学センター），川越市保健所 総合保健センター，2025.2.5
- 35) 北村真吾：クロノタイプと睡眠について. 一般社団法人日本快眠協会，オンライン，2024.11.11.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 栗山健一：日本睡眠学会 理事・評議員
- 2) 栗山健一：日本時間生物学会 評議員
- 3) 栗山健一：日本生物学的精神医学会：評議員
- 4) 肥田昌子：日本時間生物学会 評議員
- 5) 肥田昌子：日本睡眠学会 評議員
- 6) 北村真吾：日本時間生物学会 評議員
- 7) 北村真吾：日本生理人類学会 理事
- 8) 北村真吾：日本睡眠学会 評議員
- 9) 吉池卓也：日本時間生物学会 評議員
- 10) 吉池卓也：日本睡眠学会 評議員
- 11) 河村 葵：日本睡眠学会 評議員

(3) 座長

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 栗山健一：日本睡眠学会 倫理委員会 委員長

- 2) 栗山健一：日本睡眠学会 利益相反委員会 副委員長
- 3) 栗山健一：日本睡眠学会 用語委員会 副委員長
- 4) 栗山健一：日本睡眠学会 睡眠研究支援委員
- 5) 栗山健一：日本睡眠学会 将来構想委員
- 6) 栗山健一：日本睡眠学会 機関誌編集委員
- 7) 栗山健一：日本睡眠学会 SBR Associate Editor
- 8) 栗山健一：日本睡眠学会 災害対策ワーキンググループ 副委員長
- 9) 吉池卓也：日本総合病院精神医学会誌 編集委員
- 10) 吉池卓也：日本総合病院精神医学会 治療戦略検討委員
- 11) 吉池卓也：日本睡眠学会 認定試験委員会試験問題作成委員
- 12) 北村真吾：日本生理人類学会誌 副編集委員長
- 13) 北村真吾：Journal of Physiological Anthropology Editorial Board
- 14) 北村真吾：Biology Editorial Board

E. 研修

(1) 研修企画

(2) 研修会講師

- 1) 内海智博：「メタ解析の実例－発想から論文作成まで」．2024 年度系統的レビュー/メタアナリシス入門講座，国立精神・神経医療研究センターTMC 棟 2 階会議室，2025.1.25.

F. その他

- 1) 栗山健一：快適睡眠のための生活習慣．すこやかファミリー 4 月号第 850 号，株式会社法研，pp.6-11.
- 2) 栗山健一：新しい睡眠ガイドラインを作る．Newsletter No.5 特別号，公益財団法人 神経研究所，pp.10-15.
- 3) 栗山健一：日照時間が短くなる時期に起こる「冬季うつ」．高校保健ニュース 第 837 号，少年写真新聞社，2025 年 1 月 8 日号.
- 4) 栗山健一：ぐっすりコンパス 「眠りと不眠症を知り、明るく活力のある毎日へ」．塩野義製薬株式会社，Web <https://wellness.shionogi.co.jp/insomnia/top.html>，2024.12.25.
- 5) 栗山健一：睡眠と健康 健康づくりのための睡眠の新常識．賢者の休日 50 号，大塚製薬，2024 年冬号.
- 6) 栗山健一：睡眠障害．一般疾患治療の最新情報，スーパードクターに教わる最善予防と最新治療 2025．文春ムック 特別編集 vol.129，文藝春秋，pp.126-127，ISBN978-4-16-007091-2.
- 7) 栗山健一：睡眠休養感を高める快適睡眠ガイド．自治体・健康保険組合・共済組合加入者配布用パンフレット，ライズファクトリー，2024.9.17.
- 8) 栗山健一：睡眠改善で健康づくり 4，睡眠の質を高める生活習慣改善策（2）－リラクゼーションと嗜好品－．地方公務員安全と健康フォーラム vol.129，pp.28-29，2024 年 12 月号.
- 9) 栗山健一：不眠症．脳を守ろう ぶれいん 日本脳神経財団ニュース vol.156，pp.2-4，2024 年夏号，2024.7.10.
- 10) 栗山健一：睡眠改善で健康づくり 3，睡眠の質を高める生活習慣改善策（1）－寝室環境と日中の生活習慣－．地方公務員安全と健康フォーラム vol.128，pp.28-29，2024 年 8 月号.
- 11) 栗山健一：睡眠と健康 健康づくりのための睡眠の新常識．賢者の休日 49 号，大塚製薬，2024 年夏号.
- 12) 栗山健一：満足度が上がる！55 歳からの睡眠習慣．リシャイン 創刊号，小学館 Vol.1,pp60-

- 61, 2024 年夏号.
- 13) 栗山健一:健康づくりのための睡眠ガイド 2023 で目指す「適切な睡眠時間」と「睡眠休養感」の科学的根拠. 特集 健康づくりのための睡眠ガイド 2023, 健康づくり, 公益財団法人健康・体力づくり事業財団 vol.554, pp.2-7, 2024 年 6 月号.
- 14) 栗山健一, 吉池卓也: いい睡眠で健康づくり. 社会保険出版社 リーフレット, 2024.
- 15) 栗山健一, 吉池卓也: シニア・おとな・こどもの睡眠習慣. 社会保険出版社 リーフレット, 2024.
- 16) 栗山健一: 昼の睡眠発作治療薬 前進 武田、秋までに最終治験 世界初の承認狙う. 日本経済新聞朝刊ビジネス面, 2024.6.14.
- 17) 栗山健一: 武田薬品やエーザイ「居眠り病」の新薬実用化へ前進. 日本経済新聞電子版, 2024.6.13.
- 18) 栗山健一: 健康づくりのための睡眠ガイド 2023 で目指す「適切な睡眠時間」と「睡眠休養感」の科学的根拠. 特集 健康づくりのための睡眠ガイド 2023, 公衆衛生情報 vol.54, No.2, pp6-7, 2024 年 5 月号.
- 19) 栗山健一: 【監修】良い眠りのためのポイント こども版. エーザイ, 2024 年 5 月作成.
- 20) 栗山健一: 【監修】良い眠りのためのポイント 高齢者版. エーザイ, 2024 年 4 月作成.
- 21) 栗山健一: 【監修】良い眠りのためのポイント 成人版. エーザイ, 2024 年 3 月作成.
- 22) 栗山健一: 睡眠改善で健康づくり 2. 睡眠時間と同じく大切な「睡眠休養感」－健康で効率よく働くために－ 地方公務員安全と健康フォーラム vol.127, pp.28-29, 2024 年 4 月号.
- 23) 栗山健一: よい睡眠のためにできること. 特集 心身の活力は睡眠から 睡眠ガイド 2023 ヘルスアップ 21 No.474, pp12-15, 2024 年 4 月号.
- 24) 栗山健一: 働く高齢者の“体の休養”を考える, 特集 心と体の「休養」を考える. エルダー No.533, pp15-18, 2024 年 4 月号.
- 25) 栗山健一: 高齢者は 8 時間以上寝ると寿命が縮む? 世代ごとに違う「睡眠時間と死亡リスク」. デイリー新潮, オンライン, 2024.4.1.
<https://www.dailyshincho.jp/article/2024/04011056/?all=1>
- 26) 吉池卓也: 大特集: 睡眠「必見! “快眠のコツ” のウソ・ホント」, 「「ぐっすり眠る」ってどういうこと? 「良い眠り」を知ろう」, 「いびき、歯ぎしり、寝言、寝ぼけ・・・睡眠中、あなたの体で何が起きている?」, 「マインドチェンジが必要です! 60 代からの睡眠・新常識」. MY HEALTH CLUB, 2025 年 4 月.
- 27) 吉池卓也: 特集 睡眠休養感を得る快眠プラン. ジャストヘルス, 2025 年 1・2 月号.
- 28) 吉池卓也: 「眠りの良し悪し決める 睡眠の量と質の両立」あなたの健康百科. MEDICAL TRIBUNE, 2025.1.20.
- 29) 吉池卓也: 睡眠休養感を高める 国内最高峰の研究所からの最新アドバイス. 特集 睡眠は最高のアンチエイジング 3, 文藝春秋, 2025 年 2 月号.
- 30) 吉池卓也: 《進化する睡眠の常識》「眠れなくてもベッドで体を休ませる」「二度寝は足りない睡眠を補うもの」は間違いだった? 医師が解説. 女性セブン, 2024 年 10 月 24・31 日号.
- 31) 吉池卓也: 特集 不眠あるところに疾患あり. ファーマスタイル, 2024 年 8 月号.
- 32) 吉池卓也: 眠りの良し悪し決める 睡眠の量と質の両立. 十勝毎日新聞電子版, 2024.8.5.
- 33) 吉池卓也: 眠りの良し悪し決める 睡眠の量と質の両立. 苫小牧民報電子版, 2024.8.2.
- 34) 吉池卓也: 眠りの良し悪し決める 睡眠の量と質の両立. 八重山毎日新聞日刊, 2024.7.13.
- 35) 吉池卓也: 眠りの良し悪し決める 睡眠の量と質の両立. 函館新聞デジタル, 2024.7.12.

10. 知的・発達障害研究部

I. 研究部の概要

知的・発達障害研究部は、知的障害研究室、発達機能研究室の二室体制で構成され、知的能力障害、自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症、限局性学習症、トゥレット症などの神経発達症の病態解明、治療・支援に関する研究を幅広く実施している。研究においては、部局内だけではなく、国立精神・神経医療研究センター内、ならびに、国立国際医療研究センター国府台病院とのナショナルセンター間の連携、東京大学、筑波大学、京都大学、名古屋大学、名古屋市立大学などの中核的研究機関との連携を幅広く構築している。加えて研究者のキャリア・パス形成を基本方針の一つに掲げており、競争的研究資金の確保、研究計画の立案と遂行、論文執筆まで、共同性と相互研鑽を通して研究者としての成長を図り、知的・発達障害ならびに関連領域における次世代のリーダーシップを国内外で発揮できる人材育成を強く意識している。また、厚生労働省から委託された国研修として発達障害者支援研修を実施し、各地でかかりつけ医対応力向上研修を実施する高度な知識と技能を有する医師の育成を行っているほか、発達障害者支援センターの人材育成など、知的・発達障害の支援を拡充するための人材育成の拠点として機能できるよう努めている。

部長の高橋長秀（児童精神医学）は、自閉スペクトラム症や注意欠如・多動症をはじめとするとその精神医学的併存症に関して、浜松医科大学子どものこころの発達研究センターとの共同研究で、ADHD の遺伝的リスクが子どものゲーム時間の増加と関連していること、ADHD とメラトニン分泌の遺伝的な関連などを見出した。また、名古屋大学との共同研究では、ADHD の子どもがトゥレット症を発症するトリガーとして炎症反応が関与していることを遺伝学的・分子生物学的解析によって明らかにした。さらに、高田美希科研費研究員（臨床心理学）とともに Parent child interaction therapy(PCIT)の中断率に対するシステムティックレビューを行った。また、NCNP 病院の児童精神科外来において診療を提供した。また、国立障害者リハビリテーションセンター発達障害情報・支援センターの発達障害情報分析会議の委員、国立特別支援教育総合研究所の運営委員として、知的・発達障害に関連する国の施策に寄与してきた。

石井礼花室長（現客員研究員）は、岡田俊奈良医科大学教授とともに、国立がんセンター島津太一らとの共同でペアレント・トレーニングの普及を阻害している要因を明確化し、その実装を図る取り組みを継続している。

江頭優佳室長（神経生理学、実験心理学）は林小百合筑波大学助教（神経生理学、実験心理学）、高田美希科研費研究員（臨床心理学）との共同のもと、定型発達ならびに神経発達症当事者のデータサンプリングを精力的に進めてきた。江頭は、神経発達症における多様な時間知覚に着目し、その神経基盤の同定と神経発達症における障害の解明に取り組んでいる。江頭は、国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部横断的研究推進費若手研究助成を得て、国立国際医療研究センター国府台病院子どものこころ総合診療センターの宇佐美政英センター長、魚野翔太筑波大学准教授、請園正敏人間環境大学教授と共同して、児童症例の前方視的追跡を開始し、併存障害との関係を明らかにする研究へと開始している。また、加賀佳美山梨大学准教授、竹市博臣理化学研究所上級技師とともに、脳統合イメージングセンター（IBIC）との連携をはかり、臨床表現型や神経心理学的機能の脳磁図を用いたバイオマーカーの探索を行っている。さらに請園、古家宏樹東京都精神医学研究所主任研究員と共同で、NMDA 受容体がラットの養育行動に関与していることを明らかにした。

上述のように、高橋部長、石井前室長、江頭室長に加え、科研費研究員として高田美希が研究に参加したことに加え、科研費研究補助員の益田来実、松田千皓が研究を支えた。また、兼任研究員の中川栄二、客員研究員として、會田千重、稲垣真澄、岩垂喜貴、宇佐美政英、魚野翔太、小川しおり、小沢 浩、加我牧子、加賀佳美、金生由紀子、久島 周、黒田美保、軍司敦子、小平雅基、崎原ことえ、鈴木 太、高野裕治、竹市博臣、辻井農亜、波多野文、堀内史枝、林小百合、安村 明、山内

彩，吉川 徹，義村さや香が研究に参加している。また，秋月由紀子，井上さゆり，日下部公美，増喜奈由子が，研究，研修活動を支えた。

部長併任の張所長に代わり，令和 6 年 9 月からは，高橋部長が着任し新体制となった。10 月には石井が東京医科大学精神科の准教授に着任した。部員がアカデミックポジションに着任し，国内の基幹施設における研究の牽引を担える人材となったことも令和 6 年度の当部の成果といえる。令和 7 年度からは新たに池田悠稀をリサーチフェローとして迎え，さらに室長，リサーチフェローの着任も内定している。

Ⅱ. 研究活動

1) 認知神経科学的手法を用いた神経発達症と併存精神疾患の病態研究

注意欠如・多動症ならびに自閉スペクトラム症の臨床表現型（神経発達症特性，適応行動，不安・抑うつなどの精神病理学的評価）と神経心理学的機能（表情認知，視線認知，実行機能，報酬系，時間知覚）との関係についてデータを蓄積している。科学研究費（江頭）ならびに精神・神経疾患研究開発費（江頭）に基づいて研究を遂行している。

さらに，江頭は，それぞれ国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部横断的研究推進費若手研究助成を得て，国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科宇佐美政英（客員研究員）らとともに神経発達症児・者および定型発達児・者を対象としたデータサンプリングできる体制を構築した。

2) 注意欠如・多動症のペアレント・トレーニングに関する実装研究

注意欠如・多動症の心理社会的治療として，ペアレント・トレーニングはその有効性が実証され，第一選択治療とされているにもかかわらず，本邦におけるエビデンス構築は不十分であり，その普及が十分ではない。石井室長は，国立がんセンター島津太一，齊藤順子との連携のもと，ペアレント・トレーニング普及の促進要因，阻害要因を明確化した上で実装化を図る研究を推進している。

3) ゲノムコホートをを用いた神経発達症の病態研究

浜松医科大学，ニューヨーク市立大学などと共に，コホート研究に，ポリジェニックリスクスコアなどのゲノム情報を加えた解析により，注意欠如・多動症ならびに自閉スペクトラム症の早期兆候の同定，発症や経過に影響する因子の同定などを目指した研究が進行中である。さらに，ゲノム解析を発展させて，神経発達症と併存することの多い精神疾患，身体疾患に共通する遺伝子の同定や介入ターゲットの探索なども行っている。本年は，高橋部長が ADHD の子が睡眠覚醒リズムが崩れやすいのはメラトニン分泌との遺伝的関連が存在するためであることなどを明らかにしている（Takahashi, Psychiat Res Com. 2024）。

4) 神経発達症の中間表現型と候補となる認知基盤の認知神経科学研究

江頭優佳リサーチフェロー，林客員研究員らは，岡田客員研究員，高田科研費研究員，魚野客員研究員とともに，神経発達症の表現型とその神経心理学的基盤を調べるため，情動的表情とともに提示した視線方向への反射的注意定位，情動的表情を課題達成のフィードバックに設定し，報酬出現頻度を操作した実行機能課題，感覚—運動同期，時間長弁別，時間長再生という異なる時間知覚課題を併せて実施した。NCNP 病院ならびに精神保健研究所における検査実施に加え，国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科との連携，市川市教育委員会との連携のもと，小児のデータを集積している。現在 376 名の検査を終了している。また，脳病態統合イメージングセンター（IBIC）との連携において脳画像（T1, T2, 安静時 fMRI, 拡散テンソル画像等）を取得した。社会認知機能課題に用いた視線手掛かり課題では，定型発達者と比べて，成人注意欠如・多動症群で視線方向への注意シフトが弱いことが示唆された。また，社会的報酬を伴う行動抑制課題では，定型発達者で

は社会的報酬による抑制精度の向上を認めたが、注意欠如・多動症の成人では異なる知見を見いだした。認知機能計測の一部である時間知覚課題では、併存群では注意欠如・多動症群よりも時間認知の歪みが重篤で、外的時間の認識や外的時間と内的時間のずれを修正できないなどの時間知覚の異常を見いだしている。

5) 養育困難を抱える児童のペアレンティング・スキル向上を目指した介入の有効性検証

神経発達症の児童は、親の養育困難と結びつきがちであり、親の不安や抑うつ、虐待リスクとも関連する。ペアレンティング・スキル向上と子どもの行動上の問題の減少に PCIT の有効性が示されているが、その一方で、中断率が高く、十分に効果が出るまで治療が継続できない、などの課題も存在する。高田美希科研員は高橋部長と共同して、システマティックレビューを実施し、中断に関与する要因を特定した。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

当研究部では、NCNP および部のホームページに神経発達症に関する支援情報を含めた医学的情報を掲示した。高橋部長は、ADHD とゲーム障害との関連について静岡新聞からの取材を受けた。また、国立障害者リハビリセンターの運営する発達障害ナビへの寄稿など、社会的な啓発に励んでいる。

(2) 専門教育面における貢献

高橋部長は、浜松医科大学にて知的・発達障害と児童精神医学における講義を担当した。また千葉大学連携大学院客員教授として院生 1 名の指導に当たっている。

また、江頭室長は九州大学、立教大学、東海大学、石井室長は東京大学医学部、心理職の大学教育に関与していた。

(3) 精研の研修の主催と協力

発達障害者支援法に示されている専門家養成のため、全国で開始された、かかりつけ医等発達障害対応力向上研修の基盤研修として、発達障害支援者研修パート 1 (2024 年 6 月 26 日～27 日)、パート 2 (2024 年 9 月 25 日～26 日)、パート 3 (2024 年 11 月 13 日～14 日)、および、行政実務研修 (2025 年 1 月 15 日～16 日) をオンラインで実施した (課程主任: 高橋, 課程副主任: 石井)。

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

高橋部長が、国立障害者リハビリテーションセンター情報分析会議委員、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所運営委員に携わるなど、国あるいは関連機関の施策への協力を行った。また、小平市教育委員会いじめ問題対策委員会委員、静岡県教育委員会相談業務などを通して、知的・発達障害の支援情報の発信、特別支援教育の研究・実践、貢献活動を行っている。

(5) センター内における臨床的活動

石井室長が 8 月まで、その後、高橋部長が NCNP 病院児童精神科外来において新患 (うちコンサルテーション, セカンドオピニオンを含む)、これらの患者に対する再診診療を提供した。

(6) その他

高橋部長は日本 ADHD 学会代議員、日本児童青年精神医学会国際委員、日本小児精神神経学会評議員として学術活動に貢献した。また、石井は小児精神神経学会認定委員会委員、日本児童青年精神医学会医療経済に関する委員会委員、日本精神神経学会児童精神科研修委員会委員、江頭は日

本生理人類学会代議員，総務幹事，若手の会顧問，日本生理人類学会誌編集委員，ヒューマンインタフェース学会誌編集委員として学術活動に貢献している。

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Tsujii N, Okazaki K, Kihara H, Usami M, Fujita J, Horiuchi F, Okada T, Negoro H: Is there evidence for the use of noninvasive brain stimulation techniques for children and adolescents with mental illness? *Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports* 2024.4.1. DOI: <https://doi.org/10.1002/pcn5.190>.
- 2) Wakuda T, Benner s, Uemura Y, Nishimura T, Kojima M, Kuroda M, Matsumoto K, Kanai C, Inada N, Harada T, Kamenno Y, Munesue T, Inoue J, Umemura K, Ymauchi A, Ogawa N, Kushima I, Suyama S, Saito T, Hamada J, Kando Y, Honda N, Kikuchi S, Seto M, Tomita H, Miyoshi N, Matsumoto M, Kawaguchi Y, Kanai K, Ikeda M, Nakamura I, Isomura S, Hirano Y, Onitsuka T, Ozaki N, Kosaka H, Okada T, Kuwabara H, Yamasue H: Oxytocin-induced increases in cytokines and clinical effect on the core social features of autism: Analyses of RCT datasets. *Brain Behavior and Immunity* 118: 398-407, 2024.5.8. DOI: 10.1016/j.bbi.2024.03.013.
- 3) Nakashima S.F, Ukezono M, Takano Y: Painful experiences in social contexts facilitate sensitivity to emotional signals of pain from conspecifics in laboratory rats. *Animals* 2024 14(9): 1280, 2024.4.14. DOI: 10.3390/ani14091280.
- 4) Ukezono M, Kasahara Y, Yoshida C, Murakami Y, Okada T, Takano Y: Impairments of social interaction in a valproic acid model in mice. *Frontiers in Behavioral Neuroscience* 2024.8.29. DOI: 10.3389/fnbeh.2024.1430267.
- 5) Li X, Takahashi N, Narita A, Nakamura Y, Sakura-Yageta M, Murakami K, Ishikuro M, Obara T, Kikuya M, Ueno F, Metoki H, Ohseto H, Takahashi I, Nakamura T, Warita N, Shoji T, Yu Z, Ono C, Kobayashi N, Kikuchi S, Matsuki T, Nagami F, Ogishima S, Sugawara J, Hoshiai T, Saito M, Fuse N, Kinoshita K, Yamamoto M, Yaegashi N, Ozaki N, Tamiya G, Kuriyama S, Tomita H: Identification of risk loci for postpartum depression in a genome-wide association study. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 2024.9.17. DOI: 10.1111/pcn.13731.
- 6) Nakatochi M, Kushima I, Aleksic B, Kimura H, Kato H, Inada T, Torii Y, Takahashi N, Yamamot M, Iwamoto K, Nawa Y, Iritani S, Iwata N, Saito T, Ninomiya K, Okochi T, Hashimoto R, Yamamori H, Yasuda Y, Fujimoto M, Miura K, Ohi K, Shioiri T, Kitaichi K, Itokawa M, Arai M, Miyashita M, Toriumi K, Takahashi T, Suzuki M, Kato T.A, Kanba S, Horikawa H, Kasai K, Ikegame T, Jinde S, Kato T, Kakiuchi C, Yamagata B, Nio S, Kunii Y, Yabe H, Okamura Y, Tadaka S, Ueno F, Obara T, Yamamoto Y, Arioka Y, Mori D, Ikeda M, Ozaki N: Copy number variations in RNF216 and postsynaptic membrane-associated genes are associated with bipolar disorder: a case-control study in the Japanese population. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 2024.10.15. DOI:10.1111/PCN.13752 .
- 7) Okada T, Sotodate T, Ogasawara-Shimizu M, Nishigaki N. Psychiatric comorbidities of attention deficit/hyperactivity disorder in Japan: a nationwide population-based study. *Frontiers in Psychiatry* 15: 2024.10.24. DOI: <https://doi.org/10.3389/fpsy.2024.1359872>.
- 8) Takahashi N, Tsuchiya K J: Commentary: Relationships between screen time and childhood attention deficit hyperactivity disorder: a Mendelian randomization study. *Frontiers in Psychiatry* 15: 2024.12.24. DOI: <https://doi.org/10.3389/fpsy.2024.1512149>

- 9) Ukezono M, Minamide K, Saika K, Nakayama H, Fujiwara Y, Miyazaki H, Mukai Y, Nagamoto T, Miyashita T, Furukawa E, Nishiyama N, Alrayes Anhar M. M. Yagi M, Yonei Y: Report from izumiotsu maternity support project: next generation aid. Glycative Stress Research 11(4): 204-211, 2024.12.31. DOI: 10.24659/gsr.11.4_204.
- 10) Takahashi N, Okumura A, Nishimura T, Harada T, Iwabuchi T, Rahman M S, Tsuchiya K: Association between genetic risk of attention deficit hyperactivity disorder and trajectories of daily gaming time in children. European Neuropsychopharmacology 91: 54-55, 2025.2. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.eurineuro.2024.11.012>.
- 11) Takahashi N, Kato H, Nawa Y, Ogawa S, Tsuchiya K J, Okada T: The role of inflammation in the development of tic symptoms in subjects with ADHD. Brain, Behavior, & immunity-Health: 2025.3.17. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.bbih.2025.100981>.
- 12) Tsukui N, Nomura Y, Newcorn JH, Takahashi N, Ishikawa - Omori Y, Nakayasu C, Okumura A, Iwabuchi T, Harada T, Rahman MS, Nishimura T, Tsuchiya KJ: Temperament Profiles at age 18 months as distinctive predictors of elevated ASD-and ADHD - trait scores and their Co-Occurrence at age 8-9: HBC study. Res Child Adolesc Psychopathol. 2025.3.29. DOI: 10.1007/s10802-025-01312-2.
- 13) Furuie H, Ukezono M, Okada T, Yamada M: Effects of neonatal N-methyl-D-aspartate receptor blockade on social facilitation of feeding behavior in adult rats. Behavioural Brain Research 483, 2025.4.12. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.bbr.2025.115464>.
- 14) Kamikawa K, Yamamuro K, Mizui R, Kashida N, Ishida R, Okada T, Iwata N, Makinodan M: Reduced prefrontal hemodynamic responses measured using near-infrared spectroscopy in adults with autism spectrum disorder. Frontiers in Psychiatry 15: 2025.1.6. DOI: 10.3389/fpsy.2024.1507890
- 15) Ohnishi H, Matsuoka K, Takahashi M, Yoshikawa H, Minami A, Ueda K, Fujimoto Y, Kiuchi K, Ochi T, Miyasaka T, Tanaka T, Matsumoto R, Makinodan M, Okada T. Associations of demyelination in the right middle temporal gyrus and right praecuneus with visuospatial cognitive dysfunction in Alzheimer's disease. Psychogeriatrics 25(1): e13223 2025.1.25. DOI: 10.1111/psyg.13223.

(2) 総説

- 1) 江頭優佳, 林 小百合, 魚野翔太, 高田美希, 請園正敏, 岡田 俊: COVID-19 パンデミック下での神経発達症研究とこれから. 心理学評論 67(1): 76-89, 2024.06.
- 2) 高橋長秀: 6 小児. 第 3 章こんなときどうする? 向精神薬コンサルテーション. 月間薬事 66(14): 170-173, 2024.10.

(3) 研究報告書

- 1) 高橋長秀, 岩渕俊樹, 奥村明美, 原田妙子, Rahman M S, 西村倫子, 土屋賢治: 注意欠如・多動症(ADHD)の発症・経過におけるアディポネクチンの役割. 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所令和 6 年度研究報告会(第 36 回), 2025.3.17.
- 2) 江頭優佳, 林 小百合, 魚野翔太, 高田美希, 請園正敏, 益田来実, 岡田 俊: 成人期の注意欠如多動症における時間知覚機能不全の検討. 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所令和 6 年度研究報告会(第 36 回), 2025.3.17.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 江頭優佳: 一般シンポジウム S8 環境適応とその可能性Ⅱ 神経発達症を通じて考える神経発達の可能性. 第 78 回日本人類学会大会, 大阪, 2024.10.14.
- 2) 高橋長秀: ゲノムコホート研究を用いて神経発達 of 病態を理解する. 第 22 回日本小児心身医学会 東海北陸地方会, 福井, 2025.3.9.

(2) 一般演題

- 1) Ishii-Takahashi A: Maternal perception of spousal support in parenting, child attachment and associated brain structures in children with attention-deficit/ hyperactivity disorder. Neurology and Neurological Disorders & Advances in Addiction Medicine and Mental Health, on line, 2024.06.26
- 2) 江頭優佳, 林 小百合, 魚野翔太, 高田美希, 請園正敏, 箱島有輝, 宇佐美政英, 岡田 俊: 定型発達小児における時間知覚課題の認知的共通点の検討. 日本生理人類学会第 85 回大会, 東京, 2024.6.14-16.
- 3) 石井礼花: Efficacy of Behavioural Parent Training on Attachment Security in Children with Attention Deficit Hyperactivity Disorder: A Randomised Controlled Trial. 2024 年度第 1 回「生涯学」領域会議, 2024.8.30-31.
- 4) 江頭優佳, 林 小百合, 魚野翔太, 高田美希, 請園正敏, 岡田 俊: 成人 ADHD において時間知覚課題の成績低下は見られるか? 2024 年度日本生理人類学会フロンティアミーティング (秋季), 東京, 2024.11.30.
- 5) 高橋長秀: 注意欠如・多動症 (ADHD) の遺伝的リスクと子どものゲーム時間の増加に与える影響. 日本 ADHD 学会, 第 16 回総会, 東京, 2025.3. 2.

(3) 研究報告会

- 1) 江頭優佳, 林 小百合, 魚野翔太, 高田美希, 請園正敏, 箱島有輝, 宇佐美政英, 岡田 俊: 神経発達症 (発達障害) の神経心理・心理社会的病態モデルの構築—疾患コホートと地域コホートの両面からの検証. 国立高度専門医療研究センター 医療研究連携推進本部 医療研究連携推進本部若手研究助成中間報告 6NC リトリート 2024, 2024.4.13.
- 2) 江頭優佳: 神経発達症の多様性の基盤となる病態解明と個別性に応じた治療法の開発と普及. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和 6 年度精神・神経疾患研究開発費 中間・事後評価 口演報告会, 2025.1.30.

(4) その他

- 1) 高橋長秀: 総合討論司会 国際学会連絡・国際交流基金運営委員会セミナー Clinical practice and research on Neurodevelopmental Disorders in Asia (アジアにおける神経発達症の臨床と研究). 第 65 回日本児童青年精神医学会総会, 愛媛, 2024.10.19.

D. 学会活動

(1) 学会役員

- 1) 江頭優佳: 日本生理人類学会 代議員, 総務幹事
- 2) 高橋長秀: 日本小児精神神経学会 代議員
- 3) 高橋長秀: 日本 ADHD 学会 代議員

(2) 学会誌編集員等

- 1) 江頭優佳：ヒューマンインタフェース学会論文誌 論文誌編集委員
- 2) 高橋長秀：臨床精神薬理 編集協力委員
- 3) 高橋長秀：小児の精神と神経 編集委員

E. 教育

- 1) 江頭優佳：明治学院大学心理学部 非常勤講師（心理学実験）
- 2) 江頭優佳：立教大学現代心理学部 兼任講師（神経心理学（神経・生理心理学））
- 3) 江頭優佳：九州大学大学院統合新領域学府 非常勤講師（感性人類学）

F. 研修

(1) 研修企画

- 1) 石井礼花：令和6年度 精神保健に関する技術研修課程 第5回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅠ. オンライン, 2024.6.26-27.
- 2) 石井礼花：令和6年度 精神保健に関する技術研修課程 第3回医療機関における注意欠如・多動性(ADHD)児の親へのペアレント・トレーニング実施者要請研修. オンライン, 2024.7.2.
- 3) 高橋長秀：令和6年度 精神保健に関する技術研修課程 第5回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅡ. オンライン, 2024.9.27-28.
- 4) 高橋長秀：令和6年度 精神保健に関する技術研修課程 第5回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅢ. オンライン, 2024.11.13-14.
- 5) 高橋長秀：令和6年度 精神保健に関する技術研修課程 第5回発達障害者支援研修：実務者養成研修. オンライン, 2025.1.15-16.

(2) 研修会講師

- 1) 石井礼花：ペアレント・トレーニング. 令和6年度 精神保健に関する技術研修課程 第5回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅠ オンライン, 2024.6.27.
- 2) 石井礼花：注意欠如・多動性(ADHD)とペアレント・トレーニング. 令和6年度 精神保健に関する技術研修課程 第3回医療機関における注意欠如・多動性(ADHD)児の親へのペアレント・トレーニング実施者要請研修. オンライン, 2024.7.2.

G. 取材・報道

- 1) 高橋長秀：ゲーム時間増に ADHD「遺伝的要因」が影響. 静岡新聞 DIGITAL, 静岡新聞紙面, 2025.2.11. <https://news.at-s.com/article/1652422>

11. 地域精神保健・法制度研究部

I. 研究部の概要

当研究部は、生物・心理・社会的観点から精神障害を多面的に捉え、地域に暮らす精神障害者とその家族が主体的な生活を送るための支援技法やシステムの開発、その効果に関する実証的研究を当事者のリカバリー支援の観点から実施することを活動の中心としている。また、精神保健福祉法、障害者総合支援法等の精神科保健医療福祉に関連する法律に基づく保健医療福祉体制のあり方についての検討、医療観察法に基づく医療の検証や一般精神科医療への適用に関する検討を行うことも重要な柱のひとつである。研究活動を通じて政策としても取り入れることが可能な支援モデルを提示し、自治体や専門職、市民への教育研修等を実施してそれらの普及を図ることにより、研究成果の社会への還元を行っている。

研究の実施にあたっては、以下の人員構成で活動を行うとともに、訪問看護ステーション PORT、所沢市アウトリーチ支援チーム、司法精神診療部との協働、研究所内の他部との連携および外部機関とのネットワークの構築についても重視している。

所沢市からの委託を受け、アウトリーチ支援を実施する他、東京都からの委託により、入院者訪問支援事業事務局を運営している。

令和6年度の当研究部の構成は以下の通りである。部長：藤井千代、精神保健サービス評価研究室長：山口創生、臨床援助技術研究室長：佐藤さやか、司法精神保健研究室長：小池純子、常勤研究員：小塩靖崇、川口敬之（8.1～）、特任研究員：名雪和美、リサーチフェロー：川口敬之（～7.31）、岩永麻衣、臼井 香、阿部真貴子（～R7.1.31）、一木崇弘（9.1～）、科研費テクニカルフェロー：久永文恵（9.1～）、科研費研究員：岡野茉莉子、五十嵐百花、羽田彩子、高嶋里枝、奈良麻結、菅原 梓、一木崇弘（5.1～8.31）、併任研究員：平林直次、竹田康二、柏木宏子、客員研究員：伊藤順一郎、瀬戸屋雄太郎、吉田光爾、杉山直也、美濃由紀子、三澤孝夫、河野稔明、柑本美和、横山恵子、稲垣中、堀口雅則、北村俊則、野口正行、鈴木浩太、菊池安希子、曾雌崇弘、松長麻美、下平美智代、安間尚徳、佐竹直子、吉浜文洋、関 英一、田中裕記、杉浦寛奈（4.12～）、馬場俊明（10.1～）研究員：田村早織、山田裕貴、小川 亮、上嶋大樹、塩澤拓亮、小林 慧、杉浦寛奈（～4.11）、阿久津 哲（5.1～）、久永文恵（8.1～8.31）、所沢市アウトリーチ支援チームについては、総括管理責任者：中西清晃、看護師：榎本美智子、医療社会事業専門員：西内絵里沙、作業療法士：柴田 興、科研費テクニカルフェロー山崎さおり、科研費研究員：糸繰朝美、科研費心理療法士：河原崎容佳。

Ⅱ. 研究活動

1) 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築を推進する政策研究（藤井、杉山、山口、小池、岩永、阿部、羽田、高嶋、名雪、久永、菅原、松長、佐竹）

市町村の包括ケアシステム構築状況、精神科医療機関の市町村・保健所への協力状況、措置入院関連ガイドラインの実施状況、危機介入の実態、包括的支援マネジメント及び精神科訪問診療に係る診療報酬改定の影響、地域包括ケアシステムにおける総合病院精神科の役割、精神科救急体制 整備状況、精神障害者の権利擁護に関する精神科医療機関の取組等を明らかにするとともに、権利擁護のための個別支援の効果検証を行う。研究結果を精神保健医療福祉関係諸団体、当事者団体等と共有したうえで上記の課題につき検討し、包括ケアシステム構築のための政策提言を行う。本研究は、以下の分担任で実施している。

- A. 精神障害者の権利擁護に関する研究
- B. 自治体における包括的ケアの推進に関する研究
- C. 地域における精神科医療の役割に関する研究
- D. 地域における危機介入のあり方に関する研究
- E. 総合病院精神科の機能に関する研究

F. 精神科救急医療体制に関する研究

- 2) 包括的精神保健サービスを実現するための協働のあり方と人材育成に関する研究（藤井，山口，小池，川口，岡野，五十嵐，安間，竹田，塩澤）

「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」の構築に資する包括的精神保健サービス（医療・福祉を含む）を実現するにあたって、当事者や家族，医療機関，地域の福祉事業所，行政など，さまざまな立場の人々の協働のあり方について検討するとともに，包括的支援体制の実装のための人材育成のための研修方法を開発するため，以下4つの分担任により研究を実施している。

- A. 地域精神保健領域におけるコアアウトカムセットの開発に関する研究
- B. 精神障害当事者との協働に基づく災害時の精神保健福祉体制に関わるガイダンスの開発
- C. 地域精神保健医療福祉に関わる支援者，行政職員を対象とした地域精神保健医療福祉研修プログラムの開発に関する研究
- D. PPIの視点を取り入れた地域司法精神医療制度の開発

- 3) 精神科医療機関における包括的支援マネジメントの普及に向けた精神保健医療福祉に関わるサービスの提供体制構築に資する研究（山口，佐藤，小池，岩永，名雪，藤井）

包括的支援マネジメントや関連診療報酬・加算に関する実態調整，並びに医福連携に関する実態調査をした。

- A. 障害者福祉サービス事業所調査・当事者調査
- B. 包括的支援マネジメントの効果検証
- C. ウェブサイトの開発および検証
- D. 精神科医療機関ニーズの調査と包括的支援マネジメントの患者特定調査。

- 4) 地域で安心して暮らせる精神保健医療福祉体制における入院医療による支援のための研究（藤井，臼井，高嶋，奈良）

医療保護入院の適応となっている病像や背景事情などの質的分析，質的分析から抽出された課題に関する全国状況の量的分析を行い，医療保護入院等の精神科における入院に係る課題を明らかにする。さらに法学・社会学的な観点から医療保護入院に関する法整備の歴史や本邦の文化的背景について検討し，諸外国における精神科入院医療に関する障害者権利条約への対応状況や，当事者・家族の意見も踏まえて，多角的に検討する。

- 5) 精神科医療機関における行動制限最小化の普及に資する研究（杉山，藤井，阿部，奈良）

行動制限最小化を推進するため，①ピアレビューの方法論（チェックリスト等を含む）の開発，②取組事例の精査，③普及啓発のための一連の教材資料等の作成を実施する。これにより，実効的で本質的な最小化の浸透普及がわが国の医療現場で実現される可能性がある。

- 6) 個別援助付き雇用に関する研究（山口，佐藤，小池，小塩，川口，五十嵐，臼井，岩永，塩澤）

精神障害者に対する就労支援として最も効果的とされる individual placement and support (IPS)に準ずる個別型援助付き雇用の均てん化と質の評価に関する調査に取り組んだ。また，個別型援助付き雇用事業所における包括的なアウトカムを検証し，論文として発表した。

- 7) 地域精神保健研究における患者・市民参画の推進（山口，岩永，五十嵐，山田）

東京大学先端研熊谷研究室と定期的に勉強会を開催し，PPIの在り方や将来のPPIセンターの構築に向けた話し合いをしている。

- 8) 多職種アウトリーチに関する研究（山口，佐藤，川口，臼井，岩永，羽田）

当事者・家族・支援者と協働し、多職種アウトリーチに関する縦断調査に取り組んだ。本研究には国内 23 のアウトリーチ機関が参加しており、2023 年 10 月から 2025 年 9 月までにこれらの機関を新規で利用した当事者と家族を 10 年間継続的に追跡する調査を実施中である。

9) 重症精神障害者の地域支援を目的とした認知行動療法の遠隔トレーニングシステムの開発
(佐藤)

本研究は、重症精神障害者への地域生活支援においても効果的な支援技法と考えられる CBT について、アウトリーチ等に従事する心理職以外の精神保健福祉スタッフを対象に、研修やスキルトレーニングを遠隔会議形式で行うシステム（＝遠隔トレーニングシステム）を開発し、その実施可能性および効果に関する予備的検討を行うことを目的とする。今年度は遠隔会議のためのオンラインシステムの整備を進めつつ、月 1 回程度の頻度でオンラインでの多職種カンファレンスを実施し、事例検討用フォーマットの形式について検討した。

10) 処遇の難しい精神障害者に対する医療支援体制の整備に向けた当事者参画研究（小池、藤井、岡野、菊池）

共生社会の実現を目指す中で、処遇が難しいとされている者への治療戦略や、社会復帰支援策の強化を検討するため、処遇困難となる要因の本質を明らかにし、処遇困難例への効果的な治療及び支援体制の構築に寄与することを目的とする。本年度は、「重度かつ慢性」の精神障害者と医療観察法対象者の特性と臨床経過に関わるデータをカルテから収集したデータを分析した。また、触法精神障害者の協働支援体制、意思決定支援に関する文献レビューを実施中である。

11) アスリートのメンタルヘルスケアシステム開発に関する研究（小塩、松長、山口、塩澤、藤井）

日本の各競技選手会（ラグビー、野球、サッカー、バスケットボール等）のアスリートと共同し、日本スポーツ界におけるメンタルヘルスケアシステム開発のための研究を実施している。2024 年度は、ラグビー選手会での調査データの分析から得られた知見について国際学術誌での論文を公開した。また、「よわいはつよいプロジェクト」というアスリートが情報発信の担い手となり、メンタルヘルスに関する経験や情報を一般市民向けに届ける web サイト、また複数のマスメディア取材への協力を通じて、メンタルヘルス普及啓発に取り組んだ。

12) 共同意思決定の基盤となる関係構築プロセスに関する研究（川口）

地域精神保健福祉サービスにおける共同意思決定（shared decision making: SDM）の普及のために、円滑な SDM の基盤となる当事者と専門職間の関係構築プロセスに焦点をあてた研究を実施した。2023 年度は、当事者および専門職を対象とした関係構築をはかるために必要な関わりやコミュニケーションに関するインタビュー調査の分析結果に基づき、関係構築における概念モデルを作成した。次年度は、共同意思決定に向けて当事者と専門職双方が行う関係構築プロセスに関する合意形成調査の実施を予定している。

13) 自治体アウトリーチ支援等における利用者からみたサービスに対する認識、満足度を測定する尺度開発（山口、岩永、臼井、佐藤）

「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」の推進にあたり、今後一層ニーズが高まるおこと予想される各自治体によるアウトリーチ支援をはじめとする地域におけるメンタルヘルスケア支援について、その効果のアウトカムとして使用することを目的に米国およびオーストラリアで開発された「Treatment Perceptions Survey (TPS)」「Treatment Perceptions Survey (Youth)」「Headspace youth (mental health) service satisfaction scale (YSSS)」の日本語版作成について研究計画を立案し、データ収集を開始した。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・地域の保健センターにおける思春期精神保健相談およびアウトリーチによる相談支援を定期的に実施した。(藤井)
- ・地域における講演会などに講師として可能な限り参加した。(藤井)
- ・特定非営利活動法人 地域精神保健福祉機構・コンボ 理事(山口)
- ・一般社団法人ルンアルン 理事(山口)
- ・V-CAT 研究会理事(佐藤)
- ・所沢市自立支援協議会こころ部会委員(中西, 西内)
- ・東京都多摩地域依存症関連期間地域連携会議委員(小塩)

(2) 専門教育面における貢献

- ・愛媛大学 医学部 非常勤講師(藤井)
- ・愛媛大学大学院 医農融合公衆衛生学環 非常勤講師(藤井)
- ・文教大学 人間科学部 非常勤講師(山口)
- ・法政大学 現代社会学部 非常勤講師(山口)
- ・東洋大学 福祉社会システム専攻 非常勤講師(山口)
- ・京都大学大学院 保健学研究科 非常勤講師(山口)
- ・大正大学 社会共生学部 非常勤講師(山口)
- ・武蔵野大学 人間科学部 非常勤講師(山口)
- ・東京大学大学院 精神看護学特論Ⅰ 連携大学院講義(山口)
- ・早稲田大学 人間科学部 非常勤講師(佐藤)
- ・立教大学 現代心理学部 非常勤講師(佐藤)
- ・目白大学 心理学部 非常勤講師(佐藤)
- ・法政大学 キャリアデザイン学部 非常勤講師(小塩)

(3) 精研の研修の主催と協力

- ・第1回入院者訪問支援事業研修の主任(藤井)
- ・第2回入院者訪問支援事業研修の主任(藤井)
- ・第4回精神科救急医療体制整備研修の主任(藤井)

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

- ・厚生労働省 社会保障審議会障害者部会 委員(藤井)
- ・厚生労働省 地域で安心して暮らせる精神保健医療福祉体制の実現に向けた検討会構成員(藤井)
- ・厚生労働省 精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築支援事業広域アドバイザー(藤井, 名雪)
- ・厚生労働省令和6年度推進事業 精神科医療における行動制限最小化に関する調査研究委員(藤井)
- ・厚生労働省 診療報酬改定結果検証委員会 委員(藤井)
- ・東京都措置入院者退院後支援体制整備推進会議委員長(藤井)
- ・東京都医療体制整備検討委員会委員長(藤井)
- ・東京都精神科救急医療体制整備検討委員会 委員長(藤井)
- ・World Health Organization 西太平洋地域事務局 Temporal Advisor(藤井)
- ・医療技術等国際展開推進事業(国立国際医療センター国際協力局)「フィリピン国を対象とした地域精神保健支援の普及と実装」実施担当責任者, 実施担当者(藤井, 佐藤)

- ・令和6年度障害者総合福祉推進事業包括的支援マネジメントにおける多職種連携促進のための調査検討委員会委員（佐藤，山口）
- ・令和6年度障害者総合福祉推進事業包括的支援マネジメントにおける多職種連携促進のための調査ワーキンググループ委員（佐藤）
- ・国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部（JH）共同研究課専門職（佐藤）
- ・日本学校保健会「精神疾患に関する指導参考資料作成委員会」委員（小塩）

(5) センター内における臨床的活動

- ・国立精神・神経医療研究センター訪問看護ステーションにて週に0.5程度，訪問時を中心に利用者本人および家族に認知行動療法を提供した。（佐藤）

(6) その他

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Shiina A, Niitsu T, Tomoto A, Iyo M, Shimizu E, Fujii C: Police officers' perception of mentally disordered people: a national survey in Japan. The Journal of Forensic Psychiatry & Psychology 1-15, 2024.
- 2) Iida M, Sawada U, Usuda K, Hazumi M, Umemoto I, Kuroda N, Kuga H, Fujii C, Nishi D: Effects of the Modified version of the Mental Health Supporter Training Program on mental-health-related public stigma among Japanese people: A pretest/posttest study. PCN Rep 2024, 18;3(2): e219
- 3) Iida M, Sawada U, Usuda K, Hazumi M, Okazaki E, Ogura K, Kataoka M, Sasaki N, Ojio Y, Matsunaga A, Umemoto I, Makino M, Nakashita A, Kamikawa C, Kuroda N, Kuga H, Fujii C, Nishi D: Effects of the Mental Health Supporter Training Program on mental health-related public stigma among Japanese people: A pretest/posttest study. PCN Rep 2024, 15;3(1): e176
- 4) Shiina A, Niitsu T, Iyo M, Fujii C: Need for education of psychiatric evaluation of offenders with mental disorders: A questionnaire survey for Japanese designated psychiatrists. World J Psychiatry 2024, 19;14(5): 726-734.
- 5) Nagata S, Yamaguchi S, Tanaka K, Kono S, Tomura T: I do not expect much ikigai from work: A failed link between employment and well-being among adults with serious mental illness. Journal of Vocational Rehabilitation 61(1): 93-102, 2024.
- 6) Yamaguchi S, Usui K, Iwanaga M, Kawaguchi T, Hada A, Yoshida K, Nishio M, Yanata H, Watanabe M, Taniguchi K, Aoki H, Hisajima Y, Sato S, Fujii C: 10-year outcome trajectories of people with mental illness and their families who receive services from multidisciplinary case management and outreach teams: protocol of a multisite longitudinal study. BMJ Open 14(8): e085532, 2024.
- 7) Sawada U, Matsunaga A, Taneda A, Sasaki N, Yamaguchi S: Perspectives of people with schizophrenia on clinical outcome scales and patient-reported outcome measures: a qualitative study. BMC Psychiatry 24(1): 861, 2024. <https://doi.org/10.1186/s12888-024-06292-z>

- 8) Yamaguchi S, Ojio Y, Koike J, Matsunaga A, Ogawa M, Kikuchi A, Kawashima T, Tachimori H, Bernick P, Kimura H, Inagaki A, Watanabe H, Kishi Y, Yoshida K, Hirooka T, Oishi S, Matsuda Y, Fujii C: Associations between readmission and patient-reported measures in acute psychiatric inpatients: a multicenter prospective longitudinal study. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology* 60(1): 79–93, 2025. <https://doi.org/10.1007/s00127-024-02710-5>
- 9) Takeda K, Kashiwagi H, Takanobu K, Kubota R, Naoe R, Yamada Y, Koike J, Kono T, Kako Y, Hirabayashi N: Current status and features of antipsychotic prescriptions in Japanese forensic psychiatric wards based on a forensic inpatient database. *Neuropsychopharmacology reports*.2024.
- 10) Ojio Y, Amemiya R, Oliffe JL, Rice S: Mental health help-seeking knowledge, attitudes, and behaviour among male elite rugby players: the role of masculine health-related values, *BMJ Open Sport Exerc Med*.9(2): 2025;11:e002275.
- 11) Ojio Y, Shiozawa T, Gregorio ER Jr, Leynes MC, Hernandez PMR, Estrada CAM, Fuyama T, Kobayashi J, Satake N: An international interdisciplinary approach to developing video educational materials promoting mental health literacy among adolescents in the Philippines. *Early Interv Psychiatry*. 2024.
- 12) Sano K, Watanabe A, Kawaguchi T, Sakamoto Y, Fukuda M: Clinical and Cognitive Characteristics Associated with the Onset of Delirium in Postoperative Cardiovascular Surgery Patients Admitted to the ICU. *Progress in Rehabilitation Medicine* 9: 20240026, 2024.
- 13) Suzuki M, Watanabe A, Kawaguchi T, Fukuda M, Serizawa K, Okubo T: Occupational Dysfunction as a Factor Affecting Changes in Quality of Life Before and After Hospitalization in Patients with Parkinson's Disease. *Asian Journal of Occupational Therapy* 20(1): 86-92, 2024.
- 14) Iida M, Sakuraya A, Imamura K, Asaoka H, Arima H, Ando E, Inoue A, Inoue R, Iwanaga M, Eguchi H, Otsuka Y, Kobayashi Y, Komase Y, Kuribayashi K, Sasaki N, Tsuno K, Hino A, Watanabe K, Ebara T, Shimazu A, Kawakami N, Tsutsumi A: Effects of participatory organizational interventions on mental health and work performance: A protocol for systematic review and meta-analysis. *J Occup Health* 2024 May 28: uiae028. doi: 10.1093/joccuh/uiae028. Epub ahead of print. PMID: 38805736.
- 15) Iwanaga M, Kawakami N: Long-Term Impact of Being Bullied at School on Job Satisfaction among Middle-Aged Workers: Findings from a 50-Year Prospective Study of the 1958 British Birth Cohort. *Industrial Health* 2024. <https://doi.org/10.2486/indhealth.2024-0141>
- 16) Sasaki N, Imamura K, Watanabe K, Hidaka Y, Sakuraya A, Ando E, Eguchi H, Inoue A, Tsuno K, Komase Y, Iida M, Otsuka Y, Iwanaga M, Kobayashi Y, Inoue R, Shimazu A, Tsutsumi A, Kawakami N: Association of psychosocial factors at work with fertility and

- menstrual disorders: A systematic review. *Japan Journal of Nursing Science* 22(1): e12624. 2024. <https://doi.org/10.1111/jjns.12624>
- 17) Koshiyama D, Nishimura R, Usui K, Fujioka M, Tada M, Kirihara K, Araki T, Kawakami S, Okada N, Koike S, Yamasue H, Abe O, Kasai K: Cortical white matter microstructural alterations underlying the impaired gamma-band auditory steady-state response in schizophrenia. *Schizophrenia (Heidelb)* 2024 Mar 12;10(1): 32.
 - 18) Tada M, Yagishita S, Uka T, Nishimura R, Kishigami T, Kirihara K, Koshiyama D, Usui K, Fujioka M, Araki T, Kasai K: From the Laboratory to the Real-World: The Role of Mismatch Negativity in Psychosis. *Clin EEG Neurosci* 2025 Jan 56(1): 60-71. doi: 10.1177/15500594241294188. Epub 2024 Nov 6.
 - 19) Satoh M, Inoue J, Ogawa J, Tabei K, Kamikawa C, Abe M, Yoshizawa A, Kitagawa G, Ota Y : Transforming text to music using artificial intelligence improves the frontal lobe function of normal older adults. *Brain and behavior* 14(9) e70007, SEP 2024.
 - 20) Hada A, Ohashi Y, Usui Y, & Kitamura T: Typology of Parent-to-Child Emotions: A study of Japanese parents of a foetus up to a 12-year-old child. *Healthcare* 2024 12(9): 881. <https://doi.org/10.3390/healthcare12090881>
 - 21) Kitamura T, Hada A, Usui Y, Ohashi Y: Development of the Japanese Version of the Test of Self-Conscious Affect-3 (TOSCA-3): A Study among Student and Parent Population. *Behavioral Sciences* 14(7): 576, 2024. <https://doi.org/10.3390/bs14070576>.
 - 22) Kitamura T, Yamamoto M, Saito T, Hada A, Tanke A, Usui Y, Ishida H: Development and validation of a multidimensional mental health screening questionnaire for pregnant women: a preliminary report. *Psychiatry Clin Neurosci Rep* 2025 Jan 19;4(1): e70053. <https://doi.org/10.1002/pcn5.70053>
 - 23) Yasuma N, Sato S, Yamaguchi S, Matsunaga A, Shiozawa T, Tachimori H, Watanabe K, Imamura K, Nishi D, Fujii C, Kawakami N: Effects of brief family psychoeducation on family caregiver burden of people with schizophrenia provided by psychiatric visiting nurses: a cluster randomised controlled trial. *BMC Psychiatry* 24(1): 445, 2024.
 - 24) 山口創生, 岩永麻衣: 医療スタッフにおける精神疾患に関するスティグマのメタ解析のミニレビュー: 精神科以外のスタッフに焦点を当てて. *精神神経学雑誌* 126(6): 391-398, 2024.
 - 25) 厨子健一, 周防美智子, 山口創生: 学校教育現場におけるスクールソーシャルワーカーによる実践内容の類型化: 国内文献における検討. *ソーシャルワーク研究* 2(3): 51-61, 2024.
 - 26) 中村麻幸, 川口敬之, 勝山基史: 回避性パーソナリティ障害を持つ入院患者に対する作業機能障害に焦点を当てた実践の効果—単一事例実験研究—. *作業療法* 43(2): 272-279, 2024. doi: 10.32178/jotr.43.2_272
 - 27) 塩澤拓亮, 川口敬之, 山田悠平, 安間尚徳, 阿部真貴子, 小池純子, 五十嵐百花, 小川 亮, 山口創生, 藤井千代: 地域で生活する精神疾患当事者が抱く自身の目標や期待する将来像 アンケート調査の内容分析. *医療と社会* 34(2): 201-216, 2024.

- 28) 鈴木満恵, 渡邊愛記, 川口敬之: 橈骨遠位端骨折患者の患手を使用した大切な作業への取り組みにおけるカナダ作業遂行測定と自己モニタリングシートを併用した作業療法実践の効果. 作業療法 43(6): 797-804, 2024.
- 29) 加藤伸輔, 川口敬之: 双極症の経験のある自分の人生におけるリカバリープロセスをどのようにに表現するか: 生きられた経験に基づくライフラインおよびライフチャートの提案. 精神障害とリハビリテーション 28(2): 200-208, 2024.
- 30) 倉持桃子, 那須田桂, 古川由己, 市橋香代, 臼井 香, 長谷川智恵, 多田真理子, 藤川慎也, 笠井清登: 統合失調症初発期にある 1 名の患者に思春期向けの早期支援プログラムを実施した報告. 精神神経学雑誌 126(5): 342-342, 2024.
- 31) 北村俊則, 羽田彩子, 大橋優紀子: 藤沢市児童障害による男児死亡事件調査検証報告書(令和 5 年 11 月)の論点. 日本周産期メンタルヘルス学会誌 10(1): 85-89, 2024.
- 32) 高嶋里枝: 医療保護入院の違法性の判断 - 「引き出し屋」医療保護入院事件(東京地裁令和 4 年 11 月 16 日判決・東京高裁令和 5 年 9 月 21 日判決) - 法学研究論集 61 号: 20-39, 2024.
- 33) 高嶋里枝: 産業保健法学と地域精神保健の課題. 産業保健法学会誌 3 巻 2 号: 55-59, 2024. https://doi.org/10.57523/jaohl.3.2_1
- 34) 高嶋里枝: 精神保健福祉法における入院者訪問支援事業の制定—創設に至る過程と運用される内容について—. 法学研究論集 62 号: 2025.

(2) 総説

- 1) Ojio Y, And Nishida M: Rethinking Alexithymia in Athletes: Barriers to Help-Seeking and Opportunities for Intervention, Personality and Individual Differences 238, 2025.
- 2) Tada M, Yagishita S, Uka T, Nishimura R, Kishigami T, Kiriara K, Koshiyama D, Usui K, Fujioka M, Araki T, Kasai K: From the Laboratory to the Real-World: The Role of Mismatch Negativity in Psychosis. Clin EEG Neurosci 2024 Nov 6: 15500594241294188.
- 3) 藤井千代: 精神保健福祉法改正と自治体の新たな役割. 法と精神医療 38: 147-160, 2024.
- 4) 藤井千代: 市町村における精神保健に係る相談支援体制の整備と都道府県のバックアップ. 保健師ジャーナル 80(2): 101-107, 2024.
- 5) 里村嘉弘, 金原明子, 大久保紗佳, 杉本達哉, 片岡朋恵, 小西優歌, 吉川桜子, 木之下遼, 末松万宙, 高橋優輔, 熊倉陽介, 長谷川智恵, 佐々木理恵, 山口創生, 澤田宇多子, 宮本有紀, 大島紀人, 熊谷晋一郎, 笠井清登: 東京大学医学部におけるダイバーシティ, インクルージョン, コ・プロダクションの学部教育. 医学教育 55(2): 121-127, 2024.
- 6) 山口創生, 横山朋子, 山田悠平, 夏苺郁子: 精神障がいのあるご本人の意思決定と家族ができること: 当事者参画が必要といわれるけれど. 月刊みんなねっと 6: 6-13, 2024.
- 7) 山口創生: リハビリテーション専門職がリカバリーの応援のためにできることは?: 概念の再確認から実装に向けた再始動へ. 精神障害とリハビリテーション 28(1): 28-30, 2024.
- 8) 山口創生: 支援のパートナーシップを求めて: 共同意思決定・共に悩む姿勢・共に考える場所. 臨床心理学 16(増刊号): 110-114, 2024.
- 9) 山口創生, 吉田光爾: ケースマネジメントの発展の歴史と概要. 精神障害とリハビリテーション 28(2): 125-139, 2024.

- 10) 山口創生：「役立つ」の意味と共同から考える、「本当に役立つ支援」．こころの科学 240(3)：48-52, 2025.
 - 11) 山口創生：精神障害に関するスティグマとその減少に向けた取り組み．こころの健康 63：3-16, 2025.
 - 12) 竹澤 翔, 小池純子, 酢野 貢, 村井千賀, 山下 真, 北村 立, 山口創生, 藤井千代：【クライシスへの予防, 予見, 早期介入～地域包括ケアシステムと精神科救急医療体制～】精神科救急病棟における包括的支援マネジメントによる地域連携．精神科救急 27：24-31, 2024.
 - 13) 竹澤 翔, 小池純子：入院ケースマネジメント-地域ケアに向けたシームレスな連携-．精神障害とリハビリテーション 28(2)：180-183, 2024.
 - 14) 中西清晃：自治体アウトリーチにおける早期介入．精神科救急 27：17-20, 2024.
 - 15) 小塩靖崇, 杉山翔一, 堀口将則：スポーツ法の実務家にとってのメンタルヘルスへの配慮．日本スポーツ法学会年報第 31 号, 182-192, 2024.
 - 16) 伊藤華英, 山中 恕, 西城紘太, 小塩靖崇：ヘルスリテラシーの観点から考える学校における月経教育のあり方．スポーツ産業研究 35(1)：65-78, 2025.
 - 17) 名雪和美：【権利擁護の実践者としての精神保健福祉士】入院者訪問支援事業について．精神保健福祉 55(3)：253-257, 2024.
 - 18) 臼井 香：精神疾患の早期発見・早期介入 up to date：統合失調症の心理社会的早期介入のあり方 ―諸外国の現状と戦略―．臨床精神医学 53(9)：1077-1084, 2024.
- (3) 著書
- 1) Usui Y, Hada A, Kitamura T: Chapter 2: Antenatal depression: Symptomatic factor structure, boundaries, and core symptoms. In Kitamura T. (Editor). The Dimensional Assessment of Mother Baby Organisation Project: The many facets of psychological difficulties among expectant women. New York: Nova Publishing, pp15-34, 2024.
 - 2) Tanke A, Hada A, Kitamura T. Chapter 4: Maternal-Foetal Bonding Disorder: Factor Structure and Correlates The many facets of psychological difficulties among expectant women. New York: Nova Publishing, pp49-66, 2024.
 - 3) Hada A, Kitamura T: Factor Structures and Clusters of Psychological Symptoms during Pregnancy: Proposal of Antenatal Psychological Syndrome. In Kitamura T. (Editor). The Dimensional Assessment of Mother Baby Organisation Project: The many facets of psychological difficulties among expectant women. New York: Nova Publishing, pp117-144, 2024.
 - 4) 藤井千代：障害者権利条約．(高柳 功, 櫻木章司, 新垣 元 編) 四訂 精神保健福祉法の最新知識, 東京, pp163-176, 2024.
 - 5) 藤井千代：精神科地域ケア．福井次矢, 高木 誠, 小室一成 (eds)：今日の治療指針 2025, 医学書院, 東京, pp1072, 2025.
 - 6) 山口創生：統合失調症（地域生活を支える治療・支援）．福井次矢, 高木 誠, 小室一成 (eds)：今日の治療指針 2025, 医学書院, 東京, pp1043-1044, 2025.
 - 7) 山口創生：アンチスティグマと PPI：スティグマ．笠井清登, 村井俊哉, 内田裕之, et al (eds)：精神科研修ノート：改訂第 3 版, 診断と治療社, 東京, pp33-35, 2024.

- 8) 山口創生：アンチスティグマと PPI：患者・市民参画（PPI）。笠井清登，村井俊哉，内田裕之，et al (eds)：精神科研修ノート：改訂第3版，診断と治療社，東京，pp36-38，2024。
- 9) 小池純子：第6章 看護学×触法精神障害者。小嶋章吾編著：M-GTA—多分野多領域における実践と応用。誠信書房，東京，pp83-93，2025。

(4) 研究報告書

- 1) 瀬戸秀文，稲垣 中，太田順一郎，小口芳世，小池純子，椎名明大，島田達洋，中西清晃，中村 仁，藤井千代：措置通報および措置入院の実態に関する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業）良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指したモニタリング研究（22GC2004）令和5年度分担研究報告書 pp90-145，2024。
- 2) 椎名明大，五十嵐禎人，伊豫雅臣，稲垣 中，小口芳世，鎌田 雄，小池純子，島田達洋，鈴木陽大，瀬戸秀文，中西清晃，新津富央，西中宏史：地域における危機介入のあり方に関する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業）精神障害者にも対応した地域包括ケアシステムの構築を推進する政策研究（22GC2003）令和5年度分担研究報告書 pp45-102，2024。

(5) 翻訳

(6) その他

B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等
 - 1) Fujii C: Early Intervention Through Outreach Services by Local Governments and Their Outcomes. The 10th World Congress Asian Psychiatry, Bali, Indonesia, 2024.12.4.
 - 2) Yamaguchi S: Vocational rehabilitation in Japan: implementation of effective employment services. The 2024 International Conference on Supportive Employment Services for People with Psychiatric Disabilities, 2024.10.16.
 - 3) Ichiki T: Community-Based Suicide Prevention: Screening and Mental Health Care for High-Risk Individuals. 8th ACONAMI Mental Health International Symposium 2024, Singapore, 2024.11.18.
 - 4) Koshiyama D, Nishimura R, Usui K, Fujioka M, Tada M, Kirihara K, Araki T, Kasai K: Mismatch negativity for elucidating schizophrenia pathophysiology in bi-directional translational approach 「双方向トランスレーショナル研究によるミスマッチ陰性電位を起点とした統合失調症の病態解明」。Neuro2024, 福岡，2024.7.24-27.
 - 5) 藤井千代：教育講演 4 「社会復帰に基づく医療ワークの意義」 パーソナル・リカバリーを目指す医療リワーク。第7回日本うつ病リワーク協会年次大会，愛知，2024.4.13-14.
 - 6) 藤井千代：委員会企画シンポジウム 11 「医療倫理の四原則からみた精神科におけるオンライン診療」 第120回日本精神神経学会学術総会 札幌大会，北海道，2024.6.20-22.
 - 7) 藤井千代：一般シンポジウム 45 「精神科へき地医療克服のための処方箋」（指定発言者）第120回日本精神神経学会学術総会 札幌大会，北海道，2024.6.20-22.

- 8) 藤井千代, 根本 隆洋 : 一般シンポジウム 76 「精神科早期介入の社会実装に向けた産学官連携の可能性」(司会) 第 120 回日本精神神経学会学術総会 札幌大会, 北海道, 2024.6.21.
- 9) 藤井千代, 新津 富央 : ワークショップ 8 措置診察実践セミナー (平成 30 年ガイドライン・令和 5 年法改正準拠) (司会). 第 120 回日本精神神経学会学術総会 札幌大会, 北海道, 2024.6.20-22.
- 10) 藤井千代: シンポジウム 1 MUSASABI (MUSUBI+MUSASI: Multicenter treatment Survey and Assessments for Schizophrenia And Bipolar disorder In psychiatric clinics) 「統合失調症の心理社会的治療-外来・在宅医療の重要性-」. 第 1 回日本外来精神医学会学術総会, 東京, 2024.9.22-23.
- 11) 藤井千代, 長谷川直美, 上ノ山一寛, 中西清晃, 小野寺健: シンポジウム 9 「精神障害にも対応した地域包括ケアシステムにおける精神科診療所の役割」. 第 1 回日本外来精神医学会学術総会, 東京, 2024.9.22-23.
- 12) 藤井千代: 入院者訪問支援事業創設に込めた想いと未来予想. 一般社団法人おかやま精神医療アドボケイトセンター, 入院者訪問支援事業シンポジウム, 岡山, 2025.2.9.
- 13) 藤井千代: シンポジウム 4 「地域で安心して暮らせる精神保健医療福祉体制における入院医療」. 第 43 回日本社会精神医学会, 東京, 2025.3.13-14.
- 14) 藤井千代, 根本隆洋: シンポジウム 7 (オーガナイザー) 「わが国の在留外国人のメンタルヘルス-その課題と展望-」. 第 43 回日本社会精神医学会, 東京, 2025.3.13-14.
- 15) 山口創生, 川口敬之, 塩澤拓亮: 学術活動における共同創造の可能性と専門用語: 第 17 回日本統合失調症学会の経験を基に. 第 18 回日本統合失調症学会, 徳島, 2024.4.13-14.
- 16) 山口創生: 統合失調症への理解と臨床上の課題. 第 18 回日本統合失調症学会, 徳島, 2024.4.13-14.
- 17) 山口創生: IPS における職場開発と企業支援. 第 120 回日本精神神経学会学術総会 札幌大会, 北海道, 2024.6.20-22.
- 18) 福田正人, 山口創生, 笠井清登, 村井俊哉: IPS における職場開発と企業支援. 第 120 回日本精神神経学会学術総会 札幌大会, 北海道, 2024.6.20-22.
- 19) 山口創生: 職業リハビリテーションの目的の実現化に向けた効果的就労支援の普及: IPS 援助付き雇用の研究を基に. 第 51 回日本職業リハビリテーション学会 島根大会, 島根, 2024.8.23-24.
- 20) 山口創生: 精神疾患とリカバリー: 専門職が理解するための再整理. 第 27 回日本摂食障害学会 東京大会, 東京, 2024.9.7-8.
- 21) 山口創生: 精神疾患に関する研究から見えるアンチスティグマ活動の課題. 第 50 回日本認知・行動療法学会 横浜大会, 神奈川, 2024.9.22-24.
- 22) 山口創生: 精神障害に関するスティグマとその減少に向けた取り組み. 第 65 回青森県精神保健福祉大会 八戸大会, 青森, 2024.10.9.
- 23) 山口創生: 精神疾患当事者に対する就労支援の課題と効果的な取り組み. 精神科医等育成事業教育研修会, オンライン, 2024.11.18.

- 24) 山口創生：学術・学会活動における当事者・家族参加の課題と未来．第 31 回日本精神障害者リハビリテーション学会 お台場大会，東京，2024.12.14-15.
- 25) 榎本美智子：アウトリーチチームの立場から．第 1 回 AMBIT シンポジウム-関東，多機関連携に役立つ AMBIT の視点，東京，2024.8.16.
- 26) 榎本美智子，中西清晃，西内絵里沙，砂田祐介，富永佳代，足立千啓，小幡泰江，今井 佳，藤原雅司：自主プログラム 17「多職種アウトリーチが目指すものを共に考えよう！～医療・保健・福祉はいかにクロスオーバーできるか～」．第 31 回日本精神障害者リハビリテーション学会 お台場大会，東京，2024.12.14-15.
- 27) 小塩靖崇：学会企画シンポジウム（話題提供者）「スポーツはアスリートや社会を幸福にするのか？～東京 2020 オリパラ後に起きたスポーツ問題を問う」．メンタルヘルスの観点から心地良い環境とは？．日本スポーツ心理学会第 51 回大会，広島，2024.9.27-29.
- 28) 川口敬之：コメディカルスタッフから見た統合失調症のある方のケア・サポートにおける留意点や ICF による整理．第 18 回日本統合失調症学会，徳島，2024.4.13-14.
- 29) 山田悠平，川口敬之：当事者主導研究の実践から考える研究における共同創造の普及のあり方．第 120 回日本精神神経学会学術総会 札幌大会，北海道，2024.6. 6.20-22.
- 30) 臼井 香：地域における精神障害者アウトリーチ支援利用者の小児逆境的体験に関する実態調査」．シンポジウム 4「若手による統合失調症研究・臨床の最前線」，第 18 回日本統合失調症学会，徳島，2024.4.13-14.
- 31) 阿部真貴子：認知症高齢者の音楽療法 ～明日から使える理論と実践～ 実践で大切な最近の動向．日本音楽心理学音楽療法懇話会 2024 年度講習会，東京，2024.4.14.
- 32) 阿部真貴子，須貝早智，磯上朋子，茶原雅史，猪狩裕史：持続可能な遠隔音楽療法の在り方の検討．自主シンポジウム，第 24 回日本音楽療法学会学術集会，北海道，2024. 9. 27-29.
- 33) 一木崇弘：アルコール依存症診療における総合病院精神保健福祉士の役割と課題．シンポジウム 4「大学病院の機能を生かしたアルコール連携医療」，第 37 回日本総合病院精神医学会総会，熊本，2024.11.29-30.
- 34) 高嶋里枝：公募シンポジウム・ゲノム医療推進のための遺伝子差別禁止の法整備をめぐる動向「オーストラリアにおける法整備の動向」日本生命倫理学会第 36 回年次大会，大阪，2024.11.16-17.
- 35) 三宅美智，奈良麻結：協会企画「厚生労働省科学研究費補助金による研究の紹介：精神科医療機関における行動制限最小化の普及に資する研究」．第 31 回日本精神科看護専門学術集会，山口，2024.10.26-27.
- 36) 杉山直也，奈良麻結，三宅美智，吉川隆博，藤井千代：精神科医療機関にいける行動制限最小化の普及．第 43 回日本社会精神医学会，東京，2025.3.13-14.

(2) 一般演題

- 1) Yamaguchi S，Koike J，Matsunaga A，Ojio Y，Ogawa M，Kimura H，Watanabe H，Fujii C：Associations between clinical and subjective outcomes and social determinant factors in acute psychiatric inpatients: a multicenter prospective longitudinal study. The 10th World Congress of Asian Psychiatry, Bari, 2024.12.5-7.

- 2) Sato S, Matsunaga A, Ogawa M, Mizuno M, Yamaguchi S, Fujii C: The cost of exposure-based cognitive-behavioral therapy in assertive community treatment for comorbid SMI and anxiety: A secondary analysis of a cluster randomized controlled trial. The 10th World Congress of Asian Psychiatry, Bari, 2024.12.5-7.
- 3) Kawaguchi T, Watanabe A, Tsuruta H, Kato S, Oikawa Y, Furuya K, Sakimoto M, Matsuoka T: Practitioners Involvement in Building Partnerships with Persons with Severe Mental Illness: A Thematic Analysis Based on Practitioners' Experiences and Knowledge in Recovery-oriented Services. The 8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress 2024, Sapporo, 2024.11.6-9.
- 4) Watanabe A, Kawaguchi T, Kaneko M, Sano K, Nobematsu A, Kobayashi T: Structural Relationships for Changes in Quality of Life in Breast Cancer Patients Six Months After Surgery. The 8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress 2024, Sapporo, 2024.11.7.
- 5) Matsuoka K, Watanabe A, Kawaguchi T: An intervention using e-ASUHS to support goal setting in daily activities at a level of difficulty appropriate for an affected upper extremity function of patients with stroke: a case series. The 8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress 2024, Sapporo, 2024.11.6-9.
- 6) Yamamoto N, Murata Y, Kawaguchi T, Koga M, Namihisa Y, Yoshimura N, Ishioka T: Impact of individual occupational therapy on change in awareness of self-management among inpatients in an acute psychiatric ward: A longitudinal mixed methods study. The 8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress 2024, Sapporo, 2024.11.6-9.
- 7) Furuya K, Matsuoka T, Kawaguchi T, Watanabe A: Verification of the efficacy of practices focused on the quality of activities for inpatients with severe dementia: A single-system design. The 8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress 2024, Sapporo, 2024.11.6-9.
- 8) Asagi M, Yabuki T, Tsuchiya F, Kawaguchi T, Tahara T, Baba N: Impact of peer support staff consultation on the recovery of clients with mental health problems in employment support services: a mixed method study. The 8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress 2024, Sapporo, 2024.11.6-9.
- 9) Takashima S: Services by visiting support-staff for psychiatry inpatients in Japan, Asian Law and Society Association, Seoul, 2024.12.13-14.
- 10) 関 英一, 藤井千代, 金 吉晴, 馬場俊明, 鈴木航太: 「世界保健機関西太平洋地域メンタルヘルス未来指向枠組」の各国での実装に向けた我が国の取組と貢献. 第120回日本精神神経学会学術総会 札幌大会, 北海道, 2024.6.20-22.
- 11) 金原明子, 里村嘉弘, 大久保紗佳, 杉本達哉, 片岡朋恵, 小西優歌, 吉川桜子, 木之下遼, 末松万宙, 高橋優輔, 熊倉陽介, 長谷川智恵, 佐々木理恵, 山口創生, 澤田宇多子, 宮本有紀, 大島紀人, 熊谷晋一郎, 笠井清登: 医療人材育成におけるコ・プロダクション. 第18回日本統合失調症学会, 徳島, 2024.4.13-14.

- 12) 岡村 泰, 荒川育子, 西 宏隆, 佐藤さやか, 小池純子, 吉田光爾, 山口創生, 藤井千代, 水野雅文: 東京都立松沢病院における包括的支援マネジメントに関する研究介入 1 年後の転帰. 第 120 回日本精神神経学会学術総会, 札幌大会, 北海道, 2024.6.20-22.
- 13) 瀬戸秀文, 稲垣 中, 太田順一郎, 小口芳世, 小池純子, 椎名明大, 島田達洋, 中西清晃, 中村仁, 藤井千代: 検察官通報に際しての精神保健指定医の措置要否判断の傾向について (1) ロジスティック回帰分析による検討. 第 20 回日本司法精神医学会大会, 東京, 2024.5.24-25.
- 14) 瀬戸秀文, 稲垣 中, 太田順一郎, 小口芳世, 小池 純子, 椎名明大, 島田達洋, 中西清晃, 中村仁, 藤井千代: 検察官通報に際しての精神保健指定医の措置要否判断の傾向について (2) 決定木分析による検討, 第 20 回日本司法精神医学会大会, 東京, 2024.5.24-25.
- 15) 小口芳世, 小池純子, 瀬戸秀文: 措置入院患者の身体合併症対応に関する全国 WEB アンケート調査. 第 32 回日本精神科救急学会学術総会, C10006, 岩手, 2024.10.24-25.
- 16) 中西清晃, 西内絵里沙, 榎本美智子: 所沢市アウトリーチ支援事業における支援終了者の実態調査. 第 31 回日本精神障害者リハビリテーション学会 お台場大会, 東京, 2024.12.14-15.
- 17) 西内絵里沙, 榎本美智子, 中西清晃: 自治体のアウトリーチ支援チームにおける若年層へのかかわり -地域精神保健と他分野との連携-. 第 31 回日本精神障害者リハビリテーション学会 お台場大会, 東京, 2024.12.14-15.
- 18) 廣瀬俊朗, 小塩靖崇, 神武直彦: 高校男子ラグビー部強豪校における監督・幹部選手の変革型リーダーシップと熟達雰囲気の関係分析. 日本スポーツ心理学会第 51 回大会, 広島, 2024.9.27-29.
- 19) 澤井大和, 柳下 祥, 川口敬之, 塩澤拓亮, 山口創生, 笠井清登: 分かりやすい用語集によって当事者や家族の学会参加が容易となるか. 第 18 回日本統合失調症学会, 徳島, 2024.4.13-14.
- 20) 岩永麻衣, 山口創生, 橋本 聡, 花岡晋平, 兼行浩史, 藤田 潔, 来住由樹, 平田豊明, 藤井千代, 杉山直也: 精神科救急急性期医療入院料病棟の入院患者 2,064 名における高規格病棟の必要性に関する予測因子の特定: ランダムフォレストを用いた横断研究. 第 32 回日本精神科救急学会学術総会, 岩手, 2024.10.24-25.
- 21) 岩永麻衣, 臼井 香, 佐藤さやか, 中西清晃, 西内絵里沙, 下平美智代, 曹 由寛, 山口創生, 藤井千代, 地域精神保健アウトリーチの支援パターン: 支援開始から 12 ヶ月間の縦断データをを用いた時系列クラスタリング. 第 31 回日本精神障害者リハビリテーション学会 お台場大会, 東京, 2024.12.14-15.
- 22) 臼井 香, 切原賢治, 荒木 剛, 多田真理子, 越山太輔, 藤岡真生, 西村亮一, 安藤俊太郎, 小池進介, 笠井清登: 一般地域住民の思春期におけるこころの不調と脳の発達に関連: 縦断コホート研究, 第 18 回日本統合失調症学会, 徳島, 2024.4.13-14.
- 23) 臼井 香, 岩永麻衣, 山口創生, 佐藤さやか, 中西清晃, 西内絵里沙, 下平美智代, 曹 由寛, 藤井千代: 支援が行き届きにくい AYA 世代への地域精神保健アウトリーチ支援の実態調査. 第 31 回日本精神障害者リハビリテーション学会 お台場大会, 東京, 2024.12.14-15.
- 24) 切原賢治, 越山太輔, 西村亮一, 臼井 香, 藤岡真生, 多田真理子, 荒木 剛, 笠井清登: 予防精神医学および脳予測性におけるバイオカーカーとしてのミスマッチ陰性電位, Mismatch

- negativity as a biomarker for preventive psychiatry and predictive coding. 第 120 回日本精神神経学会学術総会 札幌大会, 北海道, 2024.6.20-22.
- 25) 小野はるか, 高橋 徹, 臼井 香, 大須理英子, 岡浩一郎, 熊野宏昭, 谷澤薫平: 心理的 Well-being とマインドフルネス傾向および内受容感覚の関連: WASEDA'S Health Study. 日本認知・行動療法学会 第 50 回記念大会, 神奈川, 2024.9.22-24.
- 26) 澤登日菜, 大隈玲志, 土屋彩茜, 中村宣博, 中川剣人, 筒井俊春, 臼井 香, 高橋 徹, 小野田慶一, 岡浩一郎, 熊野宏昭, 谷澤薫平, 大須理英子.: 瞑想経験者・筋力トレーニング実施者の安静時脳活動の比較検討. 第 27 回ヒト脳マッピング学会, 2025.3.7-8.
- 27) 阿部真貴子: 精神科医療における生成 AI によるチャットボット活用: 入院者訪問支援員のための支援ツールの開発. 第 31 回日本精神障害者リハビリテーション学会 お台場大会, 東京, 2024.12.14-15.
- 28) 一木崇弘, 長岡舞子, 今井正城, 西 良知, 小山明日香, 竹林 実, 藤瀬 昇: 非都市部の自殺好発地域における壮年住民の抑うつ・希死念慮出現に関する縦断的検討. 第 48 回日本自殺予防学会総会, 埼玉, 2024.9.13-15.
- 29) 五十嵐百花, 川口敬之, 塩澤拓亮, 山口創生: 精神科診察では何が話されているか: 共同意思決定支援ツールの有無による比較. 6NC リトリート 2024, 東京, 2024.4.13.
- 30) 五十嵐百花, 岩永麻衣, 小林 慧, 小池純子, 松長麻美, 小塩靖崇, 小川 亮, 木村 大, 渡邊博幸, 山口創生, 藤井千代: 精神科入院治療における多職種チーム会議の開催と再入院との関連. 第 43 回日本社会精神医学会, 東京, 2025.3.13-14.
- 31) 羽田彩子, 大橋優紀子, 臼井由利子, 北村俊則: 妊娠期のボンディング障害の類型とその臨床像. 第 20 回周産期メンタルヘルス学会学術集会, 東京, 2024.10.26-27.
- 32) 高嶋里枝: 産業保健法学と地域精神保健. 第 4 回産業保健法学会学術大会, 東京, 2024.9.21-22.
- 33) 高嶋里枝: 障害者権利条約初回対日審査後の精神保健福祉法—一般医療と共通の法律での運用について. 医事法学会第 54 回大会, 広島, 2024.10.19-20.
- 34) 奈良麻結, 山口創生, 森山葉子, 岡田隆志, 臼田謙太郎, 臼井 香, 黒田直明: 精神障害当事者における日本語版 ASCOT SCT4 の妥当性・信頼性の検証. 第 83 回日本公衆衛生学会総会, 北海道, 2024.10.29-31.

(3) 研究報告会

- 1) 山口創生, 川口敬之, 岩永麻衣, 臼井 香, 五十嵐百花, 塩澤拓亮, 小池純子, 佐藤さやか, 藤井千代: IPS 援助付き雇用の再現度と長期就労アウトカムとの比較—多施設共同による 6 年間の追跡調査—. 国立精神・精神医療研究センター精神保健研究所 令和 6 年度 研究報告会 (第 36 回), 2025.3.17.
- 2) 臼井 香, 高橋 徹, 澤登日菜, 岡本悠子, 水野寛太, 佐々星時, 合屋拓巳, 大須理英子, 岡浩一郎, 谷澤薫平, 熊野宏昭: 日本語版 Mindful Awareness Task の作成およびマインドフルネス特性との関連の検討: WASEDA' S Health Study. 応用脳科学カンファレンス 2025, 2025.2.10.

- 3) 合屋拓巳, 大隈玲志, 高橋 徹, 臼井 香, 澤登日菜, 中村宣博, 中川剣人, 筒井俊春, 栗原勇人, 小野田慶一, 岡浩一郎, 熊野宏昭, 谷澤薫平, 大須理英子: マインドフルネスと幸福感の関係における安静時脳活動の媒介効果: WASEDA'S Health Study. 応用脳科学カンファレンス 2025, 2025.2.10.
- 4) 澤登日菜, 大隈玲志, 土屋彩茜, 中村宣博, 中川剣人, 筒井俊春, 臼井 香, 高橋 徹, 小野田慶一, 岡浩一郎, 熊野宏昭, 谷澤薫平, 大須理英子: 瞑想経験者・筋力トレーニング実施者の安静時脳活動の比較検討. 応用脳科学カンファレンス 2025, 2025.2.10.
- 5) 高嶋里枝: 旧優生保護法国賠訴訟 (令和 6 年 7 月 3 日最高裁判所大法廷判決). 医事法センター判例研究会, 東京, 2024.11.11.
- 6) 奈良麻結, 山口創生, 臼井謙太郎, 川口敬之, 岩永麻衣, 臼井 香, 羽田彩子, 佐藤さやか, 黒田直明, 藤井千代: 地域サービスを利用する精神障害者における日本語版 ASCOT SCT4 の妥当性・信頼性の検証. 国立精神・精神医療研究センター精神保健研究所 令和 6 年度 研究報告会 (第 36 回), 2025.3.17.

(4) その他

- 1) 山口創生: 国立精神・精神医療研究センター精神保健研究所 令和 6 年度 研究報告会 (第 36 回) 青申賞 (優秀発表賞) 受賞, 2025.3.17.
- 2) 高嶋里枝: 精神医療における人権の問題—強制入院と行動制限行—. 兵庫県立姫路東高等学校スーパーサイエンスハイスクール事業理系女子と科学倫理を考える日〜第 4 回 Girl's Expo with Science Ethics〜, 兵庫, 2025.2.11.

C. 講演

- 1) 藤井千代: 精神障害者にも対応した地域包括ケアシステムの構築について. 兵庫県精神科病院協会/大塚製薬株式会社共催, 第 11 回兵庫県精神科病院協会学術講演会 特別講演Ⅱ (オンライン), 2024.5.29.
- 2) 藤井千代: 「にも包括」時代の精神科医療. 令和 6 年度一般社団法人日本公的病院精神科協会提示総会記念講演, 東京, 2024.6.1.
- 3) 藤井千代: 良質な精神科医療の提供と地域生活の充実に向けて. 大塚製薬株式会社医療薬営業本部地域包括推進部, チイクラフォーラム 9, 埼玉, 2024.9.7.
- 4) 藤井千代: 医療機関は行政機関と本当に連携できるのか?. 住友ファーマ株式会社主催, 第 3 回多摩地域リエゾン会議, 東京, 2024.9.10.
- 5) 藤井千代: 精神保健福祉法の改正や入院における同意のあり方. 住友ファーマ株式会社東京支店主催, 第 50 回若手精神科医のためのクロスカンファレンス, 東京, 2024.10.10.
- 6) 藤井千代: 地域の支援ニーズに基づく「にも包括」. 大塚製薬株式会社 東北支店主催, 第 2 回精神福祉・医療交流, 青森, 2024.10.19.
- 7) 山口創生: 精神疾患当事者との共同から見える当事者と医師との協働: 就労支援を例として. 住友ファーマ株式会社 世界メンタルヘルスデー関連ライブ講演会. 東京, 2024.10.3.
- 8) 中西清晃, 西内絵里沙, 榎本美智子, 山崎さおり, 小野寺健: 「所沢市精神障害者アウトリーチ支援事業について」. 広島市健康福祉局障害福祉部精神保健福祉課アウトリーチを活用した支援体制ワーキンググループ. 2025.3.5.

- 9) 西内絵里沙：令和 6 年度第 1 回こころ部会委員会 他分野との連携；こどものメンタルヘルス「所沢市アウトリーチ支援チームの実践から～若年層へのかかわり～」．所沢市自立支援協議会．2024.5.23.
- 10) 西内絵里沙：地域支援における“協働”のリアル 第一部「地域支援における協働のリアル」．一般社団法人 COMHCa，オンライン，2024.6.30.
- 11) 西内絵里沙：多職種で取り組むアウトリーチ支援「所沢市精神障害者アウトリーチ支援事業」．令和 6 年度高知市精神障害者地域移行支援者会議，高知，2025.2.4.
- 12) 西内絵里沙：「所沢市精神障害者アウトリーチ支援事業における多職種アウトリーチ支援」．高知県精神障害者アウトリーチ推進事業に関する情報共有会，高知，2025.2.5.
- 13) 小塩靖崇：「アスリートと共に実践するメンタルヘルスリテラシー向上の取り組み」．トヨタ財団 みんなと考えるメンタルヘルス 2024「こころとことば展」，東京，2024.11.6.
- 14) 小塩靖崇：スポーツを頑張る子ども・若者のメンタルヘルスケア．第 54 回テニスメディカルセミナー，東京，2024.7.21.
- 15) 名雪和美：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築推進に向けて．秋田県/大塚製薬株式会社医療薬営業本部地域包括推進部，秋田，2024.8.20.
- 16) 名雪和美：入院者訪問支援事業の目指しているもの．一般社団法人全国地域で暮らそうネットワーク，チイクラフォーラム 9，埼玉，2024.9.7.
- 17) 糸繰朝美：セルフケア入門～自分と健やかに繋がるために～．セルフケアの理論と方法の心理教育，ディーキャリア所沢オフィスセミナー，埼玉，2024.5.24.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 藤井千代：日本精神神経学会 代議員
- 2) 藤井千代：日本精神神経学会 医療倫理委員会委員長
- 3) 藤井千代：日本精神神経学会 地域ケアにおける自立支援のあり方検討委員会委員長
- 4) 藤井千代：日本精神神経学会 滝山病院に関する特別委員会委員長
- 5) 藤井千代：日本社会精神医学会 副理事長
- 6) 藤井千代：日本精神科救急学会 理事
- 7) 藤井千代：日本精神保健福祉政策学会 理事
- 8) 藤井千代：日本司法精神医学会 評議員
- 9) 藤井千代：日本精神保健・予防学会 評議員
- 10) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 理事
- 11) 山口創生：日本社会精神医学会 監事
- 12) 山口創生：日本統合失調症学会 評議員・理事
- 13) 山口創生：こころのバリアフリー研究会 評議員
- 14) 山口創生：日本精神保健・予防学会 評議員
- 15) 佐藤さやか：日本精神障害者リハビリテーション学会 理事
- 16) 佐藤さやか：公認心理師の会 理事・医療部会長
- 17) 佐藤さやか：VCAT-J 研究会 理事
- 18) 佐藤さやか：日本認知・行動療法学会 倫理委員会副委員長

- 19) 佐藤さやか：日本 IPS アソシエーション (JIPSA) 監事
- 20) 小池純子：日本犯罪学会 評議員
- 21) 小池純子：日本司法精神医学会 評議員
- 22) 西内絵里沙：日本精神障害者リハビリテーション学会 理事
- 23) 西内絵里沙：一般社団法人コミュニティメンタルヘルスアウトリーチ協会 研修委員
- 24) 西内絵里沙：一般社団法人ジャパンファミリーワークプロジェクト 理事
- 25) 小塩靖崇：日本精神保健・予防学会 評議員
- 26) 小塩靖崇：日本スポーツ精神医学会 研究推進委員
- 27) 川口敬之：日本統合失調症学会 評議員
- 28) 川口敬之：日本作業療法士協会 精神科の作業療法あり方委員会 委員長
- 29) 名雪和美：日本総合病院精神医学会地域連携委員会委員
- 30) 臼井 香：日本統合失調症学会 評議員

(3) 座長

- 1) 藤井千代：Lundbeck Psychiatry Expert Seminar web Seminar 【座長】，ルンドベック・ジャパン株式会社主催，東京，2024.7.29.
- 2) 藤井千代：大会長企画教育講演 【座長】. 自殺予防と危機介入—救急現場での Do & Don't. 第 32 回日本精神科救急学会学術総会，岩手，2024.10.25.
- 3) 藤井千代：優秀論文賞授賞式・受賞講演 【座長】. 第 43 回日本社会精神医学会，東京，2025.3.13.
- 4) 村井俊哉，藤井千代：シンポジウム 4 【座長】「非自発的入院・行動制限に対する現状と課題」. 第 43 回日本社会精神医学会，東京，2025.3.14.
- 5) 藤井千代，山澤涼子：シンポジウム 7 【座長】「わが国の在留外国人のメンタルヘルス-その課題と展望-」. 第 43 回日本社会精神医学会，東京，2025.3.14.
- 6) 山口創生：教育講演 3 【座長】 第 43 回日本社会精神医学会，東京，2025.3.13.
- 7) 佐藤さやか：ケーススタディ 【座長】「治らないと思っていた強迫症男性への認知行動療法（発表者：小松広幸）」. 第 50 回日本認知・行動療法学会 横浜大会，神奈川，2024.9.22-24.
- 8) 名雪和美：シンポジウム 28 【座長】「総合病院精神科と各領域における地域連携」. 第 37 回総合病院精神医学会総会，熊本，2024.11.30.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 藤井千代：日本社会精神医学会雑誌 編集委員長
- 2) 藤井千代：日本精神神経学会雑誌 編集委員
- 3) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 査読委員
- 4) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 英文監修者
- 5) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 学会誌編集委員長
- 6) 山口創生：日本精神保健福祉士協会 査読小委員会
- 7) 山口創生：BMC Psychiatry Editorial board member
- 8) 山口創生：Journal of Epidemiology Editorial board member
- 9) 山口創生：International Journal of Mental Health Systems, Associated editor
- 10) 佐藤さやか：日本精神障害者リハビリテーション学会 査読委員
- 11) 佐藤さやか：「臨床心理学」（金剛出版）編集委員
- 12) 小塩靖崇：IACAPAP テキストブック翻訳委員会委員

- 13) 小塩靖崇：予防精神医学 編集委員
- 14) 小塩靖崇：Journal of Sports and Exercise Psychiatry Editorial board member
- 15) 川口敬之：日本臨床作業療法研究 査読委員
- 16) 川口敬之：日本精神障害者リハビリテーション学会 査読委員
- 17) 川口敬之：日本社会精神医学会雑誌 編集委員

E. 研修

(1) 研修企画

(2) 研修会講師

- 1) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの推進．日本精神科病院協会 日本精神科医学会 学術教育研修会 PSW 部門，福島，2024.9.19-20.
- 2) 藤井千代：にも包括とトラウマケア．令和 6 年度こころの健康づくり対策事業 PTSD 対策専門研修 A，通常コース 2（行政・支援者コース），オンライン，2024.11.13.
- 3) 藤井千代：精神科病院における虐待防止について．日本精神科病院協会 2024（令和 6）年度医療安全管理者養成研修会，東京，2024.10.24.
- 4) 藤井千代：「東京都における措置入院者退院後支援ガイドライン」に基づく退院後支援の実践～ケースを共有し今後の支援に活かす～．一般社団法人日本精神科看護協会，令和 6 年度「東京における措置入院者退院後支援ガイドライン専門研修（応用研修）」，東京，2024.11.26.
- 5) 藤井千代：地域で若者の心をどう救うのか～「にも包括」における精神科早期介入～．三重県立こころの医療センター，令和 6 年度三重県若年層の自殺対策推進体制構築事業 関係者向け研修会，三重，2024.12.25.
- 6) 藤井千代：「これからの地域精神科医療～法改正と診療報酬改定を踏まえて～」．一般社団法人大阪精神科病院協会，令和 6 年度長期入院精神障がい者退院支援強化事業精神科病院研修全体研修，大阪，2025.1.22.
- 7) 佐藤さやか：認知機能リハビリテーションのエビデンス、適応等について．2024 年度 VCAT-J 研修会，東京，2025.2.9.
- 8) 佐藤さやか：「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」に関連した施策について．令和 6 年度東京公認心理師協会研修会，オンライン，2025.2.23.
- 9) 小池純子：精神保健医療福祉における多職種連携支援．法務省保護局：令和 6 年度更生保護に関する地域援助研修，法務省赤レンガ棟第一教室，東京，2024.12.19.
- 10) 西内絵里沙：「アウトリーチについて」．児童思春期・大人の発達障害等専門知識を持つ精神科医等育成事業教育研修会，長崎大学病院精神神経科医局，オンライン，2024.5.27.
- 11) 西内絵里沙：2024 年度第 1 回メリデン版訪問家族支援基礎研修．一般社団法人ジャパンファミリーワークプロジェクト，オンライン，2024.9.14.
- 12) 西内絵里沙：「包括的支援マネジメント/多機関連携について～多機関連携にも役立つ包括的支援マネジメントの視点～」．法務省保護局観察課令和 6 年度更生保護に関する地域援助研修，東京，2024.12.19.
- 13) 西内絵里沙：「所沢市精神障害者アウトリーチ支援事業における多職種アウトリーチ支援」．伊佐市アウトリーチに係る意見交換会（研修会），オンライン，2025.3.3.

- 14) 榎本美智子, 西内絵里沙 : “あったらいいな” 多職種によるアウトリーチ支援～所沢市精神障害者アウトリーチ支援の実践に学ぶ～. 2024 年度 埼玉県精神障害者家族会連合会 赤い羽根共同募金助成事業 家族会研修会, 埼玉, 2024.11.2.
- 15) 小塩靖崇 : 児童生徒・学校教員を支えるメンタルケアのはじめ方. 令和 6 年 (2024 年) 度「教育相談実践研修会」, 岐阜, 2024.11.21.
- 16) 小塩靖崇 : 10 代を支えるスポーツメンタルケアのはじめ方. 令和 6 年 (2024 年) 度 盛岡中央高等学校研修, 岩手, 2024.11.12.
- 17) 臼井 香 : 不登校の理解と対応. 教職員研修, 埼玉県立所沢高等学校, 埼玉, 2024.11.1.

F. その他

- 1) 西内絵里沙 : 2024 年度メリデン版訪問家族支援実践交流会. 一般社団法人ジャパンファミリーワークプロジェクト, オンライン, 2024.6.23.

12. ストレス・災害時こころの情報支援センター

I. 研究部の概要

平成 23 年東日本大震災の被災者に対する継続的な対応、及び今後発生が予想されるその他の災害の発生に備えた体制づくりのための研究や調査を行うことを目的として、災害時こころの情報支援センターが平成 23 年 12 月に国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所に設置され、平成 30 年 4 月に「ストレス・災害時こころの情報支援センター」に改称された。災害及び事故・事件後の精神保健医療に係る助言・技術的支援、情報発信・連携に取り組んでいる。令和 6 年度は、能登半島地震後、石川県からの協力要請を受け、石川こころのケアセンターの設立に協力した。

令和 6 年度の当センターの構成は以下の通りである。センター長（併任）：張 賢徳，併任研究員：関口 敦，小川眞太郎，大沼麻実，成田 瑞，井野敬子，客員研究員：宮本有紀，種市康太郎，前田正治，高橋 晶，秋山 剛，富田博秋，本橋 豊，木津喜雅，堤 敦朗，金 吉晴。

Ⅱ. 研究活動

- 1) WHO 版の心理的応急処置（PFA）の普及活動と e-learning 普及研究
- 2) 災害後の心理的リカバリースキルの研究
- 3) 「コロナ心の支援情報」の発信

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- 1) 石川心のケアセンター事業 県民フォーラム いしかわこころのわ ～石川県のメンタルヘルスのこれからを考える～ にて、「災害後の心の動き」について講演を行った。2025.1.12.(金)
- 2) 国立精神・神経医療研究センターHP上の「コロナ心の支援情報」に「コロナ心の支援情報不安との付き合い方」の掲載を継続（<https://www.ncnp.go.jp/nimh/behavior/anxiety/index.html>）。感情調整，セルフケア，コミュニケーション，呼吸法スキルを掲示した。
- 3) 下記(3)の研修会を通じて研究成果の社会還元を行った。

(2) 専門教育面における貢献

- 1) PFA の e-learning を作成し、能登半島地震派遣者向けの動画配信は（2024 年 4 月 1 日～6 月 30 日）67 名が視聴した。
- 2) PFA の e-learning を作成し、自治体保健師・IHEAT 要員向け 405 名，歯科医師・歯科衛生士向け 783 名が視聴した。
- 3) WHO 版 PFA を日本に導入し，WHO との契約の下で，一般研修および講演を継続し，1,711 名が参加した。
- 4) 東京都令和 6 年度災害時精神科医療体制整備事業（災害時精神科医療研修）
災害時に被災した患者等の受入れを行う東京都の災害拠点精神科病院及び災害拠点精神科連携病院が，発災直後から中長期までの患者等へのこころのケアを適切に行うことができるよう，必要な知識と技術を有する人材の養成を図ることを目的として，実施した（48 名受講）。2025.2.7, 2.14.
- 5) 各種学術団体で，心のマネジメントや災害時の精神的健康について講演を行った。
- 6) 専門家向けに PTSD や災害精神医療等についての講演を行った。
- 7) メディア取材を通じて専門知識の社会普及を行った。

(3) 精研の研修の主催と協力

- 1) 令和 6 年度精神保健に関する技術研修。第 13 回および第 14 回災害時 PFA と心理対応研

修を開催した。2024.7.2, 7.9 (46名受講), 2024.12.18, 12.24 (57名受講)。(大沼)

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

1) 公的委員会

- ・ みやぎ心のケアセンター 顧問 (金)

2) 研究成果の行政貢献

- ・ JICA ウクライナ保健省支援事業に協力し、来日したウクライナ医療関係者の受け入れを行った。ウクライナ側からは、日本における災害後のメンタルヘルスケアの経験と知見に高い関心が寄せられ、当センターにおいて PTSD の最新研究や自殺予防に関する講義を実施し、NCNP の施設視察の機会を提供した。本取り組みは、国際的な連携を通じて市民社会の知見を共有し、戦争や災害など厳しい状況下にある地域への支援の一環となった。(張, 金)
- ・ 文部科学省 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業 (学士課程における看護学教育の質保証に関する調査研究委託事業—保健師の質向上のための調査研究—) 助言。2023.4.1-2025.3.31。(大沼)
- ・ 石川こころのケアセンター 能登半島地震・奥能登豪雨からの復興支援助言 (金)

(5) センター内における臨床的活動

(6) その他

- ・ 国際緊急援助隊(JDR)医療チーム登録者 (井野)

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

(2) 総説

(3) 著書

- 1) 大沼麻実：第3章3サイコロジカル・ファーストエイド～心理的応急処置：PFA～，災害歯科保健医療標準テキスト〈第2版〉，日本歯科医師会・日本災害歯科保健医療連絡協議会編，医歯薬出版株式会社，東京，100-107，2024.7.25.

(4) 研究報告書

- 1) 奥田博子，富尾淳，五十嵐久美子，大澤絵里，畠山典子，麻生保子，大沼麻実，佐藤一美，山形香織：令和6年能登半島地震時の保健師等広域応援派遣に関する実態調査「災害時に備えた自治体（都道府県）の体制整備に関する実態調査」報告書。令和6年度厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業），埼玉，2025.3.

(5) 翻訳

(6) その他

B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 大沼麻実: 災害等に見舞われた人に対して行う心理的社会的支援 (PFA) について. 第 60 回 宮崎救急医学会学術集会 特別講演, 川南病院, 宮崎, 2024.8.24.

(2) 一般演題

- 1) Ino K, Tonai A, Toshishige Y, Nakano W, Suga R: Online Prolonged Exposure Therapy for PTSD in Japan: A Case Study of Four Patients. Poster, ISTSS 40th Annual Meeting, Boston, USA, 2024.9.25-28.
- 2) 堀抜文香, 藤岡 泉, 齋藤弓子, 八巻知香子, 藤友結実子, 大沼麻実, 後藤美賀子, 大杉 満, 西村邦宏, 尾形宗士郎, 杉山雄大, 田沼順子, 井花庸子: 本邦のナショナルセンターにおける国民向け医療情報発信の現状と求められる取り組み. 公衆衛生学会, 北海道, 2024.10.29.

(3) 研究報告会

(4) その他

C. 講演

- 1) 張 賢徳: 自殺の予防について. ウクライナ医療関係者視察, 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 東京, 2025.2.21.
- 2) 大沼麻実: 災害時の心理的応急処置 (Psychological First Aid: PFA) について. 令和 6 年度専門課程Ⅰ保健福祉行政管理分野及び専門課程Ⅲ地域保健福祉専攻科, 国立保健医療科学院, 埼玉, オンライン, 2024.5.30.
- 3) 大沼麻実: 災害時のこころのケア PFA (サイコロジカルファーストエイド) 概論. 令和 6 年度なごや子ども応援委員会職員研修, 名古屋市教育委員会, 名古屋, オンライン, 2024.6.13.
- 4) 大沼麻実: 災害等に見舞われた人に対して行う心理的社会的支援 (PFA) について. 第 60 回 宮崎救急医学会学術集会 特別講演, 川南病院, 宮崎, 2024.8.24.
- 5) 大沼麻実: 災害時等の危機的状況下における心理社会的支援～サイコロジカル・ファーストエイド(PFA)について～. 令和 6 年度災害・事故時のこころのケア対策事業関係職員研修, 北九州市保健福祉局精神保健福祉センター, 福岡, オンライン, 2024.10.31.
- 6) 大沼麻実: サイコロジカル・ファースト・エイドについて. 令和 6 年度専門研修課程専攻科第 15 回地域援助能力向上研修, 名古屋矯正管区, 名古屋, オンライン, 2024.11.12.
- 7) 大沼麻実: 「至誠と愛」の実践学修「Psychological First Aid(1), (2), (3)». 医学教養, 東京女子医科大学, 東京, 2024.11.25.
- 8) 大沼麻実: 被災地支援「こころの支援とは～サイコロジカル・ファーストエイド～». 神奈川県地域包括支援センター職員現任研修, 一般社団法人神奈川県介護支援専門員協会, 神奈川, 2024.12.19.
- 9) 大沼麻実: 災害時の被災者と支援者のこころのケア-サイコロジカル・ファーストエイド(PFA)-. 札幌 CBT&EAP センター開設 10 周年記念特別講演, 医療法人社団五稜会病院札幌 CBT&EAP センター, 北海道, オンライン, 2025.1.17.
- 10) 大沼麻実: 災害等における心理社会的支援-サイコロジカル・ファーストエイド (PFA) について-. 日本精神衛生学会 2024 年度第 4 回研修会, 日本精神衛生学会, 長野, オンライン, 2025.2.1.
- 11) 大沼麻実: PFA を知っていますか-サイコロジカル・ファーストエイドの紹介研修-. 産業振興センター防災訓練, 刈谷市重原地区自主防災会, 愛知, 2025.2.9.
- 12) 金 吉晴: 地域における健康危機管理 ～災害時の心のケア～. 令和 6 年度専門課程Ⅰ保健福祉行政管理分野分割前期・専門課程Ⅲ地域保健福祉専攻科, 国立保健医療科学院, オンライン,

2024.5.30.

- 13) 金 吉晴：災害後の心理的回復と支援について．ウクライナ医療関係者視察，国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所，東京，2025.2.21.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) Kim Y：WPA（世界精神医学会），災害時精神医療に対応に関する諮問委員会委員
- 2) 張 賢徳：日本自殺予防学会 理事長
- 3) 張 賢徳：日本精神神経学会 自殺予防に関する委員会 委員長
- 4) 張 賢徳：日本うつ病学会 自殺対策委員会 委員長
- 5) 張 賢徳：第 49 回日本自殺予防学会総会プログラム委員
- 6) 関口 敦：日本心身医学会 代議員，幹事，戦略・評価委員
- 7) 関口 敦：日本摂食障害学会 評議員，学術交流委員会，ガイドライン作成委員，利益相反・倫理委員，国際交流委員
- 8) 関口 敦：日本心療内科学会 評議員，施設共同リサーチプロジェクト委員
- 9) 井野敬子：トラウマティック・ストレス学会 理事，広報委員長
- 10) 井野敬子：日本精神神経学会 災害対策委員
- 11) 成田 瑞：日本精神神経学会 ICD-11 委員
- 12) 金 吉晴：自殺予防学会 理事

(3) 座長

(4) 学会誌編集委員等

- 1) Narita Z：Asian Journal of Psychiatry, editorial board member

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 堀 弘明，大沼麻実：2024 年度精神保健に関する技術研修．第 13 回災害時 PFA と心理対応研修．東京，2024.7.2，オンライン，2024.7.9.
- 2) 堀 弘明，大沼麻実：2024 年度精神保健に関する技術研修．第 14 回災害時 PFA と心理対応研修．東京，2024.12.18，オンライン，2024.12.24.
- 3) 張 賢徳，大沼麻実：東京都令和 6 年度災害時精神科医療体制整備事業（災害時精神科医療研修）．東京，2025.2.7，オンライン，2025.2.14.

(2) 研修会講師

- 1) 大沼麻実，宮本有紀，井上幸代，山崎千鶴子，中村夕貴：サイコロジカル・ファーストエイド研修．2024 年度精神保健に関する技術研修 第 13 回災害時 PFA と心理対応研修．国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所，東京，2024.7.2.
- 2) 大沼麻実，佐々木貴代：令和 6 年度サイコロジカル・ファーストエイド：PFA 研修．浜松市精神保健福祉センター，静岡，2024.9.4.
- 3) 大沼麻実：サイコロジカル・ファーストエイド（PFA）研修．外務省領事中堅研修，外務省，東京，2024.10.10.
- 4) 大沼麻実，猿渡英代子，元田玲奈，土屋左弥子，松岡拓也：サイコロジカル・ファーストエイド研修，2024 年度精神保健に関する技術研修 第 14 回災害時 PFA と心理対応研修．国立

精神・神経医療研究センター 精神保健研究所，東京，2024.12.24.

- 5) 大沼麻実，種市康太郎，江部克也，尾崎雅子，神田聖光：災害時の PFA. 東京都令和 6 年度災害時精神科医療体制整備事業（災害時精神科医療研修）. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所，東京，2025.2.7.
- 6) 金 吉晴：災害時のこころのケア総論. 2024 年度精神保健に関する技術研修 第 13 回災害時 PFA と心理対応研修，オンライン，2024.7.9.
- 7) 金 吉晴：災害時のこころのケア総論. 2024 年度精神保健に関する技術研修 第 14 回災害時 PFA と心理対応研修，オンライン，2024.12.24.
- 8) 金 吉晴：災害時のこころのケア総論. 東京都令和 6 年度災害時精神科医療体制整備事業（災害時精神科医療研修），国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所，東京，2025.2.14.
- 9) 金 吉晴：災害時のこころのケア総論. 東京都令和 6 年度災害時精神科医療体制整備事業（災害時精神科医療研修）. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所，オンライン，2025.2.14.

F. その他

- 1) 大沼麻実：文部科学省委託事業「大学における医療人養成の在り方に関する調査研究（春山班）」における自然災害に係る e ラーニング教材への助言. 一般社団法人日本看護大学系協議会，2024.4.1-2025.3.31.
- 2) 金 吉晴：防災ニッポン 被災者のストレス. 読売新聞，2024.11.7.

Ⅲ. 研 修 実 績

令和 6 年度研修報告

研究所事務室

精神保健研究所における研修は、国、地方公共団体精神保健福祉法第 19 条の規定による指定病院等において精神保健の業務に従事する医師、保健師、看護師、作業療法士、臨床心理業務に従事する者、精神科ソーシャルワーカー等を対象に、精神保健技術者として必要な資質の向上を図ることを目的として精神保健各般にわたり必要な知識及び技術の研修を行うものである。令和 6 年度は、摂食障害入院治療研修～入院治療の留意点とコツ～（2 回）、発達障害者支援研修（4 回）、医療機関における注意欠如・多動症（ADHD）児の親へのペアレント・トレーニング実施者養成研修、災害時 PFA と心理対応研修（2 回）、摂食障害治療研修、摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療（2 回）、強迫症対策医療研修（基本コース）、入院者訪問支援事業研修（2 回）、統合失調症の標準治療研修、うつ病の標準治療研修、薬物依存臨床医師研修、薬物依存症臨看護等研修、精神保健医療福祉データ行政活用研修、認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修、精神科救急医療体制整備研修、PTSD 対策専門研修（5 回）の計 27 回の研修を合計 3,222 名に対して実施した。

《摂食障害入院治療研修～入院治療の留意点とコツ～》

令和6年4月22日から5月31日まで、第3回摂食障害入院治療研修～入院治療の留意点とコツ～を実施し、「摂食障害患者への初期対応、外来診療、医療連携」を主題に、摂食障害入院治療を実施している施設の医療関係者（原則有資格者とする）等79名に対して研修を行った。4月22日～5月31日はオンデマンド配信、5月17日はライブ配信を実施した。

課程主任 関口 敦

4月22日（月）～5月31日（金）

摂食障害診療総論	竹林 淳和
入院治療プログラムの解説	竹林 淳和
看護師の関わり方	野林美裕、鈴木麻友子
心理士の関わり方	望月洋介
栄養士の関わり方	位田文香
地域医療連携の構築	竹林 淳和

5月17日（金）

質疑応答	（全講師）
------	-------

講師名簿

関口 敦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
竹林 淳和	浜松医科大学精神科神経科講師
野林 美裕	浜松医科大学付属病院看護師
鈴木 麻友子	浜松医科大学付属病院看護師
大野 富貴子	浜松医科大学付属病院看護師
望月 洋介	浜松医科大学付属病院臨床心理士
磯部 智代	浜松医科大学付属病院臨床心理士
位田 文香	浜松医科大学付属病院管理栄養士
牧野 知美	浜松医科大学付属病院管理栄養士

《発達障害者支援研修》

令和6年6月26日から6月27日まで、第5回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅠを実施し、「ライフステージごとの発達障害児・者の課題と支援の実際」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し、発達障害に関心を有する医師（特に指導について責任的立場にある者）、自治体（都道府県、政令指定都市）において、行政的な立場で地域の研修実施に携わる者もしくは発達障害者支援センター職員106名に対してオンライン研修を行った。

課程主任 石井 礼花 課程副主任 江頭 優佳

6月26日（水）

発達障害児・者に対する行政施策	西尾 大輔
発達障害のある子と養育者の支援・アタッチメントの視点を加えて	小平 雅基
発達障害のある子への療育	吉川 徹
かかりつけ医研修に求められること	岡田 俊

6月27日（木）

ペアレント・トレーニング	石井 礼花
特別支援教育の現状と課題	笹森 洋樹
児童期・思春期の課題とその支援	小野 和哉
成人期の日常生活、就労への支援	宇野 洋太

講師名簿

石井 礼花	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
江頭 優佳	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
西尾 大輔	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課地域生活・発達障害者支援室 発達障害対策専門官
小平 雅基	恩賜財団母子愛育会総合母子保健センター愛育クリニック小児精神保健科部長
吉川 徹	愛知県尾張福祉相談センター児童専門監
岡田 俊	奈良県立医科大学精神医学講座教授
笹森 洋樹	常葉大学教育学部教授
小野 和哉	聖マリアンナ医科大学神経精神医学教室特任教授
宇野 洋太	よこはま発達クリニック副院長

《医療機関における注意欠如・多動症（ADHD）児の親へのペアレント・トレーニング実施者養成研修》
令和6年7月2日、第3回医療機関における注意欠如・多動症（ADHD）児の親へのペアレント・トレーニング実施者養成研修を実施し、「医療機関における注意欠如・多動症児の親へのペアレント・トレーニング実施のための養成研修である、ペアレント・トレーニングについての講義を受け、ワークやロールプレイを実際に体験する」を主題に、注意欠如・多動症と診断される児童の診療に関わる医療機関の専門家（医師・公認心理師等の臨床心理技術者・看護師・精神保健福祉士・作業療法士・言語聴覚士）31名に対してオンライン研修を行った。

課程主任 石井 礼花

7月2日（火）

注意欠如・多動症（ADHD）とペアレント・トレーニング

～注意欠如・多動症（ADHD）とは～

岡田 俊

導入／プログラムの進め方

濱田 純子

行動を3種類に分ける

してほしい行動に注目する／ほめることを習慣にする

してほしくない行動への注目を取り去る

指示の出し方・ほめほめ表・限界設定のルールを提示する・

草間 千絵

環境調整／学校との連携・まとめ

ペアレント・トレーニングの実践に向けて／質疑応答

石井 礼花

講師名簿

石井 礼花 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長

岡田 俊 奈良県立医科大学精神医学講座教授

濱田 純子 東京大学医学部附属病院こころの発達診療部学術専門職員

草間 千絵 東京大学医学部附属病院こころの発達診療部学術専門職員

《災害時 PFA と心理対応研修》

令和 6 年 7 月 2 日及び 7 月 9 日,第 13 回災害時 PFA と心理対応研修を実施し,「[サイコロジカル・ファーストエイド (心理的応急処置:PFA)]」に関する基本技能を習得する. またトラウマ,悲嘆,子どもの反応を含む,災害時の心理的反応を理解し,基本的な対応スキルを習得する.」を主題に,自然災害,甚大事故,犯罪,テロ等のトラウマ的出来事に際して,実際に被災者,被害者へのこころのケア対応にあたる可能性のある,精神保健医療福祉業務に従事する医師,看護師,保健師,精神保健福祉士,臨床心理技術者,行政職員,教育関係者等 46 名に対して 7 月 2 日は対面研修,7 月 9 日はオンライン研修を開催した.

課程主任 堀 弘之 課程副主任 大沼 麻実

7 月 2 日 (火)

PFA の定義と枠組み	大沼 麻実・宮本 有紀・井上 幸代
PFA の活動原則(1)	山崎 千鶴子・中村 夕貴
PFA の活動原則(2)	
PFA ロールプレイ	
セルフケアとチームのケア	

7 月 9 日 (火)

災害時のこころのケア-総論	金 吉晴
心理的リカバリー	福地 成
災害時の子どものトラウマと反応	小平 雅基

講師名簿

大沼 麻実	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所客員研究員
宮本 有紀	東京大学大学院医学系研究科精神看護学分野准教授
井上 幸代	高松赤十字病院精神科部長
山崎 千鶴子	東京武蔵野病院精神科部長
中村 夕貴	特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパン支援事業部 シリア・プログラム・コーディネーター
福地 成	東北医科薬科大学精神科学教室病院准教授
小平 雅基	恩賜財団母子愛育会総合母子保健センター愛育クリニック小児精神保健科部長

《摂食障害治療研修》

令和6年7月10日から7月12日まで、第21回摂食障害治療研修を実施し、「摂食障害の病態と治療に関する最新の知見」を主題に、病院、保健所、精神保健福祉センター等に勤務し、摂食障害に関心を有する医療従事者（精神科、心療内科、一般内科、小児科で臨床に従事している医師、臨床心理業務等に従事する者、看護師および保健師、作業療法士、精神保健福祉士、栄養士等）87名に対してオンライン研修を行った。

課程主任 関口 敦

7月10日（水）

摂食障害の疫学・病態・治療概論

安藤 哲也

初期対応と外来診療

高倉 修

入院治療

山内 常生

心理教育

小原 千郷

7月11日（木）

小児例の初期対応と診療

宇佐美 政英

精神障害・パーソナリティ障害を合併する摂食障害

西園 マーハ文

身体合併症・身体的管理

鈴木 眞理

過食症に対するガイドド・セルフヘルプ

中里 道子

7月12日（金）

児童・思春期摂食障害患者さんとそのご家族への家族療法的アプローチ

森野 百合子

当事者の話を聞く

武田 綾

症例検討

佐藤 康弘

質疑応答

佐藤 康弘・関口 敦

講師名簿

関口 敦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
安藤 哲也	国際医療福祉大学成田病院心療内科教授
高倉 修	九州大学病院心療内科講師
山内 常生	大阪公立大学大学院医学研究科神経精神医学講師
小原 千郷	帝京大学文学部心理学科准教授
宇佐美 政英	国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科診療科長 子どものこころ総合診療センター長
西園 マーハ文	明治学院大学心理学部心理学科教授
鈴木 眞理	跡見学園女子大学心理学部臨床心理学科特任教授

中里 道子	国際医療福祉大学医学部精神医学特任教授
森野 百合子	医療法人社団翠会成増厚生病院なります子どものこころケアセンターセンター 長
武田 綾	NPO 法人のびの会心理療法士
佐藤 康弘	東北大学病院心療内科講師

《摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療》

令和6年7月11日から8月3日まで、第8回摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療を実施し、「摂食障害患者への初期対応、外来診療、医療連携」を主題に、病院、診療所、保健所、精神保健福祉センター等に勤務し、摂食障害診療・支援に従事する医療従事者（原則有資格者とする）等163名に対して研修を行った。7月11日（木）～8月2日（金）はオンデマンド配信、8月3日（土）はライブ配信を実施した。

課程主任 関口 敦

7月11日（木）～8月2日（金）

摂食障害の今	安藤 哲也
一般医でもできる初期治療	高倉 修
摂食障害の理解 患者、家族にどう伝えるか	佐藤 康弘
一般医で行うべき検査・身体管理・専門家との連携	吉内 一浩
摂食障害の専門的治療と紹介の方法	山内 常生
摂食障害の外来治療、初心者の心得・経験者へのヒント	永田 利彦
小児領域の摂食障害 小児の特徴と外来	作田 亮一
産婦人科領域における摂食障害への対応	小川 真里子

8月3日（土）

症例からみる摂食障害の治療の流れとコツ	田村 奈穂
質疑応答	（全講師）

講師名簿

関口 敦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
安藤 哲也	国際医療福祉大学病院心療内科教授
高倉 修	九州大学病院心療内科講師
佐藤 康弘	東北大学病院心療内科講師
吉内 一浩	東京大学医学部附属病院心療内科准教授
山内 常生	大阪公立大学大学院医学研究科神経精神医学講師
永田 利彦	なんば・ながたメンタルクリニック院長
作田 亮一	獨協医科大学埼玉医療センター子どものこころ診療センター長
小川 真里子	福島県立医科大学ふくしま子ども・女性医療支援センター特任教授
田村 奈穂	国立国際医療研究センター国府台病院心療内科医師

《強迫症対策医療研修 基本コース》

令和6年7月24日,第3回強迫症対策医療研修 基本コースを実施し,「OCDの患者に対応できる人材を育てるため,精神医療従事者に対して,診断,評価,治療方針のために必要な知識を系統的に習得する。」を主題に,精神保健医療福祉業務に従事する医師,看護師,保健師,精神保健福祉士,社会福祉士,作業療法士,公認心理師,臨床心理士の資格を有する方.または公的機関や教育機関に勤務し,精神保健医療福祉業務に従事する方112名に対してオンライン研修を行った.

課程主任 堀 弘明

7月24日(水)

OCDの診断と評価

松永 寿人

OCDの標準治療Ⅰ

久我 弘典

OCDの標準治療Ⅱ

中尾 智博

事例検討

松尾 陽, 吉田 賀一

中尾 智博・松永 寿人

久我 弘典

講師名簿

久我 弘典 国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センターセンター長

松永 寿人 兵庫医科大学精神科神経科学主任教授

中尾 智博 九州大学大学院医学研究院精神病態医学教授

松尾 陽 九州大学大学院医学研究院精神病態医学

吉田 賀一 兵庫医科大学病院臨床心理部

《入院者訪問支援事業研修》

令和 6 年 7 月 26 日,第 1 回入院者訪問支援事業研修を実施し,「入院者訪問支援事業の意義と目的を理解したうえで,事業の実施体制の構築,各種会議の運営や事務局の役割や訪問支援員のバックアップのあり方等につき,講義とグループワークを通じて習得する」を主題に,入院者訪問支援事業の実施を検討しているまたは事業を実施中の都道府県,政令市,中核市,特別区における事業担当者(行政職員)および入院者訪問支援事業の実務を担当する方(事業委託先等)など 31 名に対して対面研修を行った。

課程主任 藤井 千代

7 月 26 日 (金)

事業の意義と実施体制の構築

藤井 千代, 角野 太一
上坂 紗絵子, 伊藤 清郁

事業開始に向けての準備

名雪 和美

不測の事態への対応

藤井 千代, 角野 太一
上坂 紗絵子, 伊藤 清郁

支援員のバックアップとスキルアップ

藤井 千代, 角野 太一
上坂 紗絵子, 伊藤 清郁

講師名簿

藤井 千代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 地域精神保健・法制度研究部部長
名雪 和美	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 地域精神保健・法制度研究部研究員
角野 太一	認定 NPO 法人大阪精神医療人権センター理事
上坂紗絵子	認定 NPO 法人大阪精神医療人権センター前事務局長
伊藤 清郁	一般社団法人おかやま精神医療アドボケイトセンター理事

《統合失調症の標準治療研修》

令和 6 年 9 月 1 日,第 3 回統合失調症の標準治療研修を実施し,「統合失調症の標準的治療の基本的な知識及び治療技術の習得」を主題に,病院,診療所,保健所,精神保健福祉センター等に勤務し,統合失調症に関心を有する医療従事者(医師,看護師,保健師,薬剤師,公認心理師,臨床心理士,作業療法士,精神保健福祉士などの,原則医療系の有資格者)など 60 名に対してオンライン研修を行った。

課程主任 橋本 亮太

9 月 1 日 (日)

統合失調症の標準治療研修とは	根本 清貴
治療計画の策定	村岡 寛之
急性期・安定・維持期	飯田 仁志
薬剤性錐体外路系副作用	柏木 宏子
その他の副作用	坪井 貴嗣
治療抵抗性統合失調症	橋本 亮太
その他の臨床的諸問題 1	中村 敏範
その他の臨床的諸問題 2	根本 清貴

症例①グループディスカッション

症例②グループディスカッション 橋本 亮太,柏木 宏子,中村 敏範,飯田 仁志
村岡 寛之,根本 清貴,坪井 貴嗣,

まとめ・質疑応答

橋本 亮太

講師名簿

橋本 亮太	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部部長
柏木 宏子	国立精神・神経医療研究センター病院司法精神診療部第三司法精神科医長
根本 清貴	筑波大学医学医療系精神医学准教授
村岡 寛之	北里大学医学部精神科学講師
飯田 仁志	福岡大学医学部精神医学教室講師
坪井 貴嗣	杏林大学医学部精神神経科学教室准教授
中村 敏範	信州大学医学部附属病院精神科助教

《薬物依存臨床医師研修》 《薬物依存臨床看護等研修》

令和6年9月4日から9月6日まで、第37回薬物依存臨床医師研修ならびに第25回薬物依存臨床看護等研修を実施し、「薬物依存症概念の理解と薬物依存症に対する臨床的対応の普及」を主題に、精神科病院、精神保健福祉センター等に勤務する医師10名、看護師等24名に対してオンライン研修を行った。

課程主任 松本 俊彦 課程副主任 嶋根 卓也・富山 健一

9月4日（水）

薬物依存症臨床総論	松本 俊彦
行動薬理学からみた薬物依存（精神依存，身体依存）	船田 正彦
大麻成分の医療用途と海外の状況	富山 健一
ベンゾジアゼピン系薬物の基礎と臨床	稲田 健

9月5日（木）

薬物乱用・依存の疫学：一般住民および青少年	嶋根 卓也
精神保健福祉センターにおける薬物依存への取り組み	藤城 聡
民間回復支援施設の活動と課題	嶋根 卓也・栗坪 千明
大麻によって発現する動物の異常行動	三島 健一

9月6日（金）

薬物依存症女性の理解と支援	大嶋 栄子
薬物依存症者家族の支援について	吉田 精次
回復と自助活動（当事者による体験談）	当事者・家族
ドパミンモデルで捉える薬物依存症：生物学的理解のために	沖田 恭治

講師名簿

松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
嶋根 卓也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
富山 健一	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
沖田 恭治	国立精神・神経医療研究センター病院精神診療部第一精神科医長
船田 正彦	湘南医療大学薬学部教授
藤城 聡	愛知県精神保健福祉センター所長
栗坪 千明	NPO 法人八王子ダルク代表理事
三島 健一	福岡大学薬学部生体機能制御学研究室教授
大嶋 栄子	NPO 法人リカバリー理事長
吉田 精次	藍里病院副院長／あいざと依存症研究所所長
稲田 健	北里大学医学部精神科学教授

《うつ病の標準治療研修》

令和6年9月15日,第3回うつ病の標準治療研修を実施し,「うつ病の標準的治療の基本的な知識及び治療技術の習得」を主題に,病院,診療所,保健所,精神保健福祉センター等に勤務し,うつ病に関心を有する医療従事者(医師,看護師,保健師,薬剤師,公認心理師,臨床心理士,作業療法士,精神保健福祉士などの原則医療系の有資格者)など60名に対してオンライン研修を行った。

課程主任 橋本 亮太

9月15日(日)

うつ病の標準治療研修とは	飯田 仁志
治療計画の策定	中川 敦夫
軽症	根本 清貴
中等症・重症	越智紳一郎
精神病性	柏木 宏子
児童思春期	橋本 亮太
睡眠障害とその対応	中村 敏範
その他の臨床的諸問題	飯田 仁志

症例①グループディスカッション

症例②グループディスカッション 橋本 亮太,柏木 宏子,中村 敏範,飯田 仁志
根本 清貴,越智紳一郎,中川 敦夫

まとめ・質疑応答

橋本 亮太

講師名簿

橋本 亮太	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部部長
柏木 宏子	国立精神・神経医療研究病院司法精神診療部第三司法精神科医長
飯田 仁志	福岡大学医学部精神医学教室講師
中村 敏範	信州大学医学部附属病院精神科助教
根本 清貴	筑波大学医学医療系精神医学准教授
中川 敦夫	聖マリアンナ医科大学神経精神科学教室教授
越智紳一郎	愛媛大学大学院医学系研究科精神神経科学講座講師

《発達障害者支援研修》

令和6年9月25日から9月26日まで、第5回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅡを実施し、「発達障害児・者の多様な支援ニーズと支援の実践」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し、発達障害に関心を有する医師（特に指導について責任的立場にある者）、自治体（都道府県、政令指定都市）において、行政的な立場で地域の研修実施に携わる者もしくは発達障害者支援センター職員102名に対してオンライン研修を行った。

課程主任 高橋 長秀 課程副主任 江頭 優佳

9月25日（水）

強度行動障害	會田 千重
発達障害と司法的問題	熊上 崇
発達障害と権利擁護	安保 千秋
高齢期の発達障害	日詰 正文

9月26日（木）

発達障害とジェンダー	館農 勝
発達障害と精神疾患の併存	辻井 農亜
女性の発達障害	砂川 芽吹
発達障害と当事者活動	田中 尚樹

講師名簿

高橋 長秀	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部部長
江頭 優佳	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
會田 千重	国立病院機構肥前精神医療センター統括診療部長
熊上 崇	和光大学現代人間学部教授
安保 千秋	都大路法律事務所弁護士
日詰 正文	国立重度知的障害者総合施設のぞみの園総務企画局研究部部長
館農 勝	さっぽろ悠心の郷ときわ病院理事長
辻井 農亜	富山大学附属病院こどものこころと発達診療学講座客員教授
砂川 芽吹	お茶の水女子大学生活科学部心理学科助教
田中 尚樹	青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科講師

《摂食障害入院治療研修～入院治療の留意点とコツ～》

令和6年10月15日から11月23日まで、第4回摂食障害入院治療研修～入院治療の留意点とコツ～を実施し、「摂食障害患者への初期対応、外来診療、医療連携」を主題に、摂食障害入院治療を実施している施設の医療関係者（原則有資格者とする）等131名に対して研修を実施した。10月15日～11月23日はオンデマンド配信、11月10日はライブ配信を実施した。

課程主任 関口 敦

10月15日（火）～11月23日（土）

摂食障害診療総論	竹林 淳和
入院治療プログラムの解説	竹林 淳和
看護師の関わり方	野林美裕、鈴木麻友子
心理士の関わり方	望月洋介
栄養士の関わり方	位田文香
地域医療連携の構築	竹林 淳和

11月10日（日）

質疑応答	（全講師）
------	-------

講師名簿

関口 敦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
竹林 淳和	浜松医科大学精神科神経科講師
野林 美裕	浜松医科大学付属病院看護師
鈴木 麻友子	浜松医科大学付属病院看護師
吉山 真央	浜松医科大学属病院看護師
望月 洋介	浜松医科大学付属病院臨床心理士
磯部 智代	浜松医科大学付属病院臨床心理士
位田 文香	浜松医科大学付属病院管理栄養士
牧野 智美	浜松医科大学付属病院管理栄養士

《令和 6 年度 PTSD 対策専門研修》

令和 6 年 10 月 22 日,令和 6 年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 1 (臨床コース) を実施し,「災害被災者,犯罪・事故被害者,災害遺族,被虐待児童等,トラウマに対するこころのケアが必要な方に対応できる人材を確保するため,精神保健医療従事者等に対しトラウマに対するこころのケアにおいて必要な知識を系統的に習得する. 受講者名簿を自治体に送付し,今後の災害,犯罪等におけるトラウマ支援のネットワークを形成する.」を主題に,精神保健医療福祉業務に従事する医師,看護師,保健師,精神保健福祉士,社会福祉士,作業療法士,公認心理師,臨床心理士の資格を有する方,または公的機関や教育機関に勤務し,精神保健医療福祉業務に従事する方 473 名に対してオンライン研修を行った.

課程主任 堀 弘明

10 月 22 日 (火)

トラウマの基本対応	西 大輔
子どものトラウマ	小平 雅基
トラウマの概念と PTSD 診断	金 吉晴
PTSD 治療	金 吉晴

講師名簿

金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所客員研究員
西 大輔	東京大学大学院医学系研究科教授
小平 雅基	恩賜財団母子愛育会総合母子保健センター愛育クリニック小児精神保健科部長

《認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修》

令和6年11月4日から11月6日まで、第16回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修を実施し、「薬物依存症者の臨床的特徴と治療に関するエビデンスを理解し、直面化を避けた動機づけ面接の重要性を理解し、薬物依存症に対する集団認知行動療法のファシリテーションの実際を学ぶとともに、家族支援への理解を深める」を主題に、医療機関、行政機関、司法機関、民間回復施設等で薬物依存症者の援助に従事している者78名に対して対面研修を行った。

課程主任 松本 俊彦 課程副主任 今村 扶美

11月4日（月）

薬物依存症臨床における司法的問題への対応	松本 俊彦
SMARPP の理念と意義	松本 俊彦
SMARPP の実際	高野 歩
SMARPP ビデオ学習	松本 俊彦
グループワーク（1）	今村 扶美
薬物依存症患者への対応の基本	成瀬 暢也

11月5日（火）

薬物乱用・依存の疫学	嶋根 卓也
社会資源（1）～精神保健福祉センターにおける支援～	山田 俊隆
社会資源（2）～民間リハビリ施設と自助グループ～	加藤 隆
入院病棟における薬物依存症治療	沖田 恭司
デモセッション	今村 扶美
グループワーク（2）	今村 扶美
まとめとディスカッション	松本 俊彦

11月6日（水）

動機づけ面接の基礎	澤山 透
ハームリダクションの理念に基づく個別支援	高野 歩
インドネシアにおけるオンライン SMARPP の実践	山田 千佳
ディスカッション	松本 俊彦

講師名簿

松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
嶋根 卓也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
高野 歩	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
今村 扶美	国立精神・神経医療研究センター病院臨床心理部臨床心理室室長
沖田 恭司	国立精神・神経医療研究センター病院精神診療部第一精神科医長

成瀬 暢也	埼玉県立精神医療センター副病院長
山田 俊隆	東京都立多摩総合精神保健福祉センター統括課長代理
加藤 隆	NPO 法人八王子ダルク代表理事
澤山 透	相模ヶ丘病院院長
山田 千佳	京都大学東南アジア地域研究研究所助教

《精神保健医療福祉データ行政活用研修》

令和6年11月8日、第2回精神保健医療福祉データ活用研修を実施し、「医療計画（精神疾患）や障害福祉計画等の現状と課題について理解したうえで、精神保健医療福祉関係の公的データ（患者調査、NDBデータ、630調査）の見方、またそのマップデータベースである地域精神保健医療福祉資源分析データベース（ReMHRAD）の見方と使い方等を学び、各自治体の実態把握とモニタリングをするためのスキルを習得する」を主題に、各都道府県、政令指定都市、市区町村の精神保健福祉主管課担当者、医療政策主管課担当者28名に対してオンライン研修を行った。

課程主任 黒田 直明 課程副主任 臼田 謙太郎

11月8日（金）

医療計画、障害福祉計画の概要	厚生労働省
各計画のモニタリングとロジックモデルの活用	黒田 直明
NDBデータとその活用	奥村 泰之
630調査とその活用、NDB以外のデータソース	立森 久照・臼田 謙太郎
ReMHRADとその活用	吉田 光爾

講師名簿

黒田 直明	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所公共精神健康医療研究部部長
臼田 謙太郎	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所公共精神健康医療研究部室長
立森 久照	国立精神・神経医療研究センター神経研究所疾病研究第七部特任研究室長
奥村 泰之	一般社団法人臨床疫学研究推進機構代表理事
吉田 光爾	東洋大学福祉社会デザイン学部教授

《発達障害者支援研修》

令和6年11月13日から11月14日まで、第5回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅢを実施し、「発達障害児・者の支援に求められる基本的姿勢とかかりつけ医研修」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し、発達障害に関心を有する医師（特に指導について責任的立場にある者）、自治体（都道府県、政令指定都市）において、行政的な立場で地域の研修実施に携わる者もしくは発達障害者支援センター職員115名に対してオンライン研修を行った。

課程主任 高橋 長秀 課程副主任 江頭 優佳

11月13日（水）

発達障害と被虐待	山下 浩
発達障害と摂食障害	中土井 芳弘
発達障害のある子どもの育ちと医療の役割	岡田 俊
発達障害支援における地域連携	堀内 史枝

11月14日（木）

発達障害にかかわる支援情報	山脇かおり
小児科医からみた移行期の課題と対応	岡田 あゆみ
外国にルーツを持つ子どもの支援	柿元 真知
発達障害とゲームやインターネットの世界	関 正樹

講師名簿

高橋 長秀	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部部長
江頭 優佳	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
山下 浩	医療法人慶仁会天神病院児童精神科
中土井 芳弘	四国こどもとおとなの医療センター成育こころの診療部長
岡田 俊	奈良県立医科大学精神医学講座教授
堀内 史枝	愛媛大学大学院医学系研究科児童精神医学講座教授
山脇 かおり	国立障害者リハビリテーションセンター病院第三診療部小児科医長 企画・情報部発達障害情報・支援センター長
岡田 あゆみ	岡山大学学術研究院医歯薬学域小児医科学准教授 岡山大学病院小児医療センター小児心身医療科
柿元 真知	三重県立子ども心身発達医療センター児童精神科医長
関 正樹	大湫病院児童精神科医

《令和6年度 PTSD 対策専門研修》

令和6年11月13日、令和6年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース2（行政・支援者コース）を実施し、「災害被災者、犯罪・事故被害者、災害遺族、被虐待児童等、トラウマに対するこころのケアが必要な方に対応できる人材を確保するため、精神保健医療従事者等に対しトラウマに対するこころのケアにおいて必要な知識を系統的に習得する。受講者名簿を自治体に送付し、今後の災害、犯罪等におけるトラウマ支援のネットワークを形成する。」を主題に、精神保健医療福祉業務に従事する医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、社会福祉士、作業療法士、公認心理師、臨床心理士の資格を有する方、または公的機関や教育機関に勤務し、精神保健医療福祉業務に従事する方461名に対してオンライン研修を行った。

課程主任 堀 弘明

11月13日（水）

トラウマの概念と PTSD 診断

金 吉晴

トラウマへの行政対策ニーズ

佐藤 まみ

行政的なトラウマ・ケースワーク

大岡 由佳

「精神障害にも対応した地域包括ケア」とトラウマケア

藤井 千代

初期対応としての PFA とトラウマインフォームドケア

西 大輔

講師名簿

堀 弘明	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部部長
藤井 千代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 地域精神保健・法制度研究部部長
金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所客員研究員
佐藤 まみ	株式会社グラフアー
大岡 由佳	武庫川女子大学心理・社会福祉学部准教授
西 大輔	東京大学大学院医学系研究科教授

《災害時 PFA と心理対応研修》

令和 6 年 12 月 18 日及び 12 月 24 日、第 14 回災害時 PFA と心理対応研修を実施し、「「サイコロジカル・ファーストエイド(心理的応急処置:PFA)」に関する基本技能を習得する. またトラウマ, 悲嘆, 子どもの反応を含む, 災害時の心理的反応を理解し, 基本的な対応スキルを習得する.」を主題に, 自然災害, 甚大事故, 犯罪, テロ等のトラウマ的出来事に際して, 実際に被災者, 被害者へのこころのケア対応にあたる可能性のある, 精神保健医療福祉業務に従事する医師, 看護師, 保健師, 精神保健福祉士, 臨床心理技術者, 行政職員, 教育関係者等 56 名に対して研修を行った. 12 月 18 日は対面研修, 12 月 24 日はオンライン研修にて開催した.

課程主任 堀 弘明 課程副主任 大沼 麻実

12 月 18 日 (水)

PFA の定義と枠組み	大沼 麻実・猿渡 英代子・
PFA の活動原則 (1)	元田玲奈・土屋左弥子・松岡 拓也
PFA の活動原則 (2)	
PFA ロールプレイ	
セルフケアとチームのケア	

12 月 24 日 (火)

災害時のこころのケア・総論	金 吉晴
心理的リカバリー	福地 成
災害時の子どものトラウマと反応	小平 雅基

講師名簿

大沼 麻実	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所客員研究員
猿渡 英代子	東北工業大学経営コミュニケーション学科客員研究員
元田 玲奈	横浜市中部地域療育センター所長
土屋 左弥子	こどもセンターゆいまわる YUIMAWARU 株式会社関西支部責任者
松岡 拓也	特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパン支援事業第 1 部 人道・開発事業第 1 課課長
福地 成	東北医科薬科大学精神科学教室病院准教授
小平 雅基	恩賜財団母子愛育会総合母子保健センター愛育クリニック小児精神保健科部長

《令和6年度 PTSD 対策専門研修》

令和6年12月4日から12月5日、令和6年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース1を実施し、「精神保健福祉センター、病院、保健所等において、PTSDに関する専門家が必要とされていることを踏まえ、精神保健医療従事者等に対し、最先端の専門的知識あるいは技術の習得をさせ、有効かつ安全に治療を行うことができる人材を養成する。受講者名簿を自治体に送付し、今後の災害、犯罪等におけるトラウマ支援のネットワークを形成する。」を主題に、症例呈示のため、職業上守秘義務を持っている精神保健医療従事者（医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、社会福祉士、作業療法士、公認心理師、臨床心理士）、過去に PTSD 研修 A.通常コースを受講している方45名に対して対面研修を行った。

課程主任 堀 弘明

12月4日（水）

PTSD の診断と評価	大江 美佐里
PTSD のソーシャルワーク	大岡 由佳
PTSD の心理療法各論 1	伊藤 正哉
遷延性悲嘆症の心理療法	中島 聡美

12月5日（木）

PTSD の心理療法各論 2	井野 敬子
トラウマ後の急性期対応と長期対応～新潟県中越地震と 東日本大震災のこころのケア活動の経験から～	塩入 俊樹
複雑性 PTSD	丹羽 まどか・金 吉晴
PTSD の神経科学と薬物療法	堀 弘明

講師名簿

堀 弘明	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部部長
井野 敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
丹羽まどか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部 リサーチフェロー
金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所客員研究員
伊藤 正哉	国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター研究開発部部長
大江 美佐里	久留米大学医学部神経精神医学講座准教授
大岡 由佳	武庫川女子大学心理・社会福祉学部准教授
中島 聡美	武蔵野大学人間科学部教授
塩入 俊樹	岐阜大学大学院医学系研究科教授

《摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療》

令和7年1月6日から1月26日まで、第9回摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療を実施し、「摂食障害患者への初期対応、外来診療、医療連携」を主題に、病院、診療所、保健所、精神保健福祉センター等に勤務し、摂食障害診療・支援に従事する医療従事者（原則有資格者とする）等132名に対して研修を行った。1月6日（月）～1月25日（土）はオンデマンド配信、1月26日（日）はライブ配信を実施した。

課程主任 関口 敦

1月6日（月）～1月25日（土）

摂食障害の今	安藤 哲也
一般医でもできる初期治療	高倉 修
摂食障害の理解 患者、家族にどう伝えるか	佐藤 康弘
一般医で行うべき検査・身体管理・専門家との連携	吉内 一浩
摂食障害の専門的治療と紹介の方法	山内 常生
摂食障害の外来治療、初心者の心得・経験者へのヒント	永田 利彦
小児領域の摂食障害 小児の特徴と外来	作田 亮一
産婦人科領域における摂食障害への対応	小川 真里子

1月26日（日）

症例からみる摂食障害の治療の流れとコツ	田村 奈穂
質疑応答	（全講師）

講師名簿

関口 敦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
安藤 哲也	国際医療福祉大学病院心療内科教授
高倉 修	九州大学病院心療内科講師
佐藤 康弘	東北大学病院心療内科講師
吉内 一浩	東京大学医学部附属病院心療内科准教授
山内 常生	大阪公立大学大学院医学研究科神経精神医学講師
永田 利彦	なんば・ながたメンタルクリニック
作田 亮一	獨協医科大学埼玉医療センター子どものこころ診療センター長
小川 真里子	公立大学法人福島県立医科大学 ふくしま子ども・女性医療支援センター特任教授
田村 奈穂	国立国際医療研究センター国府台病院心療内科医師

《発達障害者支援研修》

令和7年1月15日から1月16日まで、第5回発達障害者支援研修：行政実務研修を実施し、「地域における発達障害児・者の支援ニーズと機関連携」を主題に、行政的な立場で各自治体の「かかりつけ医等発達障害対応力向上研修」の企画・実施に携わる者、もしくは発達障害者支援センター職員、かかりつけ医研修にかかわることが期待される医師62名に対して研修を行った。対面研修からオンライン研修に変更し開催した。

課程主任 高橋 長秀 課程副主任 江頭 優佳

1月15日（水）

発達障害と児童福祉	上野 千穂
医療における課題－初診待機解消、初期診療医の育成、医療連携	本田 秀夫
自治体における発達障害児者とその家族への支援体制整備	今出 大輔
発達障害と就労支援の実際	西村 浩二

1月16日（木）

発達障害者支援の施策について	西尾 大輔
発達障害に関する支援情報の活用	与那城 郁子
発達障害支援における家庭・教育・福祉の連携	笹森 洋樹
強度行動障害を有する者への支援施策	山根 和史

講師名簿

高橋 長秀	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部部長
江頭 優佳	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
上野 千穂	京都市児童福祉センター診療所所長
本田 秀夫	信州大学医学部子どものこころの発達医学教室教授 信州大学附属病院 子どものこころ診療部部長
今出 大輔	こども家庭庁支援局障害児支援課発達障害児支援専門官
西村 浩二	静岡県東部発達障害者支援センターアスタ発達障害者支援コーディネーター
西尾 大輔	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課地域生活・発達障害者支援室 発達障害対策専門官
与那城 郁子	国立障害者リハビリテーションセンター発達障害情報・支援センター 発達障害情報分析専門官
笹森 洋樹	常葉大学教育学部教授
山根 和史	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課地域生活・発達障害者支援室 発達障害施策調整官

《令和 6 年度 PTSD 対策専門研修》

令和 7 年 1 月 22 日から 1 月 23 日、令和 6 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 2 を実施し、「精神保健福祉センター、病院、保健所等において、PTSD に関する専門家が必要とされていることを踏まえ、精神保健医療従事者等に対し、最先端の専門的知識あるいは技術の習得をさせ、有効かつ安全に治療を行うことができる人材を養成する。受講者名簿を自治体に送付し、今後の災害、犯罪等におけるトラウマ支援のネットワークを形成する。」を主題に、症例呈示のため、職業上守秘義務を持っている精神保健医療従事者（医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、社会福祉士、作業療法士、公認心理師、臨床心理士）、過去に PTSD 研修 A.通常コースを受講している方 300 名に対してオンライン研修を行った。

課程主任 堀 弘明

1 月 22 日（水）

PTSD の診断と評価	大江 美佐里
PTSD のソーシャルワーク	大岡 由佳
PTSD の心理療法各論 1	伊藤 正哉
PTSD の心理療法各論 2	井野 敬子

1 月 23 日（木）

トラウマ後の急性期対応と長期対応～新潟県中越地震と	塩入 俊樹
東日本大震災のこころのケア活動の経験から～	
遷延性悲嘆症の心理療法	中島 聡美
複雑性 PTSD	丹羽 まどか・金 吉晴
PTSD の神経科学と薬物療法	堀 弘明

講師名簿

堀 弘明	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部部長
井野 敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
丹羽まどか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部 リサーチフェロー
金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所客員研究員
伊藤 正哉	国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター研究開発部部長
大江 美佐里	久留米大学医学部神経精神医学講座准教授
大岡 由佳	武庫川女子大学心理・社会福祉学部准教授
中島 聡美	武蔵野大学人間科学部教授
塩入 俊樹	岐阜大学大学院医学系研究科教授

《入院者訪問支援事業研修》

令和7年1月31日、第2回入院者訪問支援事業研修を実施し、「入院者訪問支援事業の意義と目的を理解したうえで、事業の実施体制の構築、各種会議の運営や事務局の役割や訪問支援員のバックアップのあり方等につき、講義とグループワークを通じて習得する」を主題に、入院者訪問支援事業の実施を検討しているまたは事業を実施中の都道府県、政令市、中核市、特別区における事業担当者（行政職員）および入院者訪問支援事業の実務を担当する方（事業委託先等）など18名に対して対面研修を行った。

課程主任 藤井 千代

1月31日（金）

事業の意義と実施体制の構築

藤井 千代、角野 太一
上坂 紗絵子、彼谷 哲志
堀本 久美子、殿垣内 能範
中野 千世

事業開始に向けての準備

名雪 和美

不測の事態への対応

支援員のバックアップとスキルアップ

藤井 千代、角野 太一
上坂 紗絵子、彼谷 哲志
堀本 久美子、殿垣内 能範
中野 千世

講師名簿

藤井 千代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域精神保健・法制度研究部 部長
名雪 和美	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域精神保健・法制度研究部 研究員
角野 太一	認定 NPO 法人大阪精神医療人権センター理事
上坂 紗絵子	認定 NPO 法人大阪精神医療人権センター前事務局長
彼谷 哲志	認定 NPO 法人大阪精神医療人権センター理事
堀本 久美子	和歌山県入院者訪問支援チームまりねこ WA！かやまピアサポーター
殿垣内 能範	和歌山県入院者訪問支援チームまりねこ WA！かやまピアサポーター
中野 千世	和歌山県入院者訪問支援チームまりねこ WA！かやま訪問支援員

《精神科救急医療体制整備研修》

令和 7 年 2 月 8 日,第 4 回精神科救急医療体制整備研修を実施し,「精神科救急医療体制整備事業の現状と課題について理解したうえで,精神科救急医療体制整備に関連する課題やデータの見方,ReMHRAD の見方と使い方等を学び,各自治体の精神科救急体制整備に係る施策の立案やモニタリングのためのスキルを習得する」を主題に,都道府県精神科救急医療体制整備事業担当者および精神医療相談窓口相談担当者 36 名に対してオンライン研修を行った。

課程主任 藤井 千代

2 月 8 日 (土)

精神科救急医療体制整備事業について

厚生労働省

精神科救急医療体制の現状と課題

平田 豊明

花岡 晋平

精神科救急医療体制事業に関する実践報告

濱谷 翼

門田 雅宏

各自治体の精神科救急医療体制整備事業の現状と課題等に関する

グループワーク①

塚本 哲司

各自治体の精神科救急医療体制整備事業の現状と課題等に関する

グループワーク②

塚本 哲司

講師名簿

藤井 千代 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域精神保健・法制度研究部
部長

平田 豊明 千葉県総合救急災害医療センター名誉病院長

花岡 晋平 千葉県総合救急災害医療センター医長

濱谷 翼 埼玉県保健医療部疾病対策課

門田 雅宏 滋賀県立精神保健福祉センター医療連携係

塚本 哲司 地方独立行政法人埼玉県立病院機構 埼玉県立精神医療センター療養援助部部長

《令和 6 年度 PTSD 対策専門研修》

令和 7 年 2 月 17 日から 2 月 18 日まで、令和 6 年度 PTSD 対策専門研修 C. 犯罪・性犯罪被害者コースを実施し、「犯罪・性犯罪被害者への適切な対応を行うために必要な専門的知識と心理社会的支援・治療対応について習得する。」を主題に、精神保健医療福祉業務に従事する医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、社会福祉士、作業療法士、公認心理師、臨床心理士の資格を有する方、または公的機関や教育機関に勤務し、精神保健医療福祉業務に従事する方 377 名に対してオンライン研修を行った。

課程主任 堀 弘明

2 月 17 日 (月)

犯罪被害者の心理とケア I	中島 聡美
犯罪被害者の心理とケア II	中島 聡美
子どもの性暴力被害者のメンタルヘルス・治療・対応	野坂 祐子
犯罪被害者支援	大岡 由佳

2 月 18 日 (火)

犯罪被害者に係る司法制度	柑本 美和
虐待を受けた子どもの治療	小平 雅基
性暴力被害者への治療	齋藤 梓
犯罪被害者の PTSD と治療	小西 聖子

講師名簿

堀 弘明	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部部長
中島 聡美	武蔵野大学人間科学部教授
野坂 祐子	大阪大学大学院人間科学研究科教授
大岡 由佳	武庫川女子大学心理・社会福祉学部准教授
柑本 美和	東海大学法学部法律学科教授
小平 雅基	恩賜財団母子愛育会総合母子保健センター愛育クリニック小児精神保健科部長
齋藤 梓	上智大学総合人間科学部心理学科准教授
小西 聖子	武蔵野大学人間科学部教授

研修の推移

国 立 精 神 衛 生 研 究 所			
	昭和36年6月～		昭和54年度～ 昭和61年度
研 修 課 程	・医学科研修 ・心理学科研修 ・社会福祉学科研修 ・精神衛生指導科研修	→	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科デイ・ケア課程研修

国立精神・神経センター精神保健研究所					
	昭和61年度		昭和62年度～	平成18年度～	平成20年度 平成21年度
研 修 課 程	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科デイ・ケア課程研修	→	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神保健指導過程研修 ・精神科デイ・ケア課程研修	・精神保健指導過程研修 ・精神科デイ・ケア課程研修 ・発達障害支援課程研修 ・摂食障害治療課程研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・ACT研修 ・薬物依存臨床課程研修 ・児童思春期精神医学研修 ・司法精神医学課程研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修	・自殺総合対策企画研修 ・地域自殺対策支援研修 ・心理職等自殺対策研修 ・自殺対策相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害精神医療研修 ・摂食障害治療研修 ・摂食障害看護研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・薬物依存臨床看護研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・PTSD精神療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・司法精神医学研修 ・ACT研修

独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所		
	平成22年度	平成23年度 平成24年度
研 修 課 程	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・司法精神医学研修 ・PTSD医療研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・発達障害精神医療研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・ACT研修	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修

独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所				国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所
研	平成25年度	平成26年度	平成27年度	
	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・精神障害者に対する医療機関と連携した就労支援研修	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント(福祉型)研修 ・ACT・多職種アウトリーチ研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・医療における個別就労支援研修 ・司法精神医学ワンデイセミナー	・発達障害早期総合支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・発達障害支援医学研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント(福祉型)研修 ・医療における包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・司法精神医学ワンデイセミナー ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・心理職自殺予防研修 ・メンタルヘルス問題への初期対応指導者研修 ・司法精神医学研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・精神科急性期医療の質を考える研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修	
修				
課				
程				

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所			
研	平成28年度	平成29年度	平成30年度
	・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・地域自殺対策推進企画研修 ・摂食障害治療研修 ・多職種による包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・自殺対策・相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・司法精神医学研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修 ・摂食障害看護研修	・発達障害地域包括支援研修: 早期支援 ・発達障害支援医学研修 ・摂食障害治療研修 ・地域精神科モデル医療研修プレセミナー ・多職種による包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・自殺対策・相談支援研修 ・発達障害地域包括支援研修: 精神保健・精神医療 ・精神保健指導課程研修 ・司法精神医学研修 ・摂食障害看護研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修	・災害時PFAと心理対応研修 ・精神保健指導課程研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害地域包括支援研修: 早期支援 ・摂食障害治療研修 ・精神障害者地域包括支援研修 ・多職種による包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・地域におけるリスクアセスメント研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害地域包括支援研修: 精神保健・精神医療 ・摂食障害看護研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修
修	平成31・令和1年度	令和2年度	令和3年度
	・災害時PFAと心理対応研修 ・精神保健指導課程研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害地域包括支援研修: 早期支援 ・摂食障害治療研修 ・多職種による包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・地域におけるリスクアセスメント研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害地域包括支援研修: 精神保健・精神医療 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修	・災害時PFAと心理対応研修 ・発達障害者支援研修: 指導者養成研修 ・発達障害者支援研修: 行政実務研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修	・摂食障害治療研修 ・災害時PFAと心理対応研修 ・発達障害者支援研修: 指導者養成研修 ・発達障害者支援研修: 行政実務研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修 ・精神科救急医療体制整備研修 ・令和3年度PTSD対策専門研修
課			
程			

Ⅲ 研 修 実 績

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所			
研 修 課 程	令和4年度	令和5年度	令和6年度
	・発達障害者支援研修:指導者養成研修 ・医療機関における注意欠如・多動症(ADHD)児の親へのペアレント・トレーニング実施者養成研修 ・強迫症対策医療研修基本コース ・災害時PFAと心理対応研修 ・摂食障害治療研修 ～初心者が知っておくべき外来治療～ ・統合失調症の標準治療研修 ・PTSD持続エクスポージャー療法研修 ・うつ病の標準治療研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・摂食障害治療研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修 ・発達障害者支援研修:行政実務研修 ・精神科救急医療体制整備研修 ・令和4年度PTSD対策専門研修 ・STAIR Narrative Therapyワークショップ ・強迫症対策医療研修認知行動療法コース	・摂食障害治療研修 ～初心者が知っておくべき外来治療～ ・災害時PFAと心理対応研修 ・発達障害者支援研修:指導者養成研修 ・医療機関における注意欠如・多動症(ADHD)児の親へのペアレント・トレーニング実施者養成研修 ・摂食障害治療研修 ・強迫症対策医療研修基本コース ・統合失調症の標準治療研修 ・PTSD持続エクスポージャー療法研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・うつ病の標準治療研修 ・精神保健医療福祉データ行政活用研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修 ・精神科救急医療体制整備研修 ・令和5年度PTSD対策専門研修	・摂食障害入院治療研修 ～入院治療の留意点とコツ～ ・発達障害者支援研修:指導者養成研修 ・医療機関における注意欠如・多動症(ADHD)児の親へのペアレント・トレーニング実施者養成研修 ・災害時PFAと心理対応研修 ・摂食障害治療研修 ・摂食障害治療研修 ～初心者が知っておくべき外来治療～ ・強迫症対策医療研修基本コース ・入院者訪問支援事業研修 ・統合失調症の標準治療研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・うつ病の標準治療研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修 ・精神保健医療福祉データ行政活用研修 ・発達障害者支援研修:行政実務研修 ・精神科救急医療体制整備研修 ・令和6年度PTSD対策専門研修

令和6年度精神保健に関する技術研修課程 実施計画表

研 修 日 程	課 程 名	申込み方法		申込み期間 (センター書類必着日)	受講料	定 員	主 任
		WEB	自治体 推薦				副主任
令和6年 オンデマンド配信 4月22日(月)～5月31日(金) ライブ配信:5月17日(金)	<オンライン開催> (第3回)摂食障害入院治療研修 ～入院治療の留意点とコツ～	○		3月1日(金)～3月25日(月)	¥3,000	300	関口 敦
6月26日(水)～6月27日(木)	<オンライン開催> (第5回)発達障害者支援研修: 指導者養成研修パートⅠ		○	4月8日(月)～4月30日(火) (5月17日(金))	無料	50	石井 礼花 江頭 優佳
7月2日(火)	<オンライン開催> (第3回)医療機関における注意欠如・ 多動症(ADHD)児の親へのペアレント・ トレーニング実施者養成研修	○※		4月15日(月)～5月10日(金)	¥10,000	30	石井 礼花
対面:7月2日(火) オンライン:7月9日(火)	<対面/オンライン開催> (第13回)災害時PFAと心理対応研修	○※		4月15日(月)～5月10日(金)	¥16,000	50	堀 弘明 大沼 麻実
7月10日(水)～7月12日(金)	<オンライン開催> (第21回)摂食障害治療研修 (後援:日本摂食障害学会)	○※		4月22日(月)～5月15日(水)	¥20,000	100	関口 敦
オンデマンド配信 7月11日(木)～8月2日(金) ライブ配信:8月3日(土)	<オンライン開催> (第8回)摂食障害治療研修 ～初心者を知っておくべき外来治療～	○		4月22日(月)～5月24日(金)	¥3,000	300	関口 敦
7月24日(水)	<オンライン開催> (第3回)強迫症対策医療研修 基本コース	○		5月13日(月)～5月31日(金)	¥8,000	100	堀 弘明
7月26日(金)	<対面開催> (第1回)入院者訪問支援事業研修	○		5月7日(火)～5月27日(月)	¥6,000	50	藤井 千代
9月1日(日)	<オンライン開催> (第3回)統合失調症の標準治療研修	○		6月3日(月)～7月16日(火)	¥8,000	50	橋本 亮太
9月4日(水)～9月6日(金)	<オンライン開催> (第37回)薬物依存臨床医師研修	○		6月17日(月)～7月8日(月)	¥24,000	50	松本 俊彦 嶋根 卓也
	(第25回)薬物依存臨床看護等研修					50	
9月15日(日)	<オンライン開催> (第3回)うつ病の標準治療研修	○		6月17日(月)～7月29日(月)	¥8,000	50	橋本 亮太
9月25日(水)～9月26日(木)	<オンライン開催> (第5回)発達障害者支援研修: 指導者養成研修パートⅡ		○	7月1日(月)～7月22日(月) (8月5日(月))	無料	50	高橋 長秀 江頭 優佳
オンデマンド配信 10月15日(火)～11月23日(土) ライブ配信:11月10日(日)	<オンライン開催> (第4回)摂食障害入院治療研修 ～入院治療の留意点とコツ～	○		8月13日(月)～9月13日(金)	¥3,000	300	関口 敦
10月22日(火)	<オンライン開催> 令和6年度PTSD対策専門研修 A.通常コース1(臨床コース)	○※		9月9日(月)～9月29日(日)	無料	200	堀 弘明
11月4日(祝・月) ～11月6日(水)	<対面開催> (第16回)認知行動療法の手法を活用した 薬物依存症に対する集団療法研修	○		8月26日(月)～9月17日(火)	¥24,000	60	松本 俊彦 今村 扶美

Ⅲ 研 修 実 績

研 修 日 程	課 程 名	申 込 み 方 法		申 込 み 期 間 (センター書類必着日)	受 講 料	定 員	主 任	
		WEB	自治体 推薦				主 任	副 主 任
11月8日(金)	＜オンライン開催＞ (第2回)精神保健医療福祉データ 行政活用研修	○		8月26日(月)～9月20日(金)	¥4,000	100	黒田 直明 臼田 謙太郎	
11月13日(水)	＜オンライン開催＞ 令和6年度PTSD対策専門研修 A.通常コース2(行政・支援者コース)	○※		9月9日(月)～10月20日(日)	無料	60	堀 弘明	
11月13日(水)～11月14日(木)	＜オンライン開催＞ (第5回)発達障害者支援研修: 指導者養成研修パートⅢ		○	8月26日(月)～9月13日(金) (9月30日(月))	無料	50	高橋 長秀 江頭 優佳	
12月4日(水)～12月5日(木)	＜オンライン開催＞ 令和6年度PTSD対策専門研修 B.専門コース1	○※		9月9日(月)～10月20日(日)	無料	60	堀 弘明	
対面:12月18日(水) オンライン:12月24日(火)	＜対面／オンライン開催＞ (第14回)災害時PFAと心理対応研修	○※		10月1日(火)～10月21日(月)	¥16,000	50	堀 弘明 大沼 麻実	
オンデマンド配信 1月6日(月)～25日(土) ライブ配信:1月26日(日)	＜オンライン開催＞ (第9回)摂食障害治療研修 ～初心者が知っておくべき外来治療～	○		10月21日(月)～11月22日(金)	¥3,000	300	関口 敦	
1月15日(水)～1月16日(木)	＜オンライン開催＞ (第5回)発達障害者支援研修: 行政実務研修		○	10月21日(月)～11月11日(月) (11月29日(金))	無料	50	高橋 長秀 江頭 優佳	
1月22日(水)～23日(木)	＜オンライン開催＞ 令和6年度PTSD対策専門研修 B.専門コース2	○※		9月9日(月)～12月15日(日)	無料	150	堀 弘明	
1月31日(金)	＜対面開催＞ (第2回)入院者訪問支援事業研修	○		11月1日(金)～11月21日(木)	¥6,000	50	藤井 千代	
2月8日(土)	＜オンライン開催＞ (第4回)精神科救急医療体制整備研修	○		11月25日(月)～12月13日(金)	無料	60	藤井 千代	
2月17日(月)～18日(火)	＜オンライン開催＞ 令和6年度PTSD対策専門研修 C.犯罪・性犯罪被害者コース	○※		9月9日(月)～1月12日(日)	無料	300	堀 弘明	

※
推薦状が
必要な研修

IV. ランチョンセミナー開催実績

1. 令和6年度 精神保健研究所 ランチョンセミナー

(毎月第1月曜日 12:00～13:00 オンライン開催)

日付	回次	演題	発表研究部	演者	参加人数
2024年6月19日	第67回	精神疾患の克服とその障害支援のための病態解明研究と社会実装研究の過去・現在・未来	精神疾病病態研究部	部長 橋本 亮太	57名
2024年7月17日	第68回	遺伝子発現プロファイリングによるうつ病とPTSDの病因病態研究	行動医学研究部	部長 堀 弘明	35名
2024年8月7日	第69回	中枢神経作用薬の作用機序解明とその医療応用	精神薬理研究部	部長 池田 和隆	34名
2024年9月18日	第70回	Evidence-based Policy Making (EBPM) を自治体から：市町村と協働してみえる景色	公共精神健康医療研究部	部長 黒田 直明	62名
2024年10月16日	第71回	世界規模で求められる統合失調症への対応; “Schizophrenia – Time to Commit to Policy Change, Updated Report 2024”	児童・予防精神医学研究部	部長 住吉 太幹	42名
2024年11月27日	第72回	悲嘆の精神心理学的理解をめざして	睡眠・覚醒障害研究部	室長 吉池 卓也	49名
2024年12月18日	第73回	精神疾患当事者に対する就労支援の課題と効果的な実践の現在地	地域精神保健・法制度研究部	室長 山口 創生	53名
2025年1月15日	第74回	動物と細胞を用いた依存性薬物の薬理学的解析	薬物依存研究部	室長 富山 健一	41名
2025年2月19日	第75回	ゲノムコホート研究を用いて神経発達症の病態を理解する	知的・発達障害研究部	部長 高橋 長秀	53名

令和6年度 精神保健研究所リサーチ委員会

堀 弘明、小塩靖崇、北村真吾、小池純子、白間 綾

V. 精神保健研究所 研究報告会 プログラム・抄録集

令和6年度 国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所 研究報告会

会 期：令和7年3月17日（月）

会 場：教育研修棟 ユニバーサルホール（対面）

9:15	開場
9:30	開会の辞（理事長 中込和幸） ご挨拶（所長 張 賢徳）
9:40	行動医学研究部（座長 堀 弘明） 演者 小川真太郎 演者 関口 敦
10:10	地域精神保健・法制度研究部（座長 藤井千代） 演者 山口創生 演者 奈良麻結
10:40	休憩
10:50	知的・発達障害研究部（座長 高橋長秀） 演者 高橋長秀 演者 江頭優佳
11:20	薬物依存研究部（座長 松本俊彦） 演者 嶋根卓也 演者 喜多村真紀
11:50	昼食
12:50	公共精神健康医療研究部（座長 黒田直明） 演者 三宅美智 演者 白田謙太郎
13:20	精神疾患病態研究部（座長 橋本亮太） 演者 伊藤颯姫 演者 松本純弥
13:50	休憩
14:00	精神薬理研究部（座長 池田和隆） 演者 西澤大輔 演者 森屋由紀
14:30	児童・予防精神医学研究部（座長 住吉太幹） 演者 Andrew Stickley 演者 白間 綾
15:00	睡眠・覚醒障害研究部（座長 栗山健一） 演者 内海智博 演者 高橋恵理矢
15:30	閉会の辞（所長 張 賢徳）
15:40	

令和6年度 精神保健研究所リサーチ委員会
堀 弘明 北村真吾 小塩靖崇 小池純子 白間 綾

お知らせとお願い

〈発表者の皆様へのお願い〉

1. 発表時間について

発表時間は、1 演題につき 14 分（発表 10 分、質疑応答 4 分）です。発表者の交替を含め 1 演題 15 分の時間内でおさめてください。

2. 発表形式および発表用ファイルの仕様

発表は、Power Point で作成したファイルを投影して発表してください。発表スライドは当日に USB で持参し、開始前や休憩時間に発表用 PC(Windows)のデスクトップにコピーしてください。発表後のファイルは事務局が責任を持って削除します。持ち込み PC の利用も可能ですが、ご自身で接続して下さい（Macintosh の場合、コネクタをご持参ください）。

3. お願い

当日は、少なくともひとつ前の回に行われている発表までには待機してください。発表時間の経過時間に合わせて、卓上ベルを鳴らして合図いたします。発表時間終了時（10 分）にベルを 1 回、質疑応答の終了時（4 分）に 2 回ならします。時間の遵守をお願いします。

〈座長の方へのお願い〉

1. 座長について

座長は、各部長にお願いします。

タイトなスケジュールですので、発表時間の厳守にご協力をお願いいたします。

2. お願い

座長と発表者は、ひとつ前の発表までには待機をお願いいたします。

〈すべての参加者の皆様へ〉

1. 対面開催で、オンラインあるいはハイブリッドでの配信はありません。

2. すべてのセッションにご参加いただいた先生には、若手発表奨励賞の投票をいただきます。

投票方法は当日にご案内を申し上げます。

3. 各部長は、若手奨励賞とともに青申賞の投票をお願い申し上げます。投票方法につきましては当日にご案内を差し上げます。

4. 研究報告会終了後に参加者全員で集合写真を撮影する予定です。

プログラム

【開会】 9:30 ～ 9:40

開会の辞 国立精神・神経医療研究センター 理事長 中込和幸

ご挨拶 精神保健研究所 所長 張 賢徳

【報告1】 9:40 ～ 10:10 行動医学研究部 座長 堀 弘明

PTSD患者および健常対照者における血清脂質および血漿脂肪酸プロファイル：

症状・認知機能・炎症マーカーとの関連

○小川眞太郎，堀弘明，丹羽まどか，伊藤真利子，林明明，吉田冬子，井野敬子，河西ひとみ，成田恵，中野稚子，今井理紗，松井三枝，加茂登志子，刃刀浩，服部功太郎，金吉晴

多施設共同研究による摂食障害の脳画像バイオマーカーの解明

～厚労事業との相乗効果で広がる診療・研究ネットワーク～

○関口敦，高村恒人，勝沼るり，船場美佐子，小原千郷，佐藤康弘，平野好幸，吉内一浩，野原伸展，磯部昌憲，兒玉直樹，吉原一文，権藤元治，高倉修，中野稚子，井野敬子，守口善也

【報告2】 10:10 ～ 10:40 地域精神保健・法制度研究部 座長 藤井千代

IPS援助付き雇用の再現度と長期就労アウトカムとの比較

多施設共同による6年間の追跡調査

○山口創生，川口敬之，岩永麻衣，臼井香，五十嵐百花，塩澤拓亮，小池純子，佐藤さやか，藤井千代

***地域サービスを利用する精神障害者における日本語版ASCOT SCT4の妥当性・信頼性の検証**

○奈良麻結，山口創生，臼田謙太郎，川口敬之，岩永麻衣，臼井香，羽田彩子，佐藤さやか，黒田直明，藤井千代

(休憩)

【報告3】 10:50 ～ 11:20 知的・発達障害研究部 座長 高橋長秀

注意欠如・多動症（ADHD）の発症・経過におけるアディポネクチンの役割

○高橋長秀，岩渕俊樹，奥村明美，原田妙子，Md Shafiur Rahman，西村倫子，土屋賢治

成人期の注意欠如多動症における時間知覚機能不全の検討

○江頭優佳，林小百合，魚野翔太，高田美希，請園正敏，益田来実，岡田俊

【報告4】 11:20 ~ 11:50 薬物依存研究部

座長 松本俊彦

**高校生における市販薬乱用の有病率と関連する心理社会的要因に関する研究：
薬物使用と生活に関する全国高校生調査2021**

○嶋根卓也，猪浦智史，喜多村真紀，松本俊彦

***市販薬の過量服薬に関連する問題の探索的研究 - SNS投稿文の計量テキスト分析より**

○喜多村真紀，高田雅弘，江藤不二子，首藤誠，嶋根卓也

(昼食)

【報告5】 12:50 ~ 13:20 公共精神健康医療研究部

座長 黒田直明

***トラウマインフォームドケアに基づく研修の有効性の検討**

○三宅美智，羽澄恵，臼田謙太郎，川島貴大，深澤舞子，立森久照，黒田直明，西大輔

心のサポーター養成研修事業の研修効果に関する検討 前後比較試験

○臼田謙太郎，澤田宇多子，飯田真子，羽澄恵，片岡真由美，小塩靖崇，梅本育恵，中下綾子，
神川ちあき，黒田直明，久我弘典，藤井千代，西大輔

【報告6】 13:20 ~ 13:50 精神疾患病態研究部

座長 橋本亮太

***統合失調症の認知機能の簡便な評価と労働の関連要因の検討**

○伊藤颯姫，松本純弥，住吉チカ，安田由華，藤本美智子，山森英長，長谷川尚美，高野晴成，
住吉太幹，橋本 亮太

側脳室拡大と認知機能障害を示す精神疾患患者群の病態解明

○松本純弥，伊藤颯姫，安田由華，鬼塚俊明，住吉チカ，岡田直大，福永雅喜，根本清貴，
橋本直樹，山本真江里，岡田剛，原田健一郎，中瀧理仁，大井一高，久保田学，山森英長，
藤本美智子，長谷川尚美，高橋努，山末英典，吉村玲児，橋本亮太

(休憩)

【報告7】 14:00 ~ 14:30 精神薬理研究部

座長 池田和隆

鎮痛薬感受性関連遺伝子多型の同定とその臨床応用

○西澤大輔，池田和隆

*** μ オピオイド受容体欠損マウスにおける δ オピオイド受容体**

作動薬の相加効果による絶望感軽減の雌雄差

○森屋由紀，笠原好之，嶋田政史，藤井秀明，長瀬博，井手聡一郎，Frank Scott Hall，
George R Uhl，曾良一郎，池田和隆

【報告8】 14:30 ~ 15:00 児童・予防精神医学研究部 座長 住吉太幹

***Problematic gambling and psychotic-like experiences: Findings from Japan**

○Andrew Stickley, Aya Shirama, Risa Yamada, Tomiki Sumiyoshi

近似推論における瞳孔とリンクした覚醒系の役割：健常者での検討

○白間綾, 信川創, 住吉太幹

【報告9】 15:00 ~ 15:30 睡眠・覚醒障害研究部 座長 栗山健一

***慢性不眠障害および閉塞性睡眠時無呼吸と比較したComorbid insomnia and sleep apneaの白質変性の病像**

○内海智博, 吉池卓也, 松井健太郎, 河村葵, 長尾賢太郎, 羽澄恵, 佐藤典子, 栗山健一

***睡眠休養感の欠如が慢性疾患の健康転帰に及ぼす影響の検討**

○高橋恵理矢, 吉池卓也, 内海智博, 河村葵, 長尾賢太郎, 羽澄恵, 岡邨しのぶ, 不破真衣, 松島舜, 南學正仁, 木村綾乃, 北村真吾, 松井健太郎, 栗山健一

【閉会】 15:30 ~ 15:40

閉会の辞 精神保健研究所 所長 張 賢徳

<凡例> * 若手奨励賞選考対象演題 ○ 発表者

抄 録

行動医学研究部

PTSD 患者および健常対照者における血清脂質および血漿脂肪酸プロファイル：症状・認知機能・炎症マーカーとの関連

○小川眞太郎¹⁾²⁾、堀 弘明¹⁾²⁾、丹羽まどか¹⁾、伊藤真利子¹⁾³⁾、
林 明明¹⁾⁴⁾、吉田冬子¹⁾、井野敬子¹⁾⁵⁾、河西ひとみ¹⁾⁶⁾⁷⁾、成田 恵¹⁾、
中野稚子¹⁾、今井理紗¹⁾⁵⁾⁸⁾、松井三枝⁹⁾、加茂登志子¹⁾¹⁰⁾、
切刀 浩²⁾¹¹⁾、服部功太郎²⁾¹²⁾、金 吉晴¹⁾

1) 国立精神・神経医療研究センター (NCNP) 行動医学研究部, 2) NCNP 疾病研究第三部,
3) 北海道大学 環境健康科学研究教育センター, 4) 理化学研究所 脳神経科学研究センタ
ー, 5) 名古屋市立大学大学院 医学研究科 精神・認知・行動医学分野, 6) NCNP 脳病態統
合イメージングセンター, 7) 東北大学大学院 医学系研究科, 8) りさ栞中こころのクリニッ
ク, 9) 金沢大学大学院 人間社会環境研究科 認知科学分野, 10) 若松町こころとひふのクリ
ニック, 11) 帝京大学医学部 精神神経科学講座, 12) NCNP MGC バイオリソース部

近年の研究により、精神疾患である心的外傷後ストレス障害 (PTSD) が身体的な健康とも関連していることが示唆されている。脂質関連分子は、PTSD 症状に関連する中枢神経系の機能において重要な役割を果たすが、PTSD と脂質関連分子の関連を検討する症例対照研究は乏しい。本研究では、PTSD 患者 68 名および健常対照者 97 名を対象として、PTSD 症状 (PDS-IV スコア ※患者のみ)・幼少期逆境体験 (CTQ-28 スコア)・自殺念慮 (M.I.N.I. module C 重み付けスコア ※患者のみ)・認知機能 (RBANS) を評価した。また、対象者の血清においてコレステロール、トリグリセリド、炎症関連マーカーを測定し、血漿から脂肪酸濃度を解析した。

その結果、PTSD 患者群は対照群と比較して、高密度リポタンパク質 (HDL) コレステロールおよび n-6 系リノール酸の濃度が有意に低く、一方で飽和脂肪酸であるパルミチン酸の濃度および、必須脂肪酸欠乏の指標となる n-9 系ミード酸と n-6 系アラキドン酸の比 (T/T 比) が高いことが示された。PTSD 症状のうち、特に過覚醒症状のスコアは、n-6 系 γ -リノレン酸・n-6 系ジホモ- γ -リノレン酸・n-9 系ミード酸の値および T/T 比と有意な正の相関を示した。認知機能のスコアでは、n-3 系ドコサヘキサエン酸 (DHA)、n-3 系脂肪酸合計、n-6 系リノール酸の値と有意な正の相関を示す一方で、n-6 系ジホモ- γ -リノレン酸、飽和脂肪酸であるパルミチン酸、飽和脂肪酸合計の値とは負の相関を示した。自殺念慮のスコアは、n-6 系ジホモ- γ -リノレン酸、n-9 系ミード酸、および T/T 比の値と正の相関を示し、多価不飽和脂肪酸 (PUFA) の合計値と負の相関を示した。炎症関連マーカーの濃度については、飽和脂肪酸であるパルミチン酸、n-9 系オレイン酸、n-9 系脂肪酸合計の値と正の相関を示し、リノール酸および PUFA 濃度の値と負の相関を示した。また、潜在プロファイル分析 (LPA) により、脂肪酸や症状のプロファイルが異なる複数のサブグループが特定された。

これらの脂質関連分子の変化から、PTSD の病態生理の理解が深まることが期待される。また、LPA によって特定された異なる脂肪酸プロファイルは、PTSD 患者のサブタイプ分類や、栄養学的アプローチによる個別化治療の戦略のための指針となる可能性がある。

行動医学研究部

多施設共同研究による摂食障害の脳画像バイオマーカーの解明 ～厚労事業との相乗効果で広がる診療・研究ネットワーク～

○関口敦¹⁾, 高村恒人¹⁾, 勝沼るり¹⁾, 船場美佐子¹⁾, 小原千郷¹⁾,
佐藤康弘²⁾, 平野好幸³⁾, 吉内一浩⁴⁾, 野原伸展⁴⁾, 磯部昌憲⁵⁾,
兒玉直樹⁶⁾, 吉原一文⁷⁾, 権藤元治⁷⁾, 高倉修⁷⁾,
中野稚子¹⁾, 井野敬子¹⁾, 守口善也¹⁾

- 1) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 行動医学研究部,
2) 東北大学病院 心療内科, 3) 千葉大学 子どものこころの発達教育研究センター,
4) 東京大学 医学部附属病院 心療内科, 5) 京都大学 医学研究科 精神医学,
6) 産業医科大学 医学部 脳神経内科 心療内科,
7) 九州大学 大学院医学研究院 心身医学

摂食障害は、発達期から成人期に好発する精神疾患で、NDB 調査における総患者数は 22～28 万人と報告されている。特に神経性やせ症（AN）は精神疾患の中で均一性が高い疾患とされ（Kaye 2009）、脳画像などのバイオマーカーの解明が期待されている。

我々は、国内 7 施設による多施設共同研究を通じて、100 例を超える世界最大規模の AN および健常対照女性の脳 MRI データベースを整備し、横断データ解析により脳画像診断マーカーを特定した。脳灰白質量の検討では、視床、前帯状皮質、前頭頭頂皮質、小脳など広範な脳部位で灰白質体積の有意な減少を認めた。また、眼窩前頭皮質および後部島皮質の灰白質体積と症状重症度との間に正の相関を認めた（Tose 2024）。安静時脳機能接続（rsFC）の解析では、AN 患者群で健常群に比べて情動系脳回路の強化が見られ、さらに制限型（ANR）では過食排出型（ANBP）より視覚系回路が強化されていることが病型のマーカーとして検出された（Sudo 2024）。さらに、機械学習による判別器を作成し、70～80%の精度で AN および病型（ANR/ANBP）の判別が可能であった。

また、認知行動療法（CBT）の前後における AN および神経性過食症（BN）患者 60 例の縦断データを収集し、縦断データ解析により治療効果や CBT の治療反応性を予測する神経基盤を明らかにした。AN の治療マーカーとして視床下部-下垂体系の脳回路強化が示され、治療反応性予測マーカーとして後部島皮質体積の低下および小脳・海馬関連回路の rsFC 低下が特定された。また、BN の治療マーカーとして小脳体積の低下、後頭葉系回路の rsFC 低下が、治療反応性予測マーカーとして前頭葉系回路の rsFC 低下が示唆された。

これらの成果を基に、京都大および千葉大の大学院生が学位を取得し、さらに複数大学の大学院生が執筆中の論文も学位取得に繋がる見込みである。また、厚労省「摂食障害治療支援センター設置運営事業」の枠組みとの連携を通じて、研究と診療が相補的に展開する好事例と評価されている。AMED 事業として開始した摂食障害治療のバイオマーカー開発を端緒として、若手研究者の育成、さらには診療ネットワークの拡大にもつながる成果が得られた。

地域精神保健・法制度研究部

IPS 援助付き雇用の再現度と長期就労アウトカムとの比較 多施設共同による 6 年間の追跡調査

○山口創生¹⁾, 川口敬之¹⁾, 岩永麻衣¹⁾, 臼井香¹⁾, 五十嵐百花¹⁾,
塩澤拓亮²⁾, 小池純子¹⁾, 佐藤さやか¹⁾, 藤井千代¹⁾

1) 地域精神保健・法制度研究部, 2) 東京科学大学大学院保健衛生学研究科

【背景】統合失調症患者を含め重い精神症状を抱える当事者の約 60%が就労を希望しているが、実際に就労ができていないのは 30%以下である。Individual Placement and Support 援助付き雇用モデル（以下 IPS）は、30 以上の無作為化試験（RCTs）にて、就労アウトカムに対する効果が実証された実践であり、各国の臨床ガイドラインで推奨されている。しかしながら、日常実践における長期効果、特に支援の質（IPS の再現度）を絡めた効果は未検証である。そこで、本研究は国内の IPS 事業所における IPS の再現度をフィデリティ尺度で測定した上で、各事業所の利用者を 6 年間追跡し、就労アウトカム（就労率・期間・給与）を比較した。

【方法】本研究には、日本で IPS を実践する約 20 事業所のうち 15 事業所が参加した。分析対象者は、①各事業所のサービスを 2017 年 1 月 1 日から 6 月 30 日に利用開始し、②過去に実施した 2 年間の追跡調査に登録された 202 名であった。IPS の再現度は、日本版個別型援助付き雇用フィデリティを用いて評価・分類した（低再現群：7 機関、高再現群：8 機関）。対象者の就労アウトカムは就労率・就労期間・給与とし、それぞれ支援記録やインタビューにて情報を得た。主解析として可逆性イベントの累積発生率の分析を行った。本研究は、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会から承認を得て実施された（No. A2023-056）。

【結果】分析対象者は 123 名であった（追跡率：61%）。両群の平均サービス利用期間は約 50 カ月（4.1 年）であった。IPS 低再現群と比較し、高再現群の 6 年間の就労率は有意に高く（54.0% vs 88.3%、aOR = 6.5、 $p = 0.020$ ）、平均就労期間が長く（aMD = 14.4 カ月、 $p = 0.020$ ）、また平均収入も多かった（aMD = 161 万 7,667 円、 $p = 0.014$ ）。就労イベントの推移に関する主解析の結果、低再現群における就労率のピークは 49 カ月目（36.5%）であり、高再現群では 22 カ月目（71.7%）であった。低再現群と高再現群の就労率の有意差は 48 カ月目（4 年目）まで維持されたが、60 カ月（5 年目）以降は両群の有意差が観察されなかった。

【結論】本研究の知見から、日常実践における IPS 利用者の長期的な就労アウトカムを確保するためには、フィデリティを用いた継続的な IPS の評価と、IPS を忠実に実施する再現度（支援の質）の維持が重要であることが示唆された。また、IPS のサービス終了のタイミングや、離職した利用者と長期的に関わるための支援内容や制度・戦略の見直しという現実的な検討課題が明らかになった。

地域精神保健・法制度研究部

地域サービスを利用する精神障害者における 日本語版 ASCOT SCT4 の妥当性・信頼性の検証

○奈良麻結¹⁾, 山口創生¹⁾, 臼田謙太郎²⁾, 川口敬之¹⁾, 岩永麻衣¹⁾,
臼井香¹⁾, 羽田彩子¹⁾, 佐藤さやか¹⁾, 黒田直明²⁾, 藤井千代¹⁾

1) 地域精神保健・法制度研究部, 2) 公共精神健康医療研究部

【背景】21世紀以降、介護や障害支援を含むヘルスリサーチ領域において、主観的指標によるアウトカム評価の重要性が増している。現在分野を問わず広く使用されている EuroQoL 5 Dimension は、項目数が少なく、精神障害者への適応が難しいといった課題がある。このため、分野横断的に利用可能な主観的指標の開発が求められている。the Adult Social Care Outcomes Toolkit (ASCOT)は、何らかの社会的な援助・支援を利用することにより影響を受ける生活の質（社会的ケア関連 QOL）を把握するために開発された尺度であり、支援サービス利用者のアウトカム評価に適していると考えられる。しかし、精神障害者を対象とした ASCOT の妥当性および信頼性の検証は行われていない。本研究は、地域サービスを利用する精神障害者を対象に、自己記入版である日本語版 ASCOT SCT4 の妥当性および信頼性の検証を行った。

【方法】全国 22 施設において、地域サービスを利用する精神障害者を対象に調査を実施した。日本語版 ASCOT SCT4 を用いて社会的ケア関連 QOL、健康関連 QOL、主体性、ウェルビーイング、抑うつ症状、機能評価を自記式調査票として、人口統計学的変数、機能評価、客観的 QOL をスタッフ評価式調査票としてそれぞれ評価した。因子構造は確認的因子分析を用いて検証し、各尺度との相関係数を用いて併存的妥当性と収束的妥当性を評価した。さらに内的一貫性（クロンバックの α 係数）、再検査信頼性（ICC）を算出した。本研究は国立精神・神経医療研究センター倫理委員会から承認を得て実施した（A2023-059）。

【結果】397 名が研究に参加し、64 名が再検査信頼性のための追跡調査に参加した。1 因子構造を仮定した適合度指標は、CMIN/df=1.069 ($p=0.375$)、RMSEA=0.013、SRMR=0.026、CFI=0.998、TLI=0.997 であった。日本語版 ASCOT SCT4 は健康関連 QOL ($\rho=0.619, p<0.001$)、主体性 ($\rho=0.502, p<0.001$)、ウェルビーイング ($\rho=0.657, p<0.001$)、客観的 QOL ($\rho=0.240, p=0.001$)と有意な正の相関、抑うつ症状 ($\rho=-0.657, p<0.001$)、機能評価自己記入版 ($\rho=-0.616, p<0.001$)、機能評価面接者版 ($\rho=-0.242, p<0.001$)と有意な負の相関を示した。クロンバックの α 係数は 0.76、ICC は 0.71 (95%CI: 0.57-0.81, $p<0.001$)であった。

【結論】日本語版 ASCOT SCT4 は、地域サービスを利用する精神障害者における主観的 QOL を簡便に測定できる主観的指標として有用な可能性が示唆された。今後は、大規模な調査を実施し、日本における日本語版 ASCT SCT4 の標準的な得点分布の確率が求められる。

知的・発達障害研究部

注意欠如・多動症（ADHD）の発症・経過における アディポネクチンの役割

○高橋長秀¹⁾²⁾³⁾，岩渕俊樹²⁾³⁾，奥村明美²⁾³⁾，原田妙子²⁾³⁾，
Md Shafiur Rahman²⁾³⁾，西村倫子²⁾³⁾，土屋賢治²⁾³⁾

1) 国立精神・神経医療研究センター

2) 浜松医科大学子どもこころの発達研究センター

3) 大阪大学大学院連合小児発達学研究科

【目的】注意欠如多動症(ADHD)では肥満の併存率が高く、両者は共通の遺伝的基盤を有することが示唆されている。アディポネクチンは脂質代謝と炎症に関わるホルモンであり、血中のアディポネクチンの低下が代謝性疾患・炎症性疾患と関連していることが報告されている。本研究では、アディポネクチンが ADHD の発症および経過に対する影響を分子生物学的および遺伝学的解析を用いて明らかにすることを目的とした。

【方法】出生コホートの参加者（N=1,258）を対象に臍帯血中のアディポネクチンと ADHD 症状の関連を検討した。さらに、ADHD（N=55,374）とアディポネクチン（N=46,434）のゲノムワイド関連研究（GWAS）のデータを用いて ADHD と血中アディポネクチンの遺伝的相関・関連を検討した。

【結果】臍帯血中のアディポネクチン濃度が低いことが、コホート参加者の 6 歳、9 歳時点での ADHD 症状の重症度と関連していた。さらに、trajectory 解析により 6 歳から 9 歳までの ADHD 症状の変化は 3 つの異なるパターンに分類されたが、症状が継時的に悪化するグループでは、臍帯血中のアディポネクチンが低い傾向が見られた。Mendelian Randomization 解析では、ADHD から血中アディポネクチン濃度への一方向の相関が見られた。Polygenic Risk Score 解析では、ADHD の遺伝的リスクとアディポネクチンの間に負の関連があることが示された。また、臍帯血中のアディポネクチンの低下は臍帯血中の炎症性マーカー(IL-1b,IL-6,CRP)の上昇と関連していた。

【結論】ADHD の発症・経過に、アディポネクチンが関与していることが示唆された。また、アディポネクチンが ADHD そのもの及び併存する身体疾患の治療において、ターゲットとなりうる可能性を示唆していると考えられた。

○倫理的配慮について

本研究は浜松医科大学倫理委員会の承認を受けて行われた。

○利益相反の有無について

本演題に関して開示すべき利益相反はない。

知的・発達障害研究部

成人期の注意欠如多動症における時間知覚機能不全の検討

○江頭優佳¹⁾、林小百合¹⁾²⁾、魚野翔太¹⁾²⁾、
高田美希¹⁾³⁾、請園正敏¹⁾⁴⁾、益田来実¹⁾、岡田 俊¹⁾⁵⁾

1) 国立精神・神経医療研究センター、2) 筑波大学、3) 千葉大学、
4) 人間環境大学、5) 奈良県立医科大学

【背景と目的】注意欠如多動症（ADHD）は前頭部が関連する抑制制御や報酬系の不全のほかに、小脳が関連する時間知覚機能の不全を有する。1時間や1日などの時間認知が前頭部や複雑な認知ネットワークを要するのに対して、1秒未満～数秒の範囲の時間知覚は小脳機能の関連が大きく、ADHDに見られる小脳の器質的偏倚との関連が示唆されている。ADHD小児は多くの時間知覚課題で定型発達群と比べて課題成績の低下があるが、成人における詳細は不明である。時間知覚機能不全が成人期にも見られる場合、時間知覚機能不全はADHD症状の中核をなす可能性が考えられる。従って本研究ではADHD成人における時間知覚機能不全の有無を明らかにするため、典型的に用いられる時間知覚機能計測課題を実施した。更に課題遂行には、反応抑制や持続的注意、ワーキングメモリなどADHDにおける不全が報告されている機能も関わるため、それらについても計測し、それぞれの不全の有無を検討した。

【方法】実験参加者はADHD診断を有する成人（ 31.6 ± 8.5 歳、女性48名）と定型発達成人（ 28.1 ± 10.2 歳、女性47名）各63名であった。時間知覚課題として時間長再生課題（TR）、時間長弁別課題（DD）、タッピング課題（タッピング）を実施した。反応抑制・持続的注意機能を調べるために持続的注意課題（SART）を実施した。各課題の指標は次のとおりとした。TR：平均再生時間長、再生時間SD、DD：75%弁別閾、タッピング：タッピング間隔の安定性、SART：誤反応率、正反応時間平均値、正反応時間SD。ワーキングメモリ機能の計測にはウェクスラー成人知能検査（WAIS-IV）のワーキングメモリ指標（WMI）を用いた。なお、本研究の実施には国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を受けた（承認番号A2020-125）。

【結果と考察】各指標に対して対応のないt検定を実施したところ、時間知覚課題ではいずれも成績に群間の差はなかった。一方、SARTの誤反応率はADHD群が定型発達群に比べて有意に高かった。このことから、ADHD成人では1秒未満～数秒の時間知覚機能不全については症状が落ち着いている可能性があるが、反応抑制・持続的注意機能不全は持続していると考えられる。加えて、時間知覚課題の各指標とADHD症状との相関関係を検討したところ、ADHD群では症状と課題成績に有意な相関関係はなかった。従って当事者に生じる時間感覚についての生活上の困りと時間知覚機能計測課題成績とは必ずしも一致せず、成人期も持続する認知機能不全との関連を踏まえて検討する必要があることが分かった。

利益相反の開示：本発表に関して、開示すべき利益相反はない。

薬物依存研究部

高校生における市販薬乱用の有病率と関連する心理社会的要因に関する研究：薬物使用と生活に関する全国高校生調査 2021

○嶋根卓也¹⁾，猪浦智史^{1,2)}，喜多村真紀¹⁾，松本俊彦¹⁾

1) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部，

2) 新潟青陵大学看護学部

【背景】 近年、若者を中心に鎮咳去痰薬や総合感冒薬などの市販薬を主たる薬物とする依存症患者が急増しているが、地域における乱用状況は依然としてよくわかっていない。

【目的】 全国の高校生における市販薬乱用の有病率を算出するとともに、学校生活および家庭生活に関連する予測因子を特定することを目的とした。

【方法】 調査対象は、全国からランダムに選ばれた全日制高等学校 202 校における高校生であった。調査期間は、2021 年 9 月から 2022 年 3 月であり、教員の協力のもと、学校内で無記名自記式の質問紙調査を実施した。過去 1 年以内の市販薬の乱用経験を主たるアウトカムとした。対象とする市販薬は、鎮咳去痰薬、総合感冒薬、解熱鎮痛薬とし、乱用目的での使用を「治療目的ではなく、ハイになるため、気分を変えるために決められた量や回数を超えて使用すること」と定義した。市販薬乱用の有病率の推計値を算出するとともに、アルコールや大麻使用の有病率と比較した。また、多変量ロジスティック回帰分析により、学校生活および家庭生活に関連する市販薬乱用の予測因子を特定した。本研究の実施にあたり、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得た（承認番号 A2018-055）。

【結果】 全国 80 校の高等学校より、計 44,789 名の高校生から回答を得た（回収率 39.6%）。データが欠損している 3,432 名を除いた計 41,357 名を本研究の分析対象とした。過去 1 年以内における薬物乱用の有病率は市販薬 1.5%、アルコール 12.5%、大麻 0.1%であった。市販薬乱用の有病率は、男性（1.2%）に比べて女性（1.7%）が高く、その他の性別および性別不明（8.3%）は、さらに高率であった。学校生活への不満（調整済みオッズ比 AOR = 2.57、95% CI = 1.80–3.66）、親の監督不足（AOR = 1.59、95% CI = 1.27–2.00）、COVID-19 関連のストレス（AOR = 1.53、95% CI = 1.15–2.05）は、市販薬乱用のリスクを有意に増加させた。逆に、母親との密接なコミュニケーション（AOR = 0.67、95% CI = 0.51–0.87）、高い薬物拒否スキル（AOR = 0.57、95% CI = 0.41–0.79）は、リスクを有意に減少させた。

【考察】 本研究は、アジア地域で初めて実施された大規模なランダムサンプリングに基づく市販薬の乱用に関する学校調査であった。日本の高校生において市販薬の乱用は全国に広がっており、約 60 人に 1 人が乱用経験を有していた。学校および家庭での孤立は、青少年における市販薬乱用の危険因子である可能性がある一方で、親や友人とのつながりは保護的に働いている可能性が示唆された。市販薬の乱用問題を抱える青少年に対する効果的な予防教育および支援方法を検討する必要がある。

薬物依存研究部

市販薬の過量服薬に関連する問題の探索的研究 - SNS 投稿文の計量テキスト分析より

○喜多村真紀¹⁾, 高田雅弘²⁾, 江藤不二子³⁾, 首藤誠²⁾, 嶋根卓也¹⁾

1) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部,

2) 摂南大学 薬学部, 3) 有限会社綾部ファーマシー 綾部薬局

【背景と目的】市販薬の過量服薬（Overdose, 以下 OD）に関する情報の入手先としてソーシャルネットワークサービス（以下, SNS）が挙げられる。そこで、本研究では、市販薬 OD 関連問題への予防的早期介入の検討に有用な情報を得ることを目的に、SNS に書き込まれた投稿文を情報源とし、関連問題の特徴や経時変化について探索的研究を実施した。

【方法】本研究は2つの調査から構成され、いずれも SNS のプラットフォームである「X（旧 Twitter）」への投稿文を分析データとした。データ収集には株式会社ユーザーローカルの Social Insight を用いた。1) 2024 年 4 月 18 日から 5 月 29 日に X に投稿され、文字列「OD レポ」を含むデータ全件を分析し、OD に用いる医薬品名と類推される語（以下、ブランド名）を把握した。ブランド名（略称, 隠語を含む）の確認は、薬物依存の研究に従事する臨床心理士 1 名、薬剤師 3 名により実施した。2) 2019 年 1 月 1 日から 2023 年 12 月 31 日に投稿された、各ブランド名と過量服薬を意味する語（「オーバードーズ」、「OD」、「過量服薬」のいずれか）の双方を含む投稿文を収集した。データに含まれる語の出現度数（国内 10% の投稿を対象に補正した全投稿数の推定値）を集計し、用語同士の関連の強さを計量テキスト分析の手法によって数値化・可視化し、明らかになった特徴的な語（以下、特徴語）を質的に研究した。計量テキスト分析には KH Coder3.0 を使用した。なお、本研究は国立精神・神経医療研究センター倫理審査委員会の承認（A2024-019）を得て、実施した。

【結果】1) 対象期間中の投稿文 258 件のうち 167 件が研究者によってブランド名を含むと判断され、抽出されたブランド名は 15 であった。2) 15 のブランド名のうち、対象期間の投稿文における出現度数上位 5 つは「ブロン（118493 件）」「メジコン（38775 件）」「レスタミン（34090 件）」「パブロン（19633 件）」「コンタック（12040 件）」であった。月次出現度数は 2019 年以来「ブロン」が他のブランド名よりも突出して多かったが、2021 年 8 月から「メジコン」に増加傾向がみられ、2022 年 7 月に急激に増大した。2023 年 3 月は「メジコン（1960 件）」が「ブロン（1920 件）」を上回った。2023 年次の「メジコン」を除く 4 つの各ブランド名と関連の強い特徴語として「メジコン」が抽出された。

【考察】厚生労働省による濫用等のおそれのある医薬品として未指定の市販薬と類推されるブランド名が抽出されており、指定に係る更なる検討が必要といえる。また、SNS への投稿文を継時的に分析することによって、OD に用いる市販薬としての各ブランドの認知度の推移を検討することが可能であると考えられた。

公共精神健康医療研究部

トラウマインフォームドケアに基づく研修の有効性の検討

○三宅美智¹⁾、羽澄恵¹⁾、臼田謙太郎¹⁾、川島貴大²⁾、
深澤舞子⁴⁾、立森久照³⁾、黒田直明¹⁾、西大輔⁵⁾

1)国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 公共精神健康医療研究部

2)国立精神・神経医療研究センター病院 臨床研究・教育研修部門 情報管理・解析部

3)国立精神・神経医療研究センター 神経研究所 疾病研究第七部

4)福島県立医科大学 健康増進センター

5)東京大学大学院医学系研究科 公共健康医学専攻 精神保健学分野

【背景】トラウマ体験は、世界各国では約7割、日本では約6割の人が経験していると報告されており、その割合は少なくない。さらに精神疾患患者においては、トラウマ体験の経験率が高いことが指摘されている。近年「トラウマインフォームドケア(TIC)」が注目され、これまでの研究から精神科病院で実施される隔離および拘束の減少、看護師のメンタルヘルスの改善に有効である可能性が示唆されている。すでに本研究では、非無作為化比較試験によって、看護者に対するTIC動画研修の提供による隔離および拘束時間への影響について報告している。今回は、同研究における看護者のメンタルヘルスへの影響について検討した結果を報告する。

【方法】精神科医療機関に研究参加を依頼し、同意が得られた11の医療機関においてTIC研修を希望する群と希望しない群に分けた。2021年11月～2022年1月を介入群における介入期間とし、TIC動画研修が看護師および看護補助者(看護者)に実施された。TIC動画研修は全5回計90分で構成されており、①個人の媒体から研究用に設置されたホームページから視聴、②医療機関の媒体に保存された動画を視聴、③医療機関で集合研修を開催し視聴、といずれかの方法で提供された。対象者は、2021年10月に入院病棟に在籍している看護者とした。収集されたデータは、性別、年齢、職種、職位、経験年数、所属病棟、The Attitudes Related to Trauma-Informed Care Scale 10(ARTIC10)、Kessler 心理的苦痛尺度(K6)、日本語版バーンアウト尺度であった。看護者に対する質問紙調査は、2021年10月(介入前)、2022年2月(介入後)、5月(介入から3ヶ月後)に実施された。解析は、ARTIC10、K6、日本語版バーンアウト尺度をアウトカムとして、反復測定混合効果モデル(MMRM)を用いて行った。なお、本調査は東京大学倫理委員会の承認を得て行われた(2021065NI-(1))。

【結果】看護者561人(63.7%)がTIC動画研修を修了した(調査に回答しなかった看護者も含む)。介入前後で異動がなくかつ質問紙調査に回答した者757人(介入群は6病院402人、対照群5病院355人)が解析対象となった。解析の結果、ARTIC10(介入後： $p=0.003$ 、介入から3ヶ月後： $p<0.001$)、日本語版バーンアウト尺度の脱人格化(介入後： $p=0.04$)、情緒的消耗感(介入から3ヶ月後： $p=0.03$)において有意な改善が認められた。

【考察】TIC単独の動画研修による低強度の介入であっても、看護者のTICに対する態度の習得、バーンアウトの予防に有効である可能性が示唆された。

公共精神健康医療研究部

心のサポーター養成研修事業の研修効果に関する検討 前後比較試験

○臼田謙太郎¹⁾, 澤田宇多子¹⁾²⁾, 飯田真子¹⁾³⁾, 羽澄恵¹⁾,
片岡真由美¹⁾, 小塩靖崇⁴⁾, 梅本育恵⁶⁾, 中下綾子¹⁾,
神川ちあき¹⁾, 黒田直明¹⁾, 久我弘典⁶⁾, 藤井千代⁴⁾, 西大輔¹⁾³⁾

- 1) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 公共精神健康医療研究部
- 2) 埼玉県立大学 保健医療福祉学部 看護学科精神看護学
- 3) 東京大学大学院 医学系研究科 精神保健学分野
- 4) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 地域精神保健・法制度研究部
- 5) 東京医科歯科大学 大学院保健衛生学研究科 精神保健看護学分野
- 6) 国立精神・神経医療研究センター 認知行動療法センター

【背景】心のサポーター養成研修事業は、2021年から厚生労働省が推進しているメンタルヘルスに関する我が国独自のプログラムである。各自治体が主体となって研修を開催し、地域住民が精神障害に関する知識や当事者の体験、身近な人の支援方法、積極的な話の聴き方などを学ぶ内容である。本研究では、モデル事業期間の2年目の2022年度と3年目の2023年度の2か年の研修効果について、主にメンタルヘルスに関する知識、リテラシー、スティグマの低減効果について検証を行った。

【方法】精神保健の専門家が「メンタルヘルスファーストエイド」を参考にして、地域住民向けの独自のプログラムを開発し、訓練を受けた指導者が自治体主催の研修会で地域住民に研修を行なった（3年目に当事者インタビューを動画で視聴する内容が追加）。研修は対面もしくはオンラインで2時間（1時間半の共通研修＋30分の選択研修）であった。2022年度は2529人（研修会回数68回）、2023年度は3830人（研修会回数95回）の心のサポーターが養成された。精神疾患へのスティグマ（Reported and Intended Behaviour Scale, RIBS-J）、メンタルヘルスリテラシー（Mental Health Literacy Scale, MHLS）、メンタルヘルスに関する知識（研修内容の習得度）、プログラム実装評価（許容性・実施可能性・満足度：Implementation Outcome Scale for Digital Mental Health for Users, iOSDMH）を、介入前（T1）、介入直後（T2）、フォローアップ（T3；2022年度は6か月後、2023年度は3か月後）に郵送またはオンラインの自記式調査票で測定した。各時点の得点を用いて効果量（Cohen's d）を算出し、混合効果モデルによる反復測定分散分析によって介入効果を評価した。本研究は国立精神・神経医療センター研究倫理委員会の承認を得た。開示すべき利益相反はない。

【結果】2022年度の結果ではRIBS-Jの「将来の行動意図スコア」に有意な総合効果が示された（ $t=8.04$, $p<0.001$ ）が、T3まで効果が持続しなかった。MHLS（知識： $t=19.85$, $p<0.001$ ；態度： $t=15.02$, $p<0.001$ ）、メンタルヘルスに関する知識（ $t=28.04$, $p<0.001$ ）についてはともに有意な効果が見られた。iOSDMHでは回答者の90%以上がプログラムを肯定的に評価した。2023年度の結果では、「将来の行動意図スコア」に有意な総合効果が示されただけでなく（ $t=10.86$, $p<0.001$ ）、T3まで効果が維持された（ $t=4.14$, $p<0.001$ ）。iOSDMHでは回答者の95%以上がプログラムを肯定的に評価した。

【考察】本事業により、地域住民の精神疾患へのスティグマが改善する可能性が示された。またメンタルヘルスリテラシー、メンタルヘルスに関する知識に対しても有効である可能性が示唆された。また、2022年度の結果を踏まえて2023年度に当事者の体験に触れる機会がプログラムに追加されたことで、少なくとも3ヵ月後まではスティグマの「将来の行動意図」への影響が維持される可能性が示された。

精神疾患病態研究部

統合失調症の認知機能の簡便な評価と労働の関連要因の検討

○伊藤颯姫¹⁾, 松本純弥¹⁾, 住吉チカ¹⁾²⁾, 安田由華¹⁾, 藤本美智子¹⁾,
山森英長¹⁾, 長谷川尚美¹⁾, 高野晴成¹⁾³⁾, 住吉太幹²⁾, 橋本 亮太¹⁾

¹⁾国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 精神疾患病態研究部

²⁾国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・予防精神医学研究部

³⁾国立精神・神経医療研究センター 脳病態統合イメージングセンター 臨床脳画像研究部

【目的】統合失調症(SZ)の認知機能障害は、患者の日常生活や社会復帰、就労を妨げ、QOL や経済的自立にも影響する。そのため認知機能障害の評価と支援の確立が重要であるが、評価には時間的・人的リソースを要する。また認知機能と社会機能が労働にどう関与するか解明することは、適切な就労支援策の策定に不可欠である。本研究の一つ目の目的は、SZ 患者の認知機能障害を臨床現場で簡便に評価できるようにすることである。二つ目の目的は社会実装を推進し、具体的な社会復帰や就労支援策の具体的な基盤を構築するため、従来密接な関係が知られている認知機能・社会機能と就労の関係を明らかにすることである。

【方法】まず、従来 1 時間半かかる WAIS を短時間で実施可能にする WAIS-IV 簡略版を開発するため、SZ 患者 110 名にて、因子分析により患者の知能の因子構造を確認し、類似と記号探しを独立変数とした回帰分析で全検査 IQ への説明力を評価した。また先行研究を基に類似と記号探しで算出した認知機能と社会機能の相関も確認した。つづいて SZ と類似の社会機能障害を呈する自閉スペクトラム症(ASD)と比較しながら、SZ 患者 396 名と ASD 患者 26 名を対象に、認知機能、社会機能、労働時間を測定し、相関分析を行った。SZ については精神病症状も変数に加えてパス解析も実施した。

【結果】SZ の知能は処理速度とそれ以外の 2 因子構造であり、類似と記号探しはそれぞれ別の因子に属していた。回帰分析では、類似と記号探しによる WAIS-IV 簡略版は全検査 IQ に対して十分な説明力を示した。簡略版で測定した認知機能は社会機能と有意な相関があった。また SZ では認知機能と社会機能の両方が労働時間と相関し、社会機能の下位項目では、特に日常生活行動と労働時間の関連が強く中程度の正の相関があった。一方 ASD では労働時間と関連があったのは社会機能のうち娯楽のみであった。SZ では認知機能・精神病症状は直接労働時間に影響するだけでなく、日常生活行動を介して労働時間に影響していた。

【考察】WAIS-IV 簡略版は全検査 IQ を予測し、簡便な認知機能検査として臨床現場での実用性が示された。また労働の促進のためには、SZ では日常生活行動の支援や認知機能の向上が重要な役割を果たす一方、ASD では趣味などの娯楽活動が社会関係構築や労働へのモチベーション形成に関連する可能性が示唆された。SZ の労働支援では、精神病症状、認知機能、日常生活行動が総合的に改善されることが不可欠であり、これらの複雑な相互作用を考慮した多面的な支援が重要である。本研究の知見は疾患特性に基づく支援の必要性を示唆し、特性に即した介入に向け、社会実装を推進する重要な基盤となる。

【今後の展望】認知機能障害の有無を日々の診察で簡単な質問でスクリーニングできれば、必要な人だけにのみ詳細な認知機能検査を実施することができ、より効率的な評価が可能となる。そこで今後は、多施設共同研究として 33 施設で 500 例のデータを収集し、蓄積されたデータを基に質問項目を 2 項目に簡略化し、実用的なツールを作成する予定である。現在は、認知機能障害に起因する日常生活の困りごとを尋ねる 8 項目の質問票に加え、WAIS-IV 簡略版やその他の認知社会機能検査と組み合わせながら 2 項目からなる質問票のための項目を選定中である。このような取り組みにより、認知機能障害や日常生活の困難を早期発見し、適切な介入を可能にすることで、患者の社会復帰や就労支援の強化が期待される。

精神疾患病態研究部

側脳室拡大と認知機能障害を示す精神疾患患者群の病態解明

○松本純弥¹⁾, 伊藤颯姫¹⁾, 安田由華¹⁾²⁾, 鬼塚俊明¹⁾³⁾, 住吉チカ¹⁾⁴⁾,
 岡田直大¹⁾⁵⁾, 福永雅喜¹⁾⁶⁾, 根本清貴¹⁾⁷⁾, 橋本直樹¹⁾⁸⁾,
 山本真江里⁹⁾, 岡田剛¹⁾¹⁰⁾, 原田健一郎¹¹⁾, 中瀧理仁¹²⁾,
 大井一高¹⁾¹³⁾, 久保田学¹⁴⁾, 山森英長¹⁾¹⁵⁾, 藤本美智子¹⁾¹⁶⁾,
 長谷川尚美¹⁾, 高橋努¹⁾¹⁷⁾, 山末英典¹⁸⁾, 吉村玲児¹⁾¹⁹⁾, 橋本亮太¹⁾

¹⁾国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部, ²⁾医療法人フオスター生きたる育む輝くメンタルクリニック, ³⁾国立病院機構榊原病院, ⁴⁾福島大学人間発達文化学類, ⁵⁾東京大学大学院医学系研究科臨床神経精神医学教室, ⁶⁾生理学研究所脳機能計測・支援センター生体機能情報解析室, ⁷⁾筑波大学医学医療系精神医学, ⁸⁾北海道大学大学院医学研究院精神医学教室, ⁹⁾名古屋大学大学院医学系研究科精神医学・親と子どもの心療学分野, ¹⁰⁾広島大学大学院医系科学研究科精神神経医科学, ¹¹⁾山口大学大学院医学系研究科高次脳機能病態学講座, ¹²⁾徳島大学病院精神科神経科, ¹³⁾岐阜大学医学部附属病院精神科, ¹⁴⁾京都大学大学院医学研究科精神医学教室, ¹⁵⁾独立行政法人地域医療機能推進機構大阪病院神経精神科, ¹⁶⁾大阪大学大学院医学系研究科情報統合医学講座精神医学教室, ¹⁷⁾富山大学学術研究部医学系神経精神医学講座, ¹⁸⁾浜松医科大学精神医学講座, ¹⁹⁾産業医科大学医学部精神医学教室

【背景】精神科診断は生物学的な病態ではなく症状に基づいた操作的診断基準に依っているが、客観的な検査所見に基づく診断が求められている。統合失調症(SZ), 双極症, うつ病, 自閉スペクトラム症(ASD)の疾患横断の先行研究では皮質下体積に基づき 4 つの脳バイオタイプが分類された。その後の検討で生物学的及び臨床的特徴の検証により症状が重篤な患者群は側脳室体積が健常者の 3 標準偏差以上(EV)に加えて中等度以上の認知機能障害(CI)の有無で層別化できた。本研究では EV と CI を伴う患者(EV-CI)群の認知機能プロファイルを検討し、各症例の個別の臨床経過・特徴を確認し、EV-CI 群が異なる被験者からも抽出されるかの再現性を検証した。本研究は国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を受けた。

【方法】SZ, 双極症, うつ病, ASD を含む EV-CI 群 9 名, nonEV-CI 群 129 名, EV-nonCI 群 29 名, nonEV-nonCI 群 1422 名について CI, 病前推定 IQ, 現 IQ, ウェクスラー成人知能検査, ウェクスラー記憶検査, 聴覚言語学習検査, 語流暢性検査, 持続的注意力検査, ウィスコンシンカード分類検査から 18 項目を検討した。EV-CI 各症例の臨床情報は診療情報を見直した。再現性は先行研究の EV 群の中で新たに認知機能を確認できた EV 群 27 名を対象に検証した。

【結果】EV-CI 群と nonEV-CI 群は認知機能全項目で nonEV-nonCI 群との間に有意差があった。EV-CI 群の効果量の平均値は-2.61, EV 有無での認知機能への効果は-0.61, CI 有無での認知機能への効果は-1.84 であった。個別の臨床情報からは精神病的症状を認め、典型的 SZ 症例と非典型症例それぞれに稀な病的 CNV を認めた。典型的 SZ 症例には治療抵抗性のクロザピン治療反応例が含まれた。それらを中心として脳波異常, 白質虚血病変があった。先行研究後の検討では 38 名の EV 群の中の 9 名(24%)が EV-CI 群であり今回の再現性検討では 27 名の EV 群の中から 5 名(19%)の EV-CI 群が抽出され EV 群の約 2 割に EV-CI 群を認めることがわかった。

【考察】EV-CI 群で生じている認知機能の病態は EV-nonCI 群に至る病態とそこから EV-CI 群に至る病態が重畳していることが示唆された。個別症例では脳波異常, 統合失調症の診断, 稀な病的 CNV を高率に認めるという特徴があった。異なる被験者からも EV-CI 群が抽出された。さらなる病態解明と治療法開発には前向きコホートが必要となる。そこで 12 以上の施設の協力を得てプロトコルを検証し、頭部画像検査, 病前推定 IQ, WAIS-IV 簡略版による現 IQ, BE-PSD(精神病的症状ドメイン簡易評価尺度)を共通検査とし、脳波, 採血もしくは唾液採取による DNA 抽出を追加項目とした。この体制で新規症例を見出す試みを進めている。

精神薬理研究部

鎮痛薬感受性関連遺伝子多型の同定とその臨床応用

(Identification of genetic polymorphisms related to analgesic sensitivity and their clinical application)

○西澤 大輔 (Daisuke Nishizawa)¹⁾²⁾, 池田 和隆 (Kazutaka Ikeda)¹⁾²⁾

- 1) 国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 精神薬理研究部
(Department of Neuropsychopharmacology, National Institute of Mental Health, National Center
of Neurology and Psychiatry (NCNP), Tokyo, Japan)
- 2) 東京都医学総合研究所 依存性物質プロジェクト (Addictive Substance Project, Tokyo
Metropolitan Institute of Medical Science, Tokyo, Japan)

モルヒネ等のオピオイド物質は強力な鎮痛薬としても広く利用されるが、その作用及び副作用の発現には個人差が大きいことが広く知られており、環境要因のみならず、遺伝要因の寄与が示唆される。

これまでの演者らの候補遺伝子解析において、ミューオピオイド受容体遺伝子 *OPRM1* の rs9384179 多型、GIRK チャネル遺伝子 *GIRK2* (*KCNJ6*) の rs2835859 多型、電位依存性カルシウムチャネル Cav2.3 遺伝子 *CACNA1E* の rs3845446 多型、アドレナリン $\beta 2$ 受容体遺伝子 *ADRB2* の rs11959113 多型、等の遺伝子多型がオピオイド鎮痛薬感受性に関連することが示された (Fukuda K et al., Pain, 2009 ; Nishizawa D et al., J Pharmacol Sci, 2014 ; Ide S and Nishizawa D et al., PLoS One, 2013)。

また、演者らは、オピオイド鎮痛薬感受性に対するゲノムワイド関連解析 (GWAS) を行い、*METTL21A* (*FAM119A*) 及び *CREBI* の遺伝子近傍領域に最有力候補多型 rs2952768 を同定したが (Nishizawa D et al., Mol Psychiatry, 2014)、この多型は物質依存重症度との関連も認められた他、*CREBI* の mRNA 発現量とも関連していた。

このような基礎的研究のエビデンスを臨床の現場に生かし、事前に遺伝子多型判定を行うことにより患者各個人の鎮痛薬感受性を予測し、その情報に基づいた投薬を行うなど、個別化疼痛治療への応用の道も拓かれるものと期待される。実際に、演者らは既に上記 5 多型を用いたオピオイド鎮痛薬感受性の予測に基づく個別化疼痛治療を実践している (Yoshida K and Nishizawa D et al., PLoS One, 2015)。

精神薬理研究部

μ オピオイド受容体欠損マウスにおける δ オピオイド受容体 作動薬の相加効果による絶望感軽減の雌雄差

Sex differences in hopelessness reduction by additive effects of δ opioid receptor activation in
μ opioid receptor knockout mice

○森屋 由紀¹⁾²⁾³⁾, 笠原 好之³⁾⁴⁾, 嶋田 政史³⁾, 藤井 秀明⁵⁾,
長瀬 博⁶⁾, 井手 聡一郎²⁾, Frank Scott Hall⁷⁾, George R Uhl⁸⁾,
曾良 一郎⁹⁾, 池田 和隆¹⁾²⁾

- 1) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 精神薬理研究部
- 2) 公益財団法人東京都医学総合研究所 依存性物質プロジェクト
- 3) 東北大学大学院医学系研究科 精神神経生物学分野
- 4) 東北大学大学院医学系研究科 産科学・胎児病態学
- 5) 北里大学薬学部 大学院薬学研究科 生命薬化学
- 6) 筑波大学 国際統合睡眠医科学研究機構 創薬化学
- 7) Department of Pharmacology and Experimental Therapeutics, College of Pharmacy and
Pharmaceutical Sciences, University of Toledo
- 8) Departments of Neurology and Pharmacology, University of Maryland School of Medicine, and
VA Maryland Healthcare System
- 9) 神戸大学大学院医学研究科 精神医学分野

これまでの薬理的解析から、気分障害における μ、κ、δ オピオイド受容体間の機能的相互作用の可能性が示されてきた。我々はこれまでに、μ オピオイド受容体ノックアウト (MOP-KO) マウスが野生型 (WT) マウスに比べて疼痛閾値の低下と痛覚過敏様行動、ストレス誘発性鎮痛効果の減弱、ストレス (拘束、強制水泳) 負荷時におけるステロイドホルモンの分泌の減少、心理社会的ストレス負荷モデルにおけるストレス耐性様行動などを報告している。

本研究では、MOP-KO マウスおよび WT マウスに δ オピオイド受容体 (DOP) 作動薬である KNT-127 を投与し、抑うつ様行動の評価法である、強制水泳試験 (FST) および尾懸垂試験 (TST) を行った。その結果、いずれの試験においても、KNT-127 投与群では生理食塩水投与群に比べて無動時間が有意に短縮した。生理食塩水投与群では、いずれの試験においても MOP-KO マウスは WT マウスに比べて無動時間が有意に減少した。さらに、雌性 MOP-KO マウスでは、KNT-127 は TST において WT マウスと比較して無動時間を有意に減少させた。一方、雄性 MOP-KO マウスの TST では、KNT-127 を投与しても、遺伝子型の比較において無動時間は減少しなかった。このように、少なくとも FST および TST では、DOP の活性化と MOP の非活性化は絶望感の低減に相加的な効果を示し、DOP の活性化による意欲行動の欠如は MOP とは独立して機能することが示唆された。

利益相反の有無:演題発表に関連し、開示すべき COI 関連にある企業等がありません。

児童・予防精神医学研究部

Problematic gambling and psychotic-like experiences: Findings from Japan

○Andrew Stickley, Aya Shirama, Risa Yamada, Tomiki Sumiyoshi

Department of Preventive Intervention for Psychiatric Disorders, National Institute of
Mental Health, National Center of Neurology and Psychiatry

Background: Previous research has indicated that gambling difficulties may be elevated in individuals with psychosis. However, as yet, comparatively little is known about the association between problematic gambling and sub-clinical hallucinations and delusions i.e. psychotic-like experiences (PLEs). To address this deficit, the current study examined this association among adults in Japan where there is some indication that the prevalence of problematic gambling may be comparatively high. A second aim of this research was to determine if the problematic gambling-PLEs association differs between men and women.

Methods: Data were analyzed from 3701 adults in the Japanese general population that were obtained in an online survey in the first quarter of 2023. Information on problematic gambling was assessed with the Japanese short version of the South Oaks Gambling Screen Revised (SOGS-R), while PLEs were measured with the PRIME Screen-Revised (PS-R). Logistic regression was used to examine associations.

Results: In an unadjusted analysis problematic gambling was associated with 2.35 times higher odds for PLEs. When the analysis was adjusted for sociodemographic, self-rated health and mental health variables, the odds ratio was attenuated although problematic gambling continued to be associated with significantly higher odds for PLEs (OR: 1.64, 95%CI: 1.07–2.50). When the analysis was stratified by sex, problematic gambling was significantly associated with PLEs in women (OR: 2.80, 95%CI: 1.33–5.89) but not men (OR: 1.32, 95%CI: 0.78–2.22) in the fully adjusted model although no effect modification by sex was found.

Conclusions: Problematic gambling is associated with higher odds for PLEs among adults in the Japanese general population. More research is now needed to determine which factors are associated with the co-occurrence of problematic gambling and PLEs and whether this comorbidity is associated with a higher risk for negative gambling-related and other outcomes.

児童・予防精神医学研究部

近似推論における瞳孔とリンクした覚醒系の役割：

健常者での検討

○白間綾¹⁾，信川創¹⁾²⁾，住吉太幹¹⁾

1) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・予防精神医学研究部，

2) 千葉工業大学 情報変革学部 情報工学科

【はじめに】瞳孔は、注意、学習、意思決定、不確実性評価などの認知機能、運動、情動といった精神機能における覚醒系の役割を調べる際に利用されてきた。昨今の計算論的神経科学の発展により、瞳孔計測で報告されたさまざまな現象をベイズ統計学や情報理論に基づいて統一的に理解する可能性が示されつつある。一方で、複雑で動的な環境下ではベイズの定理が計算不可能となるため、脳はより実用的な近似推論を行うと考えられている。今回、瞳孔径が近似推論モデルにおいて推定された情報量を反映するかを、健常成人を対象に検討した。

【方法】対象は健康成人 27 名（平均年齢 [SD] = 37.3 [10.0]，女性 14 名）とした。これらの参加者は、連続して提示される数値を予測し、予告なく生じる変化点(数値の生成基準が変化する時点)に対応して予測を更新する予測的推論課題（Nassar et al., 2012）を受検した。同課題は、断片的な情報から数値生成のルールを推論するとともに、変化点に柔軟に対応する能力を評価する。課題の遂行成績と瞳孔反応の個人差は、近似推論の一種である変分ベイズ法によりモデル化した。同モデルにより予測の不確実性と変化点確率を、カルバック・ライブラー情報量(DKL, モデル最適化のための情報量)とシャノンサプライズ(SS, 事象の希少性を表す情報量)により定量化し、モデルフィッティングを行なった。

【結果】上記の解析から、試行ごとの瞳孔径とモデルによって推定された DKL の間に共変関係が確認された ($r=0.73, p<.0005$)。さらに、変分ベイズモデルは課題遂行成績における個人差を再現することや、変化点に対して SS が一過性の反応を示し変化点の検出に有用であることがモデルシミュレーションにより確認された。

【考察】変分ベイズモデルに基づくアプローチから、動的な環境において、脳の覚醒系とリンクした瞳孔径が近似推論の最適化に用いる情報量を反映する可能性が示唆された。

【参考文献】 Eye pupils mirror information divergence in approximate inference. Shirama, A., Nobukawa, S., Sumiyoshi, T. *Scientific Reports* (印刷中)

睡眠・覚醒障害研究部

慢性不眠障害および閉塞性睡眠時無呼吸と比較した

Comorbid insomnia and sleep apnea の白質変性の病像

○内海智博¹⁾、吉池卓也¹⁾、松井健太郎¹⁾、河村葵¹⁾、長尾賢太郎¹⁾、

羽澄恵¹⁾、佐藤典子²⁾、栗山健一¹⁾

1)国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 睡眠・覚醒障害研究部

2)国立精神・神経医療研究センター病院 放射線診療部

【目的】慢性不眠障害(CID)および閉塞性睡眠時無呼吸(OSA)は加齢変化とともに有病率は上昇する。両者が併存すると、臨床症状や治療の有効性・順守率が単独障害と比較して悪化する傾向がみられるため、Comorbid insomnia and sleep apnea(COMISA)という疾患概念が提唱され、背景病態が注目されている。睡眠中に間欠的低酸素を引き起こす OSA では、上縦束や脳梁など幅広い脳部位に局在性の白質変性が報告されている。CID の一部では神経炎症による白質変性が報告されているが、変性局在部位は一貫していない。COMISA では両疾患特有の白質変性が混在・重症化し、臨床症状の複雑化の一因となる可能性を検討するために、白質変性総容積および局在を比較した。

【方法】2020年4月から2023年5月までに当院睡眠外来を受診し、頭部MRIを撮像した40歳以上のCID患者40名(64.7±14.3歳)、OSA患者55名(57.2±11.3歳)、COMISA患者45名(68.2±11.6歳)を対象とした。白質変性総容積および各白質線維のFractional Anisotropy(FA)値を3群間で共分散構造分析を行い、Bonferroni補正による下位検定を行った。本研究はNCNP倫理委員会の承認をうけ実施した。

【結果】白質変性総容積は年齢層により疾患差を認め、高齢者ではCIDはOSAより有意に大きく($p<0.017$)、COMISAはOSAより大きい傾向にあった($p<0.033$)。さらにCOMISAおよびCIDはOSAと比較して情動制御に関わる前視床放線のFA値が有意に高かった($p<0.017$)。これらはいずれもBMI、性別と独立した関連であった。

【考察】高齢者におけるCOMISAは、CIDとOSA特有の白質変性が重畳したものではなく、CIDと類似した白質変性総容積および局在を示し、これが不眠症状の増悪と関連する可能性を示唆する。今後、COMISAやCIDの治療転帰と白質変性との関連を検討することにより、白質変性の臨床的意義をさらに追究したい。

睡眠・覚醒障害研究部

睡眠休養感の欠如が慢性疾患の健康転帰に及ぼす影響の検討

○高橋恵理矢¹⁾²⁾、吉池卓也¹⁾²⁾、内海智博¹⁾²⁾、河村葵¹⁾²⁾、
長尾賢太郎¹⁾²⁾、羽澄恵¹⁾、岡邨しのぶ¹⁾、不破真衣¹⁾³⁾、松島舜¹⁾³⁾、
南學正仁¹⁾²⁾、木村綾乃¹⁾³⁾、北村真吾¹⁾、松井健太郎¹⁾³⁾、栗山健一¹⁾²⁾

1) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 睡眠・覚醒障害研究部

2) 国立精神・神経医療研究センター病院 精神診療部

3) 国立精神・神経医療研究センター病院 臨床検査部

【背景・目的】睡眠で休養が取れた感覚の欠如(NRS: nonrestorative sleep)は、睡眠の量的指標である睡眠時間の健康転帰予測における限界を克服しうる睡眠の質的指標として重視されている。NRS は糖尿病、高血圧、肥満、うつ病といった慢性疾患の病態形成に寄与することが示唆され、広く生理的休養の障害を反映すると推測されるが、NRS が併存することで特定の慢性疾患の健康転帰が相乗的に悪化するかは明らかでない。本研究は、NRS と慢性疾患の併存による全死亡リスクの増加パターンから、両者の病態関連性を検討した。

【方法】米国の地域住民が参加した多施設コホート研究である Multi-Ethnic Study of Atherosclerosis の公開データセットを用いて、睡眠関連情報を提供した成人 5,818 名 (49～90 歳、女性 52.9%)を対象とした。対象者を NRS の有無と特定の慢性疾患(糖尿病、高血圧、肥満、うつ病のいずれか)の有無により疾患ごとに次の 4 群に分類した：(1)NRS なし/疾患なし(基準群)、(2)NRS あり/疾患なし、(3)NRS なし/疾患あり、(4)NRS あり/疾患あり。人口統計学的要因、心血管リスク因子、睡眠関連因子(睡眠時間、夜間の不眠症状)といった既知の潜在的交絡因子を説明変数とした Cox 比例ハザード回帰モデルによる多変量解析を行い、4 群間で全死亡の調整ハザード比(HR: hazard ratio)を比較した。さらに、相互作用による相対過剰リスク (RERI: relative excess risk due to interaction) の指数を用いて NRS と各疾患との間に全死亡リスクに対する相乗効果がみられるかを検討した。

【結果】中央値 9.4 年 (四分位範囲: 9.0～9.8 年) の追跡期間中に、863 名 (14.8%) が死亡転帰をとった。NRS と各疾患はそれぞれ単独では全死亡リスクの増加と必ずしも関連しなかったが、NRS と各疾患の併存は一貫して基準群より高い全死亡リスクと関連した。NRS が各疾患に併存することで、各疾患単独と比べ全死亡リスクは増加傾向を示した(調整 HR が 33%～123%増加)。さらに、糖尿病のみ NRS との間に交互作用を有し、NRS の併存により全死亡リスクは相乗的に増加した(RERI 0.98、95%信頼区間: 0.02–1.94)。

【結論】本結果は、NRS が睡眠時間や夜間の不眠症状とは独立して多様な慢性疾患の全死亡リスクを相加的に増加させるのみならず、糖尿病との間に相互増悪関係を形成し、全死亡リスクを相乗的に増加させる病態基盤を有することを示唆する。

VI. 令和6年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
所 長 室	張 賢徳	研究代表者	Quality Indicatorを用いた医療の質向上プログラムの開発と効果研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	張 賢徳	研究代表者	性行動異常を呈する者の精神医学的考察と認知行動療法を含めた介入方法の検討及び性被害者の心理的ストレス対処に資する実態調査	厚生労働行政推進調査事業費補助金（厚生労働科学特別研究事業）	厚生労働省
	張 賢徳	研究代表者	Quality Indicatorを用いた精神科医療の質向上プログラムの開発と効果研究	ヘルスリサーチ研究助成	ファイザーヘルスリサーチ振興財団
	張 賢徳	研究分担者	自殺未遂者の実態解明と自殺未遂者登録システム構築のための研究	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(B)	文部科学省
	金 吉晴	研究代表者	PTSDの恐怖記憶と情動反応の分子基盤の解明と治療	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)	日本学術振興会
公 共 精 神 健 康 医 療 研 究 部	黒田直明	研究代表者	「良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指したモニタリング研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	黒田 直明	研究代表者	第8期障害福祉計画の精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築に係る成果目標の見直しに資する研究	厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業)	厚生労働省
	黒田直明	研究分担者	地域の実情を踏まえた在宅医療提供体制の整備を推進するための政策研究	厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業)	厚生労働省
	黒田直明	主任研究者	「新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	羽澄 恵	分担研究者	「新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討」内「COVID-19感染後の予後に関連する要因の検討」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	臼田謙太郎	分担研究者	「新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討」内「感染時期による罹患後精神症状の比較検討」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	片岡真由美	分担研究者	「新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討」内「COVID-19罹患経験の有無による精神症状の比較」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	臼田謙太郎	研究分担者	「精神保健医療福祉施設におけるトラウマ（心的外傷）への対応の実態把握と指針開発のための研究」内「精神科医療機関に対するトラウマインフォームドケア研修の効果に関する検討」	厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業)	厚生労働省
	羽澄 恵	研究代表者	「睡眠不足の維持増悪に関連する心理的機序の解明」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（若手研究））	日本学術振興会
	三宅美智	研究分担者	「精神科医療機関における行動制限最小化の普及に資する研究」	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	三宅美智	研究代表者	「精神障害者当事者が参加する隔離・拘束を減らすためのプログラムの効果の検証」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究C））	日本学術振興会
	三宅美智	研究代表者	「行動制限最小化の活動に参加する精神障害当事者のための育成プログラムの開発」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究C））	日本学術振興会
	三宅美智	研究分担者	「BPSD緩和を目的とした生活リズムの調整に着目した看護-介護共同介入モデルの作成」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究C））	日本学術振興会

VI 令和6年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
薬物 依存 研究部	松本俊彦	主任研究者	「アディクションの病態・症候・治療に関する包括的研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	松本俊彦	分担研究者	「アディクションの病態・症候・治療に関する包括的研究」内「覚醒剤使用障害患者の臨床像の経年的変化に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	松本俊彦	研究代表者	「処方薬や市販薬の乱用又は依存症に対する新たな治療方法及び支援方法・支援体制構築のための研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業)	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	「処方薬や市販薬の乱用又は依存症に対する新たな治療方法及び支援方法・支援体制構築のための研究」内「処方薬・市販薬依存症患者の実態と通院治療プログラムの開発に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業)	厚生労働省
	松本俊彦	主任研究者	「アディクションの病態・症候・治療に関する包括的研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	松本俊彦	分担研究者	「アディクションの病態・症候・治療に関する包括的研究」内「覚醒剤使用障害患者の臨床像の経年的変化に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	松本俊彦	研究代表者	「処方薬や市販薬の乱用又は依存症に対する新たな治療方法及び支援方法・支援体制構築のための研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業)	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	「処方薬や市販薬の乱用又は依存症に対する新たな治療方法及び支援方法・支援体制構築のための研究」内「処方薬・市販薬依存症患者の実態と通院治療プログラムの開発に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業)	厚生労働省
	松本俊彦	分担研究者	「薬物乱用・依存状況の実態把握のための全国調査と近年の動向を踏まえた大麻等の乱用に関する研究」内「全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査（2024年）」	厚生労働行政推進調査事業費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	松本俊彦	分担研究者	「アルコール・薬物使用者の行動変容促進アプリと適切なフィードバックAIモデルの開発」内「RCTリクルート、アプリ有用性評価」	文部科学省基盤研究（B）	文部科学省
	松本俊彦	分担研究者	「精神障害と物質使用障害を併せ持つ者への日本版統合治療支援ツールの開発と普及」内「研究全体に対して、依存症治療の立場からの助言」	文部科学省基盤研究（C）	文部科学省
	松本俊彦	共同代表	拠点センター（薬物依存症）	厚生労働省依存症対策全国拠点機関設置運営事業	厚生労働省
	嶋根卓也	研究代表者	薬物乱用・依存状況の実態把握のための全国調査と近年の動向を踏まえた大麻等の乱用に関する研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「薬物乱用・依存状況の実態把握のための全国調査と近年の動向を踏まえた大麻等の乱用に関する研究」内「飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査（2024年）」	厚生労働行政推進調査事業費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究代表者	濫用等のおそれのある医薬品の成分指定に係る研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
薬物 依存 研究 部	嶋根卓也	研究分担者	「濫用等のおそれのある医薬品の成分指定に係る研究」内「全国の依存症専門医療機関を受診する患者における市販薬乱用の実態に関する研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「処方薬や市販薬の乱用又は依存症に対する新たな治療方法及び支援方法・支援体制構築のための研究」内「大手チェーンドラッグストアにおける市販薬販売の実態に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「薬物使用と生活に関する全国高校生調査」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「ダルク等の当事者団体による依存症回復支援の現状と課題に関する研究」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	富山健一	研究代表者	危険ドラッグの依存性等に関する評価	厚生労働省危険ドラッグの依存性等に関する評価業務事業	厚生労働省
	富山健一	分担研究者	「危険ドラッグ等の乱用薬物に関する最新の分析情報の収集及び危害影響予測のための研究」内「活性未知危険ドラッグ成分の薬理学的解析」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	富山健一	分担研究者	「精神活性物質の化学構造に基づく乱用危険性予測に関する研究」内「ヒトiPS細胞より作成した機能的神経細胞を用いた危険ドラッグの有害作用の評価」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	富山健一	分担研究者	「薬物乱用・依存状況の実態把握のための全国調査と近年の動向を踏まえた大麻等の乱用に関する研究」内「豪州における大麻規制の現状と青少年に対する予防教育に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	富山健一	分担研究者	「濫用等のおそれのある医薬品の成分指定に係る研究」内「濫用等のおそれのある医薬品の追加候補となる薬剤に関する文献的調査」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	富山健一	研究協力者	「危険ドラッグと関連代謝産物の有害作用評価と乱用実態把握に関する研究」内「新規オピオイド化合物の薬理学的特性並びに薬物依存性の評価」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	富山健一	研究協力者	「若年者を対象としたより効果的な薬物乱用予防啓発活動の実施等に関する研究」内「大麻を巡る国際社会の動向：米国及びカナダの規制状況について」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	高野 歩	研究代表者	飲酒・薬物使用のリアルタイム測定と機械学習に基づく即時介入モデルの開発	文部科学省基盤研究 (B)	文部科学省
	高野 歩	研究分担者	日本版Moral Injury尺度の作成と信頼性・妥当性の検証	文部科学省基盤研究 (C)	文部科学省
	高野 歩	分担研究者	日本におけるハームリダクションの導入・普及に関する研究	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	高野 歩	分担研究者	「ゲームに関連した生活障害等の問題、併存疾患、対応法などの実態把握に資する研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業)	厚生労働省
	高野 歩	分担研究者	「アディクション病態の包括的解明とアディクション障害予防・治療・回復戦略の確立」内「薬物・アルコール使用問題に対するAI動機づけ面接プログラムの開発と効果検証」	依存症・研究推進事業 (R6補正予算)	厚生労働省
	近藤あゆみ	分担研究者	「女性薬物依存症者の回復支援に関する研究」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省

VI 令和6年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
行動医学 研究部	堀 弘明	研究代表者	幼少期トラウマがもたらす生化学的・生理学的変化：概日リズムに着目した検討	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	堀 弘明	研究分担者	「PTSDの恐怖記憶と情動反応の分子基盤の解明と治療」内「PTSDの遺伝子解析」	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (A)	日本学術振興会
	堀 弘明	研究分担者	情動記憶における文脈情報喪失の発生機序の解明とこれを防止する心理介入法の開発	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (B)	日本学術振興会
	堀 弘明	研究代表者	心的外傷後ストレス障害に対するメマンチンの有効性・安全性の検証	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	堀 弘明	事業協力者	学際領域展開ハブ形成プログラム「多階層ストレス疾患の克服」	共同利用・共同研究システム形成事業	文部科学省
	堀 弘明	実務担当者	令和6年度こころの健康づくり対策事業 PTSD対策専門研修事業	国庫補助金	厚生労働省
	関口 敦	研究代表者	ヒトのシナプス可塑性評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	武田科学振興財団医学系研究助成 (精神・神経・脳領域)	武田科学振興財団
	関口 敦	研究代表者	疼痛性障害の新規治療プログラムの脳科学的エビデンスの構築	中富健康科学振興財団研究助成	中富健康科学振興財団
	関口 敦	研究代表者	良画で悪画を駆逐する～摂食障害の正しい知識の啓発および予防・支援に資する動画の作成・普及活動～	三菱財団社会福祉事業	三菱財団
	関口 敦	研究代表者	摂食障害の治療支援センター設置運営事業 (全国拠点機関分)	精神保健対策費補助金	厚生労働省
	関口 敦	研究分担者	過敏性腸症候群の認知行動療法を社会実装する	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	関口 敦	研究分担者	精神疾患の新規治療法開発に向けた経皮的耳介迷走神経刺激の作用メカニズムの解明	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究 (B)	日本学術振興会
	関口 敦	研究分担者	感情認識に内受容感覚の諸側面が及ぼす影響-内受容感覚の多角的測定と介入による検討	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究 (B)	日本学術振興会
	関口 敦	研究分担者	家族ピアサポーターと協働した心理教育プログラムの開発	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	関口 敦	研究分担者	神経性やせ症における脳機能画像解析による病態解明と至適治療の確立 研究課題	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	小川真太郎	研究代表者	逆境的小児期体験とうつ症状の発現に関連するバイオマーカーの開発ーリン脂質を軸にー	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	井野敬子	研究代表者	ウェブ持続エクスポージャー療法の効果検証と普及 コロナ禍にトラウマ治療を届ける	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	井野敬子	研究代表者	難治性パニック障害の予後予測因子解明と発達特性にマッチした修正型心理療法の開発	文部科学省科学研究費補助金 若手研究	日本学術振興会
	井野敬子	研究開発代表者	心的外傷後ストレス障害に対するオンライン持続エクスポージャー療法の有用性検証：多施設ランダム化比較試験	日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業 (精神障害)	日本医療研究開発機構
	井野敬子	研究代表者	音による環世界マニピュレーション A02班 バーチャルリアリティ・エクスポージャーを使ったPTSD治療の新展開	文部科学省科学研究費補助金 日本学術振興会 学術変革領域 (B)	日本学術振興会
	成田 瑞	研究代表者	AI機械学習を用いた食行動によるうつ病予防モデルの開発	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	成田 瑞	分担研究者	「心的外傷後ストレス障害に対するメマンチンの有効性・安全性の検証」内「心的外傷後ストレス障害に対するメマンチンの効果と脳MRIの関連についての研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
行動医学 研究部	成田 瑞	研究分担者	ICD-11の適用を通じて我が国の死因・ 疾病統計の向上を目指すための研究	厚生労働科学研究費補助金	厚生労働省
	成田 瑞	研究分担者	「PTSDの恐怖記憶と情動反応の分子基 盤の解明と治療」内「PTSD治療の脳画 像研究」	文部科学省科学研究費補助金 基盤研 究(A)	日本学術振興会
	大沼麻実	研究分担者	災害時における地域保健活動を推進す る体制整備に資する研究	厚生労働科学研究費補助金(健康安 全・危機管理対策総合研究事業)	厚生労働省
	大沼麻実	研究分担者	ナショナルセンターによる医療情報発 信の基盤整備事業	国立高度専門医療研究センター医療研 究連携推進本部 横断的研究推進費	国立高度専門医 療研究センター
	大沼麻実	事業担当者	東京都令和6年度災害時精神科医療体 制整備事業(災害時精神科医療研修) 事業	補助金	東京都
	伊藤(丹羽) まどか	研究代表者	複雑性PTSDに対する診断評価尺度の整 備と治療法の検証	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	伊藤(丹羽) まどか	分担研究者	「心的外傷後ストレス障害に対するメ マシンの有効性・安全性の検証」内 「複雑性PTSDに対するSTAIR Narrative Therapyの無作為化比較試 験」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経 医療研究セン ター
	伊藤(丹羽) まどか	研究分担者	トラウマに配慮したうつと不安に対す るコンパッション・フォーカスト・セ ラピーの開発	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(B)	日本学術振興会
	勝沼り	研究代表者	ニューロモジュレーションを用いた内 受容訓練による利他行動の変容とその 神経機序	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会
	金 吉晴	参画機関 研究開発責 任者	「共生社会」をつくるアートコミュニ ケーション共創拠点」内「文化的 処方」のエビデンス構築と実践知の蓄 積・共有システムの開発	共創の場形成支援プログラム・本格型 (共創分野)	国立研究開発法 人科学技術振興 機構(JST)
児童・予 防精神医 学研究部	船場美佐子	研究代表者	過敏性腸症候群の認知行動療法を社会 実装する	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会
	船場美佐子	研究代表者	過敏性腸症候群に対する内部感覚曝露 を用いた認知行動療法(CBT-IE)の実装 研究-有効性・症状改善に対する患者 の満足度の検討-	公益財団法人メンタルヘルス岡本記念 財団研究助成金	公益財団法人メ ンタルヘルス岡 本記念財団
	住吉太幹	主任研究者	精神疾患の発症および再発の予防に関 連するリスク・防御因子の解明に向け た神経生物学、心理社会学的研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経 医療研究セン ター
	住吉太幹	分担研究者	認知機能、身体機能に対する機能再建 に着目したニューロモジュレーション の機序解明と臨床応用に向けての基盤 整備	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経 医療研究セン ター
	住吉太幹	研究分担者	生体モニタリング情報に基づく疾患横 断的精神機能評価	科学研究費助成事業(学術研究助成基 金)(基盤研究(C))	日本学術振興会
	住吉太幹	研究分担者	神経伝達素と神経ネットワークの異常 に着目した統合失調症の個別化治療シ ステムの開発	科学研究費助成事業(学術研究助成基 金)(基盤研究(C))	日本学術振興会
	住吉太幹	研究分担者	統合失調症の社会認知機能障害に対す る経頭蓋直流電気刺激の効果検証	科学研究費助成事業(学術研究助成基 金)(基盤研究(C))	日本学術振興会
	住吉太幹	研究分担者	統合失調症の光生物調節療法の反応性 を予測する生体指標の検討	科学研究費助成事業(学術研究助成基 金)(基盤研究(C))	日本学術振興会
児童・予 防精神医 学研究部	住吉太幹	研究開発分 担者	多様なソースから収集するデータの蓄 積と利活用のための個人情報非特定 化手法の開発とデータ加工技術の確立 並びにデータの質担保に関する研究開 発	日本医療研究開発機構 障害者対策総 合研究開発事業(精神障害分野)	日本医療研究開 発機構

VI 令和6年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
児童・予 防精神医 学研究部	住吉太幹	主任研究者	気分障害センター	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経 医療研究セン ター
	住吉太幹	研究代表者	大うつ病性障害患者を対象とした中央 評価の妥当性に関する予備研究 ～対 面評価と情報通信機器を介した遠隔 評価との一致性の検討～	共同研究	大日本住友製薬 株式会社／武田 薬品工業株式会 社／Meiji Seikaファルマ 株式会社／塩野 義製薬株式会 社／大塚製薬株式 会社／ヤンセン ファーマ株式会 社
	住吉太幹	研究分担者	超ハイリスク基準群における生体情報 評価及びサイトカイン測定による統合 失調症の発現予測因子の探索研究	共同研究	ヤンセンファーマ株式会社
	住吉太幹	研究分担者	気分状態の安定した双極性障害患者の 認知機能改善に対するLurasidone併用 療法 (ELICE-BD) の有効性評価のための 6週間ランダム化二重盲検プラセボ対 照多施設試験	共同研究	British Columbia大学
	白間綾	研究代表者	生体モニタリング情報に基づく疾患横 断的精神機能評価	科学研究費助成事業 基盤研究C	日本学術振興会
	白間綾	研究分担者	3つの神経伝達系の非侵襲的同時測定 法を用いた統合失調症の認知機能障害 の解明	科学研究費助成事業 基盤研究B	日本学術振興会
	白間綾	研究分担者	神経伝達系と神経ネットワークの異常 に着目した統合失調症の個別化治療シ ステムの開発	科学研究費助成事業 基盤研究C	日本学術振興会
	白間綾	研究分担者	ADHDの世界認識はなぜ「ズレ」るの か；表現学習における質的・量的変化 の検証	科学研究費助成事業 基盤研究C	日本学術振興会
	白間綾	研究分担者	瞳孔径から子供のADHDの推定を可能に する解析アルゴリズム	共同研究	SMK株式会社
	白間綾	研究分担者	自閉スペクトラム症児の早期療育の効 果を親はどう捉えているか；ニューロ ダイバーシティの観点からの再考	三菱財団社会福祉事業	三菱財団
	末吉一貴	研究代表者	精神疾患における認知的効率が社会機 能へ及ぼす影響ならびにその機序の解 明	若手研究	日本学術振興会 科学研究費助成 事業
	末吉一貴	研究分担者	気分障害における認知機能評価バッテ リー日本語版の信頼性・妥当性に関す る研究	基盤研究 (C)	日本学術振興会 科学研究費助成 事業
	長谷川由美	研究代表者	気分障害における認知機能評価バッテ リー日本語版の信頼性・妥当性に関す る研究	基盤研究 (C)	日本学術振興会 科学研究費助成 事業
	山田理沙	研究代表者	アルコール依存症における飲酒量低減 薬の反応性の客観的計測：前頭葉機能 に基づく検討	科学研究費助成事業 研究活動スター ト支援	日本学術振興会
	山田理沙	研究代表者	統合失調症の光生物調節療法の反応性 を予測する生体指標の検討	科学研究費助成事業 基盤研究C	日本学術振興会
精神薬理 研究部	池田和隆	分担研究者	先端モデル動物支援プラットフォーム	学術変革領域研究（学術研究支援基盤 形成）	日本学術振興会
	池田和隆	研究代表者	依存症病態の包括的解明と依存症の診 断・治療。支援方法の確立に関する研 究推進事業	令和6年度補正予算	厚生労働省
	三輪秀樹	研究代表者	トランスレータブル脳指標による精神 疾患横断的機能解析	第11回第一三共TaNeDS	第一三共(株)

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
精神薬理研究部	三輪秀樹	研究代表者	アルツハイマー病発症機構におけるGABA神経機能不全	武田科学振興財団 ビジヨナリーリサーチ研究 (スタート)	(株)武田科学
	三輪秀樹	研究代表者	睡眠による脳機能回復	リバネス研究費ウェルネス・エイジングケア賞	(株)リバネス
	三輪秀樹	分担研究者	「精神疾患の発症および再発の予防に関連するリスク・防御因子の解明に向けた神経生物学、心理社会学的研究」内「トランスレータブル脳指標を元にした精神疾患発症リスク因子の探索および介入効果の検証」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	三輪秀樹	分担研究者	「アディクションの病態・症候・治療に関する包括的研究」内「フェンサイクリジン(PCP)やケタミンなどNMDA受容体拮抗薬の中樞作用の解析と薬物依存治療標的の探索」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	三輪秀樹	分担研究者	「脳老化を抑制する転写抑制因子RP58とそのメカニズムの解析」内「生理学的解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究B)	日本学術振興会
	三輪秀樹	分担研究者	「神経同期活動を軸とした統合失調症の橋渡し研究：病態解明と新規治療法開発にむけて」内「疾患モデル動物基礎研究の遂行」	科学研究費助成事業 (基盤研究B)	日本学術振興会
	三輪秀樹	分担研究者	「手術検体を用いた脳腫瘍細胞と正常神経細胞間のでんかん原性回路の解明」内「パッチクランプ法・Ca imagingを用いた機能的アプローチ」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	三輪秀樹	分担研究者	「細胞周期離脱遅延を用いた大脳皮質の人為的進化」内「脳機能解析」	科学研究費助成事業 (挑戦的研究 (萌芽))	日本学術振興会
	西澤大輔	研究代表者	がん患者における疼痛治療の効果及び副作用に関わる遺伝要因の同定と緩和医療への応用	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	上條諭志	研究代表者	患者由来変異型SHARPINの機能解析によるアルツハイマー病の新規創薬標的探索	横断的研究推進費 若手研究助成	国立高度専門医療研究センター
	上條諭志	研究代表者	発達期小脳活動異常によるオスマウス特異的な社会性低下および協調運動機能の障害 ―発達期オス小脳脆弱仮説―	令和6年度JH研究環境整備支援費	国立精神・神経医療研究センター
	上條諭志	研究代表者	発達期の小脳活動抑制ASDモデルマウスにおける性特異的発症機構の解明	小児医学研究助成費	(公財)母子健康協会
	森屋由紀	研究代表者	女性特有のうつ病に効果的な新規抗うつ薬の開発	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	森屋由紀	研究代表者	オビオイド受容体をターゲットとした新規向精神薬の母体と胎児への影響	民間財団等助成 資生堂 女性研究者サイエンスグラント	株式会社 資生堂
	森屋由紀	研究代表者	オビオイド受容体をターゲットとした新規向精神薬の母体と胎児への影響	民間財団等助成 資生堂 女性研究者サイエンスグラント	株式会社 資生堂
精神疾患病態研究部	橋本亮太	研究開発代表者	「AI技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発に関する研究」内「統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発」	医工連携・人工知能実装研究事業	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究開発代表者	「iPS細胞技術とデータ科学を融合した精神疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究」内「疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究の統括発」	脳神経科学統合プログラム(精神・神経疾患メカニズム解明プロジェクト)	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究開発代表者	「精神科領域のガイドラインの社会実装化に関する検証研究」内「精神科治療ガイドラインの社会実装検証研究の統括」	障害者対策総合研究開発事業 (精神障害分野)	日本医療研究開発機構

VI 令和6年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
精神 疾 患 病 態 研 究 部	橋本亮太	研究開発分 担者	「マイレジストリの縦断データを活用 した新規治療法開発と薬事承認の実 現」内「横断的患者リクルート促進」	障害者対策総合研究開発事業（精神障 害分野）	日本医療研究開 発機構
	橋本亮太	研究開発分 担者	「精神疾患の個別化医療を実現するた めのゲノム・空間オミクス多施設共同 研究」内「解析対象ASD/SCZ家系の選 定と臨床情報の収集」	ゲノム医療実現バイオバンク利活用プ ログラム:B-Cureゲノム医療実現推進 プラットフォーム・先端ゲノム研究開 発事業	日本医療研究開 発機構
	橋本亮太	研究分担者	ヒト精神疾患のバイオタイプにアプ ローチする疾患モデル脳の構造・機能 解析と創薬	科学研究費助成事業 基盤研究（A）	日本学術振興会
	橋本亮太	分担研究者	「精神疾患の発症および再発の予防に 関連するリスク・防御因子の解明に向 けた神経生物学、心理社会的研究」 内「精神疾患のバイオタイプに基づく 発症及び再発予防のための病態解明研 究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経 医療研究セン ター
	橋本亮太	研究代表者	統合失調症の認知機能障害の新規スク リーニング質問票に関する調査研究	受託研究	日本ベーリン ガーインゲルハ イム株式会社
	橋本亮太	研究代表者	「AI技術を活用した統合失調症の早期 診断医療機器プログラムの開発」	知的財産プロデューサー派遣事業	独立行政法人工 業所有権情報・ 研修館
	松本純弥	研究代表者	精神疾患の病前推定知能と脳構造画像 についての疾患横断的大規模多施設研 究	科学研究費助成事業 基盤研究（C）	日本学術振興会
	松本純弥	研究開発分 担者	「精神科領域のガイドラインの社会実 装化に関する検証研究」内「理解度、 実践度、治療に関するデータ収集」	障害者対策総合研究開発事業（精神障 害分野）	日本医療研究開 発機構
	松本純弥	研究開発分 担者	「AI技術を活用した統合失調症の早期 診断医療機器プログラムの開発に関す る研究」内「統合失調症の早期診断の エビデンスの創出」	医工連携・人工知能実装研究事業	日本医療研究開 発機構
	松本純弥	研究開発分 担者	「iPS細胞技術とデータ科学を融合し た精神疾患横断的な双方向トランス レーショナル研究」内「中間表現型情 報と生体試料の収集とバイオマーカー の測定」	脳神経科学統合プログラム(精神・神 経疾患メカニズム解明プロジェクト)	日本医療研究開 発機構
	長谷川尚美	研究代表者	精神科領域の治療ガイドラインの普及 と教育が実臨床の治療行動に及ぼす効 果の検証	科学研究費助成事業 若手研究	日本学術振興会
	長谷川尚美	研究分担者	精神疾患の病前推定知能と脳構造画像 についての疾患横断的大規模多施設研 究	科学研究費助成事業 基盤研究（C）	日本学術振興会
	安田由華	研究開発分 担者	「精神科領域のガイドラインの社会実 装化に関する検証研究」内「精神科診 療ガイドラインの講習と医師に対する 理解度の検証」	障害者対策総合研究開発事業（精神障 害分野）	日本医療研究開 発機構
	安田由華	研究開発分 担者	「AI技術を活用した統合失調症の早期 診断医療機器プログラムの開発に関す る研究」内「統合失調症の早期診断の エビデンスの創出」	医工連携・人工知能実装研究事業	日本医療研究開 発機構
	安田由華	研究開発分 担者	「AI技術を活用した統合失調症の早期 診断医療機器プログラムの開発に関す る研究」内「統合失調症の早期診断の エビデンスの創出」	医工連携・人工知能実装研究事業	日本医療研究開 発機構

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
睡眠・覚醒障 害研究部	栗山健一	主任研究者	睡眠ポリグラフデータバンクの拡充およびこれを活用した睡眠障害・精神神経疾患の病態解明と生理学的診断マーカー・治療法開発	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	栗山健一	研究代表者	睡眠時間・睡眠休養感の確保に影響する就寝環境・生活習慣の客観的評価手法および適切な睡眠取得のための介入・環境整備法の開発	厚生労働科学研究費補助金 (循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業)	厚生労働省
	栗山健一	研究代表者	ウェアラブルデバイスにより得られたライフログデータの活用による産業保健活動の推進に関する研究	労災疾病臨床研究事業費補助金	厚生労働省
	栗山健一	研究開発分担者	オンライン診療を介したリアルワールドデータを活用した「睡眠脳波と問診デジタルデータによるうつ病の検査・問診・診断支援システム」の開発・事業化	日本医療研究開発機構研究開発費	日本医療研究開発機構
	栗山健一	研究分担者	次期健康づくり運動プラン作成と推進に向けた研究	厚生労働科学研究費補助金 (循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業)	厚生労働省
	栗山健一	研究代表者	睡眠時間の主観・客観乖離と健康不安が不眠症診断・健康転機に及ぼす影響の包括的検討	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	栗山健一	研究分担者	PTSDの恐怖記憶と情動反応の分子基盤の解明と治療	科学研究費助成事業 (基盤研究A)	日本学術振興会
	栗山健一	研究分担者	アルツハイマー病の病理と睡眠障害・アミロイドPET・タウPETと睡眠指標との関連	科学研究費助成事業 (基盤研究B)	日本学術振興会
	栗山健一	研究分担者	更年期女性の不眠の病態生理と身体運動に着目した睡眠改善プロトコルの開発と効果検証	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	栗山健一	研究代表者	モディオダール錠100mg使用成績調査	受託研究	田辺三菱製薬株式会社
	栗山健一	研究代表者	スマートフォンアプリケーション“SAS'Eye”を利用した睡眠中の呼吸イベント検出の有用性検証: 終夜睡眠ポリグラフ検査との精度比較	受託・共同研究	株式会社 D'isum
	北村真吾	研究代表者	個人の概日リズム特性の決定に対する出生後環境の寄与	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	北村真吾	研究開発分担者	ヒトの時計老化年齢を評価する血液バイオマーカーの探索とその応用	日本医療研究開発機構研究開発費	日本医療研究開発機構
	北村真吾	研究分担者	睡眠の自然免疫機能への寄与解明のための実態調査および発展的介入試験	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	北村真吾	研究分担者	子どもの健康睡眠習慣を考慮したスクリーンタイム／グリーンタイムガイドラインの開発	科学研究費助成事業 (基盤研究B)	日本学術振興会
	北村真吾	研究代表者	木材を用いた空間が睡眠に与える影響について 木材を用いた空間が睡眠に与える影響について	受託・共同研究	国立大学法人東京大学／三井不動産株式会社
	吉池卓也	研究代表者	脳構造の可塑性ダイナミクスと気分障害病態の関連探索	科学研究費助成事業 (若手研究)	日本学術振興会
	吉池卓也	研究代表者	睡眠休養感の精神生理学的背景と成立機序の解明	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	吉池卓也	分担研究者	精神疾患の発症および再発の予防に関連するリスク・防御因子の解明に向けた神経生物学、心理社会学的研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	吉池卓也	研究分担者	遷延性悲嘆症の生物学的基礎に関する研究の統括・実施	科学研究費助成事業 (基盤研究B)	日本学術振興会

VI 令和6年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
睡眠・覚醒 障害 研究部	吉池卓也	研究分担者	睡眠時間・睡眠休養感の確保に影響する就寝環境・生活習慣の客観的評価手法および適切な睡眠取得のための介入・環境整備法の開発	厚生労働科学研究費補助金 (循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業)	厚生労働省
	吉池卓也	研究代表者	高い睡眠休養感を与える環境に関する研究	受託・共同研究	ダイキン工業株式会社
	吉池卓也	研究代表者	香りの感じ方を考慮した睡眠前後の香り制御に関する研究	受託・共同研究	ダイキン工業株式会社
	河村 葵	研究代表者	月経前症候群・月経前不快気分障害の症状再燃と患者家族の感情表出の関連	ロート女性健康科学研究助成	ロート株式会社
	河村 葵	研究分担者	更年期女性の不眠の病態生理と身体運動に着目した睡眠改善プロトコルの開発と効果検証	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	河村 葵	研究代表者	高照度光療法による月経前症候群及び月経前不快気分障害のプレゼンティズム改善効果	科学研究費助成事業 (若手研究)	日本学術振興会
	内海智博	研究代表者	アルツハイマー型認知症の病原因子と睡眠中の記憶定着・増強プロセスとの関連	学術研究助成	神経研究所 睡眠健康推進機構
	内海智博	研究代表者	アルツハイマー型認知症の病原因子と睡眠中の記憶定着・増強プロセスとの関連	学術研究助成	神経研究所 睡眠健康推進機構
知的・発達 障害 研究部	高橋長秀	研究分担者	機能障がいに焦点をあてた神経発達症の診断体系の再構成	文部科学省科学研究費 学術変革領域研究 (A)	文部科学省
	高橋長秀	研究代表者	産後うつ病の全ゲノム・メタボローム解析により病態解明とバイオマーカーの開発	文部科学省科学研究費 基盤研究 (C)	文部科学省
	高橋長秀	研究分担者	自閉スペクトラム特性の産前リスク因子と酸化ストレス：出生コホートMRS研究	文部科学省科学研究費 基盤研究 (C)	文部科学省
	高橋長秀	研究分担者	児童青年期における入眠時刻の後退と適応行動との関連—出生コホートの追跡による検討	文部科学省科学研究費 基盤研究 (C)	文部科学省
	石井礼花	研究代表者	更年期の母の育児に関する実態調査と脳神経基盤の解明～サポートシステム構築に向けて	文部科学省科学研究費 学術変革領域研究 (A)	文部科学省
	石井礼花	研究代表者	注意欠如多動症児の「尊厳」の概念を診療に導入する教育システム開発研究	文部科学省科学研究費 学術変革領域研究 (A)	文部科学省
	江頭優佳	研究代表者	神経発達症の多様性の基盤となる病態解明と個別性に応じた治療法の開発と普及	精神・神経疾患研究開発費 (4-4)	国立精神・神経医療研究センター
	江頭優佳	研究代表者	神経発達症の（発達障害）の神経心理・心理社会的病態モデルの構築-疾患コホートと地域コホートの両面からの検証	横断的研究推進費 若手研究助成	国立高度専門医療研究センター
	江頭優佳	研究代表者	脳活動と行動に基づく注意欠如・多動症児の時間認知系機能検査バッテリーと治療法開発	文部科学省科学研究費 若手研究	文部科学省
	江頭優佳	分担研究者	脳磁図データを用いた機械学習による夢内容の推定	文部科学省科学研究費 基盤研究 (B)	文部科学省
	江頭優佳	研究代表者	感覚知覚の特異性が神経発達症の認知パフォーマンスに及ぼす影響の解明	文部科学省科学研究費 基盤研究 (C)	文部科学省
	江頭優佳	分担研究者	表情認知障害を起点とする自閉スペクトラム症の二次障害の成立過程の解明	文部科学省科学研究費 基盤研究 (C)	文部科学省
	請園正敏	分担研究者	ヒトにおける嗅覚コミュニケーションの解明：嗅覚感度と社会的認知および社会的行動	文部科学省科学研究費 基盤研究 (C)	文部科学省

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
知的・ 発達障 害研 究部	請園正敏	研究代表者	社会的促進の観察効果と共行動効果の 発生機序解明に向けて	文部科学省科学研究費 若手研究	文部科学省
	請園正敏	分担研究者	表情認知障害を起点とする自閉スペク トラム症の二次障害の成立過程の解明	文部科学省科学研究費 基盤研究 (C)	文部科学省
	高田美希	研究代表者	親子相互交流療法 (PCIT) の治療プロ セスと中断要因の解明	ファイザーヘルスリサーチ研究助成	ファイザーヘル スリサーチ振興 財団
	稲垣真澄	研究分担者	自治体3歳児健診における統一発達ス クリーニングの開発及び社会実装	文部科学省科学研究費 基盤研究 (B)	文部科学省
	稲垣真澄	研究分担者	適応的歩行障害における歩行調節機能 の解明	文部科学省科学研究費 基盤研究 (C)	文部科学省
	岡田俊	研究分担者	免疫介在性疾患の血中プロテオーム解 析を通じた新たなエンドタイプ解析と 発症メカニズムの探索	横断的研究推進費	国立高度専門医 療研究センター
	岡田俊	研究分担者	免疫介在性疾患の血中プロテオーム解 析を通じた新たなエンドタイプ解析と 発症メカニズムの探索	横断的研究推進費	国立高度専門医 療研究センター
地域精 神保 健・法 制度 研 究部	藤井千代	研究代表者	精神障害にも対応した地域包括ケアシ ステムの構築を推進する政策研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金 (障害者政策総合研究事業)	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	精神科医療機関における包括的支援マ ネジメントの普及に向けた精神保健医 療福祉に関わるサービスの提供体制構 築に資する研究 内「精神科医療機関 ニーズの調査と包括的支援マネジメン トの患者特定調査」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者政 策総合研究事業)	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	地域で安心して暮らせる精神保健医療 福祉体制における入院医療による支援 のための研究 内「非自発的入院に関 する実態調査」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者政 策総合研究事業)	厚生労働省
	藤井千代	主任研究者	包括的精神保健サービスを実現するた めの協働のあり方と人材育成に関する 研究	精神・神経疾患研究開発費	国立研究開発法 人 国立精神・ 神経医療研究セ ンター
	藤井千代	研究分担者	重症精神障害者の地域支援を目的とし た認知行動療法の遠隔トレーニングシ ステムの開発	科学研究費助成事業 (学術研究助成基 金助成金) 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	藤井千代	研究分担者	処遇の難しい精神障害者に対する医療 支援体制の整備に向けた当事者参画研 究	科学研究費助成事業 (学術研究助成基 金助成金) 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	藤井千代	研究分担者	ドメスティック・バイオレンス加害者 の暴力重症化リスクアセスメントの開 発	科学研究費助成事業 (学術研究助成基 金助成金) 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	藤井千代	研究分担者	行動制限最小化の活動に参加する精神 障害当事者のための育成プログラムの 開発	科学研究費助成事業 (学術研究助成基 金助成金) 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	藤井千代	研究代表者	所沢市精神障害者アウトリーチ支援	所沢市精神障害者アウトリーチ支援業 務委託	所沢市
	藤井千代	研究代表者	フィリピン国を対象とした地域精神保 健支援の普及と実装	医療技術等国際展開推進事業	国立国際医療研 究センター国際 医療協力局
	藤井千代	研究代表者	東京都入院者訪問支援事業費		東京都
	藤井千代	研究代表者	精神疾患を有する患者に対する腎代替 療法等に関する調査研究	障害者総合支援事業費補助金 (障害者 総合福祉推進事業)	厚生労働省
	山口創生	研究代表者	精神科医療機関における包括的支援マ ネジメントの普及に向けた精神保健医 療福祉に関わるサービスの提供体制構 築に資する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者政 策総合研究事業)	厚生労働省
	山口創生	研究分担者	障害者ピアサポート研修の実施内容の 検証及び更なる効果的な実施方法の確 立に向けた研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者政 策総合研究事業)	厚生労働省

VI 令和6年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
地域精神保健・法制度研究部	山口創生	研究代表者	多職種アウトリーチ支援における精神障害者・家族の10年間の軌跡：多機関共同縦断研究	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	山口創生	研究分担者	重症精神障害者の地域支援を目的とした認知行動療法の遠隔トレーニングシステムの開発	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	山口創生	研究分担者	スクールソーシャルワーカーの専門性と質の保証のためのアウトカム指標のパッケージ化	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	佐藤さやか	研究代表者	重症精神障害者の地域支援を目的とした認知行動療法の遠隔トレーニングシステムの開発	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	佐藤さやか	研究分担者	精神科医療機関における包括的支援マネジメントの普及に向けた精神保健医療福祉に関わるサービスの提供体制構築に資する研究内「ウェブサイトの開発および検証」	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	佐藤さやか	研究分担者	多職種アウトリーチ支援における精神障害者・家族の10年間の軌跡：多機関共同縦断研究	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	小池純子	研究代表者	処遇の難しい精神障害者に対する医療支援体制の整備に向けた当事者参画研究	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	小池純子	研究分担者	認知機能を軸とした急性期の気分障害における評価と包括的支援の開発及び効果の検証	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	小塩靖崇	研究代表者	アスリートのメンタルヘルスケアのあり方—社会文化的背景の影響に関する日豪比較研究	国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（A）	日本学術振興会
	小塩靖崇	研究代表者	アスリートの、アスリートによる、みんなのための、メンタルヘルス教育プログラム開発	イニシアティブプログラム助成金	トヨタ財団
	小塩靖崇	研究分担者	トップアスリートの睡眠のスクリーニングに関する研究および疫学調査	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	川口敬之	研究代表者	精神保健福祉領域における当事者主導研究のELSI対処方策に向けたガイダンスの作成	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	川口敬之	研究代表者	精神障害当事者と支援者との共創に基づくリカバリーに向けた共同意思決定実施ガイダンスの開発	三菱財団助成 社会福祉事業・研究助成	三菱財団
	川口敬之	研究分担者	多職種アウトリーチ支援における精神障害者・家族の10年間の軌跡：多機関共同縦断研究	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	川口敬之	分担研究者	包括的精神保健サービスを実現するための協働のあり方と人材育成に関する研究 内「精神障害当事者との協働に基づく災害時の精神保健福祉体制に関わるガイダンスの開発」	精神・神経疾患研究開発費	国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター
	岩永 麻衣	研究分担者	多職種アウトリーチ支援における精神障害者・家族の10年間の軌跡：多機関共同縦断研究	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	臼井 香	研究代表者	AYA世代への多職種アウトリーチ支援における支援実態の把握と支援評価の可視化ツールの開発	2023年度（後期）在宅医療推進のための研究	公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団
	臼井 香	研究分担者	多職種アウトリーチ支援における精神障害者・家族の10年間の軌跡：多機関共同縦断研究	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	阿部真貴子	研究分担者	オンライン演奏における身体性の認知神経基盤の解明および演奏教育・音楽療法への応用	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
地域精神保健・法制度研究部	杉山 直也	研究代表者	精神科医療機関における行動制限最小化の普及に資する研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	杉山 直也	研究分担者	精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築を推進する政策研究 内「精神科救急医療体制に関する研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	河野稔明	研究代表者	自治体における精神保健福祉法の通報等事例と支援をモニタリングする基盤の構築	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	下平 美智代	研究代表者	オープンダイアログ（開かれた対話）のミーティング方法をプログラムの基礎とした「経験専門家講座」が精神障害者の主体性と社会参加に与える影響	研究助成2023	公益財団法人ユニバーサル財団
	安間 尚徳	分担研究者	包括的精神保健サービスを実現するための協働のあり方と人材育成に関する研究 内「地域精神保健医療福祉に関わる支援者、行政職員を対象とした地域精神保健医療福祉研修プログラムの開発に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター
	塩澤 拓亮	分担研究者	包括的精神保健サービスを実現するための協働のあり方と人材育成に関する研究 内「地域精神保健領域におけるコアアウトカムセットの開発に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター
	安間 尚徳	分担研究者	包括的精神保健サービスを実現するための協働のあり方と人材育成に関する研究 内「地域精神保健医療福祉に関わる支援者、行政職員を対象とした地域精神保健医療福祉研修プログラムの開発に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	塩澤 拓亮	分担研究者	包括的精神保健サービスを実現するための協働のあり方と人材育成に関する研究 内「地域精神保健領域におけるコアアウトカムセットの開発に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
ストレス・災害時こころの情報センター	大沼麻実	事業担当者	東京都令和6年度災害時精神科医療体制整備事業（災害時精神科医療研修）事業	補助金	東京都

精神保健研究所年報No.38（通号No.71）2025

令和7年9月30日発行

編集責任者 張 賢徳

発行所 国立研究開発法人
国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所
〒187-8553

東京都小平市小川東町4-1-1

（非売品） 電話 042（341）2711

印刷：株式会社 アトミ

©2025, All rights reserved, Printed in Japan